靈界物語　第三巻　靈主體從　寅の卷

出口王仁三郎

●底本

『霊界物語　第三巻』愛善世界社

一九九三（平成〇五）年〇四月〇四日　第一刷發行

※現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせずにすべて底本通りにした。

※圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。

※詳細な凡例は次のウェブサイト内に掲載してある。

ｈｔｔｐ：／／ｏｎｉｄｏ．ｏｎｉｓａｖｕｌｏ．ｊｐ／

※原データ作成者…『飯塚弘明』

二〇〇四年〇四月二四日作成

二〇〇九年十一月二〇日修正

●目次

序文（じょぶん）
凡例
總説

第一篇　國魂（くにたま）の配置（はいち）

第一章　神々（かみがみ）の任命（にんめい）〔一〇一〕
第二章　八王神（やつわうじん）の守護（しゆご）〔一〇二〕

第二篇　新高山（にひたかやま）

第三章　溪閒（けいかん）の悲劇（ひげき）〔一〇三〕

第四章　鶴の首〔一〇四〕

第三篇　ロツキー山

第五章　不審の使神〔一〇五〕
第六章　籠の鳥〔一〇六〕
第七章　諷詩の徳〔一〇七〕
第八章　従神司の殊勳〔一〇八〕

第四篇　鬼城山

第九章　辨者と辨者〔一〇九〕
第一〇章　無分別〔一一〇〕
第一一章　裸體の道中〔一一一〕

第一二章　信仰の力（一一二）
第一三章　嫉妬の報（一一三）
第一四章　霊系の抜擢（一一四）
第五篇　萬壽山
第一五章　神世の移寫（一一五）
第一六章　玉ノ井の宮（一一六）
第一七章　岩窟の修業（一一七）
第一八章　神霊の遷座（一一八）
第六篇　青雲山
第一九章　楠の根元（一一九）

第二〇章　晴天白日（一二〇）
第二一章　狐の尻尾（一二一）
第二二章　神前の審判（一二二）
第七篇　崑崙山
第二三章　鶴の一聲（一二三）
第二四章　蛸閒山の黒雲（一二四）
第二五章　邪神の滅亡（一二五）
第二六章　大蛇の長橋（一二六）
第八篇　神界の變動
第二七章　不意の昇天（一二七）

第二八章　苦心惨憺（一二八）
第二九章　男波女波（一二九）
第三〇章　抱擁歸一（一三〇）
第三一章　龍神の瀑布（一三一）
第三二章　破軍の劍（一三二）

第九篇　隱神の活動

第三三章　巴形の斑紋（一三三）
第三四章　旭日昇天（一三四）
第三五章　寶の埋換（一三五）
第三六章　唖者の叫び（一三六）
第三七章　天女の舞曲（一三七）
第三八章　四十八瀧（一三八）

第三九章　乘合舟（一三九）

第一〇篇　神政の破壞

第四〇章　國の廣宮（一四〇）
第四一章　二神の歸城（一四一）
第四二章　常世會議（一四二）
第四三章　配所の月（一四三）

第一一篇　新規蒔直し

第四四章　可賀天下（一四四）
第四五章　猿猴と澁柿（一四五）
第四六章　探湯の神事（一四六）

第四七章　夫婦の大道（ふうふ）（だいだう）〔一四七〕
第四八章　常夜（とこよ）の闇（やみ）〔一四八〕
第四九章　袖手傍観（しうしゆばうくわん）〔一四九〕
第一二篇　靈力體（れいりよくたい）
第五〇章　安息日（あんそくび）〔一五〇〕
附録　岩井温泉紀行歌

序文

艮の金神出現以後三十年の立替は、いよいよ明治五十五年、すなはち大正の十一年、三千世界一度に開く梅の花の機運に到達したのである。つぎに坤の金神出現以後二十五年、桃李もの言はずして桃李ものとなりし神の教示も、いよいよ開く桃の春、五十二歳の曉に、月の光に照らされて、霊界探險物語り、ももの千草も、百鳥も、百の言問ひ言止めて、三月三日五月五日の神の經綸を詳細に、悟る神代の魁となつたのも、まつたく時の力といふべきである。明治三十三年九月八日の神筆に、

『出口直は三千世界の根本の因縁から末の世のことまで書かす御役なり、それを細かう説いて聞かせるのが海潮の役であるから、一番に男子が現はれて、次に女子が表はれたら、大本の中の役員も、あまり思ひが違ふてをりたと申して、きりきり舞をいたして喜ぶ人と、きりきり舞をして苦しむ人と、力一杯われの目的のために、男子女子を惡くまをすものとができるぞよ。神を突込みておいて、我で

開いて、まだ悪く申してあるく、取次がたくさんにできるぞよ。云々』

大本の筆先は、どうしても男子女子でなければ眞解することはできぬのは神示のとほりである。しかるに各自の守護神の御都合の悪いことがあると、「女子の筆先は審神をせなそのままとつてはいかぬ」と申す守護神が現はれてくる、困つたものだ。九月八日にいよいよ神示のとほり女子の役となり、隱退して靈界の消息を口述するや、またまた途中の鼻高がゴテゴテ蔭で申し出したのである。女子の歸神の筆を審神する立派な方が澤山できて、神様も御滿足でありませう。

また、明治五十五年の三月三日五月五日といふ神の抽象的教示にたいして、五十五年は大正十一年に相當するから、今年は女子の御魂にたいして肉體的結構があるとか、大本の神の經綸について花々しきことが出現するかのやうに期待してをる審神者があるやうにきく。されど、神の御心と人間の心とは、天地霄壤の相違があるから、人間の智慧や考へでは、たうてい、その眞相は判るものでない。五十五年といふことは、明治二十五年から三十年間の神界經綸の表面に具體的にあらはれる年のいひである。

三月三日とは三ツの御魂なる月の大神の示顯が、天地人三體に輝きわたる日といふことである。日は「カ」と讀む、「カ」はかがやくといふことである。今まで三十年間男子の筆先の眞意が充分に了解され、また從道二十五年に相當する女子の御魂の光が、そろそろ現はれることを暗示された神諭である。二十五年間、周圍の障壁物にさまたげられた女子の御魂の神界經綸の解釋も、やや眞面目になつて耳をかたむくる人が出現するのを、「女子にとりて結構な日である」と示されたものである。あたかも暗黒の天地に、日月の東天を出でて萬界を照らすがごとき瑞祥を、五月五日といふのである。五は言靈學上「出」であつて、五月五日は出月出日の意味である。二十五年の天津風、いま吹きそめて經緯の、神の教示も明らけく、治まる御代の五十五年（出神出念）、いよいよ神德出現して、神慮の深遠なるを宇宙に現【出】すべき時運にむかふことを慶賀されたる神示であります。

月光世に出でて萬界の暗を照破す、これ言靈學上の五月五日となるのであつて、けつして暦學上の月日でないことは明白である。三月三日と五月五日に、變つた

ことがなければ信仰をやめるといふ無明暗黒の雲が、遠近の天地を包むでゐるやうに思はれましたから、一寸略解をほどこしておきました。これでもまた女子の御魂の言は審神をせなくてはいかぬと、唱ふる豪い人々が出現するかもしれませぬ。これが暗黒の世の中といふのでせう。

神諭に「女子にとりて結構な日である」云々は微々たる五尺の肉體にたいしての言ではない。神靈そのものの大目的の開き初むるを慶賀されたる意味であることを了解すべきである。千座の置戸は、瑞の御魂の天賦的神業たることを承知してもらひたい。

靈界物語を讀ンで、初めて今日までの神諭の解釋にたいする疑雲は一掃され、心天たちまち晴明の日月をうかべ、靈體力に光輝をそへ歡喜と了解の日月出現していはゆる三月三日五月五日の瑞祥を神人ともに祝することになるのである。

五月五日は男子の祝日、菖蒲の節句である。三月三日は女子の祝日で、桃の節句である。女子の御魂聖地に出現してより二十五年の間桃李物言はず自ら蹊をなせしもの、ここに目出度く世にあらはれて苦、集、滅、道を説き、道、法、禮、

節をはなばなしく開示することとなつたのも、神界經綸の神業成就の曙光をみとめ、旭光照破の瑞祥にむかつたので、神人界のともに祝福すべき年であります。

○

この物語のうちに大自在天とあるは、神典にいはゆる、大國主之神の御事であつて、大國彦命、八千矛神、大己貴命、葦原醜男神、宇都志國魂神などの御名を有したまひ、武力絶倫の神にましまして國平矛を天孫にたてまつり、君臣の大義を明らかにし、忠誠の道を克く守りたまふた神であります。本物語にては大自在天、または常世神王と申しあげてあります。

大自在天とは佛典にある佛の名であるが、神界にては大國主神様の御事であります。この神は八代矛の威力をふるつて、天下を治めたまうた英雄神である。皇祖の神は、平和の象徴たる璽と、智慧の表徴たる鏡とをもつて、世を治めたまふのが御神意である。

また盤古大神鹽長彦は一名潮沫彦と申し上げる、善良なる神にましますことは、前篇に述べたとほりであります。この神を奉戴して荒ぶる神人等が色々の計畫をたて、神界に活動して國治立命の神政に對抗し、種々の波瀾をまきおこしたことはすでに述べたとほりである。そこでこの世界を救ふべく、諾册二神がわが國土を中心として天降りまし、修理固成の神業を勵ませたまふこととなつた、ありがたき物語は篇を逐うて判明することであらうと思ひます。惟神靈幸倍坐世

大正十一年一月三日

王仁識

凡例

一、本巻はその前半を龜岡の瑞翔閣において口述筆録せしめられ、後半は綾部龍宮館において完成されたものであります。恆定筆録者の内、谷口正治氏が第二巻完了とともに、出口教祖詳傳編集の任にあたることとなり、靈界物語に關係せざるにいたりましたことを、筆録者一同遺憾に思ひますとともに、前巻まで筆録されし勞を多謝する次第であります。

一、第一巻に國治立命、盤古大神、大自在天の各派が、三つ巴となつて惡戰苦闘をつづけ、神界を混亂せしめたる記録を讀み、盤古大神および大自在天につきその眞相を識らむとする人々のために、ちよつと説明を加へておきたいと思ひます。

盤古大神とか、盤古神王とか、また盤古眞王といふのは、平田篤胤翁の赤縣太古傳成文といふ著書の、盤古眞王記に、

『古昔天地未だ分れず、渾沌として鷄子の如し。盤古氏其の中に生ず。九萬八千歳にして天地開闢せり。清輕のものは上つて天となり、濁重のものは下つて地と

なる。盤古其の中に在り。一日に九變して、天に於ては神に、地に於ては聖なり。天日に高きこと一丈、地日に厚きこと一丈、盤古日に長ずること一丈、此の如きこと九萬八千歳、天極めて高く、地極めて邃く、盤古極めて長ぜり。數は一に起りて三に立ち、五に於て成り、七に於て盛りに、九に於て處す。

盤古氏夫妻は陰陽の始めなり。大荒に生じて其の初めを知ること莫し。蓋し陶鎔造化の主にして、天地萬物の祖なり。乃ち元始天王、大元聖母は是れなり。盤古氏の後に三皇あり、これ天地人の始めなり』

とあるごとく、「支那」の人民が天王聖母として尊崇するところのものが盤古大神であります。

さうして盤古大神は體主靈從（われよし）で、國常立尊は靈主體從（ひのもと）であります。しかし本書には神名を國治立命と申し上げてあります。

つぎに大自在天は、力主體靈（つよいものがち）であつて、佛典によりますと波羅門教徒は、この神は世界萬物の造物主であり、また世界の本體であり、この神の支配のままに吾人苦樂の果報が割り當らるるのであるといつて、あらむ限り

の崇拝の的としてをるのであります。ところが佛教が起つてから後といふものは、大自在天神と命名されて、やうやく第六天の統治者として、きはめて平凡な取扱ひを受くるものとなつたのです。

一、次に常世の國について一言しておきます。「稽古要略」といふ書物に、『少彦名神、粟莖（方船のこと）に乘りて、常世の國に渡りき。按ずるに常世の國とは本神仙の幽境をいふ。因つて以て海外の絶域、人到り易からざる地を稱す』とありますから、日本からいへば海外の絶域たる亞米利加は常世の國となりますが、亞米利加からいへば日本が常世の國となるわけです。ゆゑに靈界物語と古文書と比較研究して見ることが肝要だと思ひます。

大正十一年一月廿九日

龍宮館に於て　識す

總説

天地剖判して大地、日、月、星辰現はれ、地上には樹草、人類、獣、鳥、魚、蟲を發生せしめ、各自分掌の神を定めてこれを守護せしめたまひける。

大神は人體の元祖神として天足彦、胞場姫を生みたまひ、天の益人の種と成したまひたり。しかるに天足彦は胞場姫のために神勅にそむきて靈主體從の本義を忘れ、つひに體主靈從の果實を食し、靈性たちまち惡化して子孫に惡念を遺したるのみならず、邪念はおのづから凝つて八頭八尾の大蛇と變じ、あるひは金毛九尾の惡狐と化し、六面八臂の魔鬼となり、世界を混亂紛擾せしめ、國治立大神、國直姫命、大八洲彦命以下の諸神を根の國に隱退せしめ、盤古大神（鹽長彦）を奉じて國治立大神の聖職に代らしめ、鹽長姫をして國直姫命の職をおそはしめ、八王大神（常世彦）をして大八洲彦命の職を司らしめ、常世姫をして豐國姫命にかはらしめ、和光同塵的神策を布き、一時を糊塗して、大國彦と結託し、世界を物質主義に惡化し、優勝劣敗、弱肉強食の端を開き、つひには收拾すべからざる

惡逆無道の暗黒界と化せしめ、その慘状目もあてられぬ光景となりたれば、天の三體の大神も坐視するに忍びず、ここに末法濁世の代を短縮して再び國治立命の出現を命じたまひ、完全無缺の理想の神世の出現せむとする次第を略述せるものなれども、製本上の都合により本卷は、國大立命および金勝要神、大將軍澤田彦命の隱退さるるまでの靈界の消息を傳ふることとせり。ゆゑにこの靈界物語は、あたかも大海の一滴、九牛の一毛にもおよばず、無限絶對、無始無終の靈界の一部の物語なれば、これをもつて靈界の全況となすは誤りなり。願はくはこの書をもつて靈界一部の消息を探知し、靈主體從の身魂に立ちかへり、世界萬國のために彌勒の神業に奉仕されむことを懇望する次第なり。數千年間の歴史上の事實のみ研究さるる現代の人士は、この物語を讀みて或ひは怪亂狂暴取るにたらざる癡人の夢物語と嘲笑し、牽強附會の言となさむは、むしろ當然の理といふべし。神諭に曰く、

『世の元の誠の生神が、時節きたりてこの世に現はれ、因縁ある身魂にうつりて太古から言ひおきにも、書きおきにもなきことを、筆と口とで世界へ知らすので

あるから、世界の人民が疑ふて眞實にいたさぬのは、もつとものことであるぞよ云々』

と示されあり。また、

『この神の申すことは、因縁の身魂でないと、到底腹へは這入らぬぞよ』

と示されあり。ゆゑに神縁深き人士にあらざれば、斷じて信じ難からむ。

要は、單に一片の小説と見なしたまふも不可なく、また癡人の夢物語として讀まるるも可なり。ただ天地の大神たちの天地修理固成の容易ならざる御艱難と御苦心の徑路を拜察したてまつり、かつ洪大無邊の神恩に報ひたてまつり、人生の本分を全ふしうる人士の一人にても出現するにいたらば、口述者にとりて、望外の欣幸とするところなり。惟神靈幸倍坐世

大正十一年一月　　王仁識

第一篇　國魂の配置

第一章　神々の任命〔一〇一〕

國治立命は、無限絶對の大神力を發揮し、まづ大地を創造したまひぬ。この時清き輕きものは日月星辰となり、重く濁れるものは大地と別れたり。しかしてここに陰陽二神の夫婦が生れたるが、男を天足彦といひ、婦を胞場姫といふ。

しかるに物には表裏あり、善惡あり、陰陽あり、火水ありて初めて萬物を形成さるるは自然の理法なり。このとき宇宙間に存在する邪氣凝つて妖魅を現出し、靈主體從の神木に、體主靈從の果實を結ぶにいたりけり。ここに神は、

『この果實を喰ふべからず』

と女神に命じたまひしを、女神は神命を奉ぜず、みづから採つてこれを食し、つぎに夫神にまでもすすめ食はしめたりける。これより地上の世界は體主靈從にか

たむき、種々の罪惡は漸次發生し、邪惡の氣凝つて八頭八尾の惡龍となり、金毛九尾の惡狐となり、六面八臂の邪神、妖氣の靈怪天地のあひだに發生するにいたりける。これより天地の間には、罪惡さかんに行はれ、天地混沌として紛亂に紛亂をかさね、世は常闇となり、ほとンど拾收すべからざる狀態となりにける。

ここに國治立命は、豐國姫命を補佐神とし、八百萬の神とともに、千辛萬苦をなめたまひ、つひに天道別命（モウゼ）とともに天地の律法を制定せられたり。その律法は前卷に述べたるごとく、内面的には、

省みる
恥る
悔ゆる
畏る
覺る

の五ケ條であり、外面的には、

第一、夫婦の道を嚴守し、一夫一婦たるべきこと

第二、神を敬ひ、長上を尊み、博く萬物を愛すること

第三、たがひに嫉み、謗り、詐り、盗み、殺すなどの惡事を爲すべからざること

右の大要を示され、その他百般の事物について、細密なる律法が設けられたりける。ここにおいて、まづこれを地上におこなひ、天上にもこれを行はむとし、三體の大神に認許を受け、これを天地に施行さるることとはなりける。

ここに三體の大神、國治立命は天地合體して世を治むべく、天地間を往來して、神命の戒律を天上地上に宣布すべく、管掌の神を定めたまひけり。

さて國治立命は、天上の三體の神の命により、太陽界に使神となり、日天使國治立命と稱され、豐國姫命は月天使國大立命と名づけられ、日天使の神業を國直

姫命に、月天使の神業を豊國姫命に委任され、天道別命は現界の諸神に律法を宣傳する聖職とならせたまひたり。

神は天地の律法を天上地上にあまねく擴充すべく、十六柱の神司を靈主體從の天使として重く任命せられたり。十六天使の名は、大八洲彦命、言靈別命、神國別命、大足彦、花森彦、磐樟彦、元照別、道貫彦、貴治彦、有國彦、眞鐵彦、磐玉彦、齋代彦、吾妻別、神澄彦、高山彦にして大八洲彦命は天使の長となり、十六天使を指揮さるることとなりにけり。

以上の十六天使は、天上地上を往復し、天地の律法を宇宙間に宣傳したまひ、一時は天地ともに太平に治まり、大神の理想の世は完全に樹立されたりしが、たちまち地の各所より、邪神勃興して世はふたたび混亂の巷と惡化せむとぞしたりける。

ここに國治立命は、シオン山に鎭祭せる十二個の玉を大地の各所に配置し、これを國魂の神となし、八頭神を任命さるることとなりたり。

（大正一〇・一一・一三　舊一〇・一四　栗原七藏録）

第二章　八王神の守護〔一〇二〕

日天使國治立命は、シオン山に鎮祭せる十二の玉を世界の各所に配置し、もつて國魂の神と定められ、新高山には青色の玉を鎮め、高國別、高國姫の二神をして、これを永遠に守らしめたまひけり。

つぎに萬壽山には赤色の玉を鎮め、瑞穂別、瑞穂姫をしてこれを守護せしめ、またローマに白色の玉を鎮め、朝照彦、朝照姫をしてこれを守護せしめ、モスコーに黒色の玉を鎮め、夕日別、夕照姫をしてこれを守護せしめ、ロッキー山に紺色の玉を鎮め、靖國別、靖國姫をしてこれを守護せしめ、つぎに鬼城山に灰色の玉を鎮め、元照彦、元照姫をしてこれを守護せしめ、また長白山に白色の玉を鎮め、磐長彦、玉代姫をしてこれを守護せしめ、コンロン山に紅色の玉を鎮め、大島彦、大島姫をしてこれを守護せしめ、天山に黄色の玉を鎮め、谷山彦、谷山姫をしてこれを守護せしめ、つぎに金色の玉を青雲山に鎮め、吾妻彦、吾妻姫をしてこれを守護せしめ、ヒマラヤ山に銀色の玉を鎮め、ヒマラヤ彦、ヒマラヤ姫をしてこ

れを守護せしめ、タコマ山に銅色の玉を鎮め、國玉別、國玉姫をして、これを永遠に守護せしめたまひける。この十二の玉の守護神を稱して、八頭の神といふ。

さて國治立命は十二の玉を鎮め、八頭の國魂を任命し、つぎに八王の神を配置したまひぬ。すなはち新高山には花森彦をして主權を握らしめ、萬壽山には磐樟彦、ローマには元照別、モスコーには道貫彦、ロッキー山には貴治彦、鬼城山には眞鐵彦、長白山には有國彦、コンロン山に磐玉彦、天山には齋代彦、青雲山には神澄彦、ヒマラヤ山には高山彦、タコマ山には吾妻別の十二神將を配置して王となし、各主權を握らしめたまひぬ。これを八王の神といふ。この八王八頭の神司は、もとより至善至美にして天則を嚴守しゐたりしが、天地の邪氣より現はれいでたる八頭八尾の惡龍と金毛九尾の惡狐と、六面八臂の惡鬼の邪靈のために、月かはり星うつるにしたがひ、漸次神の國は穢され、つひには天則違反の行動をとるのやむを得ざるに立ちいたり、ここに世はますます混濁し、つひには國治立命御退隱のやむを得ざるにいたらしめたる繁雜なる經緯は、章をおうて略述することとすべし。

（大正一〇・一一・一三　舊一〇・一四　河津雄録）
（序～第二章　昭和一〇・一・一五　於新居濱　王仁校正）

第二篇　新高山

第三章　溪間の悲劇〔一〇三〕

新高山は花森彦統裁のもとに、高國別、高國姫が天地の律法を嚴守し、高砂島一帶の諸神を至治太平に治めゐたりしが、たまたま高國姫は谷間に下りて清泉を汲まむとし、斷崖より過つて足を踏み外し、谷間に轉落し、神事不省に陷りければ、侍者らは大いに驚きて、これを救ひあげむと百方手をつくしたれども斷崖高

く、溪流はげしく、いかんとも救助の道なく、侍者は驚きあはてこれの顛末を詳細に高國別に報告せしより、急報を聞きし夫は、たちまち顔色蒼白となり、とるものも取りあへず、職服のまま現場にかけつけたりける。

高國姫は溪間の激流におちいり、激浪につつまれて、浮きつ沈みつ悶え苦しみ救ひを呼びゐたり。その聲は次第に細りゆきて、つひには蟲の音のごとく衰へきたりぬ。いかに救はむとするも斷巖絶壁に隔てられ救助の道なく、ただ手をつかねて神司らは、あれよあれよと絶叫するばかり、傍觀するより外に方法とてはあらざりにける。

ここに高國姫の侍者に玉手姫といふ容色優れたる女性ありしが、玉手姫は、

『主神の一大事、吾は生命に替へて救ひまつらむ』

といふより早く着衣を脱ぎすて、數百丈の谷間を目がけ、急轉直下、高國姫の溺れ苦しむ前に飛下り、高國姫を小脇にかかへ、辛うじて溪流はるかの下流に泳ぎつきこれを救ひあげたり。高國別夫妻の喜悦と感謝はたとふるに物もなく、玉手姫は高國姫の生命の親として優遇され、つひに玉手姫は二神司の寵愛ふかき神司

となりぬ。
高國別、高國姫二神は、玉手姫の奇智と才略と忠勇心に深く信頼し、城中のこと一切は、玉手姫のほとんど指揮を待たざれば何事も決定せざるまでに、漸次權勢を張るにいたりける。
ここに新高山を中心とする高砂島は、玉手姫の水ももらさぬ經綸によつて大いに治まり、よく天地の律法を嚴守し、上下一致して神政の模範となり、國の譽も高砂の、千歳の松の永久に、治まる御代と思ひきや、高國姫は溪流に落ちたるとき、身體の一部に障害をきたし、それが原因となりて大病を發し、病床に呻吟し、身體は日に衰へゆくばかりなりける。
ここに高國別は、高國姫の寵愛ふかき玉手姫をして、晝夜看護に盡力せしめたるに、玉手姫の周到なる看護も何の效なく、病は日々重りゆくのみなりける。ここに花森彦は高國別を近く招き、玉手姫を一時も早く追放すべく嚴命せられたるにぞ、高國別は天使の命をいぶかり、腑におちぬていにて言葉靜に、
『かれ玉手姫は忠勇無比にして眞心より懇切なる神司なり。高國姫の危急を救ひ

たるもまた玉手姫なり。多くの侍者ありといへども、玉手姫のごとき忠實なる者は外に一柱もなし。しかるに天使は何をもつて玉手姫を追ひだせと命じたまふか』と反問したりけれど、花森彦は、

『今は何事も語るべき時期にあらず、ただ吾命を遵奉せば足れり』

と、鶴の一聲を殘して殿内ふかく足早に進みいりぬ。しかして高國別は妻および玉手姫にむかつて、花森彦の嚴命の次第を物語れば、高國姫は重き病の頭をもたげながら、驚きの眼を見はり、

『わが生命は玉手姫のために救はれ、今また懇切なる看護を受く、妾にとつて命の親なり。たとへ天使の嚴命なりといへども、かかる沒義道なる命には從ひがたし』

と非常に天使を恨み興奮の結果つひに上天したりける。高國別は妻の憤死を見て大いに悲しみ、かつ花森彦を深く恨むにいたれり。

ここに玉手姫は高國別の心中を察し、熱涙をうかべ、花森彦の無情冷酷を怒り、高國別をして信書を認め天使に捧呈せしめける。その文意は、

『高國姫は天使の冷酷なる命令を恨み憤死いたしたり。また玉手姫は誠意を疑はれ、かつ放逐の命をうけたるを大いに憤慨せり。我はいかに天使の命なりとて盲従するに忍びず、實に貴神を恨みまつる』

と云ふの意味なりし。花森彦はこれを披見してただちに高國別にたいし、天則違反の由を懇諭し、かつ、

『根の國にいたるべし』

と嚴命したりける。高國別は天使の神通力を知らず、ただ單に無情冷酷の處置とのみ思惟し、自暴自棄となりて、花森彦の無道を天使長大八洲彦命に進言せむとしたりける。

（大正一〇・一一・一三　舊一〇・一四　加藤明子録）

第四章　鶴の首〔一〇四〕

高國別は妻に先だたれ、心さびしく新高山の城中にあつて、神業に奉仕しつつありけれども、花森彦の神意を了解せず、心中に不平を抱きゐたりける。玉手姫は高國別の常に快々として樂まず、不平無聊に日を送りつつあるを慰撫し、つひに命の絶對的信任を得るにいたり、ここに第二の妻と昇進したりける。玉手姫はその實は常世姫の間者にして、高國姫を谷間に落して苦しましめたるも、また重病におちいらしめたるも、玉手姫のひきゆる惡魔の暗中飛躍的惡計なりき。花森彦はさすがに名智の神將なればよくこれを察知し、高國別にむかつて、玉手姫を追出すべく嚴命されたり。されど高國別は玉手姫を少しも疑はず、深く信任して天使の嚴命を無情冷酷と恨み、かつ猥に怒ることは、天地の律法違反なるをもつて、これが處罰を命ぜられたりしなり。

高國別は玉手姫と夫婦になり、ひそかに天使長大八洲彦命に向つて信書をたてまつり、花森彦の横暴かぎりなき處置を、口をきはめて進言したり。大八洲彦命はただちに言靈別命をして新高山に急行せしめ、精密なる調査を命じたまひぬ。言靈別命はここに花森彦、高國別、玉手姫を命の前に來らしめ、審判を開始され

けるが、花森彦は言霊別命にむかひ、高國別夫妻が玉手姫の悪計にかかりをることを詳細に述べたり。このとき玉手姫は涙を流して泣き伏し、言霊別命にむかつて、花森彦の無情をうつたへ、かつ自分の誠意の貫徹せざることを言葉たくみに進言したりける。

ここに花森彦は高國別の天地の律法に違反し、かつ玉手姫を妻とせる不法の行爲を述べたてたるに、高國別はうやうやしく言霊別命にむかつていふ。

『我は不幸にして高國姫に死別れ、神務を輔佐する者なく、實に煩悶苦悩せしに、忠實なる玉手姫は陰に陽に我が神業を輔佐し功績もつとも顯著にして、この高砂島においては彼にまさる完全なる輔助者なし。いかに一夫一婦の律法あればとて、我はすでに妻を失ひ孤獨となれり。故にここに諸神司に信任あつき玉手姫を登用して、妻となすに何の不可かこれあらむ。一夫一婦は天地律法の精神ならずや』

と口をきはめて進言したりければ、言霊別命は、

『汝のいふところ一理なきにあらざれども、本島の主權者たる花森彦の認許を受けずして、獨斷的にかかる一大事を決行するは道理に反するものなり。今後は主

權者の認許をえて何事も決行すべし』
と嚴命したまへば、高國別はいふ。
『貴神の嚴命は實にもつとも千萬なれども、本島の主權者たる花森彦はすでに天則に違反し、延いて稚櫻姫命を幽界に降したてまつりたる無道の神司なり。我いかに天地を畏れ長上を尊べとの律法ありといへども、かかる不德不義なる天使の命を聞くに堪へむや。君君たらずンば臣臣たらず、願はくは公明正大なる御裁斷を乞ひ奉る』
と涙を流して陳辨するにぞ、言靈別命は高國別にむかつて、
『花森彦の罪は律法制定前の罪にして、國治立命のすでに恩赦されしは汝も知るところならむ。しかるに汝律法制定後、八頭の神となり、國魂の神に仕へながら、邪神のために誤られて最愛の妻を失ひ、玉手姫の容色に迷ひ、かつ長上の命を奉ぜず。これに越えたる律法破壞者はなし』
と宣示したまひ、
『高國別にしてなほ迷夢を醒さざれば是非なし』

といひつつ神殿より青色の玉を取りだし、玉手姫の面上を射照したまへば、今まで玉を欺く姫の姿はたちまち惡狐と變じ、雲を翔りて空中高く西天に姿を隱しける。高國別はここに初めて花森彦の明察に驚き、今までの無禮を涙とともに陳謝したりければ、言靈別命は深く將來を戒め、……何事も主權者の命を奉じ、神政に奉仕せよ……と嚴命し、かつ……委細を大八洲彦命に報告し、何分の沙汰あるまで謹慎を表しをるべし……と地の高天原に歸還し、一伍一什を天使長に奏上したまひける。審議の結果高國別に嚴しく注意をあたへ、今回の失敗の罪は問はざることとなりにけり。

しかるに常世姫一派の惡魔は、千變萬化の惡計をめぐらし、つひには高國別をおとしいれ、蒙古別をしてその地位に代らしめ、花森彦を新高山の西南方に押込めたりければ、さしも平和の高砂島は大半常世姫の部下の占領するところとなりける。されど花森彦の至粹至純の靈魂は永く本島にとどまり、青色の玉とともにこの島に永久に隱されにける。花森彦の子孫も今に儼存して勇猛義烈の神民となり、神の御魂を維持しつつ彌勒神政の出現を鶴首して靈を研きて待おれりといふ。

（大正一〇・一一・一三　舊一〇・一四　土井靖都録）

第三篇　ロツキー山

第五章　不審の使神〔一〇五〕

ロツキー山は紺色の玉を、莊嚴なる神殿を建立して鎭祭され、貴治彦八王神となり、靖國別八頭神となり、律法を遵守して、きはめて平穩に神事、神政は行はれけり。

ある時、靖國姫の居閒の扉を、ひそかに叩く者あり。靖國姫は侍女とともに扉を開き、

『かかる深夜に戸を叩くは何者ぞ』
と問ひただせば、聲に應じて、
『私は地の高天原なる國直姫命の密使にして、小島彦と申す者なり』
（附言、小島彦と稱するは實は僞名にて、常世彦の閒者、玉醜別といふ曲者なりける）
靖國姫は小島彦に一面識もなければその眞僞を知らず、國直姫命の急使と聞きて大いに驚き、
『かかる夜陰にひそかに來りたまふは、地の高天原に何事か急變おこりしならむ。まづわが居閒に』
と小島彦を引入れ、その用務をあわただしく息をはづませ問ひかくれば、小島彦は聲を低ふし四邊に眼を配り、かつ畏れながら、
『隣神を遠ざけたまへ』
と仔細ありげなり。
靖國姫はその言のごとく隣神を遠ざけ、小島彦としづかに對座したり。小島彦

は聲を低ふしていふ、

『地の高天原には大變事出來し、天使長大八洲彦命は、八王大神部下の神の惡辣なる計略におちいり、つひに上天せり。その他の天使は善後策につき協議中にして、一歩も外出することを得ず。上を下への大騒ぎなれば、我をして天使代理として遣はしたまふ。ゆゑに我が言は國直姫命の神言にして、天使の言も同様なり。一時も早く靖國別に貴下より傳言せられたし』

と顔色を變じていひければ、靖國姫はそのまま使者をわが居間に待たせおき、靖國別の寢殿にいたり、密使の次第を逐一進言したりけり。靖國別は大いに驚きしばらく雙手を組ンで思案の體なりし。たちまち座を立つて、貴治彦の御殿に參向し、密使の次第を逐一奏上したりける。

貴治彦はこれを聞きて大いに訝かり、

『國直姫命の密使ならば、第一着に吾れに傳へらるべきはずなり。しかるに如何なる變事ありとて吾れを差しおき、しかも女性の居間をたたき、かかる一大事を報告すべき理由なし。想ふに反逆を企つる者の奸手段なるべし。汝らはすみやか

に、その密使を我が前にともなひ來れ。我は彼に會ひ實否を調査せむ』と言葉を殘して殿中に進み入りける。

靖國別は命を奉じ、小島彦を伴なひひそかに殿中に伺候し、貴治彦にむかつて謁を乞ひしに、命は小島彦にむかつて密使の次第を詳細に訊問したりける。小島彦は低頭平身して言葉たくみに、前述の次第を奏上し、一時もはやく貴治彦の地の高天原へのぼられることを懇請し、かついふ。

『徒に躊躇逡巡して時を移さば一層大事變を惹起し、つひには國直姫命の御身邊も危からむ。大神の一大事、早くこの場を立つて、吾らとともに地の高天原へ參向されたし』

と進言せる。

折からたちまち城下におこる鬨の聲。命は急ぎ勾欄にのぼり山下はるかに見渡せば、夜陰のため確かにそれと判別はつかざれども、立ちならぶ無數の高張は、十曜の神紋記されありき。ただごとならじと元の座にかへり、靖國別に何事か耳語したまひける。矢叫びの聲、鬨の聲、次第に近づききたる。そのとき地の高天

原の從神司豐彦（實は常世姫の閒者）は輕裝のまま走りきたり階下に平伏し、

『恐れながら八王の神に注進し奉る。地の高天原はほとんど破壞の運命に逢着し、國治立命は行衞不明となり、大混亂狀態におちいり、收拾すべからざる慘狀なり。國直姫命は從者をしたがへ小島彦の跡を追ひ、ただ今出御相なりたり。相當の禮をつくして諸神司をして城門に奉迎せしめたまへ』

とあはただしく奏上したるにぞ、命は寢耳に水の注進にしばし茫然としてゐたりしが、ただちに靖國別に命じて城内の諸神司に非常召集を命じ、國直姫命を城門に迎へたてまつるの準備に着手されたりける。

命の命令一下とともに、諸神は各自禮裝をととのへ、城門に奉迎したり。

ここに國直姫命は諸神司とともに悠然として入りきたり、慇懃に挨拶を述べ、地の高天原の慘狀を物語られける。ここに國直姫命の命令を奉じて貴治彦、靖國別は少數の神軍をひきゐ、地の高天原へ應援のため參向することに決したり。

あまたの諸神將卒は靖國姫を守護し、ロツキー山の城中にとどまり、しばらく形勢を觀望することとはなりける。

これよりさきに貴治彦は、國彦をひそかに地の高天原につかはし、實否を糺さしめ、かつ小島彦の密使の眞僞を調査せしめゐたりしなり。

大八洲彦命は國彦の言を聞いておほいに驚き、

『地の高天原はかくのごとく平穏無事なるに、かかる密使をだすべき理由なし。察するところ邪神の奸策ならむ。このままに捨ておかば、ロッキー山は、いかなる運命に逢着するや計りがたし』

と、言靈別命に、國彦を添へ、あまたの從神とともに、ロッキー山に急ぎ出發せしめられたるぞ畏こけれ。

（大正一〇・一一・一四　舊一〇・一五　栗原七藏録）

第六章　籠の鳥〔一〇六〕

國直姫命は靖國姫とともにロッキー山の諸神將卒を集め、高天原の慘状を物語

り、かつ、……我は天の御三體の大神の命を奉じ、ロッキー山に地の高天原を建設し、國治立命を迎へたてまつり、天地の律法を嚴守し、もつて至善至美なるミロクの神政を布かむとす。汝ら諸神將卒心を合せ我が命を奉じ、力を一にして、もつて神政成就のために努力せよ……と宣示したり。

諸神將卒は一點の疑ひもなく、この宣示を遵守し、ますます結束を固くし、各城門には勇猛なる神將を配置し、固くこれを守らしめたり。このとき東天をとどろかし、天の磐船に乘りてきたる神あり、靖國別に面談せむと、眉目清秀威嚴犯すべからざる言靈別命がこの場に現はれたまひける。東門の神將玉國別は、この旨を國直姫命に奏上しければ、命はただちに大廣間に諸神將を集め、列座せる中央に言靈別命を招き、その來意を尋ねける。

ここに言靈別命は、

『貴治彦の使者國彦の進言により、高天原の混亂狀態に陥り、國直姫命は身をもつて免れ、大八洲彦命は昇天し、國治立命は行衛不明となりたまひたりとの密使ロッキー山に來れりと聞き、不審にたへず、事の實否を調査せむために、我は大

八洲彦命の使神として出向せり。今日の地の高天原はきはめて平穏無事なり。したがつて國治立命をはじめ、國直姫命、大八洲彦命はすこぶる健全にして神務に鞅掌せられ、天地の律法は完全に行はれつつあり。しかるに何者の奸策にや、當城にむけ虚偽の密告をなし當山を攪亂せむとはする、貴下は何者なるぞ』

と國直姫命にむかつて詰問せり。このとき國直姫命は容色をあらため威儀を正し、

『汝言靈別命と自稱するも我はこれを信ぜず。現に國直姫命は我なるぞ。しかるに國直姫命高天原にあり、大八洲彦命も健全に神務に從事せりとは虚偽もまた甚だしからずや、汝は「詐るなかれ」といふ天地の律法を破りたる邪神なり、國直姫命あに二柱あらむや』

と色をなして言ひ放ちけるにぞ、ここに諸神將は、……我らをいつはる不屈至極の邪神、贋言靈別命を嚴罰に處せむ……と、いふより早く目と目を見合せ、ただちに立つて命を後手に縛りあげ、口に猿轡をはませ、神卒をして泥深き堀の中に投棄し、凱歌を奏しふたたび國直姫命の御前に出で鼻高々とこの顛末を奏上した り。國直姫命は賞詞を賜はるかと思ひきや、……汝らは『殺すなかれ』との天則

に違反せり。すみやかに根の國に退去を命ず……と嚴かに言ひわたしければ、案に相違の神司らは梟の夜食に外れたるごとき不平面にて、神將に引立てられ牢獄に投げ込まれける。一方言靈別命は辛うじて泥中より這ひ上りしところを番卒に見つけられ、高手小手に縛められて牢獄に投げこまれ、無限の苦痛をなめたまひける。

折しもどこともなく微妙の音樂聞え、紺碧の蒼空より五色の雲に乗り、あまたの神將をしたがへ十曜の神旗を幾十ともなく押したてて、ロッキー山にむかつて下りきたる、榮光と權威の具はれる大神現はれましぬ。國直姫命は恭敬禮拜拍手してこれを迎へ、……國治立命様御苦勞に存じ奉る……と大聲に奏上したれば、あまたの神司は命の聲を聞くと齊しく恭敬禮拜低頭平身、禮の限りをつくして奉迎し、歡喜の涙にくれにける。

ここに國直姫命は國治立命を奥殿に案内し奉り、かつ諸神司を集めて地の高天原を天の大神の命により、ロッキー山に遷されしことを宣示しける。諸神將卒は欣喜雀躍手の舞ひ足の踏むところを知らざりし。時しも天の鳥船に乗りて、地の

高天原より八王神なる貴治彦、八頭神なる靖國別歸りきたり、東門に降下し、番卒にむかつて開門を命じたり。番卒はおほいに驚き、唯々として門を開き二神將を通したり。二神將はただちに奥殿に氣色をかへて進み入り、靖國姫を一間に招き、高天原の實況を物語り、かつ、當山に逃げきたりしといふ國治立命は、その實常世姫の部下の邪神なりと語れば、靖國姫はおほいに驚き、かつ、その眞僞に迷はざるを得ざりける。

ここに貴治彦、靖國別は城内の諸神司を集め、地の高天原の實況を傳達せむとし城内一般に令を發したるに、僞國直姫命は陰謀の露見せむことを恐れ、みづからも諸神將に令を發し、大廣前に集まらしめける。諸神將卒は一柱として國直姫命を僞神と信ずる者なく、かつ僞の國治立命を一層深く信頼しゐたりける。このとき貴治彦、靖國別は正座になほり、僞の國直姫にむかつて、貴治彦は、

『汝はいづれより來りし邪神なるか、有體に白状せよ。返答次第によりては容赦はならじ』

と雙方より詰めかけけるを、國直姫命はカラカラとうち笑ひ、

『汝は主神にむかつて無禮の雜言、「長上を敬へ」との律法を破る反逆者ならずや。また汝は地の高天原にいたりてその慘状を見きはめ歸りしにもかかはらず、吾にむかつて何れの邪神ぞと口をきはめて罵るは、これはまた律法違反に非ずや。我はただちに奥殿に入り、國治立命に汝が無禮の次第を逐一奏上し奉らむ、しばらく控へよ』

と、足音荒く奥殿に急ぎ進入したりしが、城内の諸神將はこの光景を見てやや不審の雲に包まれゐたり。貴治彦、靖國別は怒心頭に達し、二神司は共に刀の柄に手をかけ、國直姫命を一刀の下に切り付けむと決心したりしが、たちまち天地の律法を思ひ出し……「怒る勿れ、殺す勿れ」いま我短慮を起しなばみづから天則を破る者なり、ああ如何にせむ……と思案にくるるをりしも、奥殿より國治立命あまたの侍神を從へ、悠然と立ち現はれ、

『國治立命これに在り、汝何ゆゑなれば天地の大命を拜持する國直姫命にむかつて暴言を吐くや、汝は天地の律法を破壞する邪神なり、一時も早くこの場を立去れ。萬一吾が言に違背せば、やむを得ず汝ら二人を、根の國に退去を命ず』

と、言辭おごそかに傳へければ、城内の諸神將卒はいづれも眞正の國治立命と信じ、この二人を天則違反者となして、ロッキー山を退去せしめたりける。ここに貴治彦はモスコーに逃れ、蟄居して時期を待つこととなりぬ。また靖國別夫婦は何處ともなく落ちのび、行衛不明となれり。

附言　この國治立命といふは六面八臂の邪鬼の變化にして、國直姫命は常世姫の部下醜玉姫なり。かくしてロッキー山は惡魔の手におちいり、諸神將卒は、その邪神たることを覺る者なく、ここに僞高天原はある時期まで、建設されゐたりしなり。

（大正一〇・一一・一四　舊一〇・一五　河津雄録）

第七章　諷詩の徳〔一〇七〕

大八洲彦命は、ロッキー山は惡神のために根底より覆へされ、貴治彦、靖國別

夫妻のいづこともなく逃亡し、かつ言靈別命は敵のために捕はれ、牢獄につながれ呻吟せることを知り、ここに諸神司を集めて、ロツキー山を回復し、言靈別命を救ひ出さむことを協議したまひぬ。諸神司は鳩首謀議の結果、神軍をおこしてロツキー山を一舉に奪還するは、さまで難事にあらざれども、言靈別命の身邊にかへつて危險の迫らむことを慮り、表面これを攻撃することを躊躇したまひぬ。

ここに言靈別命の侍者に、忠勇義烈の譽高き言代別といふ者ありき。言代別は恐るおそる諸神將の前に出で、

『我つらつら考ふるに、ロツキー山の攻撃に先だち、言靈別命を救ひださざれば、命は人質同様なれば、魔軍は危急におちいりたる場合、命を殺害したてまつるは必定なり。我は「僞るなかれ」の嚴しき律法を破りみづから犧牲となりて、我が主を救ひたてまつらむとす。幸にこの大任を我に許したまへ』

と誠心おもてに表はして嘆願したりければ、大八洲彦命は打ちうなづき、

『汝は主を救はむとして敵を僞らむとする行爲は、元來忠良の眞情よりいでたるものなれば決して罪とならざるべし。すみやかにロツキー山にいたりて言靈別命

を救ひだせよ』
と命じたまひぬ。言代別はおほいに悦び天にも昇る心地して、ただちにロッキー山にむかひける。言代別は圓き石に金鍍金をほどこし、如意寶珠の珠を僞造して懷中に深く祕藏し、ロッキー山の南門に現はれ、
『國直姫命に奉るべき珍寶あり。拜謁を乞ひたし。願はくば貴下らの斡旋によりこの由を奏上されむことを』
と、言葉たくみに賴みこみけるを、番卒はいふ。
『果して貴下が如意寶珠の珠を所持さるるならば、我らに一目拜觀せしめよ。珠の有無をたしかめざるにおいては、輕々しく奏上することを得ず』
とてやや難色ありければ言代別は、
『貴下の仰せ實に尤もなり』
とて懷をひらき、金色燦然たる珠の一部を現はし見せたるに、番卒はこれを上級の神司に傳へ、漸次國直姫命にこの次第を奏上したりける。國直姫命は、
『ロッキー山には未だ如意寶珠の珠なきを憾みとす。しかるに天運循環してここ

に珍寶の手に入るは、いよいよ願望成就の時期到來せしならむ。すみやかに言代別を我が前によびきたれ』

といそいそとして命令したり。かくて言代別はしばらくして城内の神司にみちびかれ、國直姫命の前に現はれ一禮の後、懷中より珠を取出し八足の机上にうやうやしく安置し、

『吾こそは高白山の麓に住む言代別といふ者なり。いまや當山に國治立大神現はれたまふと聞きて歡喜にたへず。吾は往古より家に傳はる如意寶珠の珠を持參し、これを大神に奉り、もつて神業に參加せむと欲し、遠き山河を越えてここに參のぼりたり』

と言葉をつくして奏上したるに、國直姫命はおほいに悅び、その珠を手にとり熟視して滿面笑を含み、

『實に稀代の珍寶なり。汝はこの珠を奉りし功により、いかなる望みなりとも叶へつかはさむ』

と宣言せり。言代別は頓首再拜、喜色滿面にあふれ、

『實に有難き大神の御仰せ、御恩は海山に代へがたし。願はくば卑しき吾をして牢獄の番卒たらしめたまへ、これに過ぎたるよろこびはなし』

と願ひけるに、國直姫命は少しく首をかたむけ、

『心得ぬ汝が望み、かかる麗しき世界の珍寶を奉りたる功勞者でありながら、何を苦しみてかかる卑しき職を求むるや』

と反問するを、言代別はただちに言葉を反していふ。

『諺にも喬木よく風にあたり、出る杭は打たれ、高きに昇る者は、地に落つることありと聞きおよぶ。吾は役目の高下を望まず、ただ誠心誠意大神に仕へ、神業の一端に加へたまはばこれに過ぎたる幸なし。それとも吾が技倆を大神において認めたまはば、其のとき相當の地位を與へたまふべし。急に上職をたまはるより漸次に重く用ゐさせたまはば、吾が一身にとりてもつとも安全ならむ』

との言に、國直姫命は言代別の名利を求めず、寡欲恬淡なるに感激し、ただちにその乞ひを容れて牢獄の番卒仲間に加へけり。言代別は日夜番卒として忠實に奉務し、心ひそかに言靈別命の繋がれたる牢獄を探りゐたりける。言靈別命は頭髪

長く背後に伸び、髭は胸先に垂れ、顔色憔悴して、ほとんど見擬ふばかりの姿と變じゐたまへば、言代別は命の御姿を認めること容易ならざりける。

あるとき國治立命出現の祝ひとして、ロッキー山の城内に祝宴を張られ、また獄卒一般は獄前において祝意を表するため、酒宴を催しける。獄卒は珍しき酒肴に醉ひ、あるひは舞ひ、あるひはうたひ、踊りて立騒ぎけり。中に言代別は立ちて歌をうたひ、踊りはじめたり。その歌は、

昔の昔のさる昔　猿が三疋飛ンできて
鬼に遂はれて二疋は逃げた。　殘りの一疋捕まへられて
いまは鬼らの玩弄とせられ　暗い穴へとほりこまれ
消息せうにも言傳しよにも　いまは詮なしただ一言の
言靈別の神代と　現はれいでし言代別の
わけて苦しき暗の夜半　高天原より降りきて
お猿の命を助けむと　思ふ手段は有明の
十五の月のまンまるい　光をあてに飛ンで出よ。

猿が餅搗きや、兎がまぜる。　まぜる兎が言代別よ。
今年や豊年満作ぢや。　心持よき望月の
光とともに飛ンで出よ。　光とともに飛ンで出よ。
よいとさのよいとさ　さつさとぬけ出て東へ走れ。
東に羊が千疋をつて　猿をかかへて飛ンでゆく。

よいとさのよいとさ。

と節面白くみづから謠ひみづから踊り狂ふにぞ、あまたの番卒は何の意味なるやを知らず、ただ面白き歌とのみ思ひて笑ふばかりなりける。言靈別命はこの歌を聞きて言代別の我を救ひ出さむために番卒となり、合圖の歌をうたひしものと大いによろこび、十五夜の月を待ちゐたまひぬ。晝きたり夜去りて、つひには仲秋の月の夜となりぬ。國直姫命以下の曲人は、高臺に昇り月見の宴を催しゐたれば、番卒もまた一所に集まりて月見の宴を開き、酒に醉ひくるひ面白き歌をうたひて餘念なくたわむれゐたりけり。このとき言代別は、ふたたび以前の歌をうたひ牢獄を見廻りぬ。ある牢獄の中より小聲にて、

『言代別』

と呼ぶ聲あり。疑ひもなく聞きおぼえたる主の聲なるに、言代別は大いによろこび、ただちに戸をひらき縛を解き、やつれたる言靈別命を背に負ひ、東門指して逃げ出したり。

外には言靈別命の部下の神卒あまた現はれきたり、命を天磐船に乘せ、天空高くロツキー山を後に、地の高天原へ無事歸還したりける。言代別は何喰はぬ顔にて牢獄の戸を閉ぢ、もとのごとく酒宴の場に現はれ、あまたの番卒とともに酒に醉ひ踊り狂ひゐたり。後に殘りし言代別は後日いかなる活動をなすか、趣味ある問題と云ふべし。

（大正一〇・一一・一四　舊一〇・一五　土井靖都録）

第八章　從神司の殊勳〔一〇八〕

望の夜の月影とともに、言靈別命の姿は牢獄より消え去りにけり。されど言代別の監守する獄舍にあらざれば、言代別には何の咎もなかりき。言代別は漸次重用されて、つひには國直姫命の參謀となりぬ。これよりロツキー山の城内はほとんど言代別の意志のままに一切の事物は處理さるることとなりける。

話はかはつて、地の高天原においては、大八洲彦命以下の諸神將は、言靈別命の歸還により一切の情勢を知悉し、このままに放任せば國治立命と僞稱する常熊彦、および國直姫命と僞稱する醜玉姫らの、いかなる奸策をめぐらし、つひには各地の八王八頭神司を籠絡し、地の高天原の神政を轉覆せむとするやも計りがたし、躊躇していたづらに時日を移さば、遂に斧鉞を用ふるも及ばざるにいたらむ。よろしく二葉の内に刈りとるに如かずと、ここに天使大足彦をして諸神將卒を引率しロツキー山に向はしめ、東西南北の各門より一擧にこれを攻め落とし、邪神を膺懲し、天地の律法を説き諭し、心底より悔悟せしめむと、衆議一決したりければ、ここに大足彦は諸神將卒を引率し、天磐樟船を連ねて、天空を翔り、ロツキー山にむかひ勇ましく進發したりける。

大足彦の部將、足世彦は東門より、足永彦は西門より、大照彦は南門より、大島別は北門より、一齊に鬨をつくつてロツキー城に攻めよせたる。時しもあれや一天墨を流せしごとく、月の光も星の輝きもなく、咫尺を辨ぜざるにいたりたり。にはかに騷ぐ鷄の羽音に國直姫命は驚き目をさまし、

『言代別は何れにあるや、敵軍にはかに押しよせたり。諸神司はすみやかに各門の守備につけよ』

と大聲に呼ばはりけるにぞ、魔軍の諸神將は、國直姫命の聲を目あてに、大廣前に驅け集まりぬ。城内の參謀兼總指揮官たる言代別は、何故かすこしも姿を現はさざりき。諸神將は統率者を失ひ周章狼狽なすところを知らず。大足彦の率ゐる神將は堀を越え、壁を破り、門戸を破壞し、破竹の勢をもつて本城に進擊せり。

このとき言代別は血相かへて何處よりともなく走りきたり、

『事態容易ならず、國直姫命は奥殿に入り國治立命の身邊を守護したまへ、我はこれより、寄せくる數萬の敵軍にむかひ、六韜三略の兵法をもつて敵軍を千變萬化にかけ惱まし、一柱ものこさず濠の藻屑となし、御神慮を慰め奉らむ。諸神將

は我にしたがひ防禦に従事せよ』
と言葉おごそかに令を下し、みづから東門に向ひぬ。
東門には大足彦、足世彦とともに侵入せむとする眞最中なりき。言代別は大足彦にむかひ、
『我は言靈別命の従者言代別なり、國の眞澄の鏡を出してロッキー城を照させたまへ』
と呼ばはりぬ。このとき城内の諸神將は、言代別の指揮のもとに殘らず東門に集まりゐたるが、大足彦は、國の眞澄の鏡を取りだし、敵軍に向つて射照したるに、城内の神軍の六分までは、邪鬼、惡狐、惡蛇の正體をあらはし、鏡の威德に照されて、旭に霜の消ゆるがごとく煙散霧消したり。言代別は大足彦の先頭に立ち、常熊彦、醜玉姫の奥殿に進みいり、戸の外より大音聲にて、
『我いま如意寶珠の玉を取りいだし敵軍を照すやいなや、敵は玉の威德にちぢみあがり、蜘蛛の子を散らすがごとく四方に散亂して、もはや城内には敵の片影をも認めず、かくなる上はいつまでも奥殿に忍ばせたまふに及ばず、この戸を早く

開かせたまへ』

と呼ばはりぬ。國治立命、國直姫命の僞神は言代別の言葉を聞きおほいに安堵し、たちまち内より戸を開きたるを、大足彦はただちに奥殿に進入し、國の眞澄の鏡を懐中より取りいだし、二人に向つて射照しはじむるや、たちまち六面八臂の邪鬼と變じ、金毛九尾の惡狐と化し、魔神の正體をあらはし、常世城目がけて黒雲に乗じ雲を霞と逃げ去りぬ。幸にロッキー山の紺色の玉は、魔軍に汚されず、嚴粛に鎭祭せられありける。

ここに大足彦は言代別の忠勇義烈を賞し、言代別に命の名を與へて言代別命と稱せしめロッキー山の主權者となし、八王神の列に加へられける。つぎに東門の武將足世彦に命の名を與へ足世彦命と稱せしめ八頭の列に加へたまひ、つぎに足永彦、大照彦、大島別をのこし、ロッキー城の部將として留めおき、みづからは少數の神軍とともに天の磐船に乗り、無事高天原に凱旋せられたりと思ふとたんに、冷たき水の一二滴、襟首に何處からともなく落ちきたり、驚いて正氣に復れば、身は高熊の靈窟の入口に兩手を組み端坐したまま、鎭魂の姿勢を取りて居た

りける。

（大正一〇・一一・一四　舊一〇・一五　加藤明子録）

第四篇　鬼城山

第九章　辨者と辨者〔一〇九〕

寒風吹き荒み、牡丹餅雪さへ降りきたる高熊山の巖窟の入口に、靈縛を受け、身動きならぬ苦しさに、二時間ばかりを費やせしと思ふころ、またもや王仁は靈界に逍遙したりける。

たちまち巖壁に紫紺色の雲の戸帳がおろされ、中より荘重なる大神の御聲聞こ

ゆると同時に、紫紺色の雲の戸帳は自然にまきあげられ、正面には、えもいはれぬ荘厳なる寶座が設けられ、あまたの天使を從へて國治立命、國直姫命と共に中央に着座され、ふたたび神界探險の厳命を降したまひしが、寶座は忽然として消え去りし刹那に、自分はある高山の頂に登り、鬼城山におこれる種々の經緯を見るとはなしに、見聞しゐたりける。

鬼城山には灰色の玉を鎮祭し、眞鐵彦を八王神となし、元照彦を八頭神となし、眞鐵姫、元照姫を八王八頭神の妻として、永遠に守護せしむることに決定された り。しかるに鬼城山にはすでに棒振彦の變名なる美山彦、高虎姫の變名なる國照姫ら、常世姫の權威を笠にきて傍若無人の擧動多く、加ふるに杵築姫、清熊、猿世彦、駒山彦らの邪神とともに武威を輝かし、容易に國治立命の神命を奉ぜず、かつ律法を遵守せず、地の高天原より八王八頭の神司の赴任をさまたげ、魔神を集めてあくまで對抗しつつありしなり。

ここに大八洲彦命は諸神將をあつめ、美山彦の罪状にたいし、

『天地の律法御制定により從前の罪惡を大赦せられたれば、この際本心に立ち歸

らせ、神業に参加せしめなば如何』
と提議されたり。諸神將は天使長の御意見に贊成したてまつらむと、滿場一致をもつて命の提議を可決したり。されど邪智ふかき美山彦以下の曲人らの一筋繩にては到底城を追ひがたきを知り、龍宮城の侍女にして辨舌に巧みなる口子姫をつかはし、神意を傳達し、すみやかに大神に歸順せしむべく旨を含めて鬼城山に遣はしたまひける。

口子姫は照妙のうるはしき衣を着かざり、二柱の侍女をともなひ、鬼城山にいたり、美山彦をはじめ國照姫に面接を申込みたり。美山彦らは、口子姫を奥の間にみちびき來意を尋ねたるに、口子姫は一禮して後おもむろにいふ。

『このたび天地の律法地の高天原において制定され、世界の各所に十二の國魂を鎭祭し、八王八頭の神司を任命したまひたり。しかして鬼城山は眞鐵彦、眞鐵姫、元照彦、元照姫の主宰のもとに於かるることに決定されたり。汝はすみやかにこの神命を拜受し、鬼城山の城塞を明けわたし、地の高天原に參上りて神務に奉仕されよ。以上は天使長大八洲彦命の直命なり』

と淀みなく申渡しけるに、國照姫は、膝をすすめてその處置の不當なるを罵り、かつ懸河の辨舌をふるひて滔々と辨駁につとめたり。されど口子姫は名題の辨舌者なれば、負ず、劣らず布留那の辨をふるひて、神命の冒すべからざる理由を極力辨明したりけれども、國照姫もさすがの惡漢、口子姫が一言述ぶればまた一言、たがひに舌鋒火花を散らし鎬を削り、辨論はてしもなく、寢食を忘れて七日七夜を費やしけるが、布留那の辨者口子姫も、つひに國照姫の舌鋒に突き破られて兜を脱ぎ、國照姫の幕下となり、地の高天原に三年を經るも復命せざるのみならず、その身は鬼城山の美山彦に重用され、高天原に一時は反旗を翻すにいたりける。

大八洲彦命はふたたび諸神將を集めていふ。

『鬼城山に遣はせし口子姫は三年を經るもいまだ復命せざるのみか、もろくも國照姫の佞辨に肝をぬかれ、いまや鬼城山の重臣となり、反旗を翻さむとせりと聞く。鬼城山の美山彦一派にたいし膺懲の神軍をむけ、一擧にこれを討滅せむは容易の業なれども如何せむ、天地の律法は嚴然として日月のごとく、毫末も犯すべからず、諸神の御意見承りたし』

と諸神司に對しはかりたまひける。ここに天使神國別命すすみいで、『天地の律法は「殺す勿れ」とあり、仁慈をもつて萬物に對するは、大神の御神慮にして、かつ律法の示すところなり。大神は禽獸蟲魚にいたるまで、廣く萬物を愛せよと宣ひ、かつ律法に定めおかれたり。彼らはいかに猛惡の神なりといへども、一方の頭領と仰がるるにおいておや。望むらくは再び使をつかはして大神の神慮を懇切に説き示し、大義名分を悟らせなば、つひに心底より歸順するにいたらむ。よろしく吾妻別の一子須賀彦を遣はしたまへ』と進言しければ、天使長はこの言を容れ、須賀彦を第二の使者として、鬼城山に派遣したまひける。

（大正一〇・一一・一五　舊一〇・一六　森良仁録）

第一〇章　無分別〔一一〇〕

天使長大八洲彦命の命により、須賀彦は第二の使者として、伴をも連れずただ一騎龍馬にまたがり蹄の音高く、鬼城山にむかひて出馬したりけり。須賀彦は、容貌うるはしく眉目清秀にして、あくまで色白く肌滑らかにしてあたかも天女の再來かと疑はるるばかりの美男子なりけり。

須賀彦は鬼城山の城門を何ンの憚る色もなく、龍馬に鞭うち奥ふかく侵入し、玄關先に馬をすて奥殿に進みいり、大音聲をあげていふ。

『我こそは、地の高天原を司りたまふ國治立命、天使長大八洲彦命の直使として出馬せり、言ひ渡すべき仔細あり。美山彦はあらざるか、國照姫は何處ぞ。すみやかに我が眼前にまかり出で、直使の命を承れ』

と呼ばはりし。その言靈の力は、實に雷鳴のごとく轟きわたり何となくすさまじき中にも優しみありき。美山彦は須賀彦の言靈にのまれ、やや恐怖の念にかられて躊躇逡巡の色見えにける。

この時國照姫は一室より走りいで、須賀彦の容姿端麗にして、どことなく權威に充てるその態度に荒肝をひしがれ、何の言葉もなく頭を垂れて默視するのみな

りしが、又もや静に入りきたる女性あり。須賀彦は一目見るよりハツタと睨み、『反逆不忠の口子姫、見るもけがらはし、片時も早くこの場を立ち去れよ』とにらみつけられ、口子姫は恨めしげに須賀彦の顔を見あげ、袖をもつてしたたる涙をふきながら四邊に眼を配り、わが胸を押へ、何事か口には出さざれど祕密のこもれることを暗示する様子なりける。

美山彦の一女に小櫻姫といふ絶世の美しき若き女性あり。この小櫻姫は最前よりの須賀彦の容貌端麗なるを、戸の陰より垣間見つつ心臓に劇しき波を打たせゐたるが、つひに耐へかねて顔を赤らめながら戸を押しひらき、靜々と須賀彦の立てる前にはづかしげに兩手をつき、慇懃に述ぶる挨拶も口ごもるそのしほらしさ。

小櫻姫は思ひきつて面をもたぐるその刹那、須賀彦とたがひに視線は合致せり。いづれ劣らぬ花紅葉、色香爭ふ美人と美人、兩者の眼は何事かを物語るやうに見へにける。このとき美山彦、國照姫、口子姫はその場に現はれ、山海の珍味をもちだし須賀彦を丁寧に饗應し、ここに五人の神司は互ひに打ちとけ談話を交換したりける。

須賀彦はおもむろに使者のおもむきを傳へ、美山彦の返答を促しければ、美山彦は、

『使者のおもむき、たしかに拜承し奉る。しかしながら、城内の諸神司をあつめ一まづ協議を遂ぐるまで、數日の猶豫を與へたまはずや』

と顔をやや左方にかたむけ、須賀彦の返答いかにとその顔を見上げたり。須賀彦はその請求を許し、數日城内に滯在し返事を待ちゐたり。國照姫は小櫻姫に命じ、須賀彦の身邊に侍せしめ用務を便ぜしめける。

遠きやうでも近く、難きに似て易きは男女の道とかや。ここに須賀彦、小櫻姫は人目の關を破りて割無き仲となり終りぬ。この様子をうかがひ知りたる國照姫、口子姫はおほいに喜び、須賀彦をとどめて婿となさむと思ひ、種々心を配りゐたりける。

それより須賀彦と小櫻姫は兩親の默認のもとに夫婦きどりになり、緊要なる大神の使命を忘却するにいたりけるぞ歎てけれ。須賀彦は小櫻姫に魂をうばはれ日夜姫を相手に淫酒にふけり、あまたの城内の神司とともに花見の宴を催したるに、

諸神司は酒に醉ひつぶれ、かつ庭前にいまを盛りと咲き香ふ櫻木の下に、あるひは謠ひあるひは舞ひ、鐘や太鼓の拍子に乘つて踊りくるひ、かつ須賀彦の手をとり、「貴下も謠ひたまへ、舞ひたまへ」と、諸手をとつて大櫻木の下に誘ひ、春風に散る花吹雪を浴びつつ愉快氣に、須賀彦は酒の威力を借りてうたひ出しけり。その意味の大要を、今様式にここに擧ぐれば左の意味の籠れる歌なりける。

『花の顏色月の眉　富士の額に雪の肌
天津乙女の再來か　小野の小町か照手の姫か
ネルソンバテーか萬龍か　欣々女史か楊貴妃か
褒似の姫か難波江の　よしもあしきも判きかぬる
富田屋八千代も丸跣　年は二八か二九からぬ
小櫻姫の微笑は　天下の城も傾けむ
鬼神もおそるる幽廳の　閻魔も【よだれ】を流すらむ
優び姿は海棠の　雨の濕ほふごとくなり

かかる美人がまたと世に　　三千世界にあるものか
有明月のまるまると　　背は高からず低からず
一度にひらく紅梅の　　露に綻ぶ姿かや
口より見する歯の光　　光明姫か衣通姫の
美し命の再生か　　すずしき聲は鈴蟲か
さては彌生の鶯か　　松の神代に遇ふよりも
小櫻姫ともろともに　　仲も吉野の山ふかく
竹の柱に茅の屋根　　虎狼の住家をも
なぞか厭はむ絲櫻　　夜半の嵐に散るとても
散らぬ兩人の戀衣　　戀に上下の隔てなし
隔てないのが戀の道　　隔てないのが戀の道
心須賀彦須賀々々と　　八雲の琴の須賀掻も
シヤツチン　シヤツチン　シヤツチンチン　シヤツチンチン　シヤツチン　シヤツチン　シヤツチンチン』

と二弦の琴を彈じながら、あたりかまはず土堤を切らして踊り狂ふ。

かくして須賀彦は、つひに戀の虜となり、地の高天原への復命をなさず、敵城の養子婿となりすまして不義の臣とはなりにける。樂しき鴛鴦の契もつかのま、いづこよりとも知らず白羽の矢は飛び來りて須賀彦の胸を貫ぬきたれば、あはれ悶死を遂げにけり。あゝ、實に愼むべきは男女の道にこそあれ。

（大正一〇・一一・一五　舊一〇・一六　有田九皐録）

第一一章　裸體の道中〔一一一〕

ここに國直姫命、大八洲彦命は、國治立命の命を奉じ、口子姫を使者として、鬼城山に遣はしたまへども、口子姫は國照姫に言向和合され、三年になるも復命せず、よつてさらに須賀彦をつかはし、神命を傳へしめたまへども、これまた、小櫻姫の容色に迷ひて命に背き、美山彦の養子となりてこれ又三年にいたるも復

命せず、何れの神を遣はして、これを言向和合さむやと、國直姫命は、諸神を集めて言問はせたまひける。

ここに諸神司協議の結果は、天使言靈別命を使神として派遣することに決定したれば、命は、ただちに命を奉じ、村幸彦をしたがへ鬼城山にいたり、美山彦に、大神の大命を、いと嚴かに申し渡されたり。

美山彦、國照姫は、數度の戰鬪にうち破られ、千載の怨恨をいだける敵將、言靈別命の直使と聞き、おほいに怒り、平素の鬱憤を晴らすは、今この時なりと、さあらぬ體に裝ひ、懷中に兇器をのみ、わざと恭しく他意なきふうを裝ひ、命に海山河野の珍物をもつてつくりたる食膳を奉り、甘き酒をすすめむと言ひながら、國照姫はひそかに口子姫をわが居間に招き、毒酒をすすめることを小聲に命令したり。口子姫は、今は鬼城山の使臣として重く用ひられつつあれども、なんとして天使言靈別命に毒酒をすすめ奉るに忍びむやと、心は矢竹に焦燥てども、傍に國照姫の目を瞠り、眼をすゑて、その動靜を窺ひつつあれば、いかんともなすに由なく、やむを得ず、酒に毒を混入したりける。

この時同じ形したる二個の甕に酒を盛り、一個は毒の入らざる清酒を盛り、國照姫は、頭髪一筋を抜きて酒甕を縛り、毒酒の印とせり。二本の酒甕は命の前に据ゑられたり。ここに言靈別命、美山彦は晩餐をともにすることとなりぬ。口子姫は、件の頭髪をとり外し、清酒の甕に括りつけ、素知らぬ體を裝ひゐたりける。

晩餐には國照姫、口子姫あらはれて、酌婦の用をつとめたるが、國照姫は、頭髪を括りたる甕をとり、これを言靈別命に勸めたり。また口子姫は印なき甕をとりて、美山彦にすすめ、つぎに國照姫にもこれを勸めける。あまたの侍女は酒杯のあひだを往來し、歌舞音曲を奏でてこの宴を賑しぬ。酒はおひおひと進むにしたがつて醉がまはりぬ。このとき美山彦は、にはかに胸苦しとて席をはづし、言靈別命に無禮を陳謝しつつ、醉歩蹣跚として寢所に入り、まもなく頭痛をおこし、腹を痛め、咽喉よりは盛ンに黒血を吐き、七顛八倒苦しみける。侍臣は驚き、水よ藥よと周章狼狽、上を下への大騒ぎとなりける。時しも國照姫はまたもや頭痛を發し、腹を痛め、これまた七顛八倒苦しみて黒血を吐きその場に打ち倒れたり。言靈別命はこれを見て大いに驚き、國照姫の介抱に餘念なかりける。

口子姫は、言靈別命にむかひ目くばせしながら、美山彦の寢所にかけつけ、介抱に從事したりしが、幸にも、毒酒の量は少なかりしためか、數日の後夫婦は恢復を見るにいたりける。言靈別命は、吾身を毒害せむとし過つて夫婦が、毒酒を飲みたるその顛末を毫も知らず、また口子姫の反り忠義の所爲なることをも知らずにゐたりしなり。

美山彦は、ここに新しき湯槽を造り、なみなみと溢るるばかり湯を沸し、まづ言靈別命を賓客として、第一着に入浴を勸めけるが、口子姫は、言靈別命に何ごとか私語つつ一間に入りて衣服を脱ぎ、これを言靈別命に着せしめ、みづから言靈別命の衣裳を身に着し、悠々として湯殿に入りぬ。

この時、國照姫は男神の浴殿に入りしことをたしかめ、ただちに美山彦に急告したれば、美山彦は時をはからひ、大身の鎗を提げ浴殿に入るや、たちまち魂消る女の叫び聲。よくよく見れば思ひきや、わが寵臣の口子姫ならむとは、驚きあわてこれを援けむと驅けより見れば、湯槽の湯は、赤色に變じ、口子姫の身體は強直したるまま朱に染りて絶命しゐたりける。

ここに美山彦は、……言靈別命をとり逃せしか殘念至極なり、たとへ鬼神の勇ありて天を翔り、地を潜るとも、要害きびしきこの城内を遁るべき手段なし、あくまで探し索めて、多年の怨みを晴らさむ……と、あまたの從臣に命を下し、血眼となりて城内くまなく搜索しける。このとき城門を走り出むとする女性あり。清熊は怪しみてあとより追ひすがり、背後より襟筋目がけて無手とつかめば、女神に變裝せる言靈別命は手早く衣を脱ぎ捨てて裸體となり、城の堀にザンブとばかり飛び込みたまひ、清熊の手には、口子姫の着衣が殘れるのみ。言靈別命は、水底を潜り、向ふ岸につき、辛うじて命を拾ひたまひぬ。命はそれより裸體のまま、鬼城山の城塞を後にして、韋駄天走りに、北へ北へと落ち延びたまひぬ。

寒氣はますます烈しく齒の根も合はぬ苦しさをこらへて、とある荒廢家に逃げこみ、老人夫婦の厚意により、垢つき破れたる衣を與へられ、ホツと一息つきながら、なほも一目散に北方さして逃げ出したまへば、はるか後方より、聲を限りに呼ぶものあり。ふりかへり見れば、まがふ方なき從臣村幸彦なり。命は彼に神策を授け、ふたたびこの場を引返して、鬼城山の偵察に向はしめたまひける。村

幸彦は今後はたして、いかなる活動をなすならむか。

（大正一〇・一一・一五　舊一〇・一六　栗原七藏録）

（第三章～第一一章　昭和一〇・一・一五　於今治市吉忠旅館　王仁校正）

第一二章　信仰の力〔一一二〕

ここに村幸彦は言靈別命の内命により、ふたたび鬼城山にとつて返し、城内外の偵察に苦心しゐたり。あるとき猿世彦、清熊らの一行に城外において出會したり。清熊は村幸彦の姿を見るなり直ちに從臣らに命じ、四方より包圍して難なくこれを捕縛せしめ、直ちに城内に連れ歸り、言靈別命の所在をきびしく訊問したりける。村幸彦は空とぼけて、

『言靈別命は城内にましまさむ。汝らは何を狼狽して吾に向つてかかる奇問を發し、かつ吾らを捕縛せしや、思ふに汝らは酒興のあまり、滑稽にも我を愚弄する

心算ならむか。いやしくも天使言霊別命の従臣なり。いかに卑怯未練の命なりとて、何を苦しみて城内をひそかに脱出するの要あらむや、囈語もほどほどにせられよ』

と大口を開けてからからと打笑ひける。城内の魔神どもは眞剣になり、たちまち憤怒の色を現はし、口々に罵りつつ執念深くも、

『命の所在を汝は知るならむ、逐一白状におよべ』

とたたみかけて嚴しく訊問の矢を放ちしが、村幸彦は神色自若として何の怖るるところなく、ますます空とぼけて笑ひくづれける。

魔神どもは、

『かかる狂人を相手とするはあたかも暖簾と腕押しをなすがごとし。エエ面倒なり、此奴の衣類を脱がせ、冷水を頭上より浴びせかけ、逆上を下げやらむ』

といふより早く寄つてたかつて眞裸となし、氷の張りつめたる池端に連れゆき、氷を打ち破り、池中に陥れ、頭上よりは長柄の柄杓をもつて幾千杯ともなく、水を代るがはる浴びせかけたり。

村幸彦は心中に深く神を念じ、小聲になりて天津祝詞をしきりに奏上しつつ、たちまち身體冷え、凍え死するかと思ひきや、村幸彦の身體よりは濛々と湯煙たち昇り、少しも寒氣を感ぜず、悠々として湯に入りしごとき愉快にみちたる顏色に微笑をうかべ、

『ヤイ魔神、湯が熱いぞ、も少し水をくれないか』

と大聲に笑ひける。魔神どもは一體合點ゆかず、かかる嚴寒の空に投込まれその上幾千杯とも限りなき寒水を頭上より浴びせかけられ、神色自若として、何の苦痛も感ぜざるのみか剩さへ……この湯は熱い、も少し水をくれ……とは正氣の沙汰にあらざるべし。かかる大狂人をいつまでも池中に投じて苦しめむとするも何の益なしと、つひに村幸彦を救ひ上げたりしが、村幸彦の身體よりは盛ンに湯煙たち上りけり。これまつたく村幸彦が信仰の力と、國治立命の厚き神助によるものなりけり。

美山彦、國照姫はこの奇瑞を訝かり、このたびは赤裸のまま北風吹き荒ぶ廊下の柱に村幸彦を縛りつけ、寄り集りて嘲笑罵詈をきはめ、かつ、

『汝は大狂亂の大馬鹿者ぞ。見かけによらぬ土閒助よ』
といひつつ竹箒をあまた携へきたり、四方八方より頭といはず顔といはず身體一面を、あるひは打ち或ひは突き、つひには竹箒の柄にて頭部を幾百千ともなくなぐりつけたり。されど村幸彦は何の苦痛も感ぜず、平然として笑を含み、
『鬼城山の魔神どもの腕力の弱さよ』
と腮をしやくりて嘲笑したりける。ここに美山彦は烈火のごとく憤り、
『然らば吾らの力を現はしくれむ。從臣どもは各自鐵棒を携へきたつて、彼が面上を力にまかせて打ちすゑ粉碎せよ』
と命ずれば、鶴の一聲從臣どもはたちまち鐵棒かざして現はれ、前後左右より村幸彦を力かぎりに頭部面部の嫌ひなく打ちすゑたり。されど村幸彦は心中深く神を念じ、天津祝詞を奏上しつつありしためか、さしも烈しき鐵棒の亂打も鎧袖一觸の感じもなく、口をきはめて魔神どもの非力を嘲笑したり。彼らはますます怒り、つひには面上目がけて、各自に痰唾を吐きかけ辱むとしたるに、いかがはしけむ、いづれの痰唾も村幸彦の面上にいたらず中空に飛びあがり、たちまち落下

して各自の面上に、數十倍の量と數十倍の汚穢とを增して瀧のごとくに降りきたりぬ。

美山彦はおのれの吐き出したる痰唾に祟られ、面部一面に布海苔を浴びたるごとく、青白き瓜實顏は、たちまち紙雛をなめて吐きだしたるごとき滑稽なる顏貌とはなりにける。

美山彦はますます怒り大刀を拔きはなち、村幸彦に切つてかかれども、村幸彦の身體は石地藏のごとく、切れども突けども何の答へもなく、劍は曲り刃は缺れ、たちまち鋸の刃のごとくなりにける。こんどは美山彦奧に入り、ねぢ鉢卷に赤褌、袴の股立高くからげ、大身の鎗をしごきながら、村幸彦の胸先目がけて「エヽ」と一聲、電光石火の勢をもつて突込みしが、いかがはしけむ、鎗の穗先は葱の葉のごとく脆くも曲り、美山彦は空を突いて、ひよろひよろと數十間ばかり前方に走り、どつとばかりに倒れける。このとき高手小手に縛られたる太き麻繩を見て村幸彦はからからとうち笑ひ、

『かかる腐れ繩を吾にかけて何とする。いらざる戲事をすな。鼻屎にて的を張り

しごとき汝らの計畫、實に失笑に値す』
といひも終らず、「エヽ」の一聲、さしもの強き太繩もばらばらに寸斷されたり。この様子を最前より窺ひゐたる須賀彦、小櫻姫は走りきたつて兩手をつき、村幸彦にむかつて、
『貴下は如何なる尊き強き神人にましますぞや。吾らはここに前非を悔ひ、眞情より反逆の罪を謝し奉る』
と畏るおそる述べたてたり。傍にありし美山彦、國照姫は聲をはなつて號泣し、神德の威大なるに感じ、夢のさめたるごとく始めて本心に立ち歸り、大八洲彦命の直命を奉じ、鬼城山をこころよく開け渡し、一同は從臣を率ゐて地の高天原に參向し、歸順の意を表し、犬馬の勞を執らむことを誓ひける。
ここに目出度鬼城山は眞鐵彦、八王神となつて、灰色の玉を瑞の御舍仕へまつりて恭しく鎭祭し、元照彦は八頭神となり、眞鐵姫、元照姫は共に城内にとどまり、夫の補佐を勤むることとなりける。
天地の律法はもつとも嚴重にして毫末も犯すべからざるものとはいへども、發

根より改心と認められたる時は直ちにこれを許さるるものなり。實に改心にまさる結構は無かるべし。現に惡逆無道の極みをつくしたる美山彦、國照姫の罪を赦し、地の高天原の神業に參加せしめたまひしは、大神が無限の御仁慈の發露といふべし。

（大正一〇・一一・一五　舊一〇・一六　土井靖都録）

第一三章　嫉妬の報〔一一三〕

長白山には白色の玉を、莊嚴なる神殿を造營してこれに鎭祭し、國魂の神の御神體となし、八王神は有國彦これに任ぜられ、妻の有國姫神業を輔佐することとなりぬ。八頭神には磐長彦任命せられ、磐長姫は妻となり、内助輔佐の役を勤めゐたりける。

しかるに磐長姫は、その性質獰猛邪惡にして、かつ嫉妬心の深き女性なりき。

常に夫の行動を疑ひ、何事にもいちいち反對的行動をとり、夫が東へゆかむとすれば、西へゆくといひ、山へゆかむといへば、川へゆくといひ、常に夫婦の間に波瀾が絶えざりしが、磐長姫の頭髪は、實に見事なるものにして、その色澤は漆のごとくあくまでも黒く、ひいて地上に垂るるほどなりし。磐長姫はある時ただ一人深山にわけ入り、白布の瀧に身をうたれ、夫の我意に從はむことを祈願したり。

百日百夜強烈なる瀧にうたれ、見るも凄じき血相にて、祈願をこめゐたるをりしも、山上より騒がしき足音聞え、樹木を吹き倒し、岩石を飛ばし、姫のかかれる瀧の上にも、あまたの岩石降り來たりたれども、姫はこれにも屈せず、一心不亂に、長髪をふり亂し、祈願を籠めつつありぬ。そこへ忽然として白狐の姿現はれ、姫にむかつて、

『我は常世國の守護神なり。汝の熱心なる願ひにより、今より汝の肉體を守護すべし』

といふかと見れば姿は消えて、ただ瀧の水のはげしく落つる音のみ聞えけり。

それより磐長姫の黒漆の頭髪は、にはかに純白色に變じ、眼は釣りあがり、唇は突出し、容貌たちまち一變するにいたりけり。

磐長姫は、我は白狐の守護により、夫の驕慢を矯なほし、夫婦和合の目的を達することと確信し、欣然として長白山にかへりきたれり。

さて磐長彦をはじめ、あまたの神司は姫の俄然白髪となり、かつ面貌の凄くなりたるに驚きぬ。それより姫は性質ますます獰猛となり、日夜從者をしたがへて山野に入り、兎、猪、山鳥なぞを狩立て無上の樂みとなし居たりければ、夫はこれを固く戒めて曰く、

『天地の律法を嚴守して、すべての生物を斷じて殺すべからず』

とおごそかに訓諭しける。されど白毛の惡狐に憑かれたる姫は、夫の訓諭を、東風吹く風と聞き流し、ますます殺生をつづけ、つひには我が意に少しにても逆らふ從者は、片つ端より斬り殺し、生血を啜りて無上の快樂となし、惡逆の行爲日に日に增長し、從者も恐れて近づくものなきにいたりたり。

このこと八王神なる有國彦の耳に入り、唐山彦をして嚴しき訓戒を傳達せしめ

られたるに、磐長姫は聲を放つて號泣し、夫の無情を陳辨し、かつ、
『妾は天地の律法を嚴守し、蝨一匹といへども殺したることなし。その證據には妾が着衣を檢められよ』
といひつつ、下着を脱いで唐山彦の面前に差出したり。唐山彦は、その下着を見ておほいに驚きぬ。よく見れば下着には、ほとんど隙間なきほどに、粟のごとく蝨鈴生になりゐたればなり。唐山彦はこれを見て、同情の涙にくれ、
『貴女の御心中察するにあまりあり。かくのごとく蝨にいたるまで、仁慈の情をもつて助けたまふ。今は疑ふところなし。この由ただちに八王神に達し奉らむ』
と袂を別ち歸りゆく。あとに磐長姫は長き舌をだし、いやらしき微笑を浮かべてけり。
有國彦は、唐山彦の復命の次第を詳細に聽きをはり、ただちに磐長彦を召して、
『事實の詳細をつつまず、隱さず奏上せよ』
と嚴命しければ、磐長彦は事實をもつて答辨したり。されど有國彦は頭をかたむけ半信半疑の面色にて、命の顔色を熟視されつつありき。このとき磐長姫は、夫

の後を追ひ出できたり有國彦にむかつて、涙とともに、言葉たくみに我身の無實を陳辨したりける。

ここに夫婦二人の爭論は開かれけるが、姫は口角泡をとばし、舌端火をはき、兩眼はますます釣りあがり、口は耳元まで割け、見るも凄じき形相となりける。有國彦はこの光景を見てただちに奥殿にいり、白色の國玉を取りだし、その玉を兩手に捧げ、磐長姫目がけて、伊吹の神業を修したまへば、その身體より、たちまち白毛の惡狐現はれいで、空中を翔りて、たちまち西天に姿を沒したりける。

ここに磐長姫は大いに愧ぢ、この場を一目散に逃げだし大川に身を投じ、終焉を遂げたり。しかして磐長姫の靈魂は化して無數の綠白色の鴨となり、水上に浮きつ沈みつ日を送ることとなりぬ。これよりこの川を鴨綠江となんいふとかや。

（大正一〇・一一・一六　舊一〇・一七　栗原七藏録）

（第一二章～第一三章　昭和一〇・一・一六　於みどり丸船室　王仁校正）

第一四章　靈系の拔擢〔一一四〕

磐長彦は獨身となり、神務を管掌しゐたり。しかるに内助者たるべき妻に死別後は内政上すべての事につき不便を感じ、ここに忠實無比なる侍女玉姫を擧用して正妻となさむとし、諸神司をあつめてその意見を聽取したりしが、諸神司は磐長彦の孤獨不遇の生活を見ておほいに同情の意を表し、玉姫を正妻となすべきことを滿場一致をもつて贊成したりける。磐長彦は滿足の體にてただちに八王神の御殿に參候し、玉姫を正妻とすべきことの許可を奏請したるに、有國彦は一身上の一大事なれば、自分單獨にては決しかねしより、この旨を書面に認め使者を地の高天原につかはし、天使長大八洲彦命の裁決を請ひたまひけり。

大八洲彦命はただちに言靈別命、神國別命、大足彦を大廣前に集め、磐長彦の婚儀につきその可否を討議せむとし、ここに天使會議を開かれたりける。

いよいよ天使會議は開かれぬ。大八洲彦命は立つて磐長姫の平素の行跡より變死の際にいたるまでの種々の經緯を詳細に説明し、かつ……侍女の玉姫を入れて

その正妻となすべきことの可否を審議されたしと、長白山の八王神有國彦より奏請し來れり。願はくは諸天使の愼重なる審議を望む……と、宣言して座に着きたまひぬ。ここに言靈別命は、

『磐長彦の妻帶はやむを得ざる次第なれば、ただちに承認を與ふべきものと思意す。一時も早くこれを正妻となし、長白山の安全を計りたし』

と述べ立てたり。

大足彦は座を立つて顏色を變へ、言靈別命の説を極力反駁していふ。

『天地の律法は一夫一婦の道をきびしく戒めあり。しかるに後妻を迎ふるは律法に違反するものにして、惡例を後日に遺すものなれば、斷乎として許すべからず。體主靈從の行動は上に長たるものの最も愼むべきことならずや、上のなすところ下これに從ふ、上流濁れば必ず下流濁るは自然の道理なり』

と言葉はげしく反對の意を表示したりけるに、言靈別命はただちに起立し、

『實に心得ぬ貴下のお言葉かな。ただ今體主靈從の行爲と言はれしが、吾は第二の正妻を迎ふるをもつて律法違反となし、または體主靈從の行爲とみなすを得ず。

如何となれば磐長姫は夫にたいし根本的にその霊系を異にしをれば、常に圓滿を缺き、風波の絶えざるは當然なり。この夫妻はもとより恰好の縁に非ずして、霊系を無視し體系を重ンじたるに起因するものなり。霊系の合致せざる者と者とを夫婦となし、外觀の體裁に重きをおくは實に霊系を無視したるものなり。今やこの過ちを去り、霊系の等しき玉姫を入れて正妻たらしめむとするは、體を輕ンじ霊を重ンずる天地の法則に適ひ、霊主體從の本義に歸りたるものなり。ゆゑに我は斷じて體主霊從の行爲と斷ずること能はず』

と述べたて席に着きたまへば、大足彦は再び立ちあがり、

『言霊別命の仰せは一理あるに似たれども、いま一應熟考を乞ひたし。いかに霊主體從をもつて天地の法則なりとはいへ、現在卑しき侍女を擧用して、一國を司る八頭神の正妻たらしめむとするは、神界の秩序を紊すものにして、あたかも提燈に釣鐘、均衡の取れざること最もはなはだし、かくのごとき不均衡の結婚を許すといへども、たちまち輕重の度を失し、早晩顛覆破鏡の悲を見るは必然なり、かかる一大事を輕々しく聽許せむとするは、あへて天地の律法を輕んじ神意を冒

涜する無法の行爲なり』
と極言したり。言靈別命は三度立つて口を開き、
『心得ぬ大足彦のお言葉かな。卑しき侍女をして八頭神の妻となすは不均衡なりとか、神界の秩序を紊すものなりとか、仰せられたれども、そのお言葉こそ體主靈從のはなはだしきものなり。いかに卑しき侍女なりとて、その靈性において美しく高貴ならば、たとへ形體の上において卑しき職にありとも、その精神にして立派ならば、靈主體從の本義よりみて之を否定すべきものに非ず。いたづらに門閥的舊思想を墨守し、いらざる體面論を主張さるるはかへつて神慮に背き、律法の精神をわきまへざる頑冥固陋の舊思想なり。かかる所論はほとんど齒牙にかくるに足らず』
と氣色ばみて陳辨したり。
ここに、大足彦は三度立つてこの説を駁し、たがひに熱火のごとく論難攻撃いつ果つべしとも見へざりしを、このとき神國別命は立つて、
『兩神司の所説いづれを聞くも一理あり。しかるに靈主體從および體主靈從の本

義については、われは言靈別命に贊成す。諸天使すみやかに玉姫を正妻に入るることの許可を與へられむ事を希望す』と主張したまひける。

ここに大八洲彦命は多數の意見を容れ、磐長彦の妻に玉姫を入れることの決定を與へ、目出度く天使會議は終了を告げたり。元來玉姫は忠實なる女性にして磐長姫の寵兒なりける。いよいよ玉姫は玉代姫と改名し、磐長彦の妻となり内助の功もつとも多く、長白山は無事泰平に治まりにける。

（大正一〇・一一・一六　舊一〇・一七　加藤明子録）

第五篇　萬壽山

第一五章　神世の移寫〔一一五〕

萬壽山には八王神として磐樟彦、磐樟姫の夫妻居住し、赤色の玉を莊嚴なる神殿に鎭祭し、瑞穗別八頭神となり、瑞穗姫妻となりて内助の功もつとも多く、天地の律法は完全におこなはれ、神人一致して至治太平の神世はおごそかに樹立され、加ふるに忠實無比なる大川彦、清川彦、常立彦、守國別、その他の諸神司は綺羅星のごとく集まり、地の高天原につぐの聖場となつた。

萬壽山の神殿は月宮殿と稱へられ、赤玉の精魂幸はひたまひて、神人の心は赤誠丹心よく神に仕へ、長上を尊み下を憐み、各自の顏はいつも春のごとく、心は常に洋々として海のごとく、滿山の紅葉は黄紅赤緋色を競ひ、春は紅の梅、香ひ芳ばしき白梅樹々の間に點々し、蒼々たる常磐の松は、紅葉のあひだに天を摩して榮え、千年の鶴は樹上に巣を組み神政の萬壽を謳ふ。城廓を廻れる池の清泉には萬代の龜、幾千萬とも限りなく、神世を壽ぎ、右往左往に遊びたはむるその光景は、五六七神教成就後の神代の移寫とも稱すべき瑞祥なりける。かかる目出度

き萬壽山は、實は靈鷲山の神靈三ツ葉彦命の内面的輔佐の神徳の功、あづかつて力ありしが故なりといふ。

ここに萬壽山の八王、八頭の神司をはじめ、部下の諸神司は靈鷲山をもつて第二の高天原と崇め、三ツ葉彦命の神跡を慕ひて神人修業の聖場と定め、美しき神殿を山下の玉の井の邑に造營し、坤金神豐國姫命の安居所となし奉仕せむとし、ここに莊嚴なる大神殿を宮柱太敷立て、高天原に千木高知りて日の大神、月の大神、玉照姫命、國治立命鎭座したまひて洪大無邊の神徳は四方に輝き、地の高天原と相まつて神界經綸の大聖場となりぬ。これを玉ノ井の宮といふ。

玉ノ井の宮は眞道姫眞心をもつて大神に仕へ、かつ靈鷲山に日夜かよひて神慮を伺ひ、つひに三ツ星の神靈に感じて三ツ葉彦命を生み、これを地の高天原の國治立命に獻じ奉り、神政維新の神柱となさしめたまひける。三ツ葉彦命は、天の三ツ星の精魂の幸はひによりて地上に降り、眞道姫の體に宿りて玉ノ井の邑に現はれける。玉ノ井の邑には玉ノ井の湖といふ清泉をたたへたる湖水あり、この湖水は神界經綸上必要の神泉なれば、自在天の一派は、この湖水を占領せむと百方

手をつくし、つひに三ツ葉彦命と爭ひけるが、結局は目的を達するを得ずして退却したりしなり。

自在天の一派なる蟹雲別、牛雲別、種熊別、蚊取別、玉取彦らは、一齊に玉ノ井の湖水に押寄せきたり、あまたの魔神をして前後左右より取り巻き、第一着に玉ノ井の宮を破壞し眞道姫を捕へむとしたりしが、三ツ葉彦命の神威に恐れて遁走し、二度押し寄せ初志を達すべく奮鬪せし顛末は、次席に於て略述せむとす。

（大正一〇・一一・一七　舊一〇・一八　加藤明子録）

（第一四章～第一五章　昭和一〇・一・一六　於みどり丸船室　王仁校正）

第一六章　玉ノ井の宮〔一一六〕

玉ノ井の邑は、玉ノ井の湖の中央に浮かべる清き一つ島なり。玉ノ井湖の水は深く清く、常に紺碧の波漂ひ、金銀色の諸善龍神の安住所なりと傳ふ。湖の外は、

大小高低、千變萬化の靈山をもつて圍らされ、萬壽山は東方に位し、靈鷲山は西方に位し、その他の山々には諸々の神鎭まり、春は諸々の花咲きみだれ、山は雲か霞かと疑はるるばかり。夏は新綠諸山に榮え、老松處々に點綴し得もいはれぬ風景なり。秋は諸山錦の衣を織り、冬は滿山銀色に變じ、靈鳥は四季ともに悠々として舞ひ遊び、山々の谷を流るる大河小川の水清く、玉ノ井の湖水に潺々として注ぎをれり。

國治立命は世界の中心に地の高天原を建設し、今また東方の靈地を選み、この地點を第二の高天原となし、東西相應じて、陰陽のごとく、日月のごとく、經と緯との神策を定められたるなり。常世姫は地の高天原なる蓮華臺および龍宮城を占領せむとして、千變萬化の奸策を弄し、苦心焦慮すれども、神威赫々として冒すべからざるに落膽し、第二の經綸なる玉ノ井の湖を占領せむとし、大自在天にその意を通じ、東西呼應して大神の經綸を破壞し、盤古大神の神政に覆へさむと焦心せり。

萬壽山は第二の地の高天原に擬すべき靈地にして、玉ノ井の邑は龍宮城に比す

べき大切なる靈地なり。ゆゑに萬壽山を占領するに先だち、玉ノ井湖を占領するの必要起りしなり。玉ノ井湖は前述のごとく四方靈山に圍まれ、神司の守護強く容易にこれを突破すること能はざる要害堅固の靈地なり。

ここに大自在天の部下蟹雲別は、あまたの神卒をことごとく蟹と化せしめ、東南の山々の谷をつたひて玉の井湖に這ひ込みきたり、また牛雲別は、數萬の部下を殘らず牛に變化せしめ、東北の山々の谷をつたひて湖水に近寄り來たり、また蚊取別は數萬の魔を幾百萬の蚊軍と化せしめ、西南より山々の谷をつたひて玉ノ井の邑にすすましめ、玉取別は數萬の魔を、殘らず瑪瑙の玉と化せしめ、西北の山の頂に登り、玉ノ井の邑を目がけて雨のごとく降り下らしめたりける。あまたの蟹はたちまち惡龍と變じ湖水に飛び込みしが、ここに湖水の諸善龍神と惡龍とは、巨浪を起し、飛沫を天に高く飛ばし、死力をつくして爭ひ、さしもに清き紺碧の湖水の水もまたたくうちに赤色と變じ、得もいはれぬ血腥き風は四方に吹きまくりける。一方牛雲別の部下は、たちまち水牛と變じ湖水に飛びいり蟹雲別に加勢し、戰鬪はますます激烈となり、湖水はすでに敵軍のために、占領されむと

したりけり。

ここに眞道姫は玉ノ井の宮に、敵軍降伏の祈願をこめられしが、三ツ葉彦命は旗輝彦、久方彦を部將とし、湖水の敵軍に向つて天津祝詞を奏し、金色の大幣を打ち振り打ち振りおほいに敵を惱ましゐたる。時しも西北の高山より石玉の雨しきりに降りそそぎ、味方の神軍の頭上を目がけて打ち惱ましたり。西南の敵軍は、億兆無數の巨大なる蚊群となりて、味方の身體に迫り、その聲は暴風の荒れ狂ふがごとく、咫尺を辨ぜざるばかり立塞がり、暗黒無明の天地と化しぬ。三ツ葉彦命は天にむかつて救援の神軍を遣はされむことを祈願しけるに、たちまち天上の三ツ星より東雲別命、白雲別命、青雲別命の三柱の軍神、雲に乘りて萬壽山に降りきたり、大地を踏みたて、三柱一度に雄健びしたまへば、玉ノ井の湖水の水は一滴も殘らず中空に舞ひのぼり、遠く東西に分れて降りきたり、一大湖水を現出したり。このとき石玉も、蚊軍も、共に湖水の水に浚はれて中天に舞ひのぼり、影を潜めけり。

東に分れし湖水の水は地上に停留してふたたび湖水を形成したり。これを牛の

湖水といふ。今日の地理學上の裏海にして、また西に分れ降りて湖水を形成したるを、唐の湖といふ。現今地理學上の黒海なり。ここに東雲別命、青雲別命、白雲別命は、湖水を清め、新しき清泉を湛へられ、永遠に玉ノ井の湖の守護神となり、白龍と變化したまひぬ。かくして三ツ葉彦命とともに神政成就ミロクの世を待たせたまひける。

（大正一〇・一一・一七　舊一〇・一八　河津雄録）

第一七章　岩窟の修業〔一一七〕

萬壽山は前述のごとく、神界の經綸上もつとも重要なる地點なれば、これを主管する八王神は他の天使八王神に比してもつとも神德勝れ、かつ神界、幽界の大勢を辨知し、大神の神慮を洞察せざるべからずとし、八王神なる磐樟彦は、單獨にて萬壽山城をひそかに出城し、靈鷲山の大岩窟にいたりて百日百夜、すべての

飲食を断ち、世染をまぬがれ一意専心に霊的修業をはげみ、つひに三ツ葉彦命の神霊に感合し、三界の眞相をきはめ、天晴れ萬壽山城の王たるの資格を具有するにいたりける。

磐樟彦は、霊鷲山の大岩窟を深く探究したるに、數百千とも限りなき小岩窟ありて、大岩窟の中の左右に散在して、それぞれ受持の神守護されつつありき。この岩窟はいはゆる宇宙の縮圖にして、山河あり、海洋あり、種々雑多の草木繁茂し、禽獣蟲魚の類にいたるまで森羅萬象ことごとくその所を得て、地上の神國形成されありぬ。

三ツ葉彦命の霊媒の神力により、數十里に渉れる大岩窟の磐戸を開き、現はれいでたる氣品高き美しき女神は、數多の侍女とともに出できたり、磐樟彦に向ひ輕く目禮しながら、

『汝は神界のために晝夜間斷なく神業に從事して餘念なく、加ふるに百日百夜の苦行をなめ、身體やつれ、痩おとろへ、歩行も自由ならざるに、どの神司も恐れて近付きしことなき、この岩窟の神仙境にきたりしこと、感ずるにあまりあり。

妾はいま、汝の熱心なる信仰と誠實なる赤心を賞でて、奥の神境に誘ひ、坤の大神豐國姫命の御精靈體なる照國の御魂を親しく拜せしめむとす。すみやかに妾が後にしたがひきたれ』

といひつつ、岩窟の奥深く進みける。磐樟彦は女神の跡をたどりて、心も勇みつつ前進したりしが、はるか前方にあたりて、眼も眩きばかりの鮮麗なる五色の圓光を認め、兩手をもつて我面をおほひながら恐るおそる近付きける。女神はハタと立留まり、あと振かへり命にむかひ、

『汝の修業はいよいよ完成したり。ただちに兩手をのぞき肉眼のまま、御神體なる照國の御魂を拜されよ。この御魂をつつしみ拜せば三千世界の一切の過去と、現世と、未來の區別なく手に取るごとく明瞭にして、二度目の天の岩戸開きの神業に參加し、天地に代る大偉功を萬世に建て、五六七の神政の太柱とならせたまはむ。神界の狀勢は、この御魂によりて伺ふときは、必然一度は天地の律法破壞され、國治立命は根の國に御隱退のやむなきに立いたりたまひ、坤の金神豐國姫命もともに一度に御退隱あるべし。しかしてその後に盤古大神現はれ、一旦は花々

しき神世となり、たちまち不義の行動天下に充ち、わづかに數十年を經て盤古の神政は轉覆し、ここに始めて完全無缺の五六七の神政は樹立さるるにいたるべし。汝は妄が言を疑はず、萬古末代心に深く祕めて天の時のいたるを待たれよ。神の道にも盛衰あり、また顯晦あり。今後の神界はますます波瀾曲折に富む。焦慮らず、急がず、恐れず、神德を修めて一陽來復の春のきたるを待たれよ』

と懇に説き諭したまひて、たちまちその氣高き美しき女神の神姿は消えたまひける。

磐樟彦は天を拜し、地を拜し、感謝の祝詞をうやうやしく奏上したまふや、今まで光の玉と見えたる照國の御魂は崇高なる女神と化し、命の手をとり、紫雲の扉をおし明け、寶座の許に導きたまひける。

夢か、現か、幻か。疑雲に包まれゐたるをりしも、寒風さつと吹ききたつて、肌を刺す一刹那、王仁の身は高熊山の岩窟の奥に、端座しゐたりける。

（大正一〇・一一・一七　舊一〇・一八　土井靖都録）

第一八章　神靈の遷座〔一一八〕

靈鷲山は磐樟彦が修業の靈場にして、天神地祇の中にてももつとも先見の明ある神々のひそみて時を待ちたまふ神仙境なれば、等閑に附すべき所にあらずとし、磐樟彦は諸神司と議り靈窟のほとりに大宮柱太敷く造營し、神人らの修業所として鄭重に設備をほどこし、三ツ巴の神紋は、社殿の棟に燦然として朝日に輝き、夕日に照り映えじつに壯觀をきはめたりける。滿山ことごとく常磐の老松をもつて覆はれ、得もいはれぬ神々しさなり。社殿の境内には千年の老松、杉、檜、楓、雜木苔生して中天高く聳えたち、諸鳥の囀る聲はあたかも天女のきたりて音樂を奏するかと疑はるるばかりなりける。

ここにいよいよ社殿は完全に建て上げられたり。八王神磐樟彦、磐樟姫をはじめ、八頭神なる瑞穂別、瑞穂姫は神靈鎭祭のため神衣を着し、參拜さるることとなりけり。

祭官としては、神世彦齋主となり、守國彦副齋主となり、大川彦は祓戸主とな

り、國清彦は後取を奉仕し、清川彦は神饌長となり、常立別は神饌副長を奉仕し、供物は海山河野の種々の珍らしきものを横山なして獻られける。神饌のなかに鴨、山鳥、猪、海魚、川魚等あまた八足の机代に盛られあり。ここに旗照彦、久方彦はこの供物を一見して、

『穢らはしき物を神前に獻るは何の故ぞ。神は清淨を喜び汚穢を嫌はせたまふ。しかるにかくのごとき禽獸や魚類の肉を獻り、机上や神殿を汚し神慮を怒らせ、加ふるに博く萬物を愛せよとの、天地の律法を侵害し生物を殺して神饌に供するは、何たる心得違ひぞ。神は律法を定めて殺生を固く禁じたまへり。神威を冒涜するの罪輕からず。すみやかにこの神饌を撤回し清淨無穢の神饌に改めよ』

と二神司は肩をゆすりながら顔色赤く氣色ばみて述べ立てたり。これを聞くより清川彦、常立別は容をあらため襟を正し、二神司に向つていふ。

『貴下らは今吾らが獻らむとする神饌にたいして色々と故障をいれたまふは心得ぬことどもなり。いはンやかかる芽出度き大神遷座の席においてをや。せつかく選りに選り、清めし上にも清め千辛萬苦の結果、山野河海をあさりて漸く集め得

たる宇豆の神饌を、汚穢の供物なればすみやかに撤回せよとの貴下の暴言、實に呆然たらざるをえず。貴下らは祓戸の行事を何ンと心得らるるや。恭しく祓戸の神の降臨を仰ぎ奉り、清きが上にも清き神饌なり。萬一これをも汚穢の供物なりとせば、祓戸の神の御降臨は一切無意義にして、ただ單に形式のみに終らむ。吾らは大神の祭典に奉仕せむとする以上は、つねに靈主體從の法則により赤誠をこめて奉仕す。いづくンぞ形式的に祓戸の神業を奉仕し、體主靈從の逆事に習はンや。つつしンで二神司の御熟考を請ひ奉る』

と顔色をやはらげながら陳辨したりしに、旗照彦、久方彦は直ちに反對していふ。

『貴下の言は一應もつともらしく聞ゆれども、すべて大神は仁慈をもつて神の御心となし、博く萬物を愛育したまふ。しかるにその廣き厚き大御心を無視し、神の愛によりて成り出でたる生物を殺し、天地の律法を破壞し、大罪を犯しながら、なほもこれを大神の清き神饌に供せむとするは何事ぞ。仁慈の神の大御心を無視したる暴逆無道の擧動にして、これに勝れる無禮の行爲はなかるべし。是非々々この供物は瞬時も早く撤回されたし。貴下は強情をはり神饌長の職をもつて、こ

のままにして吾らの言を容れず、汚穢に充ちたる祭事を敢行さるるにおいては、我らはただ今かぎり折角の御盛典に列すること能はず』

吾意を固執して動く色なく、清川彦、常立別は大いに當惑しつつありしが、雙方の論争を聞きかねたる齋主神世彦は、

『諸神司暫時論争を中止したまへ。我いま大神の神慮を奉伺し神示をえて正邪を決すべし』

と、ただちに件の大岩窟に白き祭服のまま進み入り神の教示を乞ひ、ふたたび祭場にかへりて神教を恭しく諸神に傳へたり。神教はきはめて簡單にして要を得たものなりき。すなはちその教示は、

『神は一切の萬物を愛す。神の前に犠牲とさるる一切の生物は幸なるかな。そは一の罪惡を消滅し、新しき神國に生れ出づればなり』

との理義明白なる神示なりける。雙方の争論はこの神示を尊重し、うやうやしく祭典を完了し、天地にとどろく言靈の祝詞に四方の神人集まりきたりて、莊嚴無比の遷座祭の式は執行されたりけり。

（大正一〇・一一・一七　舊一〇・一八　栗原七藏録）
（第一六章～第一八章　昭和一〇・一・一六　於みどり丸船室　王仁校正）

第六篇　青雲山

第一九章　楠の根元〔一一九〕

青雲山は、八王神として神澄彦任ぜられ、神澄姫妻となり、吾妻彦は八頭神となり、吾妻姫はその妻となりたまひて、青雲山一帶の神政を司ることと定まりにける。

青雲山には國魂として、黄金の玉を祭るべく、盛ンに土木を起して、莊嚴無比

なる宮殿の建立に着手されたり。この宮殿を黄金の宮といふ。宮殿の竣工するまで、玉守彦をして大切にこの寶玉を保護せしめたまひぬ。

この黄金の玉は、十二個の國魂のうちにても、もつとも大切なる國魂なり。八王大神一名常世彦は、いかにもしてこの玉を手に入れむとし、部下の邪神、國足彦、醜熊、玉取彦に内命を下し、つねに玉守彦の保護せる國魂を手に入れむと、手を替へ品を代へ、つけ狙ひゐたりける。

玉守彦は、大切なるこの寶玉を敵に奪はれむことを恐れ、ひそかに同形の石玉を造り、これに金鍍金を施し、眞正の玉には墨を塗りて黒玉となしゐたるを、玉守彦の妻玉守姫はこの様子をうかがひ知り、玉守彦に向つてその不都合を責め、かつ偽玉を造りたる理由を尋ねてやまざれば、玉守彦はやむを得ずして答ふるやう、

『この黄金の玉は天下稀代の珍品にして、再び吾らの手に入るべきものに非ず。われこの玉の保管を命ぜられしを幸ひ、同形の偽玉を造り、これを宮殿竣工の上、殿内深く納め、眞正の玉はわが家に匿しおき後日この玉の徳によりて、吾ら夫婦

は、青雲山の八王神となり、一世の榮華を極めむと思ふゆゑに、吾は僞玉を造りたり』

といひつつ玉守姫の顏をのぞき見しに、玉守姫は喜色滿面にあふれ、おほいに夫の智略を譽め立てにける。

玉守彦は、智慧淺く、口輕く、嫉妬深き妻の玉守姫に、祕密を看破されしことを憂ひ、終日終夜頭を垂れ、腕を組み、溜息をつき思案にくれける。女は嫉妬のために大事を洩らすことあり、いかにせば妻を詐り、この祕密の漏洩を防がむかと苦心焦慮したる結果、ここに玉守彦は、眞僞二個の玉を玉守姫に預けおき、

『我は數日間山中を跋渉し、眞寶玉の匿し場を探し來らむ。汝は大切にこの寶玉を片時も目放さず堅く守るべし。この玉は吾ら夫婦の榮達の種なり』

と、まづ名利欲をもつて玉守姫を欺き、自分は山に入りて兎を擒り、また海にいたりて鮭を捕へ、夜中ひそかに寶珠山にわけ入り、廣き谷川の瀨に兎を笊に容れ淺瀨に浸し置き、八尾の鮭を大樹の枝につるし、何喰はぬ顏にて數日の後わが家に歸り、玉守姫に、適當なる匿し場所を探し得たることを、喜び勇み報告したり

ける。玉守姫はおほいに喜び、
『善は急げといふことあり。一時も早く、この黒き黄金の寶玉を匿しおかむ』
と玉守彦の袖をひきて、そはそはしき態度を現はし急き立てたり。玉守彦は、
『しからば明朝未明に吾が家を出で、汝とともに寶珠山にゆかむ』
と答へ、その夜は夫婦ともに安眠し、早朝黒き玉を携へ山深くわけ入りける。途中かなり廣き谷川の流れあり。二人は淺瀬を選びて渡りはじめ、川の中ほどにいたりし時、バサバサと音するものあり。玉守姫は耳敏くこれを聽きつけ、眼を上流に轉じ見るに、川中には一個の笊が淺瀬にかかり動きゐたり。夫婦は不思議にたへずと近より、笊の蓋を明け見れば不思議や、中には兎が二匹動きゐたり。玉守姫は玉守彦にむかひ、
『これは實に珍しき獲物なり。天の與へならむ。幸先よし』
と笊と共にこれを拾ひて、なほも山奥深くわけ入りにける。
鬱蒼たる老松は天をおほひ、晝なほ暗きまでに繁りゐる。その樹下に夫婦は横臥して息を休めゐたりしが、玉守姫はフト空を仰ぎ見るとたんに、

『ヤー不思議』
と絶叫したり。玉守彦は素知らぬ顔にて、
『不思議とは何事ぞ』
と言ひも終らざるに、玉守姫は頭上の松の梢を指さし、
『この松には澤山の鮭の魚生りをれり』
といふ。玉守彦はいかにも不思議千萬とあきれ顔に答へ、ただちにその木にのぼり、鮭を一々樹の枝より【むしり】取りぬ。夫婦は鮭と兎を重たげに擔ひ、なほも山深くわけ入り、楠の大木の根元に玉を埋めて歸り來たりける。
ここに夫婦は兎と鮭を料理して、祝ひの酒を飲み、雪隱にて饅頭喰ひしごとき素知らぬ顔にて日八十日、夜八十夜を過したりける。
（大正一〇・一一・一八　舊一〇・一九　栗原七藏録）

第二〇章　晴天白日〔一二〇〕

青雲山上の黄金の宮は竣工を告げ、いよいよ國魂として、黄金の寶玉を鎮祭することとはなりぬ。神澄彦は玉守彦を招き、

『さきに保管を命じたる寶玉を持參せよ』

と命ずれば玉守彦は、預かりし玉を恭しく奉持してこれを奉り、莊嚴なる儀式の下に國魂は祀られけり。ここに玉守彦は、黄金の宮の司となり、嚴重に守護することとなりぬ。

玉守彦の侍女に良姫なるものあり。つねに玉守彦夫妻に忠實に仕へ、とくに玉守彦には信任もつとも深ければ玉守彦は、何事も良姫に相談するを常とせり。玉守姫は夫の良姫を深く信ずるを見て、嫉妬心をおこし、自暴自棄となりて、日夜飲酒にふけり、隣人を集め踊り狂ひ、ややもすれば酒氣に乗じて、夫の祕密を口ばしるのみならず、玉守彦と良姫の間には汚き關係あるがごとく言ひふらしける。

玉守彦は、妻の日夜の放埒を見るに忍びず嚴しく訓戒を加へたるに、玉守姫はたちまち眉を逆立て目を瞋らせ、顔色するどく、狂氣のごとくなりて、玉守彦にむかひ、

『貴下は平素妾を疎んじ、侍女の良姫を寵愛し、妾に侮辱を與ふ。もはや堪忍袋の緒も切れたれば、妾はこれより八王神の御前に出で、夫の隱謀の次第を逐一訴へ奉らむ』

といふより早く家を飛びだし、八王神の御前に夫の罪を殘らず奏聞したりける。奏聞の次第は、

『玉守彦は大切なる黄金の寶玉を預かりながら、この玉を吾物にせむと謀り、眞の寶玉には黒く墨をぬり、別に同形の石の玉を作り、これに金鍍金をかけ、眞の玉は寶珠山の奥深くこれを埋め、擬玉を差出して黄金の宮に祀り、後日時を得て眞の寶玉を取りだし、玉の神力によりて青雲山の城塞を乗取り、八王、八頭の神を放逐し、おのれとつて代り八王神とならむと、不軌を謀りつつあり。夫ながらも實に恐ろしき惡逆無道の者なり。すみやかに捕へて獄に投じ、國の害を除かせたまへ』

と嫉妬の炎すさまじく、身をゆすりて泣きつ訴へにけり。ここに八王神神澄彦は、八頭神吾妻彦を招きて、玉守姫の訴への次第を物語り、ただちに玉守彦を召し捕

へしめたり。
玉守彦は妻の玉守姫とともに、吾妻彦の前に呼び出され、きびしき訊問を受けたるが、玉守彦は、言葉さはやかにその無實を陳辨し、かつ、
『玉守姫は嫉妬ふかく、今は狂者となれり、かならず彼がごとき狂者の言を信じたまふなかれ。至誠は天に通ず。願はくば天地の大神も吾が赤誠を照覽あれ』
と天を拜し地を拜し、涕泣して訴へたり。このとき玉守姫は首を左右に振り吾妻彦にむかひ、
『玉守彦は大膽不敵の曲者なり。彼はたしかに國魂を寶珠山に埋め、この黄金の宮の國魂は擬玉を祀りをれり。その證據は現在妻の妾とともに山中に匿しおきたり。何時にてもその所在をお知らせ申さむ』
とあわただしく苛ち氣味に奏上するにぞ、玉守彦は言辭を荒らげて、妻にむかひ、
『女の姦ましき要らざる讒言、いまに天地の神罰はたちどころに到らむ、愼めよ』
と睨めつけたるに、玉守姫は躍氣となり、
『夫は何を呆け顔に辨解するや。寶珠山の谷を渡るとき、川の中にて二匹の兎を

生捕にし、また寶珠山の松の大木に大いなる鮭の生りをりたるを妾が見つけ、夫と共にこれを【むしり】歸りて、その夜兔と鮭を料理し、祝酒を飲みしことをよもや忘れたまふまじ。そのとき寶珠山に玉を埋めおきたるを忘れたるか』と烈火のごとくなりて述べ立つる。玉守彦は吾妻彦にむかひ、

『ただ今お聞きおよびのとほり、妻の玉守姫は發狂し、取とめなきことを述べたて候。彼がごとき狂人の言は御採用なからむことを乞ひまつる』

と奏上せるに、吾妻彦は玉守姫の狂者たることを知り、ここに玉守彦の疑ひは全く晴れ、許されて家に歸りぬ。

八王大神常世彦は、黄金の宮の國魂を奪はむとし、部下の國足彦、醜熊、玉取彦に命じ、種々の奸策を授けたり。ある日のこと國足彦らは夜陰に乗じ、黄金の宮に入り國魂を首尾よく盗み、遠く常世の國へ逃げ歸りたり。八王神神澄彦は國魂を拜せむと諸神司をしたがへ神殿に進み入りしに、神前の堅牢なる錠前は捻切られ、肝腎の國魂は紛失しゐたりける。

『八王大神の部下國足彦、醜熊、玉取彦、玉を取つて常世の國に立歸る。藻脱の

空の宮の神徳彌顯著ならむアハヽヽヽ』
と認めありぬ。八王神は顔色青ざめ、
『吾は貴重なる國魂の守護を命ぜられながら、今これを敵に奪取され、大神にたいして謝すべき辭なし。この玉なきときは八王の聖職を奪はれ、かつ重き罪に問はれむ。いかがはせむか』
と歎きたまふをりしも、玉守彦はすすみ出で、
『八王神よ、必ず神慮を惱ましたまふこと勿れ。我は寶玉の保護を命ぜられてより、今日あることを前知し、擬玉を作りて奉齋し、眞正の國魂の寶玉は、寶珠山の奥深く楠樹の下に大切に埋め置きたり。直ちにこれを掘出して更めて鎭祭したまへ』
と誠を色に現はして奏上したり。神澄彦はおほいに喜び、ただちに玉守彦を先頭に、あまたの神司を遣はし、白木の輿を作りて寶玉を納め、青雲山に奉迎せしめ、ここにあらためて立派なる遷座式を擧行し、玉守彦は疑ひ解けて晴天白日となり、かつその注意周到なる行動を激賞され、重く用ゐらるることとなり、天下に盛名

を馳せにけり。

（大正一〇・一一・一八　舊一〇・一九　河津雄録）

（第一九章～第二〇章　昭和一〇・一・一六　於別府・龜の井旅館　王仁校正）

第二一章　狐の尻尾〔一二一〕

ヒマラヤ山には純銀の玉をその國魂とし、白銀の宮に恭しく鎭祭し、高山彦は八王神に任ぜられ、高山姫は妻となりて神業を輔佐し、ヒマラヤ彦は、八頭神となり、ヒマラヤ姫を妻とし、神政を監掌し、一時よく上下ともに治まりける。白銀の宮には玉國別が宮司として恭しく奉仕したり。

ここに八王大神常世彦は、部下の武寅彦、武寅姫および猛依別に命じ、種々の祕策を授けて、この國玉を奪取せしめむとしゐたりけり。武寅彦は毎日毎夜宮詣でにことよせ、晝夜閒斷なくつけ狙ひゐたれば、玉國別は武寅彦らの行動を訝か

り、ひそかに同形同色の擬玉を造り、これを神殿に鎮祭しおきたり。武寅彦らは玉國別の妻なる國香姫に、種々の手段をもつて近づき、珍らしきものを與へ、巧言令色いたらざるなく、やうやくにして國香姫を藥籠中のものとなしにける。しかして武寅彦は、ある日國香姫にむかひ、

『貴女にして白銀の宮に鎭まれる純銀の國魂を、夫玉國別に奪はしめ、これを常世國の八王大神に獻じなば、汝夫婦をヒマラヤ山の八王神に任じたまふべし。他神の幕下にいつまでも、唯々諾々として神妙に仕ふるも、惡きことには非ざれども、かの庭前の小松を見られよ、大木の蔭に立てる小松はいつまでも幹細く葉薄く日蔭の境遇に甘ンじ、幾年を經るも立派に成長する時期なし。しかるに同じ時に植ゑられたる小松も、大木の蔭に隱れざる松は、年とともに成長し、幹強く枝繁り、衝天の勢を有するに非ずや。貴下はかくの如き、不利益なる地位に甘ンずるよりも、人は一代、名は末代といふ諺あり。このさい奮起して純銀の玉を奪ひとり、身の榮達を計られよ』

と口をきはめて巧妙に説得したりければ、國香姫は幾度も頭を縱にふり、肩をゆ

すり、會心の笑をもらし、武寅彦にむかつて夫の玉國別をしてその目的を達せしむることを豫約したりけり。

ここに國香姫は曲人の甘言に惑はされ、夫玉國別にむかひ種々言葉をつくして、國魂を盗み取らしめむとしたれども、玉國別は天地の律法を嚴守せる正義の神司なれば、國香姫の言を聽いておほいに怒り、ただ一言の下に叱責したるが、たちまち「省みよ」といふ律法を思ひ出し、にはかに笑顔をつくりていふ。

『これには深き仔細のあることならむ。吾は最愛なる汝のために玉を盗みだし、夫婦諸共一度に出世をなさむ』

と、わざと嬉しげに答へたり。國香姫は夫の逐一承諾せることを、武寅彦に急ぎ報告したり。ここに武寅彦は願望成就の時こそ來れり、八王大神の賞賜に預からむものと、身も心も飛びたつばかり、勇み進みて夜半、玉國別の館を訪れにける。

玉國別は喜ンで、これを迎へ、山海の珍味佳肴をもつて饗應し、丑滿の頃、武寅彦らをともなひ白銀の宮に詣で、自分は黄金の鍵をもつて社の錠をはづし、扉をひらき大なる麻の袋に擬玉をつつみ持ちだし、ふたたび扉を閉ぢ、武寅彦にむ

かつていふ。
『首尾よく國魂は手に入れり。一時も早くこの場を立ち去り、玉の湖の畔にいたりてこれを渡すべし。長居は發覺の恐れあり』
とみづから先に立ち、夜陰に紛れて玉の湖の畔に出たりける。
このとき玉國別は武寅彦外二人にむかひ笑つていふ。
『貴下らは實によく巧妙に化けさせたまへども、如何せむ、背後に白き狐の尻尾の見ゆるは不都合ならずや。吾は實にヒマラヤ山に住む年經たる大狸なれども、貴下らのごとく少しも尾を見せしことなし』
といひつつ武寅彦らの顔を穴のあくほど覗き見るにぞ、三人は、玉國別の言葉に感歎していふ。
『われは貴下の見らるるごとく、常世國の白狐なり。しかるにいま貴下にその正體を看破せられたるは、實に慙愧のいたりなり。貴下は何ゆゑに尻尾の見えざるや』
と訝かり問ふにぞ、玉國別はここぞとばかり肩をゆすり、鼻ぴこつかせ、得意滿

面の體にて、
『さればとよ。我は純銀の玉を近く守りをれば、その玉の德によりて天地の間にいかなる貴き神も我が正體を見きはむるものなし。貴下らもこの玉に一度手を觸れたまひなば、我らのごとくよく化け果さるべし』
と笑ひつついふ。武寅彦は矢も楯もたまらず、
『われにこの玉を持たせたまはずや』
と羨まし氣に顏をのぞき、玉國別の首はいづれにふれるやを凝視しをる。玉國別はたちまち首を左右にふり、
『なかなかもつて滅相千萬、この玉は常世國の八王大神に奉るまでは他見は許されぬ』
ときつぱりと刎ねつけたりければ、武寅彦らは兩手を合せ、
『常世國まで歸る道はなかなか長し。萬一途中にて我が尻尾を他神に發見せられなば身の一大事なり。お慈悲にただ一度わが手に觸れさせたまへ』
と歎願するを、玉國別はわざと不承不承に、

『然らば望みを叶へさせむ。三人とも一度に白狐の全正體をあらはし、この麻袋に飛び込み、おのおの自由に手を觸れられよ』

と言ひ放てば、ここに三人ともたちまち白狐と變じ、先を爭ひて布袋に飛び込みにけり。玉國別は、手早く袋の口を締め、

『サア惡神ども思ひ知つたか。狐の七化け、如何にたくみに化けるとも、狸の八化けには叶ふまじ』

といひつつ袋を大地に幾度となく抛げつくれば、白狐は痛さに堪へかね苦しき悲しき聲をあげて救ひを求めける。玉國別は、

『邪神の眷屬馬鹿狐、容赦はならぬ』

といひつつ袋に重き石を縛りつけ、玉の湖の深淵へどつとばかりに投げ込みにける。たちまち湖水は左右にひらき波浪たち騷ぎ、擬玉も狐と共に、ブクブクと音をたてて湖水の底深く沈沒したりける。このこと常世彦の耳に入り、純銀の國魂は玉の湖の底深く、白狐と共に沈めるものと確信されたりければ、これより白銀の宮の國魂を奪はむとする計畫は、あとを絶ちにける。

（大正一〇・一一・一八　舊一〇・一九　加藤明子録）

第二二章　神前の審判〔一二二〕

天山には黄色の玉を祀り、宮殿を造營してこれを鎭祭し、埴安の宮と名づけられたり。齋代彦を八王神とし、妻神齋代姫をして神業を輔佐せしめ、谷山彦を八頭神となし、谷山姫をして神政を輔助せしめられける。谷山姫は嫉妬猜疑の念ふかく、齋代姫の命令をきくことを非常に不快に感じゐたり。夫婦は、つねに犬猿のごとく、たがひに嫉視反目をつづけ、それがために天山城内の神政は、つねに紛擾絶えざりける。

ここに八王大神は、部下の邪神荒國彦を谷山彦の肉體に憑依せしめ、また荒國姫といふ邪神を谷山姫に憑依せしめたり。これより谷山彦夫妻の性行は俄然一變し、齋代彦夫妻をしりぞけ、みづから八王神たらむことを企てける。斯くのごと

く悪心を起したるは全く憑靈の所爲なり。ここに谷山彦は妻の使嗾により、埴安の宮司國代彦、國代姫の夫婦を手に入れ、國魂を盗ましめ、八王神の身に失策を招かしめ、その目的を達せむとし、種々の手段をめぐらしゐたりける。

しかるに宮司の國代彦は正義の神司なれば、容易にその心を動かすべからざるを悟り、妻の國代姫を甘言をもつて説得せむと計りぬ。國代姫は谷山彦夫妻に招かれけるが、谷山彦はいふ、

『汝の辨舌をもつて夫國代彦の心を動かし、國魂を盗み出さしめなば、吾はただちに八王神の位に上り、汝ら夫妻を八頭神の地位に据ゑむ』

と言葉たくみに説き立てたり。國代姫はその成功を危ぶみ、かつ天地の律法に背く由を述べ、これを謝絶せむとするとき、何心なく夫の國代彦はこの場に現はれ來りぬ。谷山彦は國代彦にむかひて前述の謀計を打明けたるに、國代彦は一も二もなく贊成の意を表しけり。國代姫は夫の言に驚き、涙とともにその悪行を止めむとて泣きて諫言したりけれども、國代彦は決心の色を面に現はし、今この場において谷山彦の意見に反對を表せむか、いかなる危害の身邊に及ばむも計り難し

と、わざと空惚けていふ、

『我は天則違反の行爲ならむと察すれども、諺にも勝てば善神、敗れば邪神といふことあり。吾が出世榮達の道を開かせたまふならば、よろこんで貴下の命を奉ぜむ』

と即答したりける。

谷山彦夫妻は大いに喜び、埴安の宮の祭典をおこなひ、これを潮に宮司國代彦をして玉を盗み出さしめむとしたりければ、國代彦は同形同色の僞玉を造り、深く懷に祕めて祭典に列し、みづから鍵を出して宮の扉を開き種々の供物を獻じ、ひそかに僞玉を谷山彦に手渡ししたるに、谷山彦は素知らぬ顏を裝ひ、これを懷中に祕しゐたりけり。祭典は無事に終了し、八王神齋代彦、齋代姫も列席し、直會の宴は盛んに開かれ、八百萬神司は神酒に醉ひ、歌をうたひ、踊り狂ふ。このとき國代彦はたちて歌をうたひ、しきりに踊りはじめけり。その歌は、

『時世時節は怖いもの　深山を越えて谷越えて

常世の國の涯の涯　　黄が氣でならぬ玉の守り。
時世時節は怖いもの　　谷は變じて山となり
山は代つて谷となる　　變れば變る世の中よ。
頭は今に尻尾となり　　尻尾は轉げて谷底へ
落ちて苦しむ眼前　　何の用捨も荒國彦の
靈の憑りし谷と山　　どこの國代か知らねども
木々（黄々）の木魂に響くなり。　　埴安宮の玉欲しと
谷と山から攻めてくる　　谷と山から狙ひをる。
照る日の影は清くとも　　雲霧たつは山の谷
虎狼も隠れすむ　　氣をつけ守る國世彦
玉は日に夜に曇るなり。　　曇る玉こそ替玉よ』

といつて面白く踊り狂ふ。ここに八王神齋代彦はこの歌を聽き、谷山彦の謀叛を悟り、ただちに夫妻を捕へて嚴しく詰問したり。谷山彦は答ふるに實をもつてせ

り。

ここに齋代彦は谷山彦夫妻の職を免じ、國代彦、國代姫をして八頭神の後を襲はしめむと宣言せり。この時謙讓の德高き國代彦夫妻は、

『命の大命實に有りがたく、身にあまる光榮なれど、われはかかる聖職に任ぜらるるの資格なし。願はくば以前のごとく宮司たらしめられたし。谷山彦夫妻は思ふに元よりかかる惡事を企つるごとき邪神にはあらず。惡靈の憑依によつてかかる無道の行動に出でられしならむ。すみやかに神前にともなひゆきて嚴肅なる審神を奉仕し、その上にて裁斷あらむことを』

と涙を流し赤心面にあふれて奏上したりける。齋代彦は打ちうなづき、直ちに二人の審神を開始されけるに、たちまち二神は上下左右に身體震動し、邪神荒國彦は谷山彦の體内より、荒國姫は谷山姫の體内より、神威に畏れて脱出し、惡狐の正體を現はし、常世の國にむかつて雲を霞と逃げ去りにけり。

邪神の脱け出でたる後の谷山彦夫妻は、夢から醒めたるごとく前非を悔い、かつ邪神の謀計の恐ろしきを悟り、それより心をあらため、神々を篤く信じ、元の

誠心に立ちかへりけり。齋代彦は今までの谷山彦夫妻の行動は、まつたく邪神憑依の結果となし、その罪を赦し、元のごとく八頭神の聖職に就かしめたりける。

（大正一〇・一一・一八　舊一〇・一九　土井靖都録）

第七篇　崑崙山

第二三章　鶴の一聲〔一二三〕

崑崙山には紅色の國魂を、紅能宮を造營して鄭重に鎭祭され、八王神には磐玉彦を任じ、妻磐玉姫は神務を輔佐し、八頭神は大島彦が任ぜられ、大島姫妻として神政を内助し、紅能宮の司には明世彦、明世姫の二神奉仕し、崑崙山一帶の地

方は、きはめて太平無事に治まりゐたりける。

磐玉彦は名利に薄く、かつ忠誠無比にして、一切の寶玉、珍品を地の高天原に獻納し、自己を薄くし、下を憐み、善政を布きたまひて、四邊よく治まり、鼓腹擊壤して神人その業を樂み、小彌勒の神政は樹立されたる姿なり。ために天上の日月は清く晴れわたり、蒼空一點の妖氣をとどめず、五風十雨の順序ととのひ、地には蒼々として樹草繁茂し、五穀ゆたかに、鳥啼き花笑ひ、四季ともに春陽の氣充ちて、世界第一の樂土と羨望さるるにいたりける。

磐玉彦は、

『天下克く治まり、神人みづから田を耕して食し、井を穿つて飲み、室に憤怨の聲なく、神人和樂の色あり。かかる瑞祥の世には、天地の律法も徒に空文と化し、八王神の聖職もまた無用の長物たるに似たり。日夜無事に苦しみつつ高位にあるは、天地に對し何ンとなく心愧かしさに堪へず。すみやかに八王神の聖職を辭退して下に降り、神人とともに神業を樂まむ』

と決意し、ひそかに八頭神大島彦を招き、その意を告げたまひける。

大島彦はこの言を聞きておほいに驚き、暫時默然として何の答辨もなく、八王神の顏を眺めつつありしが、たちまち首を左右に振り涙を流して諫めていふ。

『崑崙山一帶の今日の至治太平なる祥運は、貴神司の神德の致すところにして、我らをはじめ下萬神萬民の貴神司を慕ひたてまつりて、感謝措く能はざるところなり。しかるに貴神司にして聖位を捨て、野に下らせたまへば、いづれの神司か、よくこの國土を治むべき。上を敬ひ下を愛撫し、もつて社稷を安全に保つは聖者の天賦的聖職なり。願はくば大慈大悲の聖德によりて、なにとぞ退位の儀は、斷念させたまへ』

と聲涙交々下つて、諫言よく努めけるに、磐玉彦は答へて、

『我は八王神として、高天原の大神より重職を忝なうし、何の功勞もつくさず、日夜神恩の深きを思ふごとに、慙愧の念胸に迫りて苦しく、一日として心を安んずることあたはず。下神人は日夜營々兀々として神業に奉仕し、汗油をしぼりて勤勉神業を勵むなる世に、吾はいたづらに雲深く殿中にありて安逸の生を送り、何の活動をもなさず、曠職いたづらに光陰を消するは、天地の大神に對したてま

つり恐懼にたへず。今日の至治泰平は、要するに貴下らが誠實と苦心の賜なり。すみやかに吾の思望を許し、貴下は直ちに八王神の位に昇りて神務を主管されたし。吾はこれより夫妻ともに山野に隠れ、修驗者となりて神明に祈り、神政の萬歳を守らむ。男子たるもの一度決心したるうへは、いかなる諫言も拒止も耳にはいり難し』

と決心の色面に現はれ容易に動かすべからず。大島彦も、平素寡欲にして恬淡水のごとき八王神なれば、如何ともするに由なく、ただ默然として深き憂に沈みゐたりしが、ヤヽありて大島彦は口をひらき、

『貴神司の潔白なる御神慮は、神人ともに常に歎賞おかざるところ、今更いかに諫めたてまつるとも、初志を翻させ給ふことなからむ。されど貴神司の身魂は貴神司の單獨に處置さるべき輕々しきものに非ず、遠き神世の因縁によりて上下の名分定まり、天地の大神の優渥なる御委任に出づるものなれば、吾らはこれより直ちに地の高天原に參上がり神示を蒙りしうへ、その結果を詳しく奏上せむ。何はともあれ、それまでは何事も吾らに一任あらむことを』

と力をこめて歎願したりしに、磐玉彦は、
『貴下の言道理にかなへり、萬事は一任すべし。よきやうに計らひくれよ』
と言を殘して奥深く姿をかくしたまひける。
大島彦はただちに天の磐船に乗り、從者をともなひ空中風をきつて龍宮城に到着し、大八洲彦命に謁をこひ、八王神の退隱の件につき、裁斷を下されむことを奏請したりける。ここに大八洲彦命は、すぐさま地の高天原の大宮にいたりて國直姫命に拜謁し、前述の次第を逐一奏上し、神勅の降下を願ひしに、國直姫命は衣服を更め、身體を清め、大神殿に進みいり、恭しく神勅を乞ひたまひ、大八洲彦命を近く召し、容姿をあらため嚴かに神示のおもむきを傳達されたり。その神示の大要は、
『磐玉彦は遠き神代よりの御魂の因縁によりて、崑崙山に八王神の聖職を拜するは動かすべからざる神界の一定不變の經綸なり。君は萬古君たるべく、臣はまた萬古末代臣たるべし。王にして臣となり、あるひは下賤の地位に降り、臣にしてたちまち王の位に進むごときは、天地の眞理に違反し、かつ大神の御神慮を無視

するものなり。神勅一度出てはふたたびこれを更改すべからず。神の一言は日月のごとく明らかにして一毫も犯すべからず。かつ名位は神の賦與する正欲にして、長者たるものの缺くべからざる榮譽なり。磐玉彦いかなればかかる明瞭なる問題を提出して、大神の御神慮を惱ませ奉るぞ。たとへ生くるも死するもみな大神の御心のままなり。一時も早く片時もすみやかに神慮を反省し、もつて神勅のまに八王神の聖職を奉仕し、今後ふたたびかかる問題を提出し神慮を煩はすこと勿れ』

との嚴命なりける。

大八洲彦命は神示を拜し、恭しく禮を述べ、大島彦を近く招きて、神示を詳細に諭達したまへり。

大島彦はおほいに歡び急ぎ崑崙山に飛還し、八王神に一切の神示を恭しく復命奏上したりけり。素より正義純直の八王神は、神勅を重ンじ前非を悔い、ふたたび元の聖職につき、その後數百年のあひだは、實に至治至樂、泰平の聖代は繼續されたり。神命の犯すべからざるは、これにても窺ひ知らるべし。

（大正一〇・一一・二〇　舊一〇・二一　出口瑞月録）
（第二一章～二三章　昭和一〇・一・一六　於龜の井旅館　王仁校正）

第二四章　蛸閒山の黒雲〔一二四〕

蛸閒山には銅色の國玉を鎭祭し、吾妻別を八王神に任じ神務を主管せしめ、妻には吾妻姫を娶はし内面的輔佐を命じ、國玉別を八頭神に任じ國玉姫を妻として神政を輔助せしめられ、駒世彦を宮司となし駒世姫をして祭事に從事せしめられたりしなり。しかるにこの蛸閒山には、かねて地の高天原より、言靈別命神命を奉じて國魂の神を鎭祭し、莊嚴なる宮殿まで建立しあれば、つまり二個の國魂を竝べ、祭祀さるることとなりぬ。ここに二つの國魂の靈現はれて互ひに主權を爭ひたまへば、蛸閒山は常に風雲たちこめ、時に暴風吹きおこり強雨降りそそぎ樹木を倒し、河川の堤防を破壞し、濁水地上に氾濫して神人その堵に安ンずること

能はず、神人の嫉視反目は日に月に激烈の度を加へ、東天より西天にむかつて眞黒の雲橋かかりて天地は爲に暗黒となり咫尺を辨ぜず。ここをもつて常夜ゆく萬の妖ことごとく起り、國土間斷なく震動し、草の片葉にいたるまで言問ふ無道の社會を現出し、所々に大火あり大洪水あり疫病蔓延して神人まさに滅亡せむとし、また銅能宮は日夜震動して妖氣を吐き、國魂の宮また同時に大音響を發して百雷の一時に轟くかと疑はるるばかり凶兆しきりにいたり、神人ともに心安からず、戰々兢々として纔に日を送る狀態を馴致したりける。

國魂の神よりしてすでに斯くのごとく互ひに主權を爭ひ、ほとんど寧日なきの有樣なりければ、その靈精また一は八王神に憑依し、一は八頭神に憑りてつねに狂暴の行爲多く、ことに八頭神には前の國魂神憑依して、八王神の命令に一々反抗し、たがひに權利を主張して相讓らず、犬猿もただならず氷炭相容れず、混亂紛糾ますます甚だしく、神人塗炭の厄に苦しみ、荒ぶる神人の言騒ぐその聲は、五月蠅のごとく群がりおこりて修羅道を現出し、動亂止むことなく饑饉相次ぎ、虎狼、豺狼、毒蛇、惡鬼、妖怪なぞの邪靈は地上に充ち滿ちたり。このことただ

ちに國祖の御耳に入り、國直姫命の口をかりて、大八洲彦命に神教を傳へしめたまひける。

國祖の御神教の大要は、

『天に二日なく地に二王なきは天地の神則なり。汝らさきに蛸閒山に國魂の神を鎭祭しおきながら、國魂神には何の通告もなさず、新に同じ神山に二個の國玉を奉齋せるは、おのづから秩序を紊亂し爭亂の種をまくものなり。彼ら八王神八頭神は名利にふけりて爭ひ憎み、たがひに怒りて天下を騷擾せしむるの罪輕からずといへども、要するに一所の靈山に二體の國魂を鎭めたる失敗の結果にして、ただちに二神を懲戒すべきに非ず、このたびの出來事はすべて汝らの一大責任なるぞ。神は神直日大直日に見直し詔り直し、もつて今回はその罪を問はざるべし。一日も早く改言改過の實をあげ、蛸閒山を境として國土を南北に兩分し、その持場を決定し、騷亂を鎭定し國祖の大神に復命せよ』

とおごそかに宣りたまひける。

大八洲彦命は恐懼措くところを知らず、みづからの不明不德を謝し、大足彦と

ともに蛸閒山に向つて出發したまひけり。

大八洲彦命は八王神に、大足彦は八頭神にむかつて神示を説き諭し神恩の忝なく尊きことを慇懃に宣り傳へける。八王神はただちに天使長の懇篤なる説示を承り、翻然として前非を悟り、かつ國魂の神のもつとも恐るべき威力に感じ、正心誠意をもつて神業に厚く奉仕し、かつ如何なる神勅なりとも、今日かぎり斷じて違背せじと、心底より誓約をなしたりにける。

これに引替へ、大足彦は八頭神なる國玉別にむかひ順逆の道を説き、神の威德をさとし言辭を竭して説示したるが、國玉別は天使の教示を聞くやたちまち顏色獰猛の相をあらはし、口をきはめて反抗し容易に屈伏せず、ほとンど捨鉢となりて天使大足彦の面上に嚙みつかむとせるを、大足彦は、心得たりと兩手の指を交叉し鎭魂の姿勢をとり、ウーと一聲發くその言靈に、國玉別は地上に仰天し倒れ伏し、口中よりは多量の泡沫を吐きだし悶え苦しみけり。天使はなほも一聲言靈の矢を放つや、八頭神の體内よりは、にはかに黑煙立ちのぼるよと見るまに、金毛八尾の惡狐の姿現はれ、雲をかすみと西の空めがけて逃失せにけり。

國魂神の嫉妬的發動の狂態を洞察したる常世國の邪神は、貪・瞋・癡の迷につけ入り、たちまち憑依の目的を達し、進ンで八王神を倒し、八頭神を失墜せしめ、蛸閒山を攪亂せむとしゐたりしが、八頭神は始めて覺醒し、天使にむかつて以前の無禮を謝し、我が精神空弱にして意志強からず、つひに邪神の容器となり、神を無視し長上を侮蔑し、天地の律法を破りたる大罪を悔い、低頭平身罪に處せられむことを願ひけり。大足彦は、

『國魂の神ある上に重ねて再び、國魂の神を齋りたるは天使長以下の經綸を誤りたる結果なれば、その責任は吾らも同樣なり。されど仁慈ふかき大神は、この度の事件に關しては寛大なる大御心をもつて、神直日大直日に見直し聞き直し詔り直したまひて、吾らがたがひの大罪を忘れさせたまひたり。心安く思召されよ』と滿面笑をうかべて宣り聞かせたるに、國玉別は神恩の尊く忝なさに涙を瀧のごとく流し、衷心より改悛の情をあらはし、八王神に忠實に仕へける。それより天地和順し上下よく治まりて、松の神代の常永に時津風枝も鳴らさぬ聖代を招來したりける。

今まで天空に橋状をなして横たはりし黒雲は、次第に散亂して拭ふがごとく、天明らけく地清く、神人和樂の極樂淨土を現出したるぞ目出度けれ。これより二個の國魂を南北に分ち祭られ、國土を二分して、北方は八王神吾妻別これを主管し、南方は八頭神國玉別これを主管することとなりぬ。君主的神政の神界の經綸も、ここにいよいよ民主的神政の端を啓かれたるぞ是非なけれ。

（大正一〇・一一・二〇　舊一〇・二一　午後八時東の天より西の天に向つて一條の怪しき黒雲横たはり、天を南北に區劃し、天地暗憺たる時、龍宮館において、加藤明子録）

第二五章　邪神の滅亡〔一二五〕

吾妻別、吾妻姫二人の間に、月世姫、月照姫、五月姫の三人の娘生れたり。長女の月世姫は、その性質粗暴にして常に邪神の群に出入し、邪神と結託して、蛸

閒山を混亂紛擾せしむることにのみ全力を集注しゐたりけるが、吾妻別の重臣たる日出彦は、平素月世姫の行動ますます暴逆の度を加へ、非事醜行止まざるを歎き、涙をふるつてしばしばこれを諫めたれども、月世姫は一言半句も耳をかさず、つひには日出彦を讒訴してこれを排除せむとくはだて、百方手段をつくして蛸閒山城の神人を籠絡し、市守姫、畑野彦、田長彦、國平別、竹代彦らを股肱の臣となし、晝夜謀計をめぐらし、日出彦に失敗を來さしめむとし、ここに芳香姫といふ美はしき女性に策を授けて、日出彦を陥いれむとしたりけり。

日出彦は八王神の命を奉じて、龍宮城に使ひせむとする時、芳香姫は門に立ふさがり日出彦の袖をひきてこれをとどめ、かつその顔色を熟視していふ。

『貴下は何故に妾を平素詐りたまひしや、殘念々々』

と身をふるはし、聲をくもらせ涕泣する。日出彦は芳香姫の言、少しも合點ゆかず、ただ呆然として芳香姫の様子を怪しみ眺めゐたるのみ。

芳香姫はたちまち日出彦に抱きつき、

『無情非道のわが夫よ。しらじらしきその御様子。ア、妾は今まで貴下の玩弄物

とされゐたるか。死なば諸共死出の山、三途の川もともどもに渡らむものと誓ひし仲をも顧みず、龍宮城に御使ひの旅出に、ただ一言の御相談もなく妾を捨て、はるばると出行きたまふは餘りの無情。ア、殘念や、口惜や』

と齒をくひしばり、大地にドツと打ち伏し、聲をかぎりに泣き叫びける。

日出彦は藪から棒の出來事に、月世姫一派の奸計とは知らず、

『芳香姫は發狂せしか、不憫の者よ』

といひつつも、直ちに手をとり抱きおこし勞はり介抱せむとする折しも、時を待ちゐたる月世姫は、市守姫、畑野彦、田長彦、國平別、竹代彦らの一味と共にその場に現はれ、

『天地の律法を破れる不義もの、日出彦を縛れよ』

と下知の聲とともに、田長彦らは何の容赦もなく荒繩おつとり、手足をしばりて八王神の御前にまかりいで、

『天地の律法を破り、芳香姫を玩弄せし曲者捕へたり。かかる曲者を城内に止めおくは、風儀を亂し秩序を破るの恐れあるのみならず、八王神の御名の汚れなり。

すみやかに厳罰に處し、當城を追放し禍根を絶ちたまへ。證據は吾ら數名の實地目撃せるところなり』

と言辭たくみに無實の奏上をなしたりしが、日出彦は、神色自若として恐るる心なく、

『ただただ賢明なる八王神の御裁斷を請ひ奉る』

と言ひしまま、一言も發せざりける。

八王神は、默然としてこの訴へを聞きつつありしが、何の言葉もなく、ツト立ちて宮殿の奥深く入りたまひ、ただちに神前に端坐して神教を請ひたまひ、日出彦、月世姫その他一同を召し出し列を作らしめ、日出彦にむかつて叮嚀に言葉をかけ、吾が長女月世姫の不都合きはまる行動を謝し、かつ、懇ろにこれを慰撫したまひ、月世姫に向つて今後を戒め、その他の神人にも厳しく訓戒したまひ、ここにいよいよ神示によりて日出彦の疑ひは氷解され、正邪の判斷は、日月のごとく明らかとなりにける。

日出彦は無實の疑ひ、まつたく神の明白なる教示によりて晴れわたりたれば、

天地にむかつて拜謝し、急ぎ龍宮城さして出發したりける。

月世姫は謀計のガラリはづれたるに失望し、いかにもして初志を達せむと、蛸閒の瀧に芳香姫をともなひ、惡龍の神に七日七夜祈願を籠めけるが、芳香姫は忽然として六面八臂の邪鬼と變じ、中空に驅けのぼるよと見るまに、東北の天に怪しき雲塊あらはれ、たちまち西北の空にむかつて延長し、晝夜を辨ぜざる常暗の空となり、あまたの黒龍は月世姫の頭上目がけて降りきたり、盛ンに毒氣を吹きかけ、火炎の舌を出して月世姫を喰ひ殺さむとす。このとき月世姫は聲をあげていふ。

『汝は芳香姫の變化にあらずや。妄の汝に命ずるところは、妄を苦しめよとには非ず。日出彦を惱ませ滅亡せしめむがためなり。何をまちがへてかかる反對的行動をとるや』

と絶叫したりしに、その時黒雲の閒より聲ありて、

『汝は實に惡逆無道なり。芳香姫は今や惡龍となりて汝を滅ぼさむとす。他を呪はば穴二つ、自己に出るものは自己に還る。天の賞罰は、寸毫もたがふことなし、

思ひ知れや』

と言葉の下より鎗の穂尖は雨の降るがごとく、危險身にせまりて寸毫も免るるの餘地なかりけるが、辛うじてわが居室に逃げいりホツト一息つぐ間もなく、家の四隅より毒龍あまた出現して瞬くうちに火炎と化し、煙は身邊をつつみ、猛火炎々として天に冲し、月世姫は黒焦となりて敢なくも亡びける。今まで稍さえたる月世姫も、神の懲罰によりて暗路をたどり幽界のふたたび刑罰を受くるの破目に陥りしなり。アヽ天地に依怙なし、善を助け惡を亡ぼし、世界の神人を戒めたまふこと、實に明鏡の物を寫して餘蘊なきがごとし。愼むべきは惡事にして、恐るべきは天地神明の大道なり。神はかかる暗黒無道の世に出現して、神、幽、現の三界の立替立直しの神業を開始し、眞善美の天國を地上に樹立したまはむとす。神の國に生れ、神の國の粟を食む神の子孫たる吾人は、つつしみて神業に奉仕し、神恩に報いたてまつるべき責任の重大なるを深く自覺すべきなり。

（大正一〇・一一・二〇　舊一〇・二一　外山豐二録）

（第二四章～第二五章　昭和一〇・一・一六　於龜の井旅館　王仁校正）

第二六章　大蛇の長橋〔一二六〕

モスコーには、黒色の玉を安置し、これを烏羽玉の宮といふ。道貫彦を八王神となし、道貫姫を妻として神務を輔佐せしめ、夕日別を八頭神とし、夕照姫を妻として神政を輔翼せしめたまへり。

夕照姫は常に氣の勝ちたる女性にして、したがつて肉體甚だ弱く、常に病魔の襲ふところとなりゐたり。その病魔は八頭八尾の大蛇の眷族大蛇姫といふ邪靈ありて、憑依し、姫の身體を苦しめゐたり。これがために夕照姫はつひに重態におちいり、危篤に瀕しければ、夕日別は枕頭をはなれず親しく看護に手をつくしたり。從つて夫婦の仲はきはめて親密なりける。夕照姫は臨終にさいし、夕日別にむかひ、

『妾が死後はかならず後妻を納れたまふなかれ』

と遺言せむとし、言ひだしかねて煩悶し、連日連夜夫の顔を凝視てゐたりける。夕照姫は、吾が死後において夫の後妻を娶るを嫉ましきことに思ひ、その一念執

着のため、臨終の息を引きとりかねゐたりけるより、夕日別はつひにその心中を察知し、妻にむかひて、

『汝は吾に心を殘すことなく神界にいたるべし。汝の昇天後、吾は斷じて後妻を納れじ、安心せよ』

と約したりければ、夕照姫は滿面笑をふくみ眠るがごとく絶息したりける。

かくて夕日別は多くの年を經たるが、老年におよび淋しくなりしより、後妻を娶らむとするの心を抱きける。部下の神人は、命の老て寂寥を嘆きたまふを氣の毒に思ひ、後妻を娶られむことを勸めけるに命はおほいに喜び、夕照姫との約束を無視して、八王神道貫彦の娘なる夕凪姫を娶りける。

夕日別はそれより元氣とみに回復し、領内の巡視に、あまたの從者をしたがへ出張さるることしばしばなりき。夕凪姫はいつも奥殿に居住して外出せざりけるが、ある時、たちまち天上より黒雲に乘りて降りきたる容貌醜惡なる鬼女あり。薙刀をひつさげ、夕凪姫の前に現はれて、

『妾こそは夕照姫なり。夫は、妾が臨終のときの堅き約束を破り、汝を納れて後

妻としたり。妾は夫にたいして恨を晴らさむと日夜つけねらへども、神力強盛にしていかんともすること能はず。よつて、その片割なる汝と雌雄を決せむ。尋常に勝負あれ』

と呼ばはりけるに、夕凪姫も元來勝氣の女性なれば、少しも怖れず、ただちに立つて長押に懸けし薙刀を取るより早く立ちむかひける。かくして互ひに火花を散らし、祕術をつくして戰ひけれども容易に勝負はつかず、鷄鳴とともに夕照姫は、ふたたび黑雲にのり中空に影を沒したりける。夫の不在中は、毎夜時刻を定めて現はれきたり、たがひに薙刀をもつて勝負を爭ひゐたるをもつて、一間のうちは天井裏、柱、疊、襖の區別なく、薙刀の創痕ばかりとなりける。されども夕凪姫は深くこれを祕して何人にも漏らさざりけり。

夕日別は領内の巡視を終へ、歸城して夕凪姫の奥殿に入り、居室の刀痕を見ておほいに怪しみ、その理由を尋ねける。夕凪姫はやむを得ず有りし次第をもれなく物語りしに、夫はこれを聞きておほいに驚き、ただちに烏羽玉宮にいたり、祈願を凝らし、かつ宮司高國別をもつて神勅を奏請したりける。

ときに巫子あり、にはかに身體震動し、大地にバツタと倒れ、起あがりてはまた倒れ、大聲を放つて泣き叫び、夕日別の面上を穴のあくばかりに、怨恨に燃ゆる嫌らしき目をもつて睨みつけ、

『汝夕日別は、妾との約束を破り、夕凪姫を後妻にいれたり。ただ今、目に物見せむ』

と矢庭に飛びかかり、命の首に手をかけ、生首を引き抜かむと猛りくるふその有様は、身の毛もよだつばかりなりける。

夕日別は如何ともするよしなく、ただ違約の罪を謝し、かつ、

『夕凪姫を離縁して汝の靈を慰め、冥福を祈るべければ、今回は許せよ』

といひけるに、巫女はふたたび口を切りて、

『しからば妾が要求すべきことあり、第一にその要求を容れたまふか』

と念を押したり。夕日別は震慄しながら、

『何事にても我が力のおよぶ範圍のことならば汝の要求に應ずべし』

と言葉も切れぎれに息をはづませて答へける。巫女はやや顏色をやはらげ、

『然らばモスコーの長橋の袂に、今宵丑満の時を期して、三萬匹の蛙を捕へ、笊籠に納めて汝みづから持ちきたれ』

といふを、夕日別は恐怖のあまり一も二もなくこれを承諾して館に歸り、即時に數多の神卒に命じ、山野にいでて蛙を捕獲せしめたれど、蛙は漸く三百匹より集まらず、夕照姫の要求の百分の一を得たるに過ぎざりける。ここに夕日別はやむを得ずあまたの【なめくじ】を捕へてこれを底積となし、蛙をもつて上側をつつみ、侍神をして丑満の刻を期し、長橋の袂に持ち運ばしめける。

たちまち天上より黒雲に乗りくる鬼女あり。侍者は驚きその場に打ち倒れむとするとき、鬼女はこれを助けおこし侍者にむかひて、

『夕日別は何故來りたまはざりしや』

と問ひければ、侍者は答へて、

『命は數十萬の【なめくじ】を室の四周に集め、その中に安座して出でたまはず、夕凪姫と相擁して樂しみゐたまへり』

と答へたるに、鬼女はたちまち忿怒の色を現はし、見る見る黒き大蛇の姿となり、

蛙の入れある笊に頭を投げ入れ、一口に喰ひつくしたるが、たちまち【なめくじ】の毒にあてられ、大蛇の身體は見るまに溶解消滅して跡には骨のみを殘し、夕照姫の怨靈はここにまつたく滅盡したりける。

夕凪姫は、それより先妻同様の病を發し、歸幽してその靈魂は大蛇と化し、長橋の守護神となりにける。これを「大蛇の長橋」と稱ふ。

（大正一〇・一一・二八　舊一〇・二九　加藤明子録）

第八篇　神界の變動

第二七章　不意の昇天〔一二七〕

天地の律法御制定とともに各山各地の守護神は、いづれも更迭を命ぜられける。その中に高白山や長高山のごとく以前のままに守護神としてとどまり、神務を奉仕する神司もありける。ただ重要なる地域にかぎり十二柱の八王神と八頭神らを配置したまへり。ローマは神界經綸上もつとも大切なる地域なるより、神界にてもことに有力なる神人をして守護せしめられたり。ローマの都には白色の國魂を祭りこれを白玉の宮と名づけ、また白波の宮とも稱へけり。元照別を八王神に任じ元照姫を妻として神務を輔佐し、朝照彦は八頭神を命ぜられ朝照姫を妻として神政を補助せしめ、水口別、大依別を部將とし盛ンに經綸をおこなひ、神德隆々として旭日昇天の勢なりけり。

このとき山口別といふ者あり、ローマを占領せむことを企てゐたり。彼は鬼雲別、蚊取別らの魔を奉じて羅馬城を顛覆しここに大根據をかまへ、漸次に進ンで龍宮城を奪取し、つひに地の高天原をも占領せむと企て、常世の國の八王大神なる常世彦を首領として、あまたの邪神とともに四方八方より全力をつくしてローマに攻め寄せけり。元照別は朝照彦とともに地の高天原に急使を馳せて、救援軍

を送られむことを請ひ來りぬ。

地の高天原においては國直姫命、大八洲彦命、眞澄姫協議の結果、大足彦に道貴彦を副へてローマの救援に向はしめられたり。しかるにローマは地の高天原および萬壽山と相竝びて、神界の經綸上、その大半はここに根據を据ゑざるべからざる要所なり。

大足彦は八王神元照別、八頭神朝照彦ら、各地に配置されたる十一柱の八王神をここに集め、十二の八頭神に國魂の守護を一時委任することと定め、十一の八王神はあまたの神將神卒を引つれローマにあつまり、八王大神の魔軍にむかつて、あるひは攻め或ひは防ぎ全力を傾注し、一時は非常なる勢力にて、さすがの八王大神の全力をつくしたる攻撃軍も敵しかね、旗色俄にさびしくなりきたりて、や小康を得たるローマの聖都は、八王神おのおの心をゆるめ、難を避け安きに移らむとする萌しを馴致したりける。

ここに十二の八王神はたがひに嫉視反目して同志討ちをはじめたる。この虚に乘じて常世彦の魔軍は、醜女、探女を深く城内に入らしめ、内部より土崩瓦潰せ

しめむと全力を傾注したり。八王神各自の嫉視反目はおひおひ激しく、あたかも洪水の堤を崩すごとく、さすがの大足彦、道貴彦も、これを鎮定するの手段盡きたりにける。

かくして八王神はローマに集まり、爭鬪につぐに爭鬪をもつてし、許多の年月を經過したり。七王も八王も協心戮力もつて敵を亡ぼさむとしたる計畫は、かへつて失敗の大原因となり、そのあひだに大國彦、常世彦の兩派の魔軍は、八頭神を使嗾して八王神にたいし反旗を揚げしめ、獨立を計ることとなりぬ。これぞ世界の國々の分立割據する端緒となりける。

ローマ城は内部の暗鬪と探女の陰密的活躍に加へて、外部よりふたたび常世彦の部下の山口別らの總攻撃にあひ、つひに支へがたき状態に陥りぬ。大足彦は天の鳥船にのり夜陰に乗じてひそかに龍宮城へ歸還し、ローマの窮状を逐一國直姫命に進言したり。そのとき何處より出で來りけむ、常世姫は大足彦の前にあらはれ、ローマ守備の粗漏きはまれる施設を口をきはめて罵倒し、かつ……速やかに大足彦を排除されたし……と國直姫命に進言したり。國直姫命は何故かこの解決

を與へず、ただちに雲を起し天へ上りたまひける。
常世姫は時期到來とひそかに喜びつつ、國直姫命の遺言なりと僞り、魔我彦、魔我姫をして神務と神政を行はしめ、みづから國直姫命の地位に就かむと企てゐたりける。
（大正一〇・一一・二八　舊一〇・二九　櫻井重雄録）

第二八章　苦心慘憺〔一二八〕

龍宮城の從臣與彦、田依彦、與若、木絲姫、龍國別、三國別、高杉別らの役員等は、國直姫命の上天後、その去就に迷ひつつありける。
そこへ常世姫は、種々の手段をめぐらしてこれらの神司を自己の部下に引入れ、大八洲彦命、神國別命、大足彦に極力反對の行動を執るにいたれり。
一方ローマ城内にては、四分五裂の窮状を曝露し、外部よりは八王大神常世彦

の強力なる魔軍に包圍され、ほとんど落城せむとするの光景なりき。言靈別命は天の鳥船に乘り、急遽ローマにむかひ直ちに入城したりしが、十二の八王神は、言靈別命の不意の來城にほとんど狼狽の體なりき。ここに言靈別命は城内の諸神將をあつめて統一をはかり、ふたたび勢力を盛返し、協力一致の積極的行動をとりければ、八王大神の魔軍は、その勢力に辟易して退却し、遠方よりこれを包圍監視しつつあるのみなりけり。

さて地の高天原は、常世姫の横暴きはまる行動に、諸神司は遠く四方に散亂し、常世姫の目の上の瘤はほとんど拂はれけり。常世姫は、内は龍宮城を攪亂せしめ、魔我彦、魔我姫、美山彦、國照姫をして大國彦に通じ、大國彦をして外部より龍宮城および地の高天原を攻撃せしめたり。大國彦は松代別、國代別を部將とし、あまたの魔軍を熊と化し、不意にこれを襲ひ、つひに城内くまなく探索して大足彦を捕へ、凱歌を奏して歸陣せり。あとに常世姫は、ほとんど龍宮城の主宰者となり、地の高天原をも蹂躙せむと、着々として歩を進めつつあり。

このとき大八洲彦命、眞澄姫、言靈姫、廣國別、廣宮彦、照代姫の部將は、地

の高天原を嚴守して、魔軍に一指をもつけさせざりけり。されど常世姫は執拗にも、高杉別、與彦、與若、魔我彦、魔我姫などを煽動して地の高天原の一角を崩壊せむとし、ほぼその目的を達せむとしたり。

○

このときローマに破れ、一時退却したる常世彦は、到底ローマの容易に陥落せざるを知り鬼雲別、蚊取別らをして、大國彦の力を借り、これを鏖滅せむと圖りぬ。大國彦はただちに承諾し、數多の魔軍を二人に與へ、常世彦と共に三方よりローマ城を包圍攻撃したりける。

このとき萬壽山城をのぞく十一の八王神はほとンど遁走し、以下の神卒は四方に散亂したり。言靈別命は敵の猛烈なる攻撃にすこしも【ひるむ】色なく力戰奮闘をつづけたまふ。しかるに火彈は空しく、弓は折れ、矢は盡き、敵のために捕はれ俘虜となり、つひに常世の國に送られける。

言靈姫は、言靈別命の常世城に囚はれしを憂ひ、大神に祈願されつつありし。をりしも常世姫は魔我彦、魔我姫をともなひ、言靈姫の祈れる前に意氣揚々と

して現はれきたり、やや輕侮の色を面色に現はしていふ。
『汝は言靈別命を救はむとする心なきや。汝の決心次第にて、夫の難を救はむ』
と心あり氣に口を切りぬ。言靈姫はよろこびて、
『いかにせば夫を救ふ途ありや』
と反問しけるに、魔我姫はここぞと言はむばかりの顔つきにて、肩をいからせながら、
『貴女は龍宮城を明け渡し、大島彦以下の神司を率ゐて、萬壽山に轉居すべし。しからば妾はその改心の賞として、常世城にます八王大神常世彦に歎願し、言靈別命を救ひ與へむ』
と得意然としていふ。
ここに言靈姫はその去就に迷はざるを得ざりけるが、魔我彦、魔我姫は、口をそろへて言靈姫の決心をうながすべく、辨にまかせて説きつけたれば、憂ひに沈みたる言靈姫はつひに魔我姫の言にしたがひ、龍宮城を開放し萬壽山に遁れむと決心を定め、あまたの從者にその意を傳へしめむとしたりける。

このとき國若姫、廣國別らの神將は、極力これを諫止し、かつ大神に祈り神力をえて、つひに常世姫一派の鬼神をやうやく退場せしめける。常世姫は、ただちに常世の國に馳せ歸り、戰備をととのへ再び捲土重來の期を待ちつつありける。

（大正一〇・一一・二八　舊一〇・二九　外山豐二録）

（第二六章～第二八章　昭和一〇・一・一七　於龜の井旅館　王仁校正）

第二九章　男波女波〔一二九〕

モスコーの八王神道貫彦は、ローマに召集されて多年の閒不在なりき。妻の道貫姫は子に甘かりしため、その長女春日姫は父の不在に心をゆるめ放縱墮落ますます激しく、神司らの指彈する行動をつねに平氣にて演じゐたり。されど母人は、子の愛に眼くらみて春日姫のあらぬ日々の行動如何を少しも氣づかざりける。春日姫は眉長く眼涼しく、口許しまりて色白く、膚やはらかく、あたかも櫻花の時

をえて咲初めたるごとき容姿を持てりき。

八王大神の従臣に竹倉別といふ若者ありき。竹倉別は水色の烏帽子狩衣を着し、烏羽玉の宮に参拝したるに、春日姫は盛装をこらし侍女の春姫とともに、神前に参拝ををはり階段を下らむとするや、みづからわが衣の裳を踏み階段より眞逆さまに顛倒せむとしたり。このとき階段を上りくる竹倉別は、春日姫の體をささへ危く厄難を救ひければ、春日姫の感謝は一通りの歡びではなく、何か深き印象を胸底にとどめける。春日姫は春姫に手をひかれて階段を下り、あと振返りつつ竹倉別の階段を上りゆくを流目に見惚れゐたりしが、これより春日姫は何ゆゑか、ただちに病の床に呻吟する身とはなりける。

諸神司はこれを憂ひて大神に祈り、醫藥を與へなど色々と手をつくせども、春日姫の病にたいしては何の效果もなかりける。母の道貫姫は姫の日夜に弱りゆく姿をながめて、夜も日も、たまらず煩悶苦惱しつつ、あたかも掌中の玉を失ひしごとく、落膽失望の極に達しゐたり。

道貫姫は春姫をひそかに招き、

『汝はつねに春日姫の側近く仕ふる者なれば、姫の意中をよく察しゐるならむ。姫のこの度の重病につきては、何か思ひあたることなきや』
と耳に口よせひそかに問ひかけたるが、春姫は春日姫の病因はほぼ察知してゐたれども、恐れて口外することをはばかり、
『くはしく探りて後日申しあげむ』
とやうやくその場を立去り、春日姫にむかひ、
『烏羽玉の宮に参拝のをり、竹倉別に危難を救はれ、それより發病したまひしは、神も藥もきかぬ御病氣には非ずや』
とおそるおそる尋ねけるに、春日姫は袖にて顔をおほひながら頭をかたむけ、やや覺束なき聲にてただ一言、
『然り』
と答へ、そのまま夜具をひきかぶり息をはづませ、病體を左右にゆすりてもがき、かつ啜り泣さへ聞へけり。春姫は春日姫にむかひ、
『主のためならば、たとへ身は天律を破るとも、妾は律法の犠牲となりて目的願

望を達し参らせむ』
と決心の色をしめし、しばしの暇を乞ひこの場を立去り、ただちに竹倉別の家を訪れた。
竹倉別は明けても暮れても、烏の鳴かぬ日はあつても、春姫を思はぬ間は瞬時もなきまでに懸想しゐたりしが、今その當の女性に不意の訪問をうけて胸ををどらせ、肩を上げ下げしつつ顔をあからめ、用もなきに前後左右に室内を驅けまはり、晴天の霹靂頭上にはげしく落下せむとする時の態度そのままなりける。春姫は落付顔に竹倉別の手をとり、
『何事の出來せしか知らざれども、まづ、しばらく落つかせたまへ』
と肩を撫で、胸をさすりてその場に端坐せしめたるに、竹倉別はあたかも酢に醉ひしごとく、骨までぐなぐなになりし心地して、何となく落つかぬ風情なりき。
春姫は耳に口寄せ、あたりをはばかりながら、
『春日姫は汝に心をよせ、ために病床に臥したまふ。貴下は主を助くるために春日姫の夫となりたまはずや』

と私語けば、竹倉別は狐につままれたるごとき面持にて、ただ茫然として春姫の面を穴のあくほどうちながめ両眼よりは熱き涙ほとばしりける。春姫は竹倉別の心中を知らず、その態度に焦慮がり百方辨をつくして、春日姫の意に從はしめむとしきりに勸めてやまざりける。竹倉別ははづかしさうに、

『貴下のお勸めを承諾するに先だち、一つの願ひあり』

とて狩衣の袖に面をつつみ、息をはづませ肩まで動搖させたり。春姫は、

『貴下の願とはいかなることぞ。か弱き女の身に叶ふことならば、何事にても身命にかへて應じたてまつらむ』

といふ。このとき竹倉別を訪ねて若彦といふ麗しき若者、烏帽子直垂を着用しながら這入りきたり。若彦は、春姫の寢ても覺めても忘れられぬ若者なりき。春姫の血は燃えたちぬ。若彦はこの場の光景を見ていぶかり無言のまま、直立不動の姿勢を取りゐたり。

竹倉別は春姫に心奪はれ、若彦の入りきたりてわが前に立てることさへ少しも氣づかず、顏の紐を解きてしきりに春姫に向ひ思ひのたけを、ちぎれちぎれに口

説きたてたり。春姫は、若彦の前にて思ひもよらぬ竹倉別に口説きたてられ、痛さ痒さの板ばさみとなりて、心中悶々の情にたへざりけり。若彦は竹倉別の家にひそかに春姫の來りゐるを見て、なンとなく不快の念をおこし、たちまち顔色を變じて物をも言はず立去りにける。この時の春姫の胸は劍を呑むよりも苦しかりしならむ。

春姫はわが心にもなき主命によりての訪問を若彦に認められ、若彦の顔色のただならぬに煩悶し、いまは自暴自棄となりにける。されど主の命は重く千言萬語をつくして竹倉別を納得させ、春日姫の夫たることを承諾させたりける。

春姫は竹倉別をともなひ、春日姫の館に導きぬ。それより竹倉別は春日姫の親切にほだされて、つひには春姫を一時の夢と忘るることとなりぬ。若彦はまた春姫に心を深く寄せゐたりしところ、春姫のひとり竹倉別を訪問せるを認めてより大いに竹倉別を恨み、いかにもして春日姫との間を割き、鬱憤を晴さむと日夜計畫しゐたり。

あゝ竹倉別、春日姫の間は如何になりゆくならむか。

（大正一〇・一一・二九　舊一一・一　谷村眞友録）

第三〇章　抱擁歸一〔一三〇〕

春日姫と竹倉別は琴瑟相和し、春の日の洋々たるごとく樂き日を送りゐたり。道貫姫も子の可愛さにひかれて、これを默許せり。若彦は鷹住別にしたがひ烏羽玉の宮にふたたび參拜したりしが、春日姫は春姫をしたがへて參拜ををはり、階段を下りきたりけるが、若彦と春姫との視線は稲妻のごとく互ひに閃きぬ。春日姫は目ざとくこれを見てやや嫉妬の念起り來りしが、若彦は春姫の自分に對する心情を察知し、ただちに春姫にたいして異樣の視線を發射せり。春姫は默然として若彦の面を恥かし氣に打ち見守りける。この樣子を目前に立ちてながめゐたりし春日姫は、ますます嫉妬の焔を燃やさざるを得ざりける。

神品骨柄において、竹倉別に倍せる鷹住別は、正裝のまま笑顔をつくりて春日

姫の前に大手を擴げて立ちふさがりければ、春日姫は前後の分別もなく鷹住別に涼しき眼をむけたりける。二人はこれより相信じ相和し、水も洩らさぬ親密なる交際をはじめたりける。

それ以後、春日姫の竹倉別にたいする態度はうつて變り冷淡となりぬ。竹倉別は鷹住別、春日姫のきはめて親密なる關係を探知し、おほいに憤り、あまたの從者を引きつれ、夜陰に乘じて鷹住別の住居を襲ひ仇を報いむとしたりければ、鷹住別は不意の襲撃に驚き、大道別に急使を馳せ救援を請ひにける。

ここに大道別は仲裁の勞をとらむとただ一人、館を立ちいで鷹住別の住居にいたり、邸外を包圍せる竹倉別に向つてすみやかに退散すべく嚴命したりける。このとき、鷹住別、若彦は竹倉別の部下の者どもに身邊を取りかこまれ、いかんともする道なかりける。竹倉別は大道別の嚴命に少しく躊躇逡巡の體なりき。されど、逸り切りたる部下の者共は水の出ばなの勢とどめがたく、鬨をあげて……鷹住別、若彦を滅ぼせ……と叫び續けてやまざりにけり。

大道別は天にむかつて、天津祝詞を言靈すずしく奏上したるに、たちまち破軍

星の精霊なる武滿彦命天上より降りきたり、竹倉別の頭上へ猛烈なる霊劍を雨のごとく投下したまひければ、竹倉別はたちまち色蒼ざめ、合掌して武滿彦命にわが行動の不穏なる罪を陳謝しけり。武滿彦命はただちに紫雲に乗じ天に歸らせたまひたり。

ここに大道別は兩者和睦の宴を開かむとし、大蛇の長橋のほとりに建てる廣殿に招待し、かつ相たがひに春日姫との手を斷然きることを堅く約し、歡をつくして宴席を各自思ひおもひに退場したりけり。

大道別は鷹住別、若彦とともに紅葉山の麓まで歸るをりしも、鬱蒼たる森林の中より何者とも知れず數十の黒影あらはれきたり、大道別をはじめ鷹住別、若彦の手をとり足をしばり、太き綱をこれに結びて大道を引ずりゆくものあり。これぞ竹倉別以下の從者どもの不逞の所爲なりける。

このとき、紅葉山上より數限りなき岩石、竹倉別の群に向つて落下し、數名の從者を傷つけたりしが、これはローマにありし若彦の兄勝彦が、弟の危急を救はむとして、竹倉別の謀計を前知し、この山上に待ち構へゐたりしなりける。竹倉

別は勝彦の勇氣に辟易し、部下を捨てて八王大神の下に走り、ついにその部將となりぬ。それより鷹住別、春日姫の得意時代とはなりける。若彦はつひに春姫の夫となり烏羽玉の宮に忠實に奉仕したりける。

春日姫と鷹住別のあひだは蜜のごとき關係の結ばれたるが、春姫は即興歌を作りてこれを祝しける。その歌、

『春の彌生の曉か　四方の山邊は陽炎の
きらめき渡り春風に　ほころぶ梅の香しさ
梢に來鳴く鶯の　谷の戸明けてホーホケキヨー
ホーホケキヨーと經を讀む　坊主の愛する今日（經）の春
霞の衣身にまとふ　四方の山々春姫の
青きみけしをまつぶさに　とりよそひたる長閑さよ
風も長閑な君が春　春日の森の常磐木は
千年の色を染めなして　櫻は笑ひ紅葉は

若き面を赤らめつ　差招くなり君が代の
春の陽氣の春日姫　松に千歳の鷹住別や
神の許せし妹と背の　中を隔つる竹倉別も
今は別れて常世往く　世は烏羽玉の暗くとも
光りかがやく玉椿　八千代の春はいつまでも
花は散らざれどこまでも　色はあせざれ常永に
ウラルの嵐強くとも　君には神風福の神
八千代の椿優曇華の　花咲く春や春日姫
ほまれはますます高殿に　登りて見晴らす天の原
ふりさけ見れば三笠山　峰より昇る望の夜の
清き月影缺くるなく　圓き涼しき家庭内
園の白梅くれなゐの　梅の薫りといつまでも
失せずにあれよどこまでも　五六七の代までかをれかし
一時千金花の春　老いず死らず幾千代も

操をかへぬ庭の松　千代の緑の蒼々と
榮ゆるごとく永遠に　變りたまふな春日姫
世は烏羽玉の暗くとも　二人のなかは紅葉の
赤きえにしを結び昆布　胸の奥山鹿ぞなき
木々の木の葉を木枯に　吹き散る淋しき世ありとも
偕老同穴むつまじく　月日をおくれ春日姫
四方の山々紅葉して　佐保姫錦織るとても
霞の衣とことはに　紅葉山下に安々と
樂き御世を送らるる　その瑞祥に因みたる
陽氣目出度き春姫の　心はいつも若彦や
榮ゆる心をとこしへに　つづかせたまへ春日姫
鷹住別といつまでも』

かくのごとく春姫の祝ひし歌も春の夜の短き夢と消え失せて、春日姫はつひに

破鏡の悲しみを味はふこととなり、發狂して暴狂ひ自暴自棄に陥りにける。
この春日姫ははたして何ものぞ。
（大正一〇・一一・二九　舊一一・一　櫻井重雄録）

第三一章　龍神の瀑布〔一三一〕

長らくローマに足を留めたる八王神道貫彦は、ローマの沒落とともに、モスコーを氣づかひ、あまたの敵軍を突破してやうやく歸城し、道貫姫とともに長物語りに夜を徹したりける。

しかるに道貫彦はわが不在中、春日姫の鷹住別と夫婦となりしことを大いに怒り、かかる一身上の大問題を父にも母にも計らず、決行したる春日姫も不都合なれども、第一母たる道貫姫の行き屆かざる行爲を怒り、道貫姫には別殿を造りてこれに蟄居せしめ、鷹住別と春日姫のあひだを生木を割くごとく、無殘にも夜半

の嵐の物凄く、常世國にむかつて鷹住別を神退ひに退はれにける。
春日姫は、海洋萬里の孤島にただ一柱とりのこされし心地して、連日連夜泣き暮したる。その結果、つひに心魂に異状を呈し、狂亂となり、行きあふ人ごとに形相を變じ眼を見はりて、
『鷹住別、々々々』
と叫び狂ふ。ここに竹友別、畠照彦は、いかにもして春日姫の病を癒さむとし、遠近の高山に分け入り瀑布に身を浸し、あるひは斷食をなして祈願を籠めたれども、病氣はおひおひ重くなるばかりなりける。
あるとき畠照彦、竹友別はゆくりなくも天道山に分け入りしが、ここには「龍神の瀧」といふがありて、山頂より落下する水勢は百雷の一度に轟くがごとく、水煙濛々として立ち上り、實にすさまじき深山幽谷なりける。
ここに二人は、七日七夜精神をこめて祈願したりしが、その時馬の蹄の音戛々と山上より聞えて、六面八臂の鬼神あらはれ二人にむかひ、
『春日姫の病氣は、この瀑布に一ケ月打たれなば全快せむ』

と告げ、そのまま姿は煙雲のごとく消え失せけり。二人は天にも上る心地して急ぎモスコーに歸り、平玉彦とはかり春日姫をひそかに誘ひ、天道山の瀑布に連れ行かむとしたるに、大道別はこれを探知し、直ちにこれを嚴禁したるに、畠照彦、竹友別は顔色をかへ大道別にむかつて、

『心得ぬ貴下の仰せなるかな。貴下は八王神に仕へまつる侍從長の顯職にありながら、毫末も忠良の志なし。われは身命を捨て、八王神夫婦の心痛を助けまつらむ忠義の心より出でたるなり。數月のあひだ、食を斷ち、あるひは深山に分け入り、瀑布に投じあらゆる艱難辛苦を嘗め、その報いによつて神の命を受け、春日姫を救ひまつらむとす。しかるに嚴禁すとは何事ぞ。いかに長上の言なればとて、かかる不忠不義の言に服從すること能はず』

と云ひ放ち、ひそかに春日姫を鶴舞姫と假名し、ここに主從三人は天道山の大瀑布の下に進み入りにける。

道貫彦は、平玉彦以下二人の赤誠を非常に感謝されたりといふ。ここに大道別は守高彦を瀑布に遣はし、すみやかに春日姫をともなひ歸るべく命令を傳へしめ

たれば、守高彦は、天道山の瀑布にいたり窺ひみれば、平玉彦以下の人々は春日姫の鶴舞姫を傍の石の上に横臥せしめ、代るがはる瀑布に打たれ、眞裸のまま春日姫の身體にむかつて指を組み、鎭魂の姿勢をとり汗を瀧水と流して、【ウーウー】と呻りゐたり。守高彦はこの體を見てあきれ果て、つひには抱腹絶倒のあまり、自分も氣が變になりきたりぬ。そのとき鶴舞姫は、

『竹友別、々々々』

と連呼しけるが、竹友別は唯々諾々として瀧壺より這ひあがり、鶴舞姫の前に畏るおそる跪坐しける。鶴舞姫はいやらしき笑をうかべて、

『貴下は戀しき鷹住別に非ずや』

と力のかぎり手首を握りたり。強力の鶴舞姫に手首を握られたる竹友別はみるみる顔色青褪め、その場に打ち倒れたり。畠照彦は驚きて瀧壺より這ひあがり瀧水を口に含み、竹友別の面上を目がけて息吹き放ちけるに、竹友別やうやくして正氣づきぬ。されど鶴舞姫は堅く手を握りて放さねば、竹友別は耳菟のごとき圓き目を白黒とむき出し、一言も發しえず悶え苦しみにけり。時しもあれ守高彦は、

やにはに鶴舞姫の横面目がけて拳固を加へたるが、そのはずみに鶴舞姫は瀧壺へ落ち込みたり。三人は驚きて鶴舞姫を瀧壺より救ひあげ、守高彦の手足に搦みつき、

『汝は不忠不義の惡人よ。主にたいして無禮の段その罪もつとも重し、目に物見せてくれむ』

と、三人一度に有りあふ岩を手に持ち、守高彦の身體を處かまはず打ち据ゑける。守高彦は四つ這となり、笑ひながら、

『もう、それでよいか』

と嘲笑したるに、三人はますます怒り、岩を持つて打てども擲れども、不死身の守高彦は平然たり。何はともあれ、一時もはやくこの様子を大道別に報告し、あまたの神司を引き連れきたりて三人をしばり、春日姫を連れ歸らむと心を定め、守高彦は一目散にモスコーに走り歸り、この次第を大道別に奏上したりける。

大道別は大石別を守高彦にそへ、あまたの神司をひきゐて天道山の瀑布にむかひ、

『鶴舞姫以下諸神司を殘らず打ち殺し歸るべし』
と命令したり。大石別、守高彦は案に相違の顏色にて、
『畏れおほくも主の御娘を、從臣の分際として、打ち殺し歸れとはその意を得ず。貴下もまた常世國の邪神に憑依されて、かくのごとき暴言を吐かるるならむ。決して決して貴下の本心より出し言には非ざるべし』
と言ひつつ、大石別、守高彦は前後より手を組み合せ、【ウーウー】と一生懸命に靈力をこめ鎭魂の姿勢を取りける。大道別は吹きだし、腹をかかへてその場に打ち伏し、
『大石別腰を揉め、守高彦足を撫でよ。あまりのをかしさに腹も腰もだるくて置き處なし』
とて哄笑せり。二人は烈火のごとく憤り、
『不忠不義の惡魔の張本、天にかはりて誅戮せむ。思ひ知れよ』
と力自慢の守高彦は、蠑螺のごとき拳固をかためて大道別を打たんとしたるその刹那、守高彦の腕は銅像のごとく手を振り上げしまま少しも動かずなりにける。

大道別は二人にむかひ、
『吾は臣下の分際として忠義の道をわきまへざるに非ず。春日姫はすでに鷹住別と手をたづさへて常世國にあり。しかるに二人の春日姫の在すは合點ゆかずと、毎夜ひそかに烏羽玉の宮に詣で、神勅を請ひゐるをりしも大神現はれたまひ、かれ春日姫は銀毛八尾の惡狐の變身なり。その證據はかれの足の裏に狐の形したる斑紋ありとの神示なりしかば、吾は常に注意しつつありしに、ある機會にその斑紋を見屆けたり。ゆゑに僞りもなき惡狐の變化なれば、汝はすみやかに天道山の瀑布にいたり、姫もろともに一度に打ちとるか、さなくばこれを生擒りにして歸りきたるべし』
と初めて心中を打ち明けたりしに、守高彦はいづれが眞の狐なるや合點ゆかず、ともかくも春日姫の足の裏を見とどけての上決せむと、大石別もろとも急ぎ龍神の瀑布に進み入りにける。
（大正一〇・一一・二九　舊一一・一　加藤明子録）
（第二九章～第三一章　昭和一〇・一・一七　於延岡市吉野屋旅館　王仁校正）

第三二章　破軍の劍〔一三二〕

大石別、守高彦は、大道別の言葉の實否を試さむと、急ぎ天道山の大瀑布に諸神卒とともに驅つけ見れば、春日姫は容姿がらりと變じ、にこやかに微笑しながら二人にむかひ遠路のところ御迎ひ大儀と、實にすましゐたりける。平玉彦は得意らしく鼻を【ぴこつ】かせ、右の手の甲にて上下の唇を左から右へ斜にこすりながら、

『大石別、守高彦』

と言葉鋭く呼びかければ、二人はその態度に憤然として面をふくらせ、

『銀毛八尾の惡狐にしたがふ平玉彦の盲目どもよ、平玉蜘蛛となりて、吾が前に正體をあらはせ』

と叫ぶや、平玉彦は怒りて、汝無禮ものと言ひながら大石別に打つてかからむとしたり。されど、仁王のごとき強力無雙の守高彦の兩手に拳骨を握りをるその形相のすさまじさに、やや躊躇の色ありき。

春日姫は言葉優しく、
『大石別、守高彦、妾はすでに病氣全快なしたれば、最早ここに長居するの必要なし。わが本復の祝ひにかへ、平玉彦を許せよ』
と言葉を添へけるを、大石別は守高彦と目と目に何事か物言はせながら、この場を無事に引返すこととなり、春日姫は神司らに送られて賑々しく歸城したりける。
道貫彦は、春日姫の無事歸城せることをよろこび、春日姫の賴みを容れて烏羽玉の宮の宮司に任じける。平玉彦、大石別以下の神司は、これを見て欣喜のあまり落涙しながら、大道別の前にすすみいで、
『貴下は、畏れおほくも八王神の御娘春日姫を、銀毛八尾の惡狐といひ、かつ御足の裏に狐の斑紋ありといはれたり。されどかくのごとく病氣全快したまひ、神聖なる烏羽玉の宮の司とならせたまひ、精神ここに一變して至善至美なる神司とならせたまひしに非ずや。貴下は八王神にたいし速やかに切腹せらるべし。卑怯未練に躊躇せば、われ天にかはつて貴下を誅戮せむ』
と息まきながら詰めよりにける。

時しも道貫彦の御召なりとて、春姫は言葉おごそかに大道別を差招きければ、大道別は春姫とともに奥殿に進み入りしに、奥殿には道貫彦、春日姫が正座にひかへ、言葉も荒く、

『汝は春日姫にたいする無禮の罪により、天地の律法に照らし自殺を申しつくる』

と嚴かに言渡しける。大道別は驚くかと思ひのほか、大口あけて打笑ひその場に倒れ伏しぬ。しばしの後、

『あゝ暗い、暗い』

と呟きながら、腰の一刀を拔くより早く電光石火春日姫の首は、胴を離れける。

このとき道貫彦は、大聲に大道別を引捕へよと怒號すれば、この聲に驚いて平玉彦、大石別、畠照彦、竹友別その他の神司は奥殿目がけて走りいり、前後左右より大道別を取り押さへ、高手小手にしばり上げたり。大道別は心中に天の破軍星を祈り、國治立命の救助を祈りければ、たちまち百雷の一時にとどろく如き音響とともに、破軍星の精魂たる武滿彦命降りきたり、破軍の劍をもつて空中を切り捲りたまふにぞ、今まで春日姫と思ひし女性は、銀毛八尾の惡狐と化し、そこ

に斃死しゐたりける。ここに全く大道別の無辜は晴れ、かつ道貫彦は非常に口をきはめて大道別の天眼力を感賞したり。しかるに大道別は春日姫の惡狐の首を斬り捨てたるさい、そのほとばしる血の一滴を口に呑み、その血は身體一面にひろがり、さしも明察にして勇猛なりし大道別も精神に異状をきたし、發狂者となりにける。

これよりモスコーの城は、常世姫の驅使せる金毛九尾の惡狐のために蹂躙され、道貫彦、夕日別の夫妻は、つひに城を捨てて萬壽山に難を避くることとはなりぬ。

大道別はそれより世界の各地を漂浪し、ある不可思議の出來事より、病氣まつたく癒えたれど❓、命は依然として發狂者をよそほひ、かつ聾者となり、馬鹿者となりて敵状を視察し、最後に神政成就の神業にたいして偉勳を立てたるなり。神機發揚の神司として五六七神政の基礎となり、國祖再出現にさいし、とつぜん地の高天原に顯現する神人なり。大道別の正體ははたして如何。ただ今後に徵せむのみ。

（大正一〇・一一・二九　舊一一・一　外山豐二録）

第九篇　隠神の活動

第三三章　巴形の斑紋〔一三三〕

大道別は、常世の國の邪神の變化たる春日姫を亡ぼし、偉勲を建てたる際、邪神の血液の一滴口中に飛び入り、ために全身の血液けがれて聾唖となり癡呆となり、かつ發狂者となりてモスコーを立出で、地上の各山各川を漂浪し、長年月を經て、南高山の深き谷間に迷ひ入りける。

この時いづこともなく、巨大なる呻き聲の起りしよと思ふ瞬間、幾萬ともかぎりなき猛虎現はれきたり、大道別に前後左右より噛みつききたる。聾者となりし大道別もこの呻り聲は、透きとほるごとく耳に入りければ、心得たりと大道別は噛みつきたる猛虎の首筋を引つかみ谷間の岩角に打ちつけ、これを亡ぼすこと數ふるにいとまなきほどなりき。猛虎の群はますます怒り猛り狂ひ、命かぎりに飛

びついてくるを、大道別は縦横無盡に戰ひけるが、つひに心身ともに大いに疲勞を感じ、千仞の谷間へ眞逆様に轉倒し、頭部に大負傷をなし、多量に出血して、谷間に失心のまま横たはりける。

數萬の猛虎はそれと同時に搔き消すごとく姿を隱し、あとには南高山の松風と、谷川の激流の音ばかりなりける。

南高山の山つづきなる此方の高山の奥に、荒河の宮といふ社殿建ちをり、その神名は荒河明神ととなへ、年々地方の神人をして犧牲を供せしむるを、慣例としをりける。毎年冬のはじめに、南高山一帶の神人は犧牲をささげて盛大なる祭典を執行することとなれり。萬一、一回にてもこの祭典を怠りしときは、南高山一帶は暴風吹きおこり猛雨降りそそぎ、たちまち大洪水をおこして、神人樹草その他の生物を苦しむる暴惡無比の神なりける。

南高山の守神大島別は、一切の危難を免れしめむがために、毎年犧牲の祭祀を怠らず執行されゐたりける。大島別の子に八島彦、八島姫といふ二人の子女ありき。八島姫の額に、たちまち巴形の黒き斑點が現はれたるが、上下貴賤の區別な

く、この斑点の現はれたる者は、その年の祭典の犠牲者たるべき運命の定まりしものとせられゐたり。

大島別、大島姫をはじめ數多の神司は、八島姫の額の斑点を見て、悲歎やるかたなく、部下の神司をあつめ種々協議の結果、その身代りを立てむと、地方一般に神司を派して、他に巴形の斑紋ある女はなきやと、晝夜間斷なく山野河川を捜索しつつありき。

時しも、南高山の谷川を渡るとき、平素清けき川水は、血液の色を帶びゐるを認めたる玉純彦、高山彦は、流れの變りたるを訝かり、あまたの神司とともに溪流をつたひ、岩の根、木の根踏みさくみ上りゆく。谷川の底にあたりて、何とも知れぬ呻き聲聞えきたるにぞ、諸神司は、巖壁をつたひ、辛うじて谷底に下りみれば、仁王のごとき容貌骨格のたくましき一人の男子が岩角に頭をうち出血して、ほとんど蟲の息となり呻きゐたりける。

玉純彦は直ちに谷水を掬ひ來りて口に飲ませ、かつ伊吹きの狭霧を吹きかけなど種々介抱に手をつくしたる結果さいはひに蘇生し、目をギロギロとみはり、も

のをもいはず茫然として神司らの顔を眺めゐたり。
高山彦は、この男の額に巴形の斑紋歴然として現はれをることを目撃し、欣喜雀躍しながら、玉純彦の耳に口をよせ、何事をか私語きける。あまたの従者の顔にも何となく晴やかなる氣分のただよひ見えゐたるなり。
大道別は神司らに誘はれ、南高山の城塞に連れゆかれ、その夜は鄭重なる饗應を受け、かつ再生の恩を謝したりしが、この時すでに大道別の精神状態は、出血のため改まり、耳は漸次聞えだし、口はものをいふことを得、視力はますます正確になりゐたりける。
大道別は、モスコーを出しより、無我無中に幾千里を跋渉しつつありしが、今この南高山において病氣恢復したれば、今の吾が身は、その身のいづれの地にあるやも分らざりしなり。
大道別は玉純彦にむかひ、
『ここの地名は何といふや、吾は永らく病氣のため夢中の旅行をなし、突然精神状態の正氣にかへりたる際なれば、はじめて生れ出たるごとく、何事も分明せず』

と云ふにぞ、玉純彦は、
『ここは南高山の城塞なり』
と答へけるにぞ、大道別はその長途の旅行に、みづから驚きゐたりける。
（大正一〇・一二・六　舊一一・八　栗原七藏録）
（第三二章～第三三章　昭和一〇・一・一七　於延岡市　王仁校正）

第三四章　旭日昇天〔一三四〕

ここに大道別は、大島別の奥殿に導かれ、山野海河の珍味の饗應をふたたび受け、終日終夜うるはしき女性の舞曲を見せられ、絲竹管絃の音に精神恍惚として、鼻唄氣分になりゐたりしが、不思議や八島姫の巴形の斑紋は拭ふがごとく消え去り、大道別の斑紋はおひおひ濃厚となりきたりぬ。
ここに大島別は威儀を正し、大道別にむかひ、八島姫のこの度の大難より、大

道別の溪間に顛倒しほとンど絶息しゐたるを助けゐたるに、あにはからむや、その面上に巴形の斑紋あらはれ、八島姫の額の斑紋はしだいに薄らぎ消え失せたる次第を物語り、

『汝は吾が娘八島姫の身代りとなりて、荒河の宮の犠牲たるべき運命のもとにおかれたるものなり』

と吐息をつきながら涙を流して物語りけるにぞ、大道別は少しも驚く色なく、涼風面を吹くごとき平氣な態度にていふ。

『そは實に面白きことを承るものかな。我はかかる犠牲的行爲を心底より喜ぶ。そもそも神たるもの犠牲をたてまつらざれば、怒りて神人を苦しますべき理由あるべからず。これまつたく邪神の所爲ならむ。我かつて龍神の瀧において惡魔を見届けたることあり、よき研究材料なり。謹ンで貴意に應ぜむ』

と、こともなげにいひ放ち平然として酒をのみゐたりけり。大島別以下の神司らは、おほいに喜び感謝の意を表し、ただちにその準備に着手したりぬ。

いよいよ期日は迫り來れり。神司らは種々の供へ物とともに、大道別を柩に入

れ納め、山深く分けいりて、黄昏ごろやうやく荒河の宮に到着し、社前に柩ならびに供へ物を安置し、一目散に逃げ歸りける。

夜は森々と更けわたり、四邊しづかにして、水さへ音なく、靜かにねむる深更の丑滿時となりぬ。たちまち社殿は鳴動しはじめ、數萬の虎狼が一度に咆哮するごとき、凄じき音響聞え來りぬ。

大道別は何の恐るる色もなく、柩の中に安坐して、天津祝詞を幾回ともなく繰返し奏上しゐたるに、たちまち神前の扉は【ぎいぎいぎい】と響きわたりて、眼は鏡の如く、口は耳まで引裂け、不恰好に曲める鼻は菊目石を括りつけしごとく、牙は劍のごとく、白髮背後に垂れ薄蝋色の角、額の左右に突出たる異樣の怪物、金棒をひつさげて柩の前に現はれ、どんと一突き地上を突けば、その響きに柩は二三尺も地上をはなれ飛び上りける。さすがの大道別も、すこしは案に相違の面持なりける。

大道別は天津祝詞を一生懸命に、汗みどろになり聲をかぎりに奏上したるに、その言靈の響きによりて、柩は自然に四方に解體したれば、大道別はスツクと立

ち上りたり。怪物はその勢に辟易して二三歩後方に退きし、その隙間を見すまし、怪物の胸部を目がけて長刀を突き刺しけるに、怪物はキヤツと一聲、大地にだうと倒れ伏し、もろくも息は絶にける。大道別はそのままそこに端坐して、神前の神酒神饌その他の供へ物を仁王のごとき手をもつて之をつかみ、【むしやむしや】と片つ端から殘らず平げにける。

しばらくあつて天上より微妙の音樂聞え來たりぬ。大道別はその音樂を酒の肴のごとく思ひつつ、神前の冷酒の殘りを【がぶがぶ】と呑みはじめたる時もあれ、たちまち容色端麗にして莊嚴無比なる女神は數多の侍神とともに現はれたまひ、言葉しづかに、

『妾は天の高砂の宮に鎭まる國直姫命なり。汝はこれより吾が命を遵奉し、神界經綸の大業を完成するまで、地上の各地をめぐり惡神の陰謀をさぐり、逐一これを國治立命に奏上すべし。それまでは汝は假に道彦と名乘り、かつ聾唖となり、癡呆と變じて神業に從事せよ。汝には、高倉、旭二柱の白狐をもつてこれを保護せしめむ。使命を遂行したる上は、汝は琴平別命と名を賜ひ、龍宮の乙米姫命を

娶はし、神政成就の殊勲者として四魂の神の中に加へむ。夢疑ふなかれ』と言葉終るとともに、國直姫命以下の神司らの姿は消え失せ、東方の山の谷間よりは紫の雲を分けて天津日の神豐榮昇りに昇りたまひぬ。かたはらを見れば象のごとき怪物、血にまみれて横たはりゐたり。これぞ六面八臂の邪鬼の眷族なる大狸なりける。

それ以後荒河の宮は燒きすてられ、南高山一帶の地方の禍は、跡を絶つに至りける。玉純彦以下の神司らは、大島別の命により數多の神司を引率し、荒河の宮にいたり見れば、大道別は平然として大狸の横に安坐し、天津祝詞を奏上しゐたるにぞ、神司らはかつ驚きかつ喜び、大道別とともに南高山の城内に意氣揚々として歸り來りける。大道別は神司らより親のごとく尊敬され、優待されて若干の月日をここに過したりける。

（大正一〇・一二・六　舊一一・八　加藤明子録）

第三五章　寶の埋換〔一三五〕

大道別は道彦と改名し、南高山の城内に長くとどまり、大島別夫妻の非常なる信任を受け、南高山の八島姫を娶はせて、わが身の後繼者たらしめむとし、大島別みづから道彦に向つてその旨をうち明し、しきりに勸めて止まざりにける。

また八島姫は生命の恩人なる上、道彦の英傑なるに心底より心をよせ、ぜひ道彦の妻たらむことを祈願しつつありける。道彦は親子の日々の親切にほだされて、これを素氣なく辭退するに苦しみゐたりける。

あるとき大島姫は、身體にはかに震動しはじめ、兩手を組みしまま上下左右に振りまはし、城内くまなく驅けめぐり、これを靜止すること困難をきはめたり。大島別は大いにこれを憂慮し、地の高天原にむかつて、國治立命の救助を祈願せり。道彦はただちに姫の狂暴を取押へむとして後を追ひ、表の階段の上にて姫とともに格闘をはじめける。

その刹那、道彦は階段より顛落して頭部を負傷し、流血淋漓失神不省の態とな

りぬ。大島姫は初めて口をきり、

『われは南高山に年古くすむ高倉といふ白狐なり。道彦はわが頭首をうち滅ぼせしにより、その仇を報ゆるために姫の體内を借り、これを階下になげつけ、傷口より毒血を注ぎいれたれば、彼はたちまち聾唖となり、癡呆となり、かつ發狂の氣味を有するにいたるは火をみるよりも明らかなり。ア、嬉しや、喜ばしや』と肩を前後左右にゆすり、足踏みして愉快氣に哄笑するにぞ、八島姫はおほいに悲しみ、道彦を抱きおこし、別殿にかつぎこみて種々介抱に手をつくしたれども道彦の容態すこしも變らず、八島姫の言葉にたいして何の反應もなく、ただただ【げらげら】と涎をたらして笑ふのみなりける。

大島姫はふたたび身體を前後左右に震動させながら、大島別にむかひ、

『われはもはや道彦を術中に陥れたれば、これに憑依するの必要なし。イザこれより常世城に遁げ歸らむ』

と言ふかとみれば、大島姫はバツタリ殿中にうち倒れたり。諸神司は右往左往に周章狼狽して水よ藥よと騒ぎまはりしが、やうやくにして大島姫は正氣に復し、

さもはづかしき面色にて大島別の前に平伏し、城中を騒がせし罪を拜謝したりける。ここに道彦は眞正の聾唖にして、かつ癡呆にかかり、全快の望みなきものと一般に信ぜらるるにいたりけるぞ口惜しけれ。

道彦は白狐の高倉と旭の二柱にみちびかれ、南高山の山頂にある數多の珍寶を調査すべく上りゆく。されど癡呆と思ひつめたる神司らは、道彦の行動に毫も注意を拂はざりしは、道彦にとりて非常なる幸福なりける。

道彦は、夜陰に乘じ白狐の案内にて山頂に登りみれば、常世姫の閒者なる高山彦は、山頂の土を開掘し、すでに種々の珍寶を奪ひ、常世の國に歸らむとして同類とともに、あまたの荷物をこしらへゐたる最中なりき。そこへ突然道彦が現はれきたりたれど、高山彦は、癡呆にして聾唖なる道彦と思ひ、少しも懸念せず種々の寶を掘出し、かつ貴重なる寶物を道彦の背に負はせ、山を下らしめむとせり。一味の曲者はおのおの寶を背負ひ、山を下りゆかむとするこの時、高倉、旭の白狐はにはかに千仞の谷閒を平地と見せかけたれば、いづれも平坦の道路と思ひ誤り、殘らず谷閒におちいり、岩角に傷つき、あるひは溪流に流され、ほとンど曲

者の一隊は全滅しをはりしぞ愉快なれ。

高山彦も大負傷をなし、つひに滅亡せしかば、道彦は白狐に導かれ谷間に下りけるに、不思議にも、その谷間は自分のかつて顛落したりし同じ箇所なり❓。すべての寶は皆この谷底に集まりありければ、白狐の指示すままにその寶を一所にあつめ、土を掘りてこれを深く祕め藏し、その上に千引の岩をもつて覆ひ、何くはぬ顔にて歸り來たりける。

南高山の城内には、高山彦以下のあまたの神司の姿見えざるに不審をおこし、四方八方に手配りして、その行方を探しつつありしところへ歸り來たりし道彦の衣類には、血が一面に附着しゐたれば、大島別は、道彦の衣類の血を見て、やや不審を抱きつつありけるところへ、數多の神司は高山彦の屍骸を擔ぎ歸り來たりぬ。しかして數多の神司は溪流に落ちて苦しみ、ほとンど全滅せることを委細に奏上したりける。時しも高山彦の從臣なる高彦は、危難をまぬがれ歸り來り、道彦のために全部滅ぼされむとしたることを、涙とともに奏上したりける。

大島別は烈火のごとく憤り、長刀を引拔き、眞向より道彦に斬りつけたるに、

道彦はヒラリと體をかはし、手をうつて笑ひながら後退りしつつ、
『ここまで御座れ、甘酒のまそ』
と踊りつつ城門をにげだしたり。八島姫は血相かへて道彦の後を追ひつつ門外に出づるや、たちまち暗にまぎれて行方をくらましにける。
（大正一〇・一二・六　舊一一・八　外山豐二録）
（第三四章～第三五章　昭和一〇・一・一八　於延岡市吉野家　王仁校正）

第三六章　唖者の叫び〔一三六〕

道彦は南高山の城塞を脱出し、白狐の高倉に守られて何處ともなく、足にまかして漂泊の旅をつづけたりしが、高倉は道彦の先に立ちて導きゆきぬ。
八島姫は道彦の後を慕ひて、見えつ隠れつ従ひゆく。されど道彦は八島姫の後より呼びとどめる聲を、聾者の眞似をなして少しも聞えぬふりを装ひ、ドンドン

と進みて行く。無論僞唖者となりし身は一言も發せざりける。八島姫はかよわき足にて、けはしき山坂を幾つともなく、晝夜を分たず跋渉せし疲勞によりて、ほとんど息も絶えだえに苦しみけるが、やうやくにして長高山の麓を流るる深き谷川のほとりに着きぬ。道彦は白狐の跡を渡り、淺瀬を選びて向ふ岸にやつと到着し、後を振りかへり息を休めゐたりける。

このとき、八島姫は命からがら對岸まで追ひかけきたり、この谷川の絶壁に立ち、いかにして渡らむやと途方にくれながら、聲をかぎりに道彦を呼びとめたり。道彦は表面素知らぬ顔はなしゐるものの、心の中には八島姫の心情を察知し、萬斛の涙にむせびゐたるなりき。

されど神命もだしがたく、聾唖を裝ひし身は一言の慰安も與ふるの自由を有せざりき。對岸の八島姫は、天を拜し地に伏し、慟哭やや久しうし、ここに決心の色を浮べてたちまち懷中より短刀を取り出し、天にむかつて合掌し、吾と吾が咽喉を突かむとする一刹那、道彦は思はず、

『しばらく待たれよ』

と呼ばはりぬ。姫は聲をしぼつて、

『妾が一旦夫と定めたるは、天地の間に貴下を措きて他になし。生きて戀路の闇に苦しみ迷はむよりは、いつそ貴下の御目の前にて自殺を遂ぐるは、せめてもの心の慰めなり。かならず止めたまふな』

とまたも咽喉を突かむとする時、白狐はたちまち姿を現はし、八島姫の持てる短刀を力かぎりに打ち落したりしが、姫はその場にドツと倒れて失心の態なり。道彦はこの慘状を見るに忍びず、ふたたび谷川を渡りきたりて、谷水を口にふくませ種々介抱の結果、姫はやうやく蘇生するにいたりける。

姫はやうやう顔をあげ、涙をぬぐひながら道彦の手をかたく握りしめ、顔を赤らめ胸肩ともに波をうたせ、たださめざめと泣くばかりなり。道彦は親切にこれをいたはり、かつ我が身の大神より一大使命を拜し、僞つて聾唖となり癡呆となり、發狂者を裝ひゐるその苦痛を逐一述べ立てたるに、八島姫ははじめて悟り、吾が身の不覺と無智を悔い、今までの怪しき心をあらため、何とぞ今後ともに神業に參加せしめよと、赤誠をこめて嘆願したりける。

道彦はただちに天にむかつて天津祝詞を奏上しけるに、たちまち天上より二柱の天使降りきたり、一柱は道彦にむかひ、一柱は八島姫にむかひ、各自に特種の使命を傳へ、固く口外することを禁じたまひぬ。この天使は天の高砂の宮にます國直姫命の使神なりき。ゆゑに道彦は八島姫の使命を知らず、八島姫はまた道彦の使命のいかなるかを知らざりける。しかし道彦には白狐高倉をしてこれを守護せしめ、八島姫には白狐旭をしてこれを守護せしめられたりける。

それより八島姫は、自己の美貌を楯に惡魔の巣窟に入りてすべての計略を探知し、道彦は力強の馬鹿となりすまして、惡神らの巣窟を探り、種々の陰謀を覺知して、これを國直姫命に詳細奏上することに努めたり。

道彦、八島姫は、個々別々に身を窶して長高山の城下に進みいりぬ。長高山は忠孝兩全の譽高かりし清照彦、末世姫の二人が主將として守りゐたりけり。

しかるに、美しき花は風に散りやすく、良果は蟲に侵されやすきがごとく、長高山は一時天國淨土の現出せしごとく天下泰平に治まり、風雨和順して神人鼓腹の樂しみに馴れ、あまたの神人は少しも治世の苦しみを知らざりける。常世姫の

閒者土熊別、鬼丸は善の假面をかぶり長高山に現はれ、城内の神人らを絲竹管絃の樂みをもつて籠絡し、日夜茗宴にふけらしめたれば、長高山は天下泰平の波にただよひ、神人は下の苦しみを知らず、たがひに自己の逸樂榮達のみにふけり、難を避け安きにつき、天職責任を解せず、頤をもつて下民人を使役し、日をおふて驕慢心を增長せしめけり。上は日夜絲竹管絃のひびきに心魂をとろかし、酒池肉林の驕奢に魂を腐らし、寶を湯水のごとく濫費し、下級民人の慘苦を少しも思はざるにいたれり。これぞ常世姫の閒者土熊別、鬼丸らの術中に陷らしめ、長高山を内部より崩潰せしめむとの奸策なりける。神人はつねに美女を座に侍らせ、長夜の遊樂に耽りゐたりけるが、あるとき土熊別は酒の醉をさますべく、城外にいでて散歩せるに、たちまち前方に容色ならぶものなき美人が現はれける。この美人は前述の八島姫なりける。

八島姫は、醉眼朦朧として唄を歌ひつつ進みくる土熊別の前にいたり、にはかに地上に俯伏して泣き苦しみはじめたり。土熊別はこれを見てただちに抱きおこし、

『貴女はいづれの女性にましますや。また何用ありてこの城下へ來たられしや』と舌もまはらぬ言靈にて問ひかくれば、姫はただうつむきて泣くばかりなり。土熊別はもどかしがり、しきりに名を尋ねけるを、姫はただちに顔をあげ、涙をぬぐひながら、

『妾は天より降りたる旭姫といふ者なり。長高山には常に絲竹管絃の音絶えず、日夜面白き舞曲を演ぜらるると聞き、雲路を分けてひそかにその舞曲を見むと降りきたる折しも、烈風のために羽衣を破られて飛行自由ならず、突然地上に墜落して大腿骨を打ち、痛苦に堪へず苦しみをれるなり』

と眞しやかに物語りければ、土熊別はやや右の肩をそばだて、首を左右に傾けながら、旭姫の顔を熟視ししばらくは無言のまま突つ立ちゐたり。このとき、旭姫はニタニタと笑ひはじめたり。しかして姫は、

『あゝありがたし、妾の苦痛は全く癒えたり』

と言ひながらすつくと立あがり數十歩圓をゑがいて輕々しく歩行して見せたるに、土熊別は手を拍ちて喜び、ただちに姫の手をたづさへ城内の酒宴の場に導きける。

あまたの美人は宴席にあれども、旭姫の容色端麗にしてその風采の優雅なるにおよぶ者なかりける。ほとンど姫は萬緑叢中紅一點の觀あるにぞ、神人らは手を拍つて喜びあいにける。

ここに旭姫は神司らの請ひをいれ、天女の舞ひを演ずることとなりぬ。拍手喝采の聲は城の内外に轟きわたりける。

（大正一〇・一二・六　舊一一・八　櫻井重雄録）

（第三六章　昭和一〇・一・一八　於延岡市　王仁校正）

第三七章　天女の舞曲〔一三七〕

八咫の大廣間の大酒宴の中に立ちて、旭姫は長袖いとしとやかに舞ひつ踊りつ、口づから歌ひはじめたり。その歌、

『朝日は豐榮昇りまし　神の光もいやちこに
清照彦のうしはげる　世は永遠に長高の
山の草木もかぐはしく　花は咲けども百鳥の
聲は長閑に謳へども　月に叢雲花に風
常世の國より吹きおくる　冷たき嵐にさそはれて
山のふもとや谷底の　木草は倒れ花は散り
神人一度に泣き叫ぶ　その聲今に長高の
山の尾の上を轟かし　常世の暗の世とならむ
心きよてる彦の神　その身の側に氣をつけて
角の生えたる牛熊や　鬼丸等がたはむれを
眞寸美の鏡に照し見よ　あらしはやがて吹き荒み
炎は今に燃え上がる　清照彦よ氣をつけよ
常世の暗となるなれば　長高山も末世姫
末世澆季の世をてらす　國直姫の御使

旭の明神これにあり　　太刀拔き振ふは今の内
角折りこらすはこの砌　　大道別や八島姫
後にひかへ奉る　　いそげよいそげいざ急げ
一時の猶豫は千歳の　　悔いを殘さむささ早く』

清照彦は旭姫の諷歌を聞くや、侍臣に命じてその場に牛熊別を縛せしめむとせしに、さすがの牛熊別も大酒をすごせしため身體自由ならず、やすやすと部下の神司のために前後左右より取り圍まれ縛につきぬ。このとき山下に聞ゆる鬨の聲。清照彦は突つ立ち上り、

『反逆者の襲來ならむ。神將らは武裝を整へ防戰にむかへ』

と下知すれども、酒に醉ひつぶれて正體なく、ただただ寢耳に水の恐怖心にかられ、右往左往に城内を奔りまはるのみ。一人として戰場にむかふ勇者は無かりけり。

時しも鬼丸は、陣頭に立ちあまたの魔軍を引率し、城内に侵入しきたり、

『鬼丸これにあり、清照彦命に見參せむ。吾こそは常世國の重臣にして、鬼丸とは世を忍ぶ假の名、實は八王大神の密偵、鷹虎別なるぞ。長高山を占領せむと身をやつし牛熊別としめし合せ、本城を根底より覆へさむとの吾が計略、天運ここに循環して、日ごろの大望成就の曉はきたれり。もはや叶はぬ清照彦は、本城を開けわたし、常世の國に從ふか、ただしはこの場で切腹あるか。返答いかに』

と阿修羅王の荒れたるごとく、奥殿目がけて攻めきたるを、清照彦、末世姫は、強弓に矢を番へ、立ち出でて鷹虎別にむかひ、一矢を發たむとする時しも、いかがはしけん、弓弦はプツリと斷ち切れて雙方とも用をなさず、進退きはまり夫婦は最早切腹の餘儀なきをりしも、旭姫は牛熊別を縛のまま、その前に曳出しきたり、短刀を牛熊別の胸に擬し、鬼丸にむかひ、

『汝吾が主にむかつて危害を加へむとせば、妾はいま汝の主を刺殺さむ』

と睨めつけたるにぞ、鷹虎別は仁王立ちとなりしまま齒がみをなし、手を下すによしなく溜息つくをりしも、表の方よりにはかに聞ゆる數多の足音。鬼丸はふと後を振返る一刹那、旭姫は短刀の鞘を拂ふより早く、鬼丸の胸につき立てしが、

鬼丸はアツと一聲、その場に倒れことときれにけり。

山麓に押しよせたる鬼丸の部下をさんざんに打ち悩ませ、敵を四方に散亂せしめ勝に乗じて山上に登り、城内の危急を救はむとして入り來れる大道別の雄姿は、今この場に現はれ、鐘のごとき大聲を放ちて、神助の次第を報知したりける。

旭姫はおほいに悦び、奥に進み入りて清照彦、末世姫に戰捷の次第を物語り、かつ大道別の功績を逐一物語りたり。清照彦はただちに大道別を引見し、その勳功を感謝し、ただちにわが地位を捨てて大道別、八島姫に讓り、かつ、

『吾ら夫妻は、貴下の從臣として永く奉仕せむ』

と赤心を面に表はして、しきりに慫慂したりける。

案に相違の大道別は、大いに迷惑を感じ、直ちに僞の聾唖を装ひ、癡呆を眞似て清照彦の言を馬耳東風と葬り去りぬ。旭姫は口をきはめて道彦の力量のみ徒に強くして、治世の能力なき癡呆者たる事を宣明したれば、清照彦は止むを得ずこれを斷念したりけり。

これより清照彦は、領内の正しき神人を下級より選拔し、重任に就かしめたり

しより、その後は一回の紛擾もおこらず、長高山はその名のごとく、世は長く榮え神徳は高く四方に輝きわたり、常世の邪神はつひにその影を沒したりける。大道別は長高山を煙のごとく消え失せ、八島姫もまた何時のまにか、姿を隱したりける。雲のごとく現はれ、霞のごとく消え去りし二人の神變不可測の行動、高倉、旭の二白狐の變現出沒の神妙奇蹟は、今後の物語りによつて判明するならむ。

（大正一〇・一二・七　舊一一・九　近藤貞二録）

第三八章　四十八瀧〔一三八〕

長高山の城塞より煙のごとく消え失せたる道彦は、高倉のあとを追ふて、遠く東北にすすみ、氷のはりつめたる海峡を渡りて、アラスカの高白山の谷間に進みたりしが、すこしく谷川の上流にあたりて喧騒の聲聞え來たる。道彦はその聲を

しるべに谷川をどんどん上りゆきみれば、谷の兩側はあたかも鏡を立てたるごとく、斷巖絶壁の一方に、あまたの人々寄り集まり、右往左往に聲を放ちて騒ぎゐたり。

見れば、高白山の主將荒熊彦は、谷間に顛落して大負傷をなし、谷水を鮮血にそめ苦しみつつありしなり。

神司らはこれを救はむとすれども、名におふ斷巖絶壁、いかんともすることあたはず途方にくれゐたりける。

このとき白狐の高倉は、金色の槌と變化し、絶壁をうち碎き、足のかかるべき穴を穿ちつつ谷底に下り行く。道彦は傍なる山林に生茂れる藤葛を長く結び、谷川のほとりの老木の根にその一端を結びつけ、みづからその蔓を谷底に垂れ、高倉の穿ちおきたる巖壁の穴に足をかけ、やうやく谷底に下りつき、荒熊彦のかたはらに寄りそひ、水を口にふくみて面上に吹きかけ、かつ天津祝詞を奏上し、鎭魂の神術をほどこし、やうやく正氣づき、出血もただちに止りたれば、右の脇に引抱へ、藤葛を左の手に持ち、巖壁の穴に足をかけ上りきたりぬ。神司らの喜び

の聲、感歎の聲は天地も崩るるばかりなり。荒熊彦は道彦を命の親として尊敬し城内にともなひ歸り、山海の珍味を出して饗應し、救命の恩を感謝したりける。

さて荒熊彦は衆とともに、この谷間の絶景を眺めて酒宴を催し、興に乗じて踊り狂ひ眼くらんで、この千仞の谷間に顛落したりしなりけり。この谷川は四十八瀧と稱し、いたる所に奇岩、怪石散在して、大小四十八個の莊嚴なる瀑布が出現し、風光絶佳の遊覽所となりゐたりけり。

道彦は荒熊彦の信任を得、聾唖癡呆の強力として侍臣のうちに加へられ、つひには炊事の用務を命ぜられ、まめまめしく奉仕しゐたり。

高白山の城内の宰相に、八十熊別といふ德望高き人あり。この人は常世姫の間諜にして、古くより高白山に謀計をもつて忍び入り、時をみて高白山を顛覆せむと企てゐたりける。

ここにローマの戰に敗れ、常世の國に送られたる言靈別命❓、中途にて、言代別命のために救はれ、身を變じて高白山にのがれ、賓客として、莊嚴なる別殿に迎へられ、時機を待ちつつありしが、八十熊別は、言靈別命の素性を探知せむと、

探女を使役して常にその行動を注視せしめゐたり。探女の名を月の姫といふ。月の姫は常に八十熊別の命により、言靈別命の侍女として、表面まめまめしく仕へゐたりぬ。

ある夜、言靈別命と荒熊彦の密談を立聽きしてをり、ひそかにその詳細を八十熊別に報告しければ、八十熊別は月の姫に耳語して何事か命令を下しける。

時に八十熊別は、茶の湯の饗應に言寄せて荒熊彦夫妻を招待し、かつ賓客なる玉照彦を招待したり。玉照彦は言靈別命の假名なり。道彦は荒熊彦の侍者として宴席に現はれしが、彼はただちに炊事場にいたり、水をくみ茶を沸かすなど、まめまめしくたち働きける。

八十熊別の侍者は、道彦の聾唖と癡呆とに心をゆるし、よろこびて炊事一切をうち任せける。月の姫は客人に茶をたて、これをすすめむとするとき、懷中よりひそかに毒藥をとり出し、茶の湯に投じたるを道彦は素知らぬ顔にこれを眺めゐたりける。月の姫はうやうやしく茶の湯を兩手にささげ、玉照彦、荒熊彦らの前にすゑ、一禮して座を立ちにける。

道彦はただちに月の姫を強力に任せてひきつかみ、茶席の前に現はれ出で、仰向に押し倒し、その茶を取るより早く、月の姫の口に無理やりに飲ませたり。

月の姫はたちまち手足をもがき、黒血を吐きことぎれにける。

八十熊別は謀計の暴露せむことを恐れ、合圖の磬盤を打つやいなや、どこともなく數多の邪軍現はれ、玉照彦、荒熊彦らを目がけて前後左右より、長刀を拔き放つて切り込みぬ。このとき道彦は、高倉の妙術により、數百の道彦となつて現はれたれば、八十熊別の味方の邪軍は、縱横無盡に、道彦を目がけて切りこめども、いづれも皆空を斬り、影を追ひ、勢あまつて階上より地上に顛落し、さんざんに敗北したりける。

八十熊別はこの態を見て、裏門よりのがれ出むとするや否や、幾千丈とも限りなき深き廣き池沼にはかに現出して、遁るるの道なかりける。これは高倉白狐の謀計的幻影なりける。

八十熊別はやむをえず、あとへ引返すとたんに、眞正の道彦のために、八つ割にされ、ここに高白山の妖雲はまつたく晴れわたり、眞如の明月は、高く中天に

輝きはじめたり。

言霊別命は、高白山の主將となり、しばらく地の高天原の神司らにも行衛を祕密にしゐたまひける。

荒熊彦、荒熊姫は、言霊別命に一切を讓り、みづから從臣となり忠實に奉仕したりしが、道彦の姿はまたもや煙と消えにける。

（大正一〇・一二・七　舊一一・九　栗原七藏録）

第三九章　乘合舟〔一三九〕

道彦は高白山を出でしより、諸方を遍歷し艱難辛苦を重ねて、やうやく常世國スペリオル湖の北岸に出たり。ここに船を傭ひ、ロッキー山に向はむとしたり。船中には澤山の神人乘りゐたり。八島姫もいつの間にか、この船の客となり居たりしが、道彦はわざと空とぼけて、素知らぬ顔をなしゐたり。八島姫は道彦の變

りはてたる姿を見て、少しも氣付かざりける。
この時船の舳先よりすつくと立ちて、八島姫の傍に近づききたる神人あり、これは南高山の從臣玉純彦なりき。南高山は八島姫の出城以來、四方八方に神人を派遣して姫の行方を探しゐたりしなり。玉純彦は八島姫にむかひ、飛つくばかりの聲を發し、
『貴女は八島姫にましまさずや』
といふ。八島姫も風采容貌ともに激變して、ほとンど眞僞を判別するに苦しむくらゐなりしかば、八島姫は首を左右に振り、
『われは旭姫といふ常世城の從臣にして、南高山のものに非ず、見違へたまふな』
と、つンとして背を向けたるを玉純彦は、どことなく八島姫の容貌に似たるを訝かり、姫の前方にまはりて首を左右にかたむけ、穴のあくばかり千鳥のごとき鋭き目を見はり、
『如何にかくしたまふとも、貴女の額には巴形の斑點今なほ微に殘れり。われは主命により貴女を尋ねむとして、櫛風沐雨、東奔西走あらゆる艱難をなめつくし、

今ここに拝顔し得たるは、天の授くる時運の到來せしならむ。袖振り合ふも他生の縁といふ。況ンや天地のあひだに二柱と無き主の御子においてをや。今この寒き湖の中に一蓮托生の船客となるも、かならず國治立命の御引き合せならむ、是非々々、名乗らせたまへ』

と、涙を流して男泣きに泣く。

八島姫は名乗りたきは山々なれども、國直姫命の神命を遂行し、地の高天原に復命を終るまで、なまじひに名乗りをあげ、神業の妨害とならむことをおそれ、斷乎としてその實を告げざりし。八島姫の胸中はじつに熱鐵をのむ心地なり。玉純彦はなほも言葉をついで、

『貴女はいかに隱させたまふとも、吾は正しく八島姫と拝察したてまつる。貴女の出城されしより、御父は煩悶のあまり、重き病の床につかせたまひ、御母また逆臣豐彦のために弑せられ、御父大島別は老いゆくとともに世をはかなみ、ぜひ一度八島姫に面會せざれば死すること能はずと、日夜悲嘆の涙にくれたまふのみならず、御兄八島彦は、瓢然として出城されしまま、行方不明とならせ給ふ。海

山の大恩ある御父の難儀をふりすて、わが意中の道彦の後を追はせたまふは、實に破倫の行爲にして天則に違反するものに非ずや』

と言葉をつくして述べたてける。

姫の胸中は暗黒無明の雲にとざされにけり。ほどなく船は南の岸に近づきぬ。この對話を聞きゐたる道彦は、はじめて様子を知り、いよいよ八島姫なることを悟り、つくづくその面を見れば、かすかに巴形の斑點を認むることを得たり。

船はやうやく岸に着き、神人は先を爭ふて上陸したり。道彦は八島姫に悟られじと直ちにその姿を物陰に隠したるに、玉純彦は姫の手を固く取りて離さざりけり。

八島姫は進退きはまり、國治立命の神靈にむかひて、この場を無事にのがれむことをと祈願したるに、たちまち白色の玉天より下り、二人の前に落下し白煙濛々としてたち昇り、四邊をつつみける。玉純彦は驚きて、姫の手を離したるを幸ひ、姫は白煙のなかを一目散に南方さして逃げ去りにける。

ややありて白煙は四方に散り、後には八島姫地に伏して泣き倒れてゐたり。こ

れは白狐旭の變化なりき。玉純彦はふたたび傍に寄り、千言萬語をつくして歸城をすすめたれば、姫はやうやう納得して、玉純彦とともに歸城の途につきにける。

數多の山河を跋渉し、やうやく南高山の城内にたち歸り、八島姫は久しぶりにて父に面會し、無斷出城の罪を謝したりしが、父はおほいに喜び、かつ玉純彦の功績を賞揚し、城内にはかに春陽の氣滿ち神人らは祝宴をひらいて萬歳を唱へ、大島別はここに元氣回復して、後日神政成就の神業に參加することとなりける。

道彦は八島姫の目を免がれ、常世城に入り、從僕となり遂に拔擢せられて、八王大神の給仕役となり、總ての計畫を探知するを得たり。また白狐の變化ならざる八島姫も同じく常世城に入り、常世姫の侍女となり、一切の邪神の計畫を探り、地の高天原に復命し、偉勳を樹つる次第は後日明瞭となるべし。

（大正一〇・一二・七　舊一一・九　加藤明子録）

第一〇篇　神政の破壊

第四〇章　國の廣宮〔一四〇〕

國直姫命の上天されしより、地の高天原も、龍宮城も綱紀紊亂して、諸神司は日夜に暗闘をつづけ、ほとんど収拾すべからざるに立いたりぬ。ここに大八洲彦命、神國別命は國直姫命の神靈を奉安し、神助をえて地の高天原を統治せむことを企てたまひぬ。

このとき龍山別、廣若、船木姫らの一派は神殿造營に極力反抗し、龍山別は大八洲彦命にむかひ、

『國直姫命は、すでに上天したまひたれば、肉身ある神にあらず。神はすべて靈にして、形體なし。いたづらに土木を起し、神殿を造營するは、かへつて天地の神慮に反くものなり。神は金石木草をもつて造りたる社殿には住みたまはざるべ

し。霊を拝するには霊をもつてせざるべからず。神殿を造りて、これに拝跪するごときは、いはゆる偶像を拝する惡逆無道の行爲にして神慮を傷つくるものなり』と強辨したれば、廣若、船木姫らも手をうつて、その説に贊成の意を表しける。

大八洲彦命は憤然として立上り、

『貴下の言一應は道理のごとく聞ゆれども、神は霊なりとしてこれを放任し、いたづらに天を拝するは、顯幽一致の神術に相反するの甚だしきものなり。神は絶對無限の神霊にして、かつ無形無聲にましますは眞理なれども、そは宇宙の大元霊たる天之御中主大神の御事にして、一旦肉身をもつて地上に顯現されし國直姫命のごときは幽神に非ず。今日は顯の幽神として上天したまへば、かならず荘厳なる宮殿を造り、神霊を祭祀し神助を仰がざるべからず』

と宣言したまひければ、神國別命は、一も二もなく大八洲彦命の説に贊成し、いよいよ天の原といふ聖淨の地を選み、宮殿を造營することとなり、これを國の廣宮ととなへられける。

國の廣宮には、宮司として武直彦、玉國彦が奉仕することとなりぬ。大八洲彦

命はあまたの神司とともに、神靈鎭祭の祭典を執行されたりしが、その場に美山彦、國照姫、龍山別、廣若、船木姫、田絲姫などの面々も、不承不承に參列したりけり。

神靈鎭祭の儀式をはるや、たちまち神殿鳴動して扉は自然に開かれ、殿内より強烈なる光線矢を射るごとく、美山彦、國照姫、廣若、船木姫、田絲姫らの面上を射照したるに、神威におそれて美山彦以下の面々は、その場に顚倒し、ふたたび起あがり手をふり、身體を動搖させ、怪しき聲をたてて庭前を狂氣のごとく飛びまはりける。

しかして美山彦以下の身體よりは銀毛八尾の白狐、古狸等數限りもなく現はれ、たちまち妖雲を捲きおこし、雲に隱れてどこともなく散亂したりける。國の廣宮は、天神地祇諸神の審神をなす聖場と定まりてより、美山彦、國照姫、龍山別は呆然として氣拔けせしごとく、神司らの前をはづかしげにすごすごとして龍宮城に立ちいたり、第二の計畫をめぐらしにける。

（大正一〇・一二・七　舊一一・九　外山豐二録）

第四一章　二神の歸城〔一四一〕

美山彦、國照姫は、天の原なる國の廣宮の建設されしより、邪鬼、惡狐の憑靈現はれ、八百萬の神司の手前面目を失し、龍山別、廣若、船木姫、田絲姫、猿若姫らとひそかに廣若の館に集まり、地の高天原をはじめ龍宮城を占領せむことを企てたるが、到底その力のおよばざるを悟りて、大國彦、常世彦の助力を求め、第一に國の廣宮を破壞し、嚴肅なる神司の審判を廢止せしめ、そのうへ當初の目的たる地の高天原を占領せむとし、四方の魔軍を募り、かつ大自在天大國彦の部下、醜原彦、大鷹彦、中依別、藤高、鷹取、遠山その他の暴惡非道の曲神の率ゐる數萬の魔軍を、天の原にむかつて攻めよせしめたり。

宮司の武直彦、玉國彦をはじめ、龍宮城の從臣佐倉彦、白峰別は大八洲彦命の命によりて極力防戰したれども、暴惡なる魔軍はなんの容赦もなく、多數の權威を頼みてたちまちこれを破壞し、凱歌をあげていういうと引揚げたりける。しかるに美山彦、國照姫の一派は、この殘虐を自己の關知せざる態によそほひ、なほ

も依然として龍宮城内に留まり、言靈姫命、眞澄姫、杉生彦を甘言をもつて説きつけ、地の高天原の主宰者なる大八洲彦命をはじめ、神國別命その他の重職にある神司を排除し、龍山別をして天使長の職に代らしめむとしたりける。

されど強直無比の曙姫、梅ケ香姫、玉若彦、豐日別の若き神人のために遮られて、せつかくの計畫も九分九厘のところにて一頓挫を來したりけるが、あくまで執拗なる美山彦、國照姫、船木姫、杵築姫らは、辨舌たくみに言靈姫命、眞澄姫を利害得失をもつて説きつけ、

『萬々一我らの進言を用ゐたまはざるにおいては、大自在天大國彦の軍勢は、直ちに龍宮城へ押寄せきたりて、國の廣宮のごとく一擧に地の高天原もろとも破壞さるるのみならず、大八洲彦命以下の神司は殘らず滅ぼされむ。我らの言を採用し、常世姫を迎へたてまつり、かつ龍山別をして天使長の職に就かしめなば、地の高天原も龍宮城も安全無事なるのみならず、言靈別命、大足彦は常世國より解放の歡びにあふは必然なり。眞澄姫、言靈姫にして、夫の危難を救ひ本城を永遠に保ち、神德を四方に發揮せむと欲したまはば、速やかに我らの忠言を容れられ

よ。夢にも我らの言を否みたまふにおいては、後日のため面白からぬ結果を招き、つひには貴女らの御身の上にも大事の發生せむこと、火を睹るよりも明白なり』と脅喝したりければ、さすが女人の心よわく、眞澄姫、言靈姫は、その贊否に迷はざるを得ざりける。曙姫、梅ケ香姫、佐倉姫らの女性は、いたつて強剛の態度をとり、眞澄姫、言靈姫にむかつて、

『斷じて美山彦一派の言に耳を傾けたまふべからず』

と進言したりけるに、二人はやや思案にくれつつありき。そこへまたもや國照姫、杵築姫、船木姫、廣若らの邪神現はれ來たり、二女にむかひて、

『如何にしても吾らの忠言を容れて諸神司を放逐し、龍山別以下の神人を採用せざるときは、災禍たちまちいたりて本城は大國彦の部下に亡ぼされ、言靈別命、大足彦は常世國の刑に處せられ、末代歸還さるべき機會なし。一時も早く吾らの言を容れて大改革を斷行されよ』

と前後左右より攻めよするをりしも、龍宮城の門外にはかに騒がしく、諸神司の歡呼の聲、鬨の聲、百雷の一時に轟くごとく聞こえきたりぬ。これは言靈別命が

神助の下に常世國に送らる❷中途において、従者言代別命に救はれ、一たん高白山の城主となり各地をひそかに巡視し、詳細なる偵察を了へて緑毛の大亀にうち乗り、大足彦とともに突然歸還したまひしなりき。

かくと知りたる美山彦、國照姫、杵築姫らの邪神は、たちまち周章狼狽して色をうしなひ、逃ぐるにも逃げ途なく、梟の夜食に外れし時のごとく面ふくらしながら二神司を迎へて、いやさうな、氣乗のせぬ聲にて、

『よくもお歸りありしぞ、マアマア御芽出度し』

と義理一遍の冷淡きはまる挨拶をのべ、早々わが居室に立ち去りにけり。

あまたの神司は、二神司の無事に歸還せられしを心底より欣喜にたへず、天を拝し、あるひは地を拝し、枯木に花の咲きしがごとく勇み立ちにける。二神司はまづ天の三柱の大神に無事の歸城を感謝し、ついで國治立命の神前に拝跪して神恩の深きに涙を流し、眞澄姫をはじめ留守中の諸神司に、永日の勞苦を謝しをはりて、蓮華臺上の聖地にのぼり、天神地祇、八百萬の神々に感謝の祝文を奏上し、衆に守られて城内深く休息したまひける。

ややあつて國照姫、杵築姫、廣若は二神司の前に現はれ、

『妾らは、常世城に捕はれ獄中に呻吟したまふことを悲しみ、同情の涙にたへず、よりて妾らは種々の手續きを求めて大國彦に歎願し、かつ常世彦のもとに必死的運動の結果、貴神司らは今日無事に歸還するを得たるは御承知のことならむ。神明の加護とはいひながら、その大部分は妾らが犠牲的大運動のたまものなれば、今後は妾らの忠言を容れて、大々的改革を斷行したまへ。この好機を逸する時は、地の高天原も龍宮城も、暗黒界と變ぜむこと明らかなり』

と喋々として述べ立つる。二神司は國照姫以下の邪神の、見えすきたる虚言にあきれて、言語も發し得ざりける。すなわち二神司は一旦ローマの戰ひに破れて捕はれたれど、神の佑助によつて中途に救はれ、言靈別命は一時高白山に隱れて時を待ち、それより不思議にも途中大足彦に會し相共に天下の諸山を歴視し、邪神の奸計を詳細に探求し還りたることを告げ、かつ國照姫、杵築姫らの言葉の事實に相反し、全然虚構なる旨を素破拔きたまひける。

國照姫以下の邪神らは、二神司の言を聞きて赤面するやと思ひの外、厚顔無恥

なる彼ら惡神は、少しの痛痒も感ぜざるごとき態度をよそほひ、かへつて二神司の言を虚言と言ひはなちつつ、なほも陰に陽に反抗的態度を持續し、あるひは大國彦の部神に通じ、あるひは常世姫とはかり、盛ンに地の高天原を顛覆せむと焦慮しつつ、表に善人の假面を被ぶり、暗々裡に反逆的活動を續けたりける。

（大正一〇・一二・七　舊一一・九　櫻井重雄録）

第四二章　常世會議〔一四二〕

美山彦、國照姫らの一派は暗々裡に大國彦に内通し、言靈別命以下を窮地におとしいれ、地の高天原を神退ひに退はむと、ここに玉の井の湖に一敗地にまみれ潰走したる牛雲別、蚊取別、蟹雲別を先導に、八十枉津なる朝觸、夕觸、日觸、言觸らをして數百萬の探女を天の下四方の國々のこる隈なく配置し、もつて言靈別命、大足彦の惡評を宣傳せしめ、蠑螈別、播磨別らの應援をえて各山各地の八

王神を籠絡せしめたり。八王神、八頭神はつひに彼らの奸策におちいり、漸次言靈別命に反抗の態度をとり、各山各地の八王八頭を常世城に召集し、十二柱の八王八頭を八王大神の部下に附屬せしめむとし、一大團結力をつくつて地の高天原なる大八洲彦命を排除せむことを鳩首謀議し八王八頭の贊成をえたりける。大八洲彦命はこの形勢を見て事態容易ならずとし、ここに八島彦、加賀彦、陸奥彦を使者として常世國に遣はし、一たん神界にて定められたる天使長の管轄をはなれ、自由に八王八頭の連合團體を造り、大神の制定を破るは、天則違反のもつとも甚だしきものたることを極力言明せしめたり。

されど最早常世彦は、世界の八王八頭をほとんど惡辣なる手段をもつて言向け從へたる勢にまかせ、天使長大八洲彦命の宣示を馬耳東風と聞き流し、自由權利論を強調して八島彦、加賀彦、陸奥彦らの使者を侮蔑し、かつ全地上の國魂の一致の決議をいまさら改變するは、道理に於て宥すべからざる惡逆無道の處置なり、と一言に【はね】付けたり。使者はほとんど取りつく島も泣き寝入り、波にとられた沖の舟、悄然として歸城したりける。

その中にも萬壽山の八王神磐樟彦の一派と、天山の八王神齋代彦の一派の神司は、天則を重ンじ苦節を守り、四面楚歌の中に卓立して、上下一致よく永遠に神政を支持しつつありき。

かくして地の高天原において神定めたまひし十二の八王神は、十王女まで八頭八尾の憑依せる常世彦のために併呑されをはりぬ。手撫土（艮の金神）、足撫土（坤の金神）のひそかに守りたまへる十二の寶座は、すでに十座までも失はれける。十二個の黄金水の玉を竹熊のために、十個まで占奪されたると同様の惨事なり。八王大神は勝に乗じて、なほもこの殘りの二王をその幕下たらしめむとして、あらゆる奸策を施したれど、この八乙女のみは、國大立命のために難を免れたりけり。

この次第は後日に詳しく口述すべし。ある古書に載せたる八乙女といへるは即ち八王と女神の意義なりといふ。

（大正一〇・一二・八　舊一一・一〇　谷村眞友録）

第四三章　配所の月〔一四三〕

八王大神常世彦は十王、十頭の神司を操縦し、あまたの魔軍とともに數百千の磐船に乗り、天空をかすめて黄金橋の上空を襲ひ、數百千萬とも數限りなき火彈を投下し、かつ進ンで龍宮城およびエルサレムの上に進撃しきたり、ここにも多數の火彈毒彈などを、雨霰のごとくに投げつけたり。大八洲彦命、神國別命、大足彦、八島別は城内の神將神卒を指揮しつつ盛ンに防戰に努めける。龍宮城よりも數多の磐樟船を飛ばして大いに敵軍を惱ませたるが、しかも一勝一敗を繰返しつつ戰ひ久しきにわたり、龍宮城の神軍は日夜にその數を減じ、ほとんど孤城落日無援の窮地に陥りにけり。

大八洲彦命は、もはや如何に神明の加護と神智を揮ひ神算鬼謀の祕術を盡すといへども、到底勝算なきを看破し、百計ここにつきて、つひに國祖の御前に拜跪し、天の眞澄の鏡をもつて敵軍を防がむことを奏請したりけるに、國祖はおほいに怒りたまひ、

『汝らは天地の律法をもつて何ゆゑに敵を言向和し悔改めしめざるや、進退これ谷まりたりとて、いやしくも天地の律法を制定され、世界を至善の道をもつて教化すべき天使の職掌を拜しながら、敵の暴力に酬ゆるに暴力をもつて對抗せむとするは、天使長より神聖なる律法を破るものにして、これに過ぎたる罪科は非ざるなり。あくまでも忍耐に忍耐を重ねて、至誠一貫もつて極悪無道の人物を心底より悔改めしめ、天則の犯すべからざるを自覺せしむべし。これ善一筋の誠の教なれば、たとへ如何なる難局に立つとも斷じて眞澄の玉は使用すべからず。かつ、その玉は稚櫻姫命幽界に持ちゆきたる淨玻璃の神鏡となりたれば、これを戰鬪のために使用すべきものに非ず。汝らは神の力を信じ、至誠を天地に一貫し、もつて天津神の御照覽にあづかるをもつて主旨とし、暴惡無道の敵軍に暴力をもつて戰ふを止めよ。眞の神の心は宇宙萬有一切を平等に愛護す。ゆゑに大神の眼よりは一視同仁にして、いたづらに爭鬪を事とするは神慮に背反するものなり。斷じて武力に訴へなどして解決を急ぐなかれ。何事も天命の然らしむるところにして、惟神の攝理なり。ただただ汝らは、天使たるの聖職に省みて廣く萬物を愛し、敵

を憎まず、彼らの爲すがままに放任せよ』
との嚴命なりける。
天使長大八洲彦命は、各天使を地の高天原にあつめて神勅を報告し、かつ最高會議は開かれたり。天空には敵の磐船雲霞の如く襲來し、頭上に火彈を雨下し、會議の席上にも火彈飛びきたりて神人を傷つけ、暗雲天地をこめて咫尺を辨ぜざるにいたる。されど國祖の神勅は大地よりも重く、その命は儼乎として動かすべからず。さりとて神命を奉ぜむか、味方の敗亡は火をみるよりも明白なる事實なり。萬一神命に背反せむか、天則破壞の罪科を犯さむ。アヽ善の道ほど辛きものはなし、と諸神司は思案にくれ、溜息吐息の態なりける。
龍宮城内よりは美山彦、國照姫、杵築姫、龍山別らの一派は、平素の目的を達するは今この時と、内外相應じて八王大神の魔軍に應援し、味方は四分五裂の状勢におちいり收拾すべからず、進退いよいよ谷まりたる天使長大八洲彦命以下の天使神將は、やむをえず大神の禁を破つて破軍の劍を拔き放ち、寄せくる空中の敵軍目がけて打ち振るやいなや、劍の尖より不思議の神光あらはれ、天地四方に

雷鳴電光おこり、疾風吹き荒び雨の降るがごとく、数百千の磐船は一隻も残らず地上に墜落し、敵軍の大半はほとんど滅亡したりける。

さしも猛烈なる敵の魔軍も、大八洲彦命以下の神司らの犠牲的英断と破軍の剣の威徳をもつて、もろくも潰滅したりける。敵の逃げ去りたる跡の地の高天原および龍宮城は、あたかも大洪水の引きたる跡のごとく、大火の跡のごとき惨澹たる光景なりき。折しも大風吹きすさび強雨降りそそぎて、すべての汚穢物は惟神的に吹き散らされ、大雨洪水となりて大海に流れ去り、ふたたび清浄なる聖地聖城とはなりにける。

ここに美山彦、國照姫の一派は、國治立命の御前にすすみいでて、

『このたびの大八洲彦命以下の天使神將は、嚴格なる大神の神勅を無視し、嚴禁を犯して破軍の劍を採り出し、寄せきたる數多の敵軍をさんざんに攻めくるしめ、暴力のあらむ限りをつくし、優勝劣敗弱肉強食の戰法を使用し、廣く萬物を愛し敵を憎まず、善一筋の誠をもつて言向和さず、かつ「殺す勿れ」の律法を無視したる惡逆無道の罪、斷じて宥すべからず。希はくば、かれ天使長以下の職を解き、

地の高天原を追放し、嚴格なる天地の律法を犯されざるやう、何分の御處置を下されむことを願ひたてまつる』

と頭をそろへ律法を楯に、うやうやしく奏上したりける。

地上靈界の主權者に坐します國祖の大神も、律法を守り天地の綱紀を保持するの必要上、いかにやむを得ざる情實のためとはいへ、天地の神の定めたる禁を犯したる以上は、これを不問に附することあたはざる破目に陥りたまひ、呑劍斷腸の思ひを心中に祕め、涙を隱して斷然意を決したまひ、大八洲彦命、言靈別命、神國別命、大足彦の四天使を召して儼然たる態度のもとに、地の高天原と龍宮城を退去すべく宣示し給ひける。この四天使らは、稚櫻姫命の到りませる幽廳の神と左遷さるる規定なりけるが、貞操なる眞澄姫、言靈姫、龍世姫らの歎願哀訴により、大神はその情をくみ給ひて、その罪を赦し、萬壽山の城に蟄居を命ぜられ、四神將はここに配所の月をながめて、いくばくかの星霜を送りたまひける。

この四神將は元來國大立之命、天神の命を奉じて大海原の國を知食すべく、その精靈魂を分ちて神界の守護に當らせたまひしものにして、

大八洲彦命は【和魂】であり
言霊別命は【幸魂】であり
また、
大足彦命は【荒魂】であり
神國別命は【奇魂】である。
ア、天使長以下三天使の重なる神司の退却されし後の地の高天原および龍宮城の形勢は、いかにして治まり行くならむ乎。
（大正一〇・一二・八　舊一一・一〇　近藤貞二録）
（第三七章～第四三章　昭和一〇・一・一八　宮崎市神田橋旅館　王仁校正）

第一一篇　新規蒔直し

第四四章　可賀天下〔一四四〕

大八洲彦命以下天使の聖地退去ののちは、國治立命の奏請により、天上より高照姫命を降したまひて、これを地の高天原の宰相神に任じ、天使長の聖職に就かしめ、眞澄姫、言靈姫、龍世姫をして天使の聖職につかしめたまひぬ。ここに女神司四柱相竝びて神務と神政に奉仕することとなり、神々の心氣を新にすることを得たりけり。

一たん常世彦の威力に壓せられ、八王聯盟に加はりゐたる諸天使は、八頭神を引連れ八王大神に背きてふたたび高照姫命の幕下となり、前非を悔い、ここに目出度く歸順することとなり、聖地の神政はまつたく復活することを得たりき。天使長高照姫命は國治立命の神命を奉じ、八王八頭を率ゐて、天地の律法をあまねく地上の世界に宣傳し、一時は飛ぶ鳥もおとすばかりの大勢力にして、世界の各山各所には天津祝詞の聲充滿し、神人動植物はことごとくその堵に安んじ、實に天下は泰平に治まり、邪神はおのおの影をひそめ國土安穩にして、天日いよいよ

照り輝き、月光澄みわたり蒼空一點の妖氣なく、實に完全無缺の神世を現出せしめたれば、世界の神人こぞつて可賀天下と賞揚するの聖代とはなりける。

龍宮城に雲をしのぎて聳立せる、三重の金殿より顯國の御玉の神靈發動して、唸りを發し、ときどき不可思議なる光輝を發射して邪惡神の面を照らしたまへば、地の高天原の聖地も龍宮城の聖城も、日ましに神威靈德くははり、金色の鴉、銀色の神鳩嬉々として中空に舞ひ遊び、天男天女はつねに四邊を圍繞して太平の音樂を奏し、五風十雨順をたがへず、禾穀豐穰して神人その業を樂しみ、神界理想の黄金世界を現出するにいたり、遠近の邪神も靜謐歸順をよそほひ、野心を深く包みて現實的暴動を慎み、天下一點の妖雲を見ざる瑞祥の世とはなりにける。これは萬壽山に退去されし前天使長以下の日夜の專念的祈念の力によりて、その精靈體に活動をおこし、聖地聖域の靈德を發輝したまひしが故なり。されど天使長高照姫命以下の三天使をはじめ神將神卒にいたるまで、須佐之男大神の晝夜の御守護の賜たることを少しも覺らず、天運の循環と、新天使以下の神務と神政の完全無缺にして、天地神明の神慮にかなひ奉れる結果ならむと、心おごりて、顯國

の御玉の守護と、大八洲彦命以下の専心祈念の賜たることを忘却し、つひには女神司のあさはかにも驕慢心増長し、その結果は天地の律法まで輕視するにいたり、神徳日々に衰へ各所に不平不滿の聲おこり、漸次日を追ひ月を重ぬるとともに、可賀天下の神政を呪ふ神々勃發するの形勢を馴致したりける。

ここに一旦鉾をおさめ歸順をよそほひゐたる八王大神常世彦は、常世姫と再擧をくはだて、大國彦と計り、世界各所の八王八頭に、八頭八尾の大蛇の靈魂を憑依せしめ、その女神司には金毛九尾の惡狐の靈を憑依せしめ、部下の神司には六面八臂の邪鬼や眷屬を憑依せしめて、俄に反逆心を發せしめたり。世界の神人はまたもや一時に起つて、地の高天原の神政に反抗的態度をあらはし、あまたの神人魔軍と變じて、八王大神指揮のもとに、まづ諸山の神軍を降し、勝に乘じて聖地にむかひ、天の磐船を數百千とも限りなく建造して天空を翔り、群をなして攻めよせ來りぬ。天使長高照姫命は周章狼狽の結果、神勅を請ふのいとまなく、ただちに數百隻の天の鳥船を造り、橄欖山より敵にむかつて攻入り、蒼空高く一大激戰を開始し、一勝一敗たがひに雌雄を爭ひ、ふたたび聖地は紛亂の巷と化し去

りにける。空中の戰ひは夜を日につぎほとンど一年有餘を費やしたり。國祖國治立命はまたもや神勅を降し、

『天地の律法を遵奉し決して暴力をもつて戰ふべからず。大慈大悲の親心をもつて敵を言向和はせ、善一つの大道に教へ導くべし』

と嚴命されたれども、高照姫命、眞澄姫、言靈姫、龍世姫は、

『今日の場合かかる緩漫なる方法をもつて敵を改心せしめむとするは、實に無謀迂遠の策にして到底寸效なかるべし。いたづらに宋襄の仁を施しかへつて敵に乘ぜられ、噬臍の悔を後日にのこさむよりは、強暴にたいするに強暴をもつてし、我らの實力を示して敵を全滅せしめ、後難を絶つに如かず。いかに國祖の神命なればとて、危急存亡の場合、實力なき天地の律法をふりかざして、なんの效をか爲さむや。神勅は、われらは努めて遵奉せざるべからずといへども、それは時と位置とに關して行ふべきものなり。急場の用に立つべきものにあらず』

と四柱の天使はきはめて強硬なる態度を持し、神勅を鼻の先にてあしらひゐたりけり。

時しも敵はますます進ンで聖地の上空に雲霞のごとく飛びきたり、天の三柱宮の上に火彈を無數に投げつけたれば、たちまち黒煙濛々として立ちのぼり、さしも莊嚴を極めたるエルサレムの大神殿もたちまち烏有に歸したり。時しも火焔の中より巨大なる神將あらはれ、味方の鳥船にうち乘り敵の神將醜原別にむかつて衝突を試みたりければ、醜原別はもろくも打ち落され、火焔の中につつまれ苦悶の結果つひに燒死したりける。味方の神將神卒は手を打ちてよろこび、快哉を叫びしが、その聲天地も動ぐばかりなり。言靈姫は又もや破軍の劍を拔放ち、敵の魔軍にむかつて前後左右に空中目がけて打ち振りしにぞ、寶劍の威德ただちに現はれたまひて、敵の將卒は雨のごとく地上に落下し、あるひは火焔の中に墜落して黒焦となり滅亡したり。敵軍の將卒は不意を打たれて一敗地にまみれ、命からがら西天をかすめて遠く姿を沒しける。東北の強風突如として吹きおこり聖地聖城を倒潰し、動植物の被害は目もあてられぬ悲慘なる光景となりければ、眞澄姫、龍世姫はおほいに驚き、

『妄ら神勅違反の行動を執りたるを大神の赫怒したまひて、かくのごとく災害の

頻發するならむ』

と、天地に拜跪して謝罪し天津祝詞を一生懸命に奏上したれども、東北の風はますます強烈となり、洪水氾濫してつひには龍宮城も水中に沒せむとするに到れり。聖地聖城の神將神卒は、今さらのごとく一齊に天地に拜跪して救助を祈り神言を奏上したれども、天地の怒りは容易に解けず、祝詞を奏上すればするほど風勢は刻々に猛烈の度をくはへ、雨はいよいよ繁く降りきたり、雷鳴は天柱くじけ、地維裂くるかと疑ふばかりの大音響すさまじく轟きわたり、電光ひらめきわたりて眼を開くあたはず、神人らの面色は土色と變じ、息をこらして地上に平伏するのみなりける。

（大正一〇・一二・八　舊一一・一〇　栗原七藏録）

第四五章　猿猴と澁柿〔一四五〕

天使長高照姫命以下の女天使は、天地の激怒に狼狽し、ほとんど爲すところを知らず、部下の神司らは殘らず驚きのあまり右往左往に逃げまはり、或ひはつまづき或ひは失神し、【とかげ】の缺伸したるごとき怪しき顔にて呆れ仰天するもあり、石龜の酒壺におちいりて溺れし時のごとき顔付にて、じつに見るも滑稽至極のいたりなりける。

雷鳴は容易にやまざるのみならず、ますます激烈に鳴りとどろき、東北の強風しきりに吹き荒み、暗雲天地に閉してすさまじく、常夜の暗のごとく神人戰慄し、禽獸蟲族にいたるまで、いづれも地に俯伏して息をも發せざるの慘狀を現出したるぞ畏こけれ。また四柱の女天使は自我心もつとも強くして、神命さへも抗拒し律法を破りたれば、天地の大神の怒りに觸れ、かかる混亂狀態に陷りたるぞ是非なき次第なりけり。

待ちまうけたる常世姫の部下、國照姫、杵築姫は、平素の願望を成就するはこの時を逸すべからずとし、國治立命の奥殿に參向し、高照姫命以下の女天使らの神勅を無視し、律法に違反せる罪科を詳細に陳述し、すみやかに四柱の女天使の

職を免じ、聖地聖城を追放されたしと進言したり。神明に依怙なし、大神は天地の律法に対し、情に訴へて四天使を赦すわけにもゆかず、つひに涙をのンで四人の聖職を免じ、かつ四人に対し、改心のためとてエデンの園に籠居を厳命したまひける。

四天使は神命と律法にたいしては抗辨するの餘地なく、唯々として厳命を拜受し、命のまにまにエデンの園に籠居の憂目を味はふの止むなきに立いたりけり。

四天使の追放とともに、さしも激烈なりし雷鳴も、凄じかりし電火も、烈風強雨も、たちまち鎭まりて清澄なる天地と化し、宇宙は夢の醒めたるごとき光景となりにける。

エデンの園は、東北西の三方青山をもつて圍まれ、南方のみ廣く展開して一條の大川清く流れ、自然の城壁を造られあり。四人はこの一定の場所に押込められ、草木の實を食用に供しつつ樂からぬ光陰を送りけり。

エデンの園は、かつて邪神の棟梁竹熊の割據せし所にして、鬼熊のために占領せられしが、鬼熊、鬼姫の沒落後まつたく龍宮城の管下になりゐたりしところな

り。
因に、高照姫命は金勝要の神の【和魂】であり、
眞澄姫命は【幸魂】であり、
言靈姫命は【荒魂】であり、
龍世姫命は【奇魂】である。
今まで四魂合一して、神業に奉仕されつつありしが、自我心の強烈なりしために、聖地聖城を追放され、さびしき配所の月に心を慰め、時を待ちたまふの止むをえざるに立いたりしは實に殘念のいたりなりける。これについても愼むべきは、自我心と驕慢心なれ。神諭の各所に、
『金勝要之神もあまり自我心が強かつたゆゑに、狹い處へ押込められなさつたぞよ』
とあるも、この消息を漏らされたるなり。
しかるに金勝要の神は、一旦大地神界の根神とまでなりたまひしに、自我心の頑強なりしため、エデンの園に押こめられ、なほも自我を頑強に張りしため、つ

ひには地底の醜めき穢なき國に墜落し、三千年の辛苦をなめたまふに至りしなり。

美山彦、國照姫の一派は、時運の到來をよろこびつつ、かならずや後繼の天使長は、常世彦に新任され、自分らの一派は天使の聖職を命ぜらるるものと期待し、肩を怒らし鼻をうごめかし、得意頂點に達し、その吉報を今か、いまかと指をり數へて樂しみ待ちゐたりける。

しかるに豈計らむや、後繼の神司は常世彦一派に下らずして、天上より降りきたれる金神の首領なる澤田彦命の一派に降りける。澤田彦命は一名大將軍と諸神將より賞揚されつつありし英雄神におはせり。

常世彦の一派は、案に相違し、猿猴が澁柿を口一杯に含みしごとく、頬をふくらせ澁面を造りながら、悄然として引下がりたるその狀、見るも氣の毒なる次第なりける。

ここに國治立命は澤田彦命を天使長に任じ、妻澤田姫命を輔佐神司となし、眞心彦を天使に任じ、妻の事足姫をして神務を輔佐せしめたまひける。

また澤田彦命の從臣に、八雲彦、八雲姫の夫婦ありしが拔擢されて用ひられ、

また眞心彦には國比古、國比女の夫婦および百照彦を從臣として奉仕せしめられたり。

百照彦は、眞心彦のもつとも寵愛深かりし者にして、眞心彦は霜の朝、月の夕に無聊を晴らすためと、百照彦を居室に招き、種々の面白き物語を聞きて心の勞を慰めゐたり。百照彦は、いかにして主の心勞を慰安せむかと常に焦慮しゐたれども、主の機嫌とるべき物語も、もはや種絶れとなりにける。

いかにせば良からむやと我が居間に端座し、雙手を組みて吐息をもらし、思案に沈みてゐたるを、妻なる春子姫は夫の近ごろの様子をうかがひ、夫には何か一大事の出來し、それがために朝夕苦慮をめぐらしたまふならむかと、心も心ならず、思ひきりて夫にむかひ言ふやう、

『近ごろの夫の様子を伺ひまつるに、よほど御心痛のていに見受けたてまつる。天地の間にかけがへなき水ももらさぬ夫婦のあひだに、なにの遠慮懸念のあるべきぞ、苦樂を共にすべき偕老同穴の契を結びたる妻に、心の苦衷を隱したまふは、實に冷酷無慈悲の御仕打ち、妾はこれを恨みまつる』

と涙片手に口説き立つれば、百照彦はやうやく口を開き、

『吾は主の仁慈と恩徳の深きに晝夜感謝の念を断たず。しかるに主眞心彦は神務の繁忙に心身を疲労し、日をおひて身體やつれ弱らせたまふを見るにつけ、從臣の身として、これを對岸の火災視するあたはず、いかにもして主の御心を慰め奉らむと日々御側に侍し、神務の閑暇には面白き四方山の物語を御聞に達し、御心を幾分か慰め奉りきたりしに、もはや吾はめづらしき物語もつきたれば、今後はいかにして御心を慰め奉らむと、とつおいつ思案にくるるなり』

と語りて太き吐息をつく。春子姫は何事か期するところあるもののごとく、夫にむかひ笑顔をたたへ見せゐたりけり。

（大正一〇・一二・九　舊一一・一一　加藤明子録）

第四六章　探湯の神事〔一四六〕

百照彦は默然として春子姫の面色を打見やりつつありしが、たちまち膝を前めて、
『汝の愉快にみちしその容貌、たしかに妙案あらむ、はやく吾がためにその妙案を物語れよ』
と顔色に光をあらはし勢よく問ひければ、春子姫はこたへていふ、
『妾は元來藝無し猿の不束者なれども、ここに一つの隱れたる藝能あり。そは天人の舞曲にして、天上において諸神の讃歎やまざりし、妾が獨特の藝能なり。妾もし夫の許しを得ば、夫とともに眞心彦の御前において一曲を演じまつらば、かならず歡ばせたまはむ』
と得意滿面にあふれて勇ましげに言ふ。百照彦はおほいに驚きて、
『ア、汝は何時のまにか、かかる藝能を覺えたるか』
と尋ぬれば、春子姫は、
『妾は貴下のもとに娶らるるまで、高天原の神殿に奉仕し、日夜舞曲を奏し、神歌をうたひ、大神の神慮を慰め奉る聖職に奉仕せしが、その技はつひに神に入り、

妙に達して、天上における第一位の藝能者として、もてはやされしが、このたび地の高天原の改革につき、貴下は眞心彦とともに赴任さるるに際し、大神の命によりて貴下の妻と定められたり。されど、貴下は大神の御心のあるところを毫も知りたまはず、ただ單に自ら選びて妾を妻に娶りしごとく思召したまへども、夫婦の縁は決して獨自の意志のごとくになるべきものに非ず。いづれも大神の御許しありての上の神議りのことなれば、夫婦の道は決して輕忽に附すべきものにあらず。いづれも皆夫婦たるべき靈魂の因縁ありて、神界より授けらるるものなり』と天地の因果を説き示し、夫婦の道は神聖にして犯すべからざる理由を諄々として説き立たり。

百照彦は初めて妻の素性を知り、かつ神律の重ンずべきを深く感得したりしが、百照彦はさらに妻にむかひ、

『汝はさほどの藝能を有しながら、現在夫たる吾に今日まで何故に告げざりしや』と怪しみ問ふを、春子姫はこたへて、

『妾は貴下の妻となりし上は、妻たるの務めを全うせば足る。いたづらに藝能に

驕り慢心に長じ、つひには夫を眼下に見下すごときことありては、天地の律法を破る大罪なれば、夢にも藝能を鼻にかけ不貞の妻と笑はるるなかれとの、父母の固き教訓なれば、今日まで何事もつつしみて、一度も口外せざりし次第なれども、今日夫の辛勞を傍觀するに忍びず、この時こそは妾が得意の藝能を輝かし、夫を輔佐し奉らむと決意したる次第なり。諺にも藝は身を助くるとかや、妾の身は何れになるも問ふところにあらざれども、現在の大切なる夫の神業を助け、なほ殊恩ある主の御神慮を慰め奉ることを得ば、妾が鍛錬したる藝能の功も、はじめて光を發するものなれば、女性の差出口、夫にたいして僭越至極の所爲とは存じながら、夫を思ふ一念にかられて、はづかしながら妾の隱し藝を知れることをふと申上げたるなり』

と夫の前に兩手をつき、敬虔の態度をあらはし物語りたり。

ここに百照彦は妻を伴なひ、主眞心彦の館に參向し、春子姫の藝能のすぐれたることを進言したりけるに、命はたちまち顏色をやはらげ、さも愉快氣に、

『天地神明の神慮を慰め、萬物を歡ばしむるの道は歌舞音樂に如くものはなし。

幸ひにも春子姫藝術に妙をえたるは何よりの重寶なり。一度吾がために一曲を演ぜよ』

と言葉もいそいそと所望したりける。

百照彦は主の愉快さうなる顔色を見て、やつと安堵せしものの如く胸をなでて笑聲を作りける。

春子姫は、會心の笑みをもらしながら、舞衣に着替へ長袖しとやかに舞ひはじめしが、實に春子姫の言へるごとく、その技、妙に達し神に入り、天地神明の嘉賞したまふも當然なるべしと、眞心彦をはじめ百照彦もただ感にうたれて恍惚たる有様なりける。その妙技の非凡なるを傳へ聞きて、大將軍澤田彦命まで臨席せられ、眞心彦にむかひて、

『貴下は實に良き從臣を持たせらる。吾は羨望の念にたへず』

と言ひながら、その妙技に首を傾けて觀覽したまひける。百照彦、春子姫はおほいに面目を施し、主の賞詞をうれしく拜受して厚く禮を述べ、吾が館に歸りただちに神前に神酒を奉獻して、感謝の祝詞を奏上したりける。

それより天使眞心彦は、春子姫の舞曲の優雅なると、その神格の高尚なるとに心をとろかし、一にも春子姫の舞曲、二にも姫の音調と、事あるごとに二人を招き酒宴をもよほし、つひには神務を捨てて絲竹管絃の道にのみ耽溺し、眞心彦と春子姫の間に面白からぬ風評さへ立つにいたりける。

眞心彦は元來仁慈の念ふかく、かつ多情多感の神司なりけり。それゆゑ外部の風評を耳にするや、春子姫にたいする同情の念は日をおうて昂まり、惡しき風評はますます油の浸潤するがごとき勢にて内外に擴まりにけり。

このことたちまち國治立命の耳に入りたるより、命はただちに眞心彦を召しだして嚴しく不義の行爲の有無を詰問されたりしが、眞心彦は首を左右にふり、

『吾いやしくも聖地の重神司として、天使の職を忝なうし、天地の律法を宣傳すべき聖職にあり。いかでか斯かる忌はしき行爲を敢てせむや。天津神國津神も、吾が心身の潔白を照鑑ありて、わが着せられし濡衣を干させたまへ』

と一心不亂に祈願を凝らしたり。そのとき春子姫は突然身體激動して憑神狀態となりぬ。これは稚櫻姫命の降臨なりける。命は教へ諭していはく、

『よろしく探湯の神事をおこなひ、その虚實を試みよ。神界にてはこの正邪と虚實は判明せり。されど地上の諸神人は、疑惑の念深くして心魂濁りをれば、容易に疑ひを晴らすの道なし。ゆゑに探湯の神事を行なひ、もつて身の疑ひをはらすべし。正しきものは、神徳を與へてこれを保護すべければ、いかなる熱湯の中に手を投ずるとも、少しの火傷をもなさざるべし。これに反して、汚れたる行爲ありし時は、たちまちにして手に大火傷をなし、汝の手はただちに破れただれて大苦痛を覺ゆべし』

と宣示されたり。

眞心彦は、喜びて頓首したまひ、ただちに探湯の神事に取かかりけり。八百萬の神人はその虚實を試すべく探湯の齋場に垣をつくり片唾をのンで見ゐたりしが、沸きかへる熱湯の中に、怖ぢず臆せず、眞心彦は天津神國津神にむかつて祈願し、泰然自若として手を浸し入れたり。つづいて春子姫も同じく手を浸し、久しきにわたるといへども、二人ともに何の火傷もなく、ここに二人の疑ひはまつたく拂拭されにける。二人は天地にむかいて神恩の有難きを謝し、慟哭やや久しうしぬ。

八百萬の神人は一齊に手をうつて、二人の潔白を賞讃したりける。國治立命は、二人の清淨無垢の心性を賞し、かつ種々のありがたき言葉を賜ひ、かつ今後は神祭のほか斷じて舞曲に耽溺し、絲竹管絃にのみ心を奪はれ、神務を忘却するごとき不心得あるべからず、と嚴しく教へ諭したまひ、悠然として奥殿に入らせたまひける。

眞心彦は大いに愧ぢ、

『我は大いに過てり。我が惡しき風評の高まりたるは、わが不德の致すところなり。聖地の重臣として、いかで他人に臨み得むや』

と直ちに國治立命の御前にいたり、天使の聖職を弊履を捨つるがごとく辭したりにけり。

（大正一〇・一二・九　舊一一・一一　外山豐二録）

第四七章　夫婦の大道〔一四七〕

眞心彦は職を辭し、固く門戸を閉ざして他人との接見を斷ち、謹愼の意を表しつつありしが、つひにはその精神に異状を呈し、一閒に入りて、ひそかに短刀を拔きはなち、

『惟神靈幸倍坐世』

と神語を唱へ自刃して歸幽したりける。妻事足姫をはじめ、長子廣宗彦、次子行成彦の悲歎と驚きはたとふるにものなく、七日七夜は蚊の泣くごとくなりけり。八百萬の神人も涙の雨に袖をしぼらぬはなく、同情の念はことごとく清廉潔白なる眞心彦の御魂に集まりぬ。八百萬の神人は命の生前の勳功を賞揚し、長子廣宗彦をして、父の後を襲ぐべく神司らは一致して、國治立命に願ひ出でたり。

ここに廣宗彦は仁慈をもつて下萬民に臨みければ、神界現界は實に無事泰平に治まり、したがつて國治立命の神世を謳歌する聲は六合に轟きわたりたり。國治立命をはじめ、地の高天原の神人の威勢は旭日昇天のごとく隆々として四海を壓するにいたり、開闢以來かくのごとくよく治まりし神世は空前絶後の聖代と稱せられける。要するに、清廉にして無欲、かつ仁慈深き眞心彦の血を享け繼ぎたる

廣宗彦の經綸よろしきを得たる結果なるべし。

ここに眞心彦の未亡人なる事足姫は、夫の心を察せず、數年を經てつひに夫の恩德を忘れ、春永彦といふ後の夫をもち、夫婦のあひだに桃上彦といふ一柱の男子を生みけり。桃上彦はまた仁慈ふかく下の神人をあはれみ、かつ上にたいして忠實至誠の實をあげ、衆の評判も非常に好かりけるより、兄の廣宗彦はおほいに歡び、自分の副役として神務を輔佐せしめたり。

然るに星移り月を閲するにしたがひ、最初きはめて善良なる性質の桃上彦も、つひに常世國の魔神にその心魂を誑惑せられ、漸次惡化邪遷して體主靈從の行動をなし、上位の命を奉ぜず、他神人の迷惑も心頭におかず、自己本位を旨とし、驕慢心日々に增長して、つひには兄の地位を奪ひ、みづから天使の位置に昇り、神政の全權を掌握せむと計り、ひたすら下萬民の望みを一身に集中することのみに碎心焦慮したりけり。それゆゑ下萬民の桃上彦にたいする勢望は一時は非常なるものにてありき。つひに桃上彦は兄を排斥し、みづからその地位につき仁政を世界に布き、大いに神政のために心身を傾注しける。下々の神人も最初はその仁

政を口をきはめて謳歌しつつありしが、つひにはその恩になれて餘りに有りがたく思はざるにいたり、放縱安逸の生活をのみ企て、天地の律法をもつて無用の長物と貶するにいたり、聖地の重なる神司も侍者も漸次聖地を離れて四方に各自思ひおもひの方面に散亂したり。而して桃上彦にむかいて忠告を與ふる神人あらば怒つてこれを排除し、かつ罪におとしいれ、亂暴狼藉いたらざるなく、瞬くうちに聖地は冬の木草のごとき荒涼たる状況となり了りける。これぞ常世彦、常世姫があまたの邪神を使役して、神政を紊亂せしめ、國治立命を漸次排除する前提として、大樹を伐らむとせば先づその枝を伐るの戦法を用ゐたるゆゑなり。國治立命は枝葉をきられた大樹のごとく、手足をもぎとられし蟹のごとく、二進も三進もならざるやうに仕むけられたまひて、神の權威はまつたく地に落ちにける。これぞ體主靈從の大原因となり、天地の律法は根底より破壞さるるの状態を馴致したるなりき。

事足姫は、空閨の淋しさに忍びきれず、婦女のもつとも大切なる貞節を破り、後の夫をもちて夫の靈にたいし無禮を加へたるごとき、體主靈從の精神より生れ

いでたる桃上彦なりければ、最初の間はきはめて身、魂ともに圓滿清朗にして、申分なき至誠の神人なりしかども、母の天則を破りたる、不貞の水火の凝結したる胎内を借りて出生したる結果、つひにはその本性あらはれ、放縱驕慢の精神萌芽せむとする、その間隙に乘じて邪神の容器と不知不識のあひだに化りかはり、つひには分外の大野心をおこし、あたら大神の苦辛して修理固成されたる天地の大經綸を、根底より破滅顛覆せしむるにいたりける。神諭に、

『世の亂れる原因は、夫婦の道からであるぞよ』

と示されあるごとく、夫婦の道ほど大切なもの又と外になかるべし。國家を亡ぼすも、一家を破るも、一身を害ふも、みな天地の律法に定められたる夫婦の大道を踏みあやまるよりきたるところの災なり。神界の神々は申すもさらなり、地上の人類は神に次ぐところの結構なる身魂なるを知りて、第一に夫婦の關係に注意すべきものなり。

かくのごとく事足姫の脱線的不倫の行爲より、ひいてはその兒の精神に大なる影響をおよぼし、つひには神界も混亂紛糾の極に達し、現界の人類にいたるまで、

この罪悪に感染し、現代のごとく邪悪無道の社會を現出するに立いたりたるなり。

これを思へば神人ともに、體主靈從の心行を改め、根本より身魂の立替立直しに全力をささげ、靈主體從の天授の大精神に立かへり、神の御子たるの天職を奉仕し、毫末といへども體主靈從に墮するがごときことなきやう、たがひに愼み、天地の律法を堅く守らざるべからざるを強く深く感ずる次第なり。

天地の律法を破りて、自由行動を取りたる二神人の子と生れたる桃上彦が、大なる野心を起しその目的を達せむため、下の神人にたいして人望を買はむとし、八方美人主義を發揮したるために、かへつて下々の神人より輕侮せられ、愚弄され、綱紀は弛緩し、上の命ずるところ下これを用ゐざる不規則きはまる社會を現出せしめたるなり。神界にては桃上彦を大曲津神と呼ばるるにいたりける。神諭に、

『慢神と誤解と夫婦の道と欲ほど恐いものは無い』

と示されたるとほり、桃上彦の失敗を處世上の手本として、神人ともに日々の行動を愼み、天授の精魂を汚さざるやう努力せざるべからず。また桃上彦は八十猛

彦、百猛彦を殊のほか寵愛し、兩人を頤使してますます野心をたくましうし、神政をもち荒したる結果は、現界にもその影響波及し、持ちも降しもならぬ澆季の世を招來したりしなり。

（大正一〇・一二・九　舊一一・一一　谷村眞友録）

（第四四章～第四七章　昭和一〇・一・一八　於宮崎市神田橋旅館　王仁校正）

第四八章　常夜の闇〔一四八〕

眞心彦の歸幽されし後は、その從者たる國比古の行動一變し、廣宗彦の命を奉ぜず、利己的に何事も振舞ひ、いたづらに權力をふるひ、事足姫を輕蔑し、自由行動をとりて神人を籠絡し、つひに神界の混亂を來たさしめたるも、國比古の行爲の不正なるに基因するもの多大なりけり。

この國比古と國比女夫婦のあひだに眞道知彦、大森雪成彦、梅ケ香彦の三柱の

男子生れたり。この三人は、兩親に似合ぬきはめて嚴正にして、智仁勇兼備至誠の神人なりける。三人は、父母の不忠不義の行動を改めしめむと、交るがはる涙をふるいて道法禮節を説き、幾度となく諫言したれど、父母は吾が子の諫言には少しも耳を傾けむとはなさざりける。

三人は是非なく、父母の發菩提心を待つのやむを得ざるを覺り、五六七神政の時まで善道を修め、天則を遵守し、二度目の岩戸開きの神業に奉仕し、拔群の功名手柄を顯はし、國治立命の大神業を輔翼し、もつて父母の罪を償はむと、古き神代の昔より現今にいたるまで、その神魂は生きかはり死にかはり、神界において神政成就のため一生懸命の大活動を今につづけゐるといふ。

廣宗彦は桃上彦の傍若無人の行動に妨げられて、非常に困難の地位にたち、筆紙口舌のつくしがたき艱難辛苦を嘗めたりにけるが、父の眞心彦は、清廉潔白の心より惡評を世間にたてられ憤慨の結果職を退き、つひには歸幽したるより、父の光を現はさむため善道をおこなひ律法を守り、至誠の結晶力をもつて天地神明の稜威を宇内に輝かし、森羅萬象をしておのおのその安住の所を得せしめ、父母

の失敗と罪科をつぐなひ、その神靈を助けむとして、現代にいたるまで地上の各所に放浪し、神政成就の曉に處するため、犧牲的艱苦をなめつつありといふ。

廣宗彦は至善至愛の神人なりけるが、元來温柔なる身魂の性質として、弟の桃上彦の行動にたいして嚴戒することを躊躇したり。そのゆゑは、桃上彦の行動を一言にても批評し訓戒するときは、繼父たる春永彦の氣色を損することを恐れたるが故なり。ゆゑに桃上彦の惡行を戒め、暴政を改めしむること能はざりしは、命にとつて末代の不覺にして、終生の大失敗なりける。神の道に奉仕する神人は、右の次第をよく了解し、天則を遵守し、情義にからまれて末代の悔をのこさざるやう注意すべきなり。

桃上彦の體主靈從天則違反の行動の結果は、上は下に押へつけられ、下はまた世とともに惡化し、慢神の空氣は天地にみなぎり溢れ、下はおひおひ自己本位の波たち騷ぎ、神人の階級までも根元より破壞せしめたり。至誠一貫的に奉仕せる善良なる神人も、つひには忍びかねておひおひに退職し、神界の神務は如何ともすること能はざる慘憺たる形勢とはなりぬ。

廣宗彦は、弟の行成彦と力をあはせ心を一にして、天則を嚴守し、善一筋の模範を世界に示し、回天的神業をおこして、地上の神界を根本より改造せむと焦慮したれども、放縱と怠慢と逸樂のみを希求するにいたりたる神人は、一柱としてその神業に參加するものなく、神界はますます混亂紛糾の度を加へ、萬妖億邪一度に突發して收拾すべからず、常夜の暗黑世界とたちまち變ずるにいたりける。

大將軍天使長澤田彦命の妻澤田姫命は、出雲姫とともに、神政の紛亂と律法の破壞とをおほいに煩慮し、心身を傾注しつつ神界幽界大改造の神業の一端にも奉仕せむと、雄々しくも女神の身魂をもつて、神代より今にいたるまで久遠の歳月を一日のごとく、筆紙口舌につくしがたき大艱苦をなめ、必死の活動をつづけたまふという。

三千世界一度に開き、艮の金神ふたたび表に現はれて、五六七の神業を開始したまふ時運の到來したる今日なり。ゆゑに今度こそは、苦勞の結晶の花の咲き匂ひ、うるはしき實を結ぶ神政の世に近づけるものにして、世界は神界現界に論なく、神人ともに必死の活動をなし、末代しほれぬ生き花を咲かし、神國のために

十分の努力を勵まねばならぬ時期に迫りきたれるなり。
（大正一〇・一二・一〇　舊一一・一二　櫻井重雄録）

第四九章　袖手傍觀〔一四九〕

澤田彦命、澤田姫命夫婦のあひだに生れたるは杵築姫、朝子姫、猿子姫の三女なりける。

天地の律法破壞して萬妖一時に發起し、つひには地の高天原の神政は、ほとんど潰滅せむとしたるも、澤田彦命は對岸の火災を傍觀するごとき態度を持し、少しも神界のために全力を傾注せざりける。ゆゑに妻の澤田姫命は躍起となり、夫にむかつて、

『かかる神界一大事の場合に際し、神界のために、奮發努力して萬妖を鎭定し、大神の神慮を安んじ、下神人の苦難を救ふは、貴夫の雙肩にかかる大責任なり』

と千言萬語をつくして奮起をうながし、かつ諫言し給ひたるに、澤田彦命はその諫言を馬耳東風と聞き流したるのみならず、無責任にも三人の娘を引連れ、妻を地上にのこして空に乗り、ふたたび天上に還りける。澤田姫命は夫子に生別れの辛酸をなめ、あるにあられぬ憂目を味はひ給ひて悲歎やるかたなく、天を仰ぎ地に俯して、夫の一日も早く天より降りて混亂紛糾の神政を修理固成したまへと一生懸命に歎願したり。されど一徹短慮なる澤田彦命は、一旦決心したる以上は初志をまげずと断然【はね】つけにける。

ここに廣宗彦は、澤田姫命の窮状を察して一方の力となり、神政を輔佐せむと弟の行成彦と議り、澤田姫命にむかつて、

『聖地の神政のかくまで混亂状態に陥りたるについては、吾々にも大責任あれば、袖手傍觀するに忍びず、ゆゑに今後は兄上と共に神界のため兄弟一致して神業を助け奉らむ』

と誠實を表に現はし、苦心に苦心を重ね、一時の困難を救ひたりける。

澤田彦命は天上に昇りて、自由自在に神界の經綸を成さむと焦慮したりしが、

元來最愛の妻の至誠のこもれる諫言に立腹し、地の高天原の混亂狀態を餘所に見流し、難をさけ安きにつき、利己の目的を達することのみに熱中せる無責任にして、かつ無慈悲なる神人なれば、犧牲的精神に缺けゐたるため、何事も志と相反し、つひには天の八衢に現はれて、猛惡なる魔神となり了りける。

また出雲姫は、天地の律法が神人の怠慢によりて破壞されたるを憂ひ、善行をもつて神人に模範を示さむとの義俠心を振おこし、神國特有の麻柱の眞柱を建てむと百方焦慮したまへども、何分にも肝腎要めの大本元破れけるにぞ、回天の神業はつひに完成にいたらざりける。

（大正一〇・一二・一〇　舊一一・一二　松村仙造録）

第一二篇　靈力體

第五〇章　安息日〔一五〇〕

天地剖判に先だち、宇宙の大元靈たる無聲無形の一神ありけり。

これを神典にては、天之御中主大神ととなへ奉り、神界にては大六合常立尊と申す。西洋にてはゴッドといひ、佛教にては阿彌陀如來といふ。漢土にては古來天帝または天主といふ。吾々はきはめて言語のすくない簡單な御名を選んで、ここでは天主ととなへ奉つて述ぶることにしたいと思ふ。

天主は、過去現在未來に一貫して無限絶對無始無終の大神靈にましまし、その絶對の靈威を發揮して宇宙萬有を創造したまうた。

大宇宙の太初にあたつて、きはめて不完全なる靈素が出現し、それが漸次發達して靈の活用を發生するまでの歳月はほとんど十億年を費してゐる。これを神界においては、【ヒツカ】（一日）といふ。つぎにその靈の發動力たる靈體（幽體）なるものが宇宙間に出現した。これを【チカラ】と稱へた。【チ】とは靈または火の意味であり、【カラ】とは元素の意味である。この宇宙に元素の活用するに

いたるまでの歳月は、また十億年を費してゐる。この十億年間を神界において【フツカ】（二日）といふ。

つぎにこの元素に靈氣發生して、現顯の物體を形成するにいたるまでの歳月は、また大略十億年を費してゐる。この十億年間の靈體の進歩を稱して【ミツカ】（三日）といふ。ここにいよいよ靈、力、體の三大勢力發揮して、無數の固形體や液體が出現した。太陽、太陰、大地、諸星の發生はつぎの十億年の間の歳月を費してゐる。これを神界にては【ヨツカ】（四日）といふ。

またつぎの十億年間の歳月を費したる神靈の活動狀態を、神界にては【イツカ】（五日）といふ。【イツ】は稜威にして【カ】は光輝の意である。この五日の活動力によりて、動植物の種天地の間に現出した。いよいよ五十億年間の星霜を經て陰陽、水火の活用あらはれ、宇宙一切の萬物に水火の活用が加はり、森羅萬象の大根元が確立した。この歳月は六億年を費してゐる。この六億年間の神靈の活用を【ムユカ】（六日）といふ。

かくのごとくして天主は宇宙萬有一切を【ムユカ】に創造された。それより天

主は一大金剛力を發揮して、世界を修理固成し、完全無缺の理想世界いはゆる五六七の神代、松の世を建設さるるその工程が七千萬年の歳月であつて、これを【ナナカ】（七日）といふ。【ナナ】とは地成、名成、成就、安息の意である。七日の神靈の活用完了の曉にいたつて、至善至美至眞の宇宙が完成さるる、之を安息日といふ。

安息日の七千萬年間は天主の荒工事ををはつて、その修理固成のために活動さるる時代であつて、世人のいふごとく神の休息したまふ意味ではない。もしも天主にして一日はおろか一分間でもその神業を休めたまふことがありとすれば、宇宙一切の萬物はたちまち滅亡してしまふからである。ゆゑにこの安息日は人々神の洪恩を感謝し、かつその神德を讃美すべく祝すべき日である。

かくして五十六億七千萬年を經て、五六七の神政まつたく成就され、天主の經綸の聖代がくるのである。しかるに幸ひなるかな、五六七の歳月もほとんど滿期に近づいてをる。いよいよ五六七神政出現の上は、完全無缺、至善至美の世界となり、神人和合して永遠無窮に榮えゆくのである。ゆゑに今日までの世界は未完

成時代であつた。ここに天運到來して、神政の開かるる時機となつた。現代はその過渡時代であるから、その前程として種々の事變の各所に突發するのも、神界の攝理上やむを得ざる次第であらうと思う。

この安息日については各教法家の所説も、古今東西の區別なく論議されてをるが、私は世説の如何にかかはらず、神示のままを述べたまでである。

（附言）

聖書に、神は六日に世界を造り了へて、七日目は安息せりといふ神言がある。この神言について言靈研究の大要を述べてみやうと思ふ。

【ナ】の言靈は宇宙萬有一切を兼て統一するといふことである。◎の凝る形であり、行届く言靈であり、天國の經綸を地上に移すこととともなり、◎の確定ともなり、調理となり成就となり、水素の形となり、押し鎮むる言靈の活用ともなる。

次の【ナ】も同様の意義の活用である。

【カ】の言靈は、燥かし固むる活用となり、晴れて見ゆる也、一切の物發生の神力となり、光明となるの活用である。

【メ】の言靈は、世界を見るの活用となり、起り兆となり、本性を寫し、女子を生み、天の岩戸を開き、草木の芽となり、眼目となるの活用である。

以上の言靈によりて、神は七日目に安息したまふといふ神語は、實に明瞭となつてくるのである。要するに宇宙萬有一切の生物にたいし、神人、樹草、禽獸、鳥族、蟲魚の區別なく、各自その所に安んじて、その天職に奉仕する聖代の現はれである。

ゆゑに七日は現代の暦にいふ日月火水木金土の一週間の日數の意味ではないことも明白なる事實であると思ふ。

（大正一〇・一二・一〇　舊一一・一二　加藤明子録）

（第四八章～第五〇章　昭和一〇・一・一九　早朝　於宮崎市神田橋旅館　王仁校正）

附録　岩井温泉紀行歌

瑞月作

岩井温泉紀行歌

【瑞の御魂】に縁由(ゆかり)ある　壬戌(みづのえいぬ)の一月の
雪降りつもる銀世界　【黄金閣】をあとにして
八日午前の巳(み)の刻に　身魂の垢を清めむと
【岩井温泉】さして行く　【湯淺】【篠原】【植芝】や
松の【大本】の【竹下氏】　恵みの風も【福島】の
【近藤】の湯治を送らむと　信仰かたき【石の宮】
家竝は古く朽ちぬれど　名は【新町】の正中を
足竝速き自動車に　搖られて【綾部】の驛につく
汽笛一聲汽車の窓　記者の【外山】氏【加藤】女史
【西村德治】を伴ひて　心も勇む【石原(いさ)】の驛

煙をあとに【初瀬(はせ)】の橋　飛びたつばかり進み行く
科戸(しなど)の風の【福知山】　聞くも恐ろし【鬼ケ城】
見捨てて走る山間の　【上川口】や【下夜久野】
降り來る雪を突破して　安全守る【上夜久野】
【梁瀬(やなせ)】を渡りゴウゴウと　輪音も高き【和田山】や
篠竹しげる【養父(やぶ)】の驛　【八鹿(やうか)】【江原】を打ち過ぎて
外山に包みし【豐岡】の　昇降客のいと多く
但馬名所の【玄武洞】　右手にながめて【城ノ崎】の
温泉場を振り返へり　【竹野】や【佐津】の驛も過ぎ
【日本海】をながむれば　雪雲とほく【香住】驛
山腹包む【鎧(よろひ)】田の　雪つむ景色面白【久】
【谷】を埋むる白雪は　山陰寒氣の表徴と
ながめて走る汽車の窓　煙草正宗菓子饅頭
お茶お茶辨當の賣聲に　空しき腹を滿たすと【は】

【ま坂】思はぬまうけもの　　車のすみに【居組】つつ
いよいよ汽車も申(さる)の刻　　【岩美】の驛に降りけり
【雪】より白き【お梅】さま　　雲【井】の【上】の雪の空
緩【高梅】の田舎道　　ホロの破れし自動車に
一行六人ぶるぶると　　自身神也屁の車
廻る【駒屋】の温泉宿　　【湯治々々】と【月】代の
一同夕餉も相濟みて　　腹もポンポコ【湯冠り】の
【ヤレヤレ】ヤレの拍子歌　　いと面白き雪の庭
なが夜を茲に【明】しける　　大正十年十二月
【十(なか)】の二日の未明(あさまだき)　　新暦一月九日に
激しき吹雪降りすさみ　　寒さに凍えた【瑞月】は
炬燵の中の侘住居　　横に立ちつつ千早振
神世の奇しき【物語】　　【外山】【加藤】【井上】氏
筆を揃へてかくの通り

○

來訪者名讀込歌

温泉(いでゆ)の神と現れませる　【出】雲に坐す大己貴(おほなむち)　（出口王仁三郎）

岩井の湯【口】細くとも　藥の【王】と聞えたる

神の【仁】慈の【三】ツ御魂　心地も日々に【朗】かに

病の根まで斷(き)り拂ふ　效驗(しるし)は岩美に名【西】負ふ　（西村德治）

田舍の【村】の湯の御【德】　療【治】を加ねて藤くより　（加藤明子）

【明】々つどひ遊び來る　男【子】と女子の宿りたる

これの駒屋の温泉は　【外】に又なき客の【山】　（外山豐二）

【豐二】暮す玉の【井】の　この【上】もなき御神德　（井上留五郎）

【留】る三階に【五郎】々々と　ねころびながら靈界の

ありし昔の物語　【石】より堅き信仰の　（石渡馨）

丹【波】に【馨】る神の道　常磐堅磐（ときはかきは）の【岩】よりも　（岩淵久男）

かたき誠の教の【淵】　汲取るものは【久】方の

天より降る變性【男】子　この世の峠や【嵯峨】の【根】に　（嵯峨根民藏）

さまよふ【民藏】救はむと　誓ひ出ます神の世に

生れ【大野】は【只】ならじ　深き因縁の著（いち）【次郎】く　（大野只次郎）

【田】づね來て見よ神の【村】　天地を【兼太郎】大神の　（田村兼太郎）

黄色の色や白梅の　【佐】和に【佐木】たる神の苑　（佐々木清藏）

【清】き【藏】昔のそのままの　【紙】より白くすがすがし　（紙本鐵藏）

世の大【本】の金【鐵】の　身魂【藏】めし萬代の

【龜】のよはひの本宮【山】　二代教主にかかりたる　（龜山金太郎）

【金】勝要の【太】み神　肌への色は山吹の

清【郎】比ぶるものもなき　景色も【藤】や【田】子の浦　（藤田武壽）

よはひも今は【武壽】（たけとし）の　【古】き昔を【田】どる【時】　（古田時治）

【治】まる波路を加露ケ濱　【船】にて【越】え來し三保の關　（船越英一）

【英米須（えびす）】の神を祭りたる　山陰【一】の神靈地

稜威も【高島】あとに見て　浪路を進む【ゆか】しさよ　（高島ゆか）

神の御魂を迎【遠藤】　綾部に居ます牛【虎】の　（遠藤虎吉）

神の【吉】詞をかしこみて　やうやう平田にたどりつき

田【植】の中の道【芝】を　神のま【盛】りに踏みて行く　（植芝盛隆）

【降】々昇る旭影　【竹】はなけれど松梅の　（竹下斯藝琉）

御杖を【下】げて道草の　【斯藝琉（しげる）】野路を勇ぎよく

【東】の空の色【良】しと　【俊（とし）】老いたまふ大教祖　（東良俊）

【桑原】田原の【道】別けて　【喜】び一行幽世を　（桑原道善）

【知食（しろしめ）】します大社　榮ゆる【松】や神の【田】の　（松田政治）

尊き【政治】を偲びつつ　苔むす【藤】のいと高く　（藤松良寛）

からむ社の千代の【松】　心持【良】く胸【寛】く

進む【小林】神の森　【秀】づる【尾】の上の彌仙山　（小林秀尾）

鶴山龜山右左　神威を【保】つ【一】の鳥居　（小林保一）

【稲】田の姫の命をば　救ふて得たる【村】雲の　（稲村壽美）

劍の光【壽美】渡り　須賀の宮居を建了へて

【横】暴無道の惡神の　【山】田の大蛇を斬放(はふ)り　（横山辰次郎）

ひの川上に【辰】雲の　光も殊にいち【次郎】く

神の功ぞ尊とけれ　諸【木】の【下】を潛りたる　（木下泉三）

谷の【泉】も【素鵝(そが)】の川　【三】山の【奥村芳】りつつ　（奥村芳夫）

【夫】婦はここに八雲立　出雲八重垣つまごめに

八重垣作る八重垣の　譽れは今にコン【近藤】　（近藤繁敏）

榮えて【繁】る長の【敏】　我日の本のあなひの

道を教へし大己貴　浦【安】國の【田】のもしく　（安田武平）

【武】力絶倫國(くに)【平(むけ)】の　鉾を皇孫(みまご)に奉り

君の御尾前仕へなむ　これの誓ひは萬代も

【田賀】へじものと手を拍つて　青紫垣にかくれたる　（田賀鐵藏）
事代主の金【鐵】の　堅き御言【藏】尊とけれ
すぎ【西】むかしの物語　神有【村】の老人に　（西村菊藏）
詳しく【菊藏】ありがたき　地の高天【原】にあれませる　（原祐藏）
神の【祐藏】うれしみて　詣でし一行十五人
神【徳岡】さぬ皇神の　【重】き御命を拜しつつ　（徳岡重光）
神の【光】を照さむと　藤き山路や【原】野越え　（藤原勇造）
【勇】み來る【造】艮の　神の生宮直子刀自
社の【前】に【田】知よりて　祈る誠の【美千香】る　（前田美千香）
この音づれを久方の　雲【井】の空や土の【上】に　（井上敏弘）
いと【敏】やかに【弘】めかし　神の眞【毛利】は【八】洲國　（毛利八彌）
【彌】常永に傳はりて　榮え目出度瑞穗國
秋の足穗の御【田代】は　太田の神に神【習】ひ　（田代習）

教の苗を植付ける　　國常立大神の

【高木】勳を【壽】ぎて　　【三】柱神の神の教　　（高木壽三郎）

【田中】も山も佐【嘉榮吉】し　　五六七の御代に【住山】の　　（田中嘉榮吉）

人の心は【泰】平【藏】　　雲井の【上】も葦【原】も　　（住山泰藏）

【熊藏】なき迄【住】渡る　　清けき富士の高【山】に　　（上原熊藏）

金銀【龍】の【二】柱　　世人を眞【森田】すけむと　　（住山龍二）

御心【くま】らせ玉ひつつ　　大【矢島】國榮え【ゆく】　　（森田くま）

祥（めで）たき御代を【松】の世の　　【浦】安國の磯輪垣（しわがき）の　　（矢島ゆく）

【秀】妻の國【藏】尊とけれ　　元氣も【吉田】の一行は　　（松浦秀藏）

身魂【勝】れて【美】はしく　　聖地を【西】にあとに見て　　（吉田勝美）

町や【山村】傳ひつつ　　又【藏】降り來る五月雨（さみだれ）を　　（西村傳藏）

おかして【伊佐】み【田】庭路の　　福知へ歸り【喜一郎】　　（伊佐田喜一郎）

途上つはりの心地して　二代スミ子は澄渡る
石原（いさ）の【小泉】すくひ上げ　教祖手づから清泉を　（小泉熊彦）
口に富（ふ）【熊】せ玉ひつつ　國武【彦】の眞【森田】る　（森田勘太郎）
綾の【勘】部の【太】元に　雨の【中尾】ば六月の　（中尾豐弘）
四日に【豐】かに【弘】前に　神徳高く【山】の如（ごと）　（山本惣吉）
頭にいただき歸ります　大【本】役員【惣】一同
今日の生日（いくひ）の【吉】き日をば　祝ひ【納】むる【吉】祥の　（同納吉）
宴を【平木】て大神の　御【稜威】かしこ【美山川】の　（平木稜威美）
供物（くもつ）を獻じ【石】の上　古き【太】初の皇神の　（山川石太郎）
直なる【武】の【田】ぐひ【な】き　譽れ【を】今に傳へける　（武田なを）
大正三年の春の頃　十三才の直靈孃
瑞月柳月の三人が　出雲大社へ禮參り
其往きがけに岩美驛　馬車にゆられて晃陽の

やかたに再び逗留し　いよいよ三度(みたび)の入浴に
身魂の垢を洗ひつつ　五ツと六(むゆ)との靈界の
昔語りを新らしく　天地宇宙の外に立ち
言葉も清くいさぎよく　まはる駒屋の温泉場
心の垢をあらひつつ　あらあらかくは識(しる)しけり

皇道發祥の靈地日向國宮崎市の公會堂に於て昭和神聖會支部の發會式を盛大に擧行したる翌朝七時四十分、同市神田橋旅館の二階の閒大淀河の名橋や清流を眺めつつ誌し置く。いよいよ靈主體從寅の卷の校正を終る。

（昭和一〇・一・一九早朝）

附言

明治三十四年舊五月十五日、教祖様神勅(しんちよく)を受けて、八雲立出雲(やくもたついづも)の國の天日隅(あめのひすみ)の

宮に御参拝の節、山陰道を徒歩し一行十五人、岩井温泉駒屋に一泊せられ、歸路ふたたび同家に宿泊されたる、大本にとつて由縁淺からざる温泉なり。瑞月は大正三年の春、三代直靈、梅田信之氏とともに一泊したることあり。今回にて三度目の入浴なり。靜養かたがた靈界物語の口述をなすも、神の御仁惠と歡びのあまり、筆記者および信者の訪問して色々と御世話下されし其の厚意を感謝するため、諸氏の芳名を讀込み、長歌を作りて第三卷の卷尾に附する事となしぬ。

靈界物語　第三卷　靈主體從　寅の卷

終り靈界物語　第三卷　靈主体從　寅の卷

出口王仁三郎

●テキスト中に現れる記号について

……ルビ

―……ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）天地剖判（ぼうはん）の

❓……入力者注

【】……傍点が振られている文字列

（例）【ヒ】は火なり

●シフトＪＩＳコードに無い文字は他の文字に置き換え、そのことをＷｅｂサイトに「相違点」として記した。

●底本

『霊界物語　第三巻』愛善世界社

１９９３（平成０５）年０４月０４日　第一刷発行

※現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせずにすべて底本通りにした。

※図表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜変更した。

※詳細な凡例は次のウェブサイト内に掲載してある。

ｈｔｔｐ：／／ｏｎｉｄｏ．ｏｎｉｓａｖｕｌｏ．ｊｐ／

※作成者…『王仁三郎ドット・ジェイピー』

２００４年０４月２４日作成

２００９年１１月２０日修正

●目次

序文（じょぶん）
凡例
総説

第一篇　国魂（くにたま）の配置（はいち）

第一章　神々（かみがみ）の任命（にんめい）〔一〇一〕
第二章　八王神（やつわうじん）の守護（しゆご）〔一〇二〕

第二篇　新高山（にひたかやま）

第三章　渓間（けいかん）の悲劇（ひげき）〔一〇三〕
第四章　鶴（つる）の首（くび）〔一〇四〕

第三篇　ロツキー山
第五章　不審の使神〔一〇五〕
第六章　籠の鳥〔一〇六〕
第七章　諷詩の徳〔一〇七〕
第八章　従神司の殊勲〔一〇八〕
第四篇　鬼城山
第九章　弁者と弁者〔一〇九〕
第一〇章　無分別〔一一〇〕
第一一章　裸体の道中〔一一一〕
第一二章　信仰の力〔一一二〕
第一三章　嫉妬の報〔一一三〕

第一四章　霊系の抜擢（一一四）
第五篇　万寿山
第一五章　神世の移写（一一五）
第一六章　玉ノ井の宮（一一六）
第一七章　岩窟の修業（一一七）
第一八章　神霊の遷座（一一八）
第六篇　青雲山
第一九章　楠の根元（一一九）
第二〇章　晴天白日（一二〇）
第二一章　狐の尻尾（一二一）

第二二章　神前の審判（一二二）
第七篇　崑崙山
第二三章　鶴の一声（一二三）
第二四章　蛸間山の黒雲（一二四）
第二五章　邪神の滅亡（一二五）
第二六章　大蛇の長橋（一二六）
第八篇　神界の変動
第二七章　不意の昇天（一二七）
第二八章　苦心惨憺（一二八）
第二九章　男波女波（一二九）

第三〇章　抱擁帰一（一三〇）
第三一章　竜神の瀑布（一三一）
第三二章　破軍の剣（一三二）

第九篇　隠神の活動

第三三章　巴形の斑紋（一三三）
第三四章　旭日昇天（一三四）
第三五章　宝の埋換（一三五）
第三六章　唖者の叫び（一三六）
第三七章　天女の舞曲（一三七）
第三八章　四十八滝（一三八）
第三九章　乗合舟（一三九）

第一〇篇　神政の破壊
第四〇章　国の広宮（一四〇）
第四一章　二神の帰城（一四一）
第四二章　常世会議（一四二）
第四三章　配所の月（一四三）
第一一篇　新規蒔直し
第四四章　可賀天下（一四四）
第四五章　猿猴と渋柿（一四五）
第四六章　探湯の神事（一四六）
第四七章　夫婦の大道（一四七）
第四八章　常夜の闇（一四八）

第四九章　袖手傍観〔一四九〕
第一二篇　霊力体
第五〇章　安息日〔一五〇〕
附録　岩井温泉紀行歌

序文

艮の金神出現以後三十年の立替は、いよいよ明治五十五年、すなはち大正の十一年、三千世界一度に開く梅の花の機運に到達したのである。つぎに坤の金神出現以後二十五年、桃李もの言はずして桃李ものとなりし神の教示も、いよいよ開

く桃の春、五十二歳の暁に、月の光に照らされて、霊界探険物語り、ものの千草も、百鳥も、百の言問ひ言止めて、三月三日五月五日の神の経綸を詳細に、悟る神代の魁となつたのも、まつたく時の力といふべきである。明治三十三年九月八日の神筆に、

『出口直は三千世界の根本の因縁から末の世のことまで書かす御役なり、それを細かう説いて聞かせるのが海潮の役であるから、一番に男子が現はれて、次に女子が表はれたら、大本の中の役員も、あまり思ひが違ふてをりたと申して、きりきり舞をいたして喜ぶ人と、きりきり舞をして苦しむ人と、力一杯われの目的のために、男子女子を悪くまをすものとができるぞよ。神を突込みておいて、我で開いて、まだ悪く申してあるく、取次がたくさんにできるぞよ。云々』

大本の筆先は、どうしても男子女子でなければ真解することはできぬのは神示のとほりである。しかるに各自の守護神の御都合の悪いことがあると、「女子の筆先は審神をせなそのままとつてはいかぬ」と申す守護神が現はれてくる、困つたものだ。九月八日にいよいよ神示のとほり女子の役となり、隠退して霊界の消

息を口述するや、またまた途中の鼻高がゴテゴテ蔭で申し出したのである。女子の帰神の筆を審神する立派な方が沢山できて、神様も御満足でありませう。

また、明治五十五年の三月三日五月五日といふ神の抽象的教示にたいして、五十五年は大正十一年に相当するから、今年は女子の御魂にたいして肉体的結構があるとか、大本の神の経綸について花々しきことが出現するかのやうに期待してをる審神者があるやうにきく。されど、神の御心と人間の心とは、天地霄壌の相違があるから、人間の智慧や考へでは、たうてい、その真相は判るものでない。五十五年といふことは、明治二十五年から三十年間の神界経綸の表面に具体的にあらはれる年のいひである。

三月三日とは三ツの御魂なる月の大神の示顕が、天地人三体に輝きわたる日といふことである。日は「カ」と読む、「カ」はかがやくといふことである。今まで三十年間男子の筆先の真意が充分に了解され、また従道二十五年に相当する女子の御魂の光が、そろそろ現はれることを暗示された神諭である。二十五年間、周囲の障壁物にさまたげられた女子の御魂の神界経綸の解釈も、やや真面目にな

つて耳をかたむくる人が出現するのを、「女子にとりて結構な日である」と示されたものである。あたかも暗黒の天地に、日月の東天を出でて万界を照らすがごとき瑞祥を、五月五日といふのである。五は言霊学上「出」であつて、五月五日は出月出日の意味である。二十五年の天津風、いま吹きそめて経緯の、神の教示も明らけく、治まる御代の五十五年（出神出念）、いよいよ神徳出現して、神慮の深遠なるを宇宙に現【出】すべき時運にむかふことを慶賀されたる神示であります。

月光世に出でて万界の暗を照破す、これ言霊学上の五月五日となるのであつて、けつして暦学上の月日でないことは明白である。三月三日と五月五日に、変つたことがなければ信仰をやめるといふ無明暗黒の雲が、遠近の天地を包むでゐるやうに思はれましたから、一寸略解をほどこしておきました。これでもまた女子の御魂の言は審神をせなくてはいかぬと、唱ふる豪い人々が出現するかもしれませぬ。これが暗黒の世の中といふのでせう。

神諭に「女子にとりて結構な日である」云々は微々たる五尺の肉体にたいして

の言ではない。神霊そのものの大目的の開き初むるを慶賀されたる意味であることを了解すべきである。千座の置戸は、瑞の御魂の天賦的神業たることを承知してもらひたい。

霊界物語を読ンで、初めて今日までの神諭の解釈にたいする疑雲は一掃され、心天たちまち晴明の日月をうかべ、霊体力に光輝をそへ歓喜と了解の日月出現していはゆる三月三日五月五日の瑞祥を神人ともに祝することになるのである。

五月五日は男子の祝日、菖蒲の節句である。三月三日は女子の祝日で、桃の節句である。女子の御魂聖地に出現してより二十五年の間桃李物言はず自ら蹊をなせしもの、ここに目出度く世にあらはれて苦、集、滅、道を説き、道、法、礼、節をはなばなしく開示することとなつたのも、神界経綸の神業成就の曙光をみとめ、旭光照破の瑞祥にむかつたので、神人界のともに祝福すべき年であります。

○

この物語のうちに大自在天とあるは、神典にいはゆる、大国主之神の御事であつて、大国彦命、八千矛神、大己貴命、葦原醜男神、宇都志国魂神などの御名を有したまひ、武力絶倫の神にましまして国平矛を天孫にたてまつり、君臣の大義を明らかにし、忠誠の道を克く守りたまふた神であります。本物語にては大自在天、または常世神王と申しあげてあります。

大自在天とは仏典にある仏の名であるが、神界にては大国主神様の御事であります。この神は八代矛の威力をふるつて、天下を治めたまうた英雄神である。皇祖の神は、平和の象徴たる璽と、智慧の表徴たる鏡とをもつて、世を治めたまふのが御神意である。

また盤古大神塩長彦は一名潮沫彦と申し上げる、善良なる神にましますことは、前篇に述べたとほりであります。この神を奉戴して荒ぶる神人等が色々の計画をたて、神界に活動して国治立命の神政に対抗し、種々の波瀾をまきおこしたことはすでに述べたとほりである。そこでこの世界を救ふべく、諾冊二神がわが国土を中心として天降りまし、修理固成の神業を励ませたまふこととなつた、ありが

たき物語は篇を逐うて判明することであらうと思ひます。惟神霊幸倍坐世

大正十一年一月三日

王仁識

凡例

❓

一、本巻はその前半を亀岡の瑞翔閣において口述筆録せしめられ、後半は綾部竜宮館において完成されたものであります。恒定筆録者の内、谷口正治氏が第二巻完了とともに、出口教祖詳伝編集の任にあたることとなり、霊界物語に関係せざるにいたりましたことを、筆録者一同遺憾に思ひますとともに、前巻まで筆録されし労を多謝する次第であります。

一、第一巻に国治立命、盤古大神、大自在天の各派が、三つ巴となつて悪戦苦闘をつづけ、神界を混乱せしめたる記録を読み、盤古大神および大自在天につきそ

の真相を識らむとする人々のために、ちよつと説明を加へておきたいと思ひます。

盤古大神とか、盤古神王とか、また盤古真王といふのは、平田篤胤翁の赤県太古伝成文といふ著書の、盤古真王記に、

『古昔天地未だ分れず、渾沌として鶏子の如し。盤古氏其の中に生ず。九万八千歳にして天地開闢せり。清軽のものは上つて天となり、濁重のものは下つて地となる。盤古其の中に在り。一日に九変して、天に於ては神に、地に於ては聖なり。天日に高きこと一丈、地日に厚きこと一丈、盤古日に長ずること一丈、此の如きこと九万八千歳、天極めて高く、地極めて邃く、盤古極めて長ぜり。数は一に起りて三に立ち、五に於て成り、七に於て盛りに、九に於て処す。

盤古氏夫妻は陰陽の始めなり。大荒に生じて其の初めを知ること莫し。蓋し陶鎔造化の主にして、天地万物の祖なり。乃ち元始天王、大元聖母は是れなり。盤古氏の後に三皇あり、これ天地人の始めなり』

とあるごとく、「支那」の人民が天王聖母として尊崇するところのものが盤古大神であります。

さうして盤古大神は体主霊従（われよし）で、国常立尊は霊主体従（ひのもと）であります。しかし本書には神名を国治立命と申し上げてあります。

つぎに大自在天は、力主体霊（つよいものがち）であつて、仏典によりますと波羅門教徒は、この神は世界万物の造物主であり、また世界の本体であり、この神の支配のままに吾人苦楽の果報が割り当らるるのであるといつて、あらむ限りの崇拝の的としてをるのであります。ところが仏教が起つてから後といふものは、大自在天神と命名されて、やうやく第六天の統治者として、きはめて平凡な取扱ひを受くるものとなつたのです。

一、次に常世の国について一言しておきます。「稽古要略」といふ書物に、『少彦名神、粟茎（方船のこと）に乗りて、常世の国に渡りき。按ずるに常世の国とは本神仙の幽境をいふ。因つて以て海外の絶域、人到り易からざる地を称す』とありますから、日本からいへば海外の絶域たる亜米利加は常世の国となりますが、亜米利加からいへば日本が常世の国となるわけです。ゆゑに霊界物語と古文書と比較研究して見ることが肝要だと思ひます。

大正十一年一月廿九日
竜宮館に於て　識す

総説

天地剖判して大地、日、月、星辰現はれ、地上には樹草、人類、獣、鳥、魚、虫を発生せしめ、各自分掌の神を定めてこれを守護せしめたまひける。

大神は人体の元祖神として天足彦、胞場姫を生みたまひ、天の益人の種と成したまひたり。しかるに天足彦は胞場姫のために神勅にそむきて霊主体従の本義を忘れ、つひに体主霊従の果実を食し、霊性たちまち悪化して子孫に悪念を遺したるのみならず、邪念はおのづから凝つて八頭八尾の大蛇と変じ、あるひは金毛九尾の悪狐と化し、六面八臂の魔鬼となり、世界を混乱紛擾せしめ、国治立大神、国直姫命、大八洲彦命以下の諸神を根の国に隠退せしめ、盤古大神（塩長彦）を奉じて国治立大神の聖職に代らしめ、塩長姫をして国直姫命の職をおそはしめ、

八王大神（常世彦）をして大八洲彦命の職を司らしめ、常世姫をして豊国姫命にかはらしめ、和光同塵的神策を布き、一時を糊塗して、大国彦と結託し、世界を物質主義に悪化し、優勝劣敗、弱肉強食の端を開き、つひには収拾すべからざる悪逆無道の暗黒界と化せしめ、その惨状目もあてられぬ光景となりたれば、天の三体の大神も坐視するに忍びず、ここに末法濁世の代を短縮して再び国治立命の出現を命じたまひ、完全無欠の理想の神世の出現せむとする次第を略述せるものなれども、製本上の都合により本巻は、国大立命および金勝要神、大将軍沢田彦命の隠退さるるまでの霊界の消息を伝ふることとせり。ゆゑにこの霊界物語は、あたかも大海の一滴、九牛の一毛にもおよばず、無限絶対、無始無終の霊界の一部の物語なれば、これをもつて霊界の全況となすは誤りなり。願はくはこの書をもつて霊界一部の消息を探知し、霊主体従の身魂に立ちかへり、世界万国のために弥勒の神業に奉仕されむことを懇望する次第なり。数千年間の歴史上の事実のみ研究さるる現代の人士は、この物語を読みて或ひは怪乱狂暴取るにたらざる痴人の夢物語と嘲笑し、牽強附会の言となさむは、むしろ当然の理といふべし。神

諭に曰く、

『世の元の誠の生神が、時節きたりてこの世に現はれ、因縁ある身魂にうつりて太古から言ひおきにも、書きおきにもなきことを、筆と口とで世界へ知らすのであるから、世界の人民が疑ふて真実にいたさぬのは、もつとものことであるぞよ云々』

と示されあり。また、

『この神の申すことは、因縁の身魂でないと、到底腹へは這入らぬぞよ』

と示されあり。ゆゑに神縁深き人士にあらざれば、断じて信じ難からむ。

要は、単に一片の小説と見なしたまふも不可なく、また痴人の夢物語として読まるるも可なり。ただ天地の大神たちの天地修理固成の容易ならざる御艱難と御苦心の径路を拝察したてまつり、かつ洪大無辺の神恩に報ひたてまつり、人生の本分を全ふしうる人士の一人にても出現するにいたらば、口述者にとりて、望外の欣幸とするところなり。惟神霊幸倍坐世

大正十一年一月　　王仁識

第一篇　国魂の配置

第一章　神々の任命〔一〇一〕

国治立命は、無限絶対の大神力を発揮し、まづ大地を創造したまひぬ。この時清き軽きものは日月星辰となり、重く濁れるものは大地と別れたり。しかしてここに陰陽二神の夫婦が生れたるが、男を天足彦といひ、婦を胞場姫といふ。

しかるに物には表裏あり、善悪あり、陰陽あり、火水ありて初めて万物を形成さるるは自然の理法なり。このとき宇宙間に存在する邪気凝つて妖魅を現出し、霊主体従の神木に、体主霊従の果実を結ぶにいたりけり。ここに神は、

『この果実を喰ふべからず』

と女神に命じたまひしを、女神は神命を奉ぜず、みづから採つてこれを食し、つぎに夫神にまでもすすめ食はしめたりける。これより地上の世界は体主霊従にか

たむき、種々の罪悪は漸次発生し、邪悪の気凝つて八頭八尾の悪竜となり、金毛九尾の悪狐となり、六面八臂の邪神、妖気の霊怪天地のあひだに発生するにいたりける。これより天地の間には、罪悪さかんに行はれ、天地混沌として紛乱に紛乱をかさね、世は常闇となり、ほとンど拾収すべからざる状態となりにける。

ここに国治立命は、豊国姫命を補佐神とし、八百万の神とともに、千辛万苦をなめたまひ、つひに天道別命（モウゼ）とともに天地の律法を制定せられたり。その律法は前巻に述べたるごとく、内面的には、

省みる
恥る
悔ゆる
畏る
覚る

の五ケ条であり、外面的には、

第一、夫婦の道を厳守し、一夫一婦たるべきこと

第二、神を敬ひ、長上を尊み、博く万物を愛すること

第三、たがひに嫉み、謗り、詐り、盗み、殺すなどの悪事を為すべからざること

右の大要を示され、その他百般の事物について、細密なる律法が設けられたりける。ここにおいて、まづこれを地上におこなひ、天上にもこれを行はむとし、三体の大神に認許を受け、これを天地に施行さるることとはなりける。

ここに三体の大神、国治立命は天地合体して世を治むべく、天地間を往来して、神命の戒律を天上地上に宣布すべく、管掌の神を定めたまひけり。

さて国治立命は、天上の三体の神の命により、太陽界に使神となり、日天使国治立命と称され、豊国姫命は月天使国大立命と名づけられ、日天使の神業を国直

姫命に、月天使の神業を豊国姫命に委任され、天道別命は現界の諸神に律法を宣伝する聖職とならせたまひたり。

神は天地の律法を天上地上にあまねく拡充すべく、十六柱の神司を霊主体従の天使として重く任命せられたり。十六天使の名は、大八洲彦命、言霊別命、神国別命、大足彦、花森彦、磐樟彦、元照別、道貫彦、貴治彦、有国彦、真鉄彦、磐玉彦、斎代彦、吾妻別、神澄彦、高山彦にして大八洲彦命は天使の長となり、十六天使を指揮さるることとなりにけり。

以上の十六天使は、天上地上を往復し、天地の律法を宇宙間に宣伝したまひ、一時は天地ともに太平に治まり、大神の理想の世は完全に樹立されたりしが、たちまち地の各所より、邪神勃興して世はふたたび混乱の巷と悪化せむとぞしたりける。

ここに国治立命は、シオン山に鎮祭せる十二個の玉を大地の各所に配置し、これを国魂の神となし、八頭神を任命さるることとなりたり。

（大正一〇・一一・一三　旧一〇・一四　栗原七蔵録）

第二章　八王神の守護〔一〇二〕

日天使国治立命は、シオン山に鎮祭せる十二の玉を世界の各所に配置し、もつて国魂の神と定められ、新高山には青色の玉を鎮め、高国別、高国姫の二神をして、これを永遠に守らしめたまひけり。

つぎに万寿山には赤色の玉を鎮め、瑞穂別、瑞穂姫をしてこれを守護せしめ、またローマに白色の玉を鎮め、朝照彦、朝照姫をしてこれを守護せしめ、モスコーに黒色の玉を鎮め、夕日別、夕照姫をしてこれを守護せしめ、ロッキー山に紺色の玉を鎮め、靖国別、靖国姫をしてこれを守護せしめ、つぎに鬼城山に灰色の玉を鎮め、元照彦、元照姫をしてこれを守護せしめ、また長白山に白色の玉を鎮め、磐長彦、玉代姫をしてこれを守護せしめ、コンロン山に紅色の玉を鎮め、大島彦、大島姫をしてこれを守護せしめ、天山に黄色の玉を鎮め、谷山彦、谷山姫をしてこれを守護せしめ、つぎに金色の玉を青雲山に鎮め、吾妻彦、吾妻姫をしてこれを守護せしめ、ヒマラヤ山に銀色の玉を鎮め、ヒマラヤ彦、ヒマラヤ姫をしてこ

れを守護せしめ、タコマ山に銅色の玉を鎮め、国玉別、国玉姫をして、これを永遠に守護せしめたまひける。この十二の玉の守護神を称して、八頭の神といふ。

さて国治立命は十二の玉を鎮め、八頭の国魂を任命し、つぎに八王の神を配置したまひぬ。すなはち新高山には花森彦をして主権を握らしめ、万寿山には磐樟彦、ローマには元照別、モスコーには道貫彦、ロッキー山には貴治彦、鬼城山には真鉄彦、長白山には有国彦、コンロン山に磐玉彦、天山には斎代彦、青雲山には神澄彦、ヒマラヤ山には高山彦、タコマ山には吾妻別の十二神将を配置して王となし、各主権を握らしめたまひぬ。これを八王の神といふ。この八王八頭の神司は、もとより至善至美にして天則を厳守しゐたりしが、天地の邪気より現はれいでたる八頭八尾の悪竜と金毛九尾の悪狐と、六面八臂の悪鬼の邪霊のために、月かはり星うつるにしたがひ、漸次神の国は穢され、つひには天則違反の行動をとるのやむを得ざるに立ちいたり、ここに世はますます混濁し、つひには国治立命御退隠のやむを得ざるにいたらしめたる繁雑なる経緯は、章をおうて略述することとすべし。

（大正一〇・一一・一三　旧一〇・一四　河津雄録）
（序～第二章　昭和一〇・一・一五　於新居浜　王仁校正）

第二篇　新高山

第三章　渓間の悲劇〔一〇三〕

新高山は花森彦統裁のもとに、高国別、高国姫が天地の律法を厳守し、高砂島一帯の諸神を至治太平に治めゐたりしが、たまたま高国姫は谷間に下りて清泉を汲まむとし、断崖より過つて足を踏み外し、谷間に転落し、神事不省に陥りければ、侍者らは大いに驚きて、これを救ひあげむと百方手をつくしたれども断崖高

く、渓流はげしく、いかんとも救助の道なく、侍者は驚きあはてこれの顛末を詳細に高国別に報告せしより、急報を聞きし夫は、たちまち顔色蒼白となり、とるものも取りあへず、職服のまま現場にかけつけたりける。

高国姫は渓間の激流におちいり、激浪につつまれて、浮きつ沈みつ悶え苦しみ救ひを呼びゐたり。その声は次第に細りゆきて、つひには虫の音のごとく衰へきたりぬ。いかに救はむとするも断巌絶壁に隔てられ救助の道なく、ただ手をつかねて神司らは、あれよあれよと絶叫するばかり、傍観するより外に方法とてはあらざりにける。

ここに高国姫の侍者に玉手姫といふ容色優れたる女性ありしが、玉手姫は、

『主神の一大事、吾は生命に替へて救ひまつらむ』

といふより早く着衣を脱ぎすて、数百丈の谷間を目がけ、急転直下、高国姫の溺れ苦しむ前に飛下り、高国姫を小脇にかかへ、辛うじて渓流はるかの下流に泳ぎつきこれを救ひあげたり。高国別夫妻の喜悦と感謝はたとふるに物もなく、玉手姫は高国姫の生命の親として優遇され、つひに玉手姫は二神司の寵愛ふかき神司

となりぬ。
高国別、高国姫二神は、玉手姫の奇智と才略と忠勇心に深く信頼し、城中のこと一切は、玉手姫のほとんど指揮を待たざれば何事も決定せざるまでに、漸次権勢を張るにいたりける。
ここに新高山を中心とする高砂島は、玉手姫の水ももらさぬ経綸によつて大いに治まり、よく天地の律法を厳守し、上下一致して神政の模範となり、国の誉も高砂の、千歳の松の永久に、治まる御代と思ひきや、高国姫は渓流に落ちたるとき、身体の一部に障害をきたし、それが原因となりて大病を発し、病床に呻吟し、身体は日に衰へゆくばかりなりける。
ここに高国別は、高国姫の寵愛ふかき玉手姫をして、昼夜看護に尽力せしめたるに、玉手姫の周到なる看護も何の効なく、病は日々重りゆくのみなりける。ここに花森彦は高国別を近く招き、玉手姫を一時も早く追放すべく厳命せられたるにぞ、高国別は天使の命をいぶかり、腑におちぬていにて言葉静に、
『かれ玉手姫は忠勇無比にして真心より懇切なる神司なり。高国姫の危急を救ひ

たるもまた玉手姫なり。多くの侍者ありといへども、玉手姫のごとき忠実なる者は外に一柱もなし。しかるに天使は何をもつて玉手姫を追ひだせと命じたまふか』と反問したりけれど、花森彦は、

『今は何事も語るべき時期にあらず、ただ吾命を遵奉せば足れり』

と、鶴の一声を残して殿内ふかく足早に進みいりぬ。しかして高国別は妻および玉手姫にむかつて、花森彦の厳命の次第を物語れば、高国姫は重き病の頭をもたげながら、驚きの眼を見はり、

『わが生命は玉手姫のために救はれ、今また懇切なる看護を受く、妾にとつて命の親なり。たとへ天使の厳命なりといへども、かかる没義道なる命には従ひがたし』

と非常に天使を恨み興奮の結果つひに上天したりける。高国別は妻の憤死を見て大いに悲しみ、かつ花森彦を深く恨むにいたれり。

ここに玉手姫は高国別の心中を察し、熱涙をうかべ、花森彦の無情冷酷を怒り、高国別をして信書を認め天使に捧呈せしめける。その文意は、

『高国姫は天使の冷酷なる命令を恨み憤死いたしたり。また玉手姫は誠意を疑はれ、かつ放逐の命をうけたるを大いに憤慨せり。我はいかに天使の命なりとて盲従するに忍びず、実に貴神を恨みまつる』

と云ふの意味なりし。花森彦はこれを披見してただちに高国別にたいし、天則違反の由を懇諭し、かつ、

『根の国にいたるべし』

と厳命したりける。高国別は天使の神通力を知らず、ただ単に無情冷酷の処置とのみ思惟し、自暴自棄となりて、花森彦の無道を天使長大八洲彦命に進言せむとしたりける。

（大正一〇・一一・一三　旧一〇・一四　加藤明子録）

第四章　鶴の首〔一〇四〕

高国別は妻に先だたれ、心さびしく新高山の城中にあつて、神業に奉仕しつつありけれども、花森彦の神意を了解せず、心中に不平を抱きゐたりける。玉手姫は高国別の常に快々として楽まず、不平無聊に日を送りつつあるを慰撫し、つひに命の絶対的信任を得るにいたり、ここに第二の妻と昇進したりける。玉手姫はその実は常世姫の間者にして、高国姫を谷間に落して苦しましめたるも、また重病におちいらしめたるも、玉手姫のひきゆる悪魔の暗中飛躍的悪計なりき。花森彦はさすがに名智の神将なればよくこれを察知し、高国別にむかつて、玉手姫を追出すべく厳命されたり。されど高国別は玉手姫を少しも疑はず、深く信任して天使の厳命を無情冷酷と恨み、かつ猥に怒ることは、天地の律法違反なるをもつて、これが処罰を命ぜられたりしなり。

高国別は玉手姫と夫婦になり、ひそかに天使長大八洲彦命に向つて信書をたてまつり、花森彦の横暴かぎりなき処置を、口をきはめて進言したり。大八洲彦命はただちに言霊別命をして新高山に急行せしめ、精密なる調査を命じたまひぬ。言霊別命はここに花森彦、高国別、玉手姫を命の前に来らしめ、審判を開始され

けるが、花森彦は言霊別命にむかひ、高国別夫妻が玉手姫の悪計にかかりをることを詳細に述べたり。このとき玉手姫は涙を流して泣き伏し、言霊別命にむかつて、花森彦の無情をうつたへ、かつ自分の誠意の貫徹せざることを言葉たくみに進言したりける。

ここに花森彦は高国別の天地の律法に違反し、かつ玉手姫を妻とせる不法の行為を述べたてたるに、高国別はうやうやしく言霊別命にむかつていふ。

『我は不幸にして高国姫に死別れ、神務を輔佐する者なく、実に煩悶苦悩せしに、忠実なる玉手姫は陰に陽に我が神業を輔佐し功績もつとも顕著にして、この高砂島においては彼にまさる完全なる輔助者なし。いかに一夫一婦の律法あればとて、我はすでに妻を失ひ孤独となれり。故にここに諸神司に信任あつき玉手姫を登用して、妻となすに何の不可かこれあらむ。一夫一婦は天地律法の精神ならずや』

と口をきはめて進言したりければ、言霊別命は、

『汝のいふところ一理なきにあらざれども、本嶋の主権者たる花森彦の認許を受けずして、独断的にかかる一大事を決行するは道理に反するものなり。今後は主

権者の認許をえて何事も決行すべし』
と厳命したまへば、高国別はいふ。
『貴神の厳命は実にもつとも千万なれども、本嶋の主権者たる花森彦はすでに天則に違反し、延いて稚桜姫命を幽界に降したてまつりたる無道の神司なり。我いかに天地を畏れ長上を尊べとの律法ありといへども、かかる不徳不義なる天使の命を聞くに堪へむや。君君たらずンば臣臣たらず、願はくは公明正大なる御裁断を乞ひ奉る』
と涙を流して陳弁するにぞ、言霊別命は高国別にむかつて、
『花森彦の罪は律法制定前の罪にして、国治立命のすでに恩赦されしは汝も知るところならむ。しかるに汝律法制定後、八頭の神となり、国魂の神に仕へながら、邪神のために誤られて最愛の妻を失ひ、玉手姫の容色に迷ひ、かつ長上の命を奉ぜず。これに越えたる律法破壊者はなし』
と宣示したまひ、
『高国別にしてなほ迷夢を醒さざれば是非なし』

といひつつ神殿より青色の玉を取りだし、玉手姫の面上を射照したまへば、今まで玉を欺く姫の姿はたちまち悪狐と変じ、雲を翔りて空中高く西天に姿を隠しける。高国別はここに初めて花森彦の明察に驚き、今までの無礼を涙とともに陳謝したりければ、言霊別命は深く将来を戒め、……何事も主権者の命を奉じ、神政に奉仕せよ……と厳命し、かつ……委細を大八洲彦命に報告し、何分の沙汰あるまで謹慎を表しをるべし……と地の高天原に帰還し、一伍一什を天使長に奏上したまひける。審議の結果高国別に厳しく注意をあたへ、今回の失敗の罪は問はざることとなりにけり。

しかるに常世姫一派の悪魔は、千変万化の悪計をめぐらし、つひには高国別をおとしいれ、蒙古別をしてその地位に代らしめ、花森彦を新高山の西南方に押込めたりければ、さしも平和の高砂島は大半常世姫の部下の占領するところとなりける。されど花森彦の至粋至純の霊魂は永く本嶋にとどまり、青色の玉とともにこの島に永久に隠されにける。花森彦の子孫も今に儼存して勇猛義烈の神民となり、神の御魂を維持しつつ弥勒神政の出現を鶴首して霊を研きて待おれりといふ。

（大正一〇・一一・一三　旧一〇・一四　土井靖都録）

第三篇　ロッキー山

第五章　不審の使神〔一〇五〕

ロッキー山は紺色の玉を、荘厳なる神殿を建立して鎮祭され、貴治彦八王神となり、靖国別八頭神となり、律法を遵守して、きはめて平穏に神事、神政は行はれけり。

ある時、靖国姫の居間の扉を、ひそかに叩く者あり。靖国姫は侍女とともに扉を開き、

『かかる深夜に戸を叩くは何者ぞ』
と問ひただせば、声に応じて、
『私は地の高天原なる国直姫命の密使にして、小島彦と申す者なり』
（附言、小島彦と称するは実は偽名にて、常世彦の間者、玉醜別といふ曲者なりける）
靖国姫は小島彦に一面識もなければその真偽を知らず、国直姫命の急使と聞きて大いに驚き、
『かかる夜陰にひそかに来りたまふは、地の高天原に何事か急変おこりしならむ。まづわが居間に』
と小島彦を引入れ、その用務をあわただしく息をはづませ問ひかくれば、小島彦は声を低ふし四辺に眼を配り、かつ畏れながら、
『隣神を遠ざけたまへ』
と仔細ありげなり。
靖国姫はその言のごとく隣神を遠ざけ、小島彦としづかに対座したり。小島彦

は声を低ふしていふ、

『地の高天原には大変事出来し、天使長大八洲彦命は、八王大神部下の神の悪辣なる計略におちいり、つひに上天せり。その他の天使は善後策につき協議中にして、一歩も外出することを得ず。上を下への大騒ぎなれば、我をして天使代理として遣はしたまふ。ゆゑに我が言は国直姫命の神言にして、天使の言も同様なり。一時も早く靖国別に貴下より伝言せられたし』

と顔色を変じていひければ、靖国姫はそのまま使者をわが居間に待たせおき、靖国別の寝殿にいたり、密使の次第を逐一進言したりけり。靖国別は大いに驚きしばらく双手を組ンで思案の体なりし。たちまち座を立つて、貴治彦の御殿に参向し、密使の次第を逐一奏上したりける。

貴治彦はこれを聞きて大いに訝かり、

『国直姫命の密使ならば、第一着に吾れに伝へらるべきはずなり。しかるに如何なる変事ありとて吾れを差しおき、しかも女性の居間をたたき、かかる一大事を報告すべき理由なし。想ふに反逆を企つる者の奸手段なるべし。汝らはすみやか

に、その密使を我が前にともなひ来れ。我は彼に会ひ実否を調査せむ』
と言葉を残して殿中に進み入りける。
靖国別は命を奉じ、小島彦を伴なひひそかに殿中に伺候し、貴治彦にむかつて謁を乞ひしに、命は小島彦にむかつて密使の次第を詳細に訊問したりける。小島彦は低頭平身して言葉たくみに、前述の次第を奏上し、一時もはやく貴治彦の地の高天原へのぼられることを懇請し、かついふ。
『徒に躊躇逡巡して時を移さば一層大事変を惹起し、つひには国直姫命の御身辺も危からむ。大神の一大事、早くこの場を立つて、吾らとともに地の高天原へ参向されたし』
と進言せる。
折からたちまち城下におこる鬨の声。命は急ぎ勾欄にのぼり山下はるかに見渡せば、夜陰のため確かにそれと判別はつかざれども、立ちならぶ無数の高張は、十曜の神紋記されありき。ただごとならじと元の座にかへり、靖国別に何事か耳語したまひける。矢叫びの声、鬨の声、次第に近づききたる。そのとき地の高天

原の従神司豊彦（実は常世姫の間者）は軽装のまま走りきたり階下に平伏し、

『恐れながら八王の神に注進し奉る。地の高天原はほとんど破壊の運命に逢着し、国治立命は行衛不明となり、大混乱状態におちいり、収拾すべからざる惨状なり。国直姫命は従者をしたがへ小島彦の跡を追ひ、ただ今出御相なりたり。相当の礼をつくして諸神司をして城門に奉迎せしめたまへ』

とあはただしく奏上したるにぞ、命は寝耳に水の注進にしばし茫然としてゐたりしが、ただちに靖国別に命じて城内の諸神司に非常召集を命じ、国直姫命を城門に迎へたてまつるの準備に着手されたりける。

命の命令一下とともに、諸神は各自礼装をととのへ、城門に奉迎したり。

ここに国直姫命は諸神司とともに悠然として入りきたり、慇懃に挨拶を述べ、地の高天原の惨状を物語られける。ここに国直姫命の命令を奉じて貴治彦、靖国別は少数の神軍をひきゐ、地の高天原へ応援のため参向することに決したり。

あまたの諸神将卒は靖国姫を守護し、ロッキー山の城中にとどまり、しばらく形勢を観望することとはなりける。

これよりさきに貴治彦は、国彦をひそかに地の高天原につかはし、実否を糺さしめ、かつ小島彦の密使の真偽を調査せしめゐたりしなり。

大八洲彦命は国彦の言を聞いておほいに驚き、

『地の高天原はかくのごとく平穏無事なるに、かかる密使をだすべき理由なし。察するところ邪神の奸策ならむ。このままに捨ておかば、ロッキー山は、いかなる運命に逢着するや計りがたし』

と、言霊別命に、国彦を添へ、あまたの従神とともに、ロッキー山に急ぎ出発せしめられたるぞ畏こけれ。

（大正一〇・一一・一四　旧一〇・一五　栗原七蔵録）

第六章　籠の鳥〔一〇六〕

国直姫命は靖国姫とともにロッキー山の諸神将卒を集め、高天原の惨状を物語

り、かつ、……我は天の御三体の大神の命を奉じ、ロッキー山に地の高天原を建設し、国治立命を迎へたてまつり、天地の律法を厳守し、もつて至善至美なるミロクの神政を布かむとす。汝ら諸神将卒心を合せ我が命を奉じ、力を一にして、もつて神政成就のために努力せよ……と宣示したり。

諸神将卒は一点の疑ひもなく、この宣示を遵守し、ますます結束を固くし、各城門には勇猛なる神将を配置し、固くこれを守らしめたり。このとき東天をとどろかし、天の磐船に乗りてきたる神あり、靖国別に面談せむと、眉目清秀威厳犯すべからざる言霊別命がこの場に現はれたまひける。東門の神将玉国別は、この旨を国直姫命に奏上しければ、命はただちに大広間に諸神将を集め、列座せる中央に言霊別命を招き、その来意を尋ねける。

ここに言霊別命は、

『貴治彦の使者国彦の進言により、高天原の混乱状態に陥り、国直姫命は身をもつて免れ、大八洲彦命は昇天し、国治立命は行衛不明となりたまひたりとの密使ロッキー山に来れりと聞き、不審にたへず、事の実否を調査せむために、我は大

八洲彦命の使神として出向せり。今日の地の高天原はきはめて平穏無事なり。したがつて国治立命をはじめ、国直姫命、大八洲彦命はすこぶる健全にして神務に鞅掌せられ、天地の律法は完全に行はれつつあり。しかるに何者の奸策にや、当城にむけ虚偽の密告をなし当山を攪乱せむとはする、貴下は何者なるぞ』

と国直姫命にむかつて詰問せり。このとき国直姫命は容色をあらため威儀を正し、

『汝言霊別命と自称するも我はこれを信ぜず。現に国直姫命は我なるぞ。しかるに国直姫命高天原にあり、大八洲彦命も健全に神務に従事せりとは虚偽もまた甚だしからずや、汝は「詐るなかれ」といふ天地の律法を破りたる邪神なり、国直姫命あに二柱あらむや』

と色をなして言ひ放ちけるにぞ、ここに諸神将は、……我らをいつはる不届至極の邪神、贋言霊別命を厳罰に処せむ……と、いふより早く目と目を見合せ、ただちに立つて命を後手に縛りあげ、口に猿轡をはませ、神卒をして泥深き堀の中に投棄し、凱歌を奏しふたたび国直姫命の御前に出で鼻高々とこの顛末を奏上したり。国直姫命は賞詞を賜はるかと思ひきや、……汝らは『殺すなかれ』との天則

に違反せり。すみやかに根の国に退去を命ず……と厳かに言ひわたしければ、案に相違の神司らは梟の夜食に外れたるごとき不平面にて、神将に引立てられ牢獄に投げ込まれける。一方言霊別命は辛うじて泥中より這ひ上りしところを番卒に見つけられ、高手小手に縛められて牢獄に投げこまれ、無限の苦痛をなめたまひける。

折しもどこともなく微妙の音楽聞え、紺碧の蒼空より五色の雲に乗り、あまたの神将をしたがへ十曜の神旗を幾十ともなく押したてて、ロッキー山にむかつて下りきたる、栄光と権威の具はれる大神現はれましぬ。国直姫命は恭敬礼拝拍手してこれを迎へ、……国治立命様御苦労に存じ奉る……と大声に奏上したれば、あまたの神司は命の声を聞くと斉しく恭敬礼拝低頭平身、礼の限りをつくして奉迎し、歓喜の涙にくれにける。

ここに国直姫命は国治立命を奥殿に案内し奉り、かつ諸神司を集めて地の高天原を天の大神の命により、ロッキー山に遷されしことを宣示しける。諸神将卒は欣喜雀躍手の舞ひ足の踏むところを知らざりし。時しも天の鳥船に乗りて、地の

高天原より八王神なる貴治彦、八頭神なる靖国別帰りきたり、東門に降下し、番卒にむかつて開門を命じたり。番卒はおほいに驚き、唯々として門を開き二神将を通したり。二神将はただちに奥殿に気色をかへて進み入り、靖国姫を一間に招き、高天原の実況を物語り、かつ、当山に逃げきたりしといふ国治立命は、その実常世姫の部下の邪神なりと語れば、靖国姫はおほいに驚き、かつ、その真偽に迷はざるを得ざりける。

ここに貴治彦、靖国別は城内の諸神司を集め、地の高天原の実況を伝達せむとし城内一般に令を発したるに、偽国直姫命は陰謀の露見せむことを恐れ、みづからも諸神将に令を発し、大広前に集まらしめける。諸神将卒は一柱として国直姫命を偽神と信ずる者なく、かつ偽の国治立命を一層深く信頼しゐたりける。このとき貴治彦、靖国別は正座になほり、偽の国直姫にむかつて、貴治彦は、

『汝はいづれより来りし邪神なるか、有体に白状せよ。返答次第によりては容赦はならじ』

と双方より詰めかけけるを、国直姫命はカラカラとうち笑ひ、

『汝は主神にむかつて無礼の雑言、「長上を敬へ」との律法を破る反逆者ならずや。また汝は地の高天原にいたりてその惨状を見きはめ帰りしにもかかはらず、吾にむかつて何れの邪神ぞと口をきはめて罵るは、これはまた律法違反に非ずや。我はただちに奥殿に入り、国治立命に汝が無礼の次第を逐一奏上し奉らむ、しばらく控へよ』

と、足音荒く奥殿に急ぎ進入したりしが、城内の諸神将はこの光景を見てやや不審の雲に包まれゐたり。貴治彦、靖国別は怒心頭に達し、二神司は共に刀の柄に手をかけ、国直姫命を一刀の下に切り付けむと決心したりしが、たちまち天地の律法を思ひ出し……「怒る勿れ、殺す勿れ」いま我短慮を起しなばみづから天則を破る者なり、ああ如何にせむ……と思案にくるるをりしも、奥殿より国治立命あまたの侍神を従へ、悠然と立ち現はれ、

『国治立命これに在り、汝何ゆゑなれば天地の大命を拝持する国直姫命にむかつて暴言を吐くや、汝は天地の律法を破壊する邪神なり、一時も早くこの場を立去れ。万一吾が言に違背せば、やむを得ず汝ら二人を、根の国に退去を命ず』

と、言辞おごそかに伝へければ、城内の諸神将卒はいづれも真正の国治立命と信じ、この二人を天則違反者となして、ロッキー山を退去せしめたりける。ここに貴治彦はモスコーに逃れ、蟄居して時期を待つこととなりぬ。また靖国別夫婦は何処ともなく落ちのび、行衛不明となれり。

附言　この国治立命といふは六面八臂の邪鬼の変化にして、国直姫命は常世姫の部下醜玉姫なり。かくしてロッキー山は悪魔の手におちいり、諸神将卒は、その邪神たることを覚る者なく、ここに偽高天原はある時期まで、建設されゐたりしなり。

（大正一〇・一一・一四　旧一〇・一五　河津雄録）

第七章　諷詩の徳〔一〇七〕

大八洲彦命は、ロッキー山は悪神のために根底より覆へされ、貴治彦、靖国別

夫妻のいづこともなく逃亡し、かつ言霊別命は敵のために捕はれ、牢獄につながれ呻吟せることを知り、ここに諸神司を集めて、ロツキー山を回復し、言霊別命を救ひ出さむことを協議したまひぬ。諸神司は鳩首謀議の結果、神軍をおこしてロツキー山を一挙に奪還するは、さまで難事にあらざれども、言霊別命の身辺にかへつて危険の迫らむことを慮り、表面これを攻撃することを躊躇したまひぬ。

ここに言霊別命の侍者に、忠勇義烈の誉高き言代別といふ者ありき。言代別は恐るおそる諸神将の前に出で、

『我つらつら考ふるに、ロツキー山の攻撃に先だち、言霊別命を救ひださざれば、命は人質同様なれば、魔軍は危急におちいりたる場合、命を殺害したてまつるは必定なり。我は「偽るなかれ」の厳しき律法を破りみづから犠牲となりて、我が主を救ひたてまつらむとす。幸にこの大任を我に許したまへ』

と誠心おもてに表はして嘆願したりければ、大八洲彦命は打ちうなづき、

『汝は主を救はむとして敵を偽らむとする行為は、元来忠良の真情よりいでたるものなれば決して罪とならざるべし。すみやかにロツキー山にいたりて言霊別命

を救ひだせよ』
と命じたまひぬ。言代別はおほいに悦び天にも昇る心地して、ただちにロッキー山にむかひける。言代別は円き石に金鍍金をほどこし、如意宝珠の珠を偽造して懐中に深く秘蔵し、ロッキー山の南門に現はれ、
『国直姫命に奉るべき珍宝あり。拝謁を乞ひたし。願はくば貴下らの斡旋によりこの由を奏上されむことを』
と、言葉たくみに頼みこみけるを、番卒はいふ。
『果して貴下が如意宝珠の珠を所持さるるならば、我らに一目拝観せしめよ。珠の有無をたしかめざるにおいては、軽々しく奏上することを得ず』
とてやや難色ありければ言代別は、
『貴下の仰せ実に尤もなり』
とて懐をひらき、金色燦然たる珠の一部を現はし見せたるに、番卒はこれを上級の神司に伝へ、漸次国直姫命にこの次第を奏上したりける。国直姫命は、
『ロッキー山には未だ如意宝珠の珠なきを憾みとす。しかるに天運循環してここ

に珍宝の手に入るは、いよいよ願望成就の時期到来せしならむ。すみやかに言代別を我が前によびきたれ』

といそいそとして命令したり。かくて言代別はしばらくして城内の神司にみちびかれ、国直姫命の前に現はれ一礼の後、懐中より珠を取出し八足の机上にうやうやしく安置し、

『吾こそは高白山の麓に住む言代別といふ者なり。いまや当山に国治立大神現はれたまふと聞きて歓喜にたへず。吾は往古より家に伝はる如意宝珠の珠を持参し、これを大神に奉り、もつて神業に参加せむと欲し、遠き山河を越えてここに参のぼりたり』

と言葉をつくして奏上したるに、国直姫命はおほいに悦び、その珠を手にとり熟視して満面笑を含み、

『実に稀代の珍宝なり。汝はこの珠を奉りし功により、いかなる望みなりとも叶へつかはさむ』

と宣言せり。言代別は頓首再拝、喜色満面にあふれ、

『実に有難き大神の御仰せ、御恩は海山に代へがたし。願はくば卑しき吾をして牢獄の番卒たらしめたまへ、これに過ぎたるよろこびはなし』

と願ひけるに、国直姫命は少しく首をかたむけ、

『心得ぬ汝が望み、かかる麗しき世界の珍宝を奉りたる功労者でありながら、何を苦しみてかかる卑しき職を求むるや』

と反問するを、言代別はただちに言葉を反していふ。

『諺にも喬木よく風にあたり、出る杭は打たれ、高きに昇る者は、地に落つることありと聞きおよぶ。吾は役目の高下を望まず、ただ誠心誠意大神に仕へ、神業の一端に加へたまはばこれに過ぎたる幸なし。それとも吾が技倆を大神において認めたまはば、其のとき相当の地位を与へたまふべし。急に上職をたまはるより漸次に重く用ゐさせたまはば、吾が一身にとりてもつとも安全ならむ』

との言に、国直姫命は言代別の名利を求めず、寡欲恬淡なるに感激し、ただちにその乞ひを容れて牢獄の番卒仲間に加へけり。言代別は日夜番卒として忠実に奉務し、心ひそかに言霊別命の繋がれたる牢獄を探りゐたりける。言霊別命は頭髪

長く背後に伸び、髭は胸先に垂れ、顔色憔悴して、ほとんど見擬ふばかりの姿と変じゐたまへば、言代別は命の御姿を認めること容易ならざりける。

あるとき国治立命出現の祝ひとして、ロッキー山の城内に祝宴を張られ、また獄卒一般は獄前において祝意を表するため、酒宴を催しける。獄卒は珍しき酒肴に酔ひ、あるひは舞ひ、あるひはうたひ、踊りて立騒ぎけり。中に言代別は立ちて歌をうたひ、踊りはじめたり。その歌は、

昔の昔のさる昔　猿が三疋飛ンできて
鬼に遂はれて二疋は逃げた。　残りの一疋捕まへられて
いまは鬼らの玩弄とせられ　暗い穴へとほりこまれ
消息せうにも言伝しよにも　いまは詮なしただ一言の
言霊別の神代と　現はれいでし言代別の
わけて苦しき暗の夜半　高天原より降りきて
お猿の命を助けむと　思ふ手段は有明の
十五の月のまンまるい　光をあてに飛ンで出よ。

猿が餅搗きや、兎がまぜる。　まぜる兎が言代別よ。
今年や豊年満作ぢや。　心持よき望月の
光とともに飛ンで出よ。　光とともに飛ンで出よ。
よいとさのよいとさ　さつさとぬけ出て東へ走れ。
東に羊が千疋をつて　猿をかかへて飛ンでゆく。

よいとさのよいとさ。

と節面白くみづから謡ひみづから踊り狂ふにぞ、あまたの番卒は何の意味なるやを知らず、ただ面白き歌とのみ思ひて笑ふばかりなりける。言霊別命はこの歌を聞きて言代別の我を救ひ出さむために番卒となり、合図の歌をうたひしものと大いによろこび、十五夜の月を待ちゐたまひぬ。昼きたり夜去りて、つひには仲秋の月の夜となりぬ。国直姫命以下の曲人は、高台に昇り月見の宴を催しゐたれば、番卒もまた一所に集まりて月見の宴を開き、酒に酔ひくるひ面白き歌をうたひて余念なくたわむれゐたりけり。このとき言代別は、ふたたび以前の歌をうたひ牢獄を見廻りぬ。ある牢獄の中より小声にて、

『言代別』

と呼ぶ声あり。疑ひもなく聞きおぼえたる主の声なるに、言代別は大いによろこび、ただちに戸をひらき縛を解き、やつれたる言霊別命を背に負ひ、東門指して逃げ出したり。

外には言霊別命の部下の神卒あまた現はれきたり、命を天磐船に乗せ、天空高くロッキー山を後に、地の高天原へ無事帰還したりける。言代別は何喰はぬ顔にて牢獄の戸を閉ぢ、もとのごとく酒宴の場に現はれ、あまたの番卒とともに酒に酔ひ踊り狂ひゐたり。後に残りし言代別は後日いかなる活動をなすか、趣味ある問題と云ふべし。

（大正一〇・一一・一四　旧一〇・一五　土井靖都録）

第八章　従神司の殊勲〔一〇八〕

望の夜の月影とともに、言霊別命の姿は牢獄より消え去りにけり。されど言代別の監守する獄舎にあらざれば、言代別には何の咎もなかりき。言代別は漸次重用されて、つひには国直姫命の参謀となりぬ。これよりロッキー山の城内はほとんど言代別の意志のままに一切の事物は処理さるることとなりける。

話はかはつて、地の高天原においては、大八洲彦命以下の諸神将は、言霊別命の帰還により一切の情勢を知悉し、このままに放任せば国治立命と偽称する常熊彦、および国直姫命と偽称する醜玉姫らの、いかなる奸策をめぐらし、つひには各地の八王八頭神司を籠絡し、地の高天原の神政を転覆せむとするやも計りがたし、躊躇していたづらに時日を移さば、遂に斧鉞を用ふるも及ばざるにいたらむ。よろしく二葉の内に刈りとるに如かずと、ここに天使大足彦をして諸神将卒を引率しロッキー山に向はしめ、東西南北の各門より一挙にこれを攻め落とし、邪神を膺懲し、天地の律法を説き諭し、心底より悔悟せしめむと、衆議一決したりければ、ここに大足彦は諸神将卒を引率し、天磐樟船を連ねて、天空を翔り、ロッキー山にむかひ勇ましく進発したりける。

大足彦の部将、足世彦は東門より、足永彦は西門より、大照彦は南門より、大嶋別は北門より、一斉に鬨をつくってロッキー城に攻めよせたる。時しもあれや一天墨を流せしごとく、月の光も星の輝きもなく、咫尺を弁ぜざるにいたりたり。にはかに騒ぐ鶏の羽音に国直姫命は驚き目をさまし、

『言代別は何れにあるや、敵軍にはかに押しよせたり。諸神司はすみやかに各門の守備につけよ』

と大声に呼ばはりけるにぞ、魔軍の諸神将は、国直姫命の声を目あてに、大広前に駈け集まりぬ。城内の参謀兼総指揮官たる言代別は、何故かすこしも姿を現はさざりき。諸神将は統率者を失ひ周章狼狽なすところを知らず。大足彦の率ゐる神将は堀を越え、壁を破り、門戸を破壊し、破竹の勢をもつて本城に進撃せり。

このとき言代別は血相かへて何処よりともなく走りきたり、

『事態容易ならず、国直姫命は奥殿に入り国治立命の身辺を守護したまへ、我はこれより、寄せくる数万の敵軍にむかひ、六韜三略の兵法をもつて敵軍を千変万化にかけ悩まし、一柱ものこさず濠の藻屑となし、御神慮を慰め奉らむ。諸神将

は我にしたがひ防禦に従事せよ』
と言葉おごそかに令を下し、みづから東門に向ひぬ。
東門には大足彦、足世彦とともに侵入せむとする真最中なりき。言代別は大足彦にむかひ、
『我は言霊別命の従者言代別なり、国の真澄の鏡を出してロッキー城を照させたまへ』
と呼ばはりぬ。このとき城内の諸神将は、言代別の指揮のもとに残らず東門に集まりゐたるが、大足彦は、国の真澄の鏡を取りだし、敵軍に向つて射照したるに、城内の神軍の六分までは、邪鬼、悪狐、悪蛇の正体をあらはし、鏡の威徳に照されて、旭に霜の消ゆるがごとく煙散霧消したり。言代別は大足彦の先頭に立ち、常熊彦、醜玉姫の奥殿に進みいり、戸の外より大音声にて、
『我いま如意宝珠の玉を取りいだし敵軍を照すやいなや、敵は玉の威徳にちぢみあがり、蜘蛛の子を散らすがごとく四方に散乱して、もはや城内には敵の片影をも認めず、かくなる上はいつまでも奥殿に忍ばせたまふに及ばず、この戸を早く

開かせたまへ』

と呼ばはりぬ。国治立命、国直姫命の偽神は言代別の言葉を聞きおほいに安堵し、たちまち内より戸を開きたるを、大足彦はただちに奥殿に進入し、国の真澄の鏡を懐中より取りいだし、二人に向つて射照しはじむるや、たちまち六面八臂の邪鬼と変じ、金毛九尾の悪狐と化し、魔神の正体をあらはし、常世城目がけて黒雲に乗じ雲を霞と逃げ去りぬ。幸にロッキー山の紺色の玉は、魔軍に汚されず、厳粛に鎮祭せられありける。

ここに大足彦は言代別の忠勇義烈を賞し、言代別に命の名を与へて言代別命と称せしめロッキー山の主権者となし、八王神の列に加へられける。つぎに東門の武将足世彦に命の名を与へ足世彦命と称せしめ八頭の列に加へたまひ、つぎに足永彦、大照彦、大嶋別をのこし、ロッキー城の部将として留めおき、みづからは少数の神軍とともに天の磐船に乗り、無事高天原に凱旋せられたりと思ふとたんに、冷たき水の一二滴、襟首に何処からともなく落ちきたり、驚いて正気に復れば、身は高熊の霊窟の入口に両手を組み端坐したまま、鎮魂の姿勢を取りて居た

りける。
（大正一〇・一一・一四　旧一〇・一五　加藤明子録）

第四篇　鬼城山

第九章　弁者と弁者〔一〇九〕

寒風吹き荒み、牡丹餅雪さへ降りきたる高熊山の巌窟の入口に、霊縛を受け、身動きならぬ苦しさに、二時間ばかりを費やせしと思ふころ、またもや王仁は霊界に逍遥したりける。

たちまち巌壁に紫紺色の雲の戸帳がおろされ、中より荘重なる大神の御声聞こ

ゆると同時に、紫紺色の雲の戸帳は自然にまきあげられ、正面には、えもいはれぬ荘厳なる宝座が設けられ、あまたの天使を従へて国治立命、国直姫命と共に中央に着座され、ふたたび神界探険の厳命を降したまひしが、宝座は忽然として消え去りし刹那に、自分はある高山の頂に登り、鬼城山におこれる種々の経緯を見るとはなしに、見聞しゐたりける。

鬼城山には灰色の玉を鎮祭し、真鉄彦を八王神となし、元照彦を八頭神となし、真鉄姫、元照姫を八王八頭神の妻として、永遠に守護せしむることに決定された り。しかるに鬼城山にはすでに棒振彦の変名なる美山彦、高虎姫の変名なる国照姫ら、常世姫の権威を笠にきて傍若無人の挙動多く、加ふるに杵築姫、清熊、猿世彦、駒山彦らの邪神とともに武威を輝かし、容易に国治立命の神命を奉ぜず、かつ律法を遵守せず、地の高天原より八王八頭の神司の赴任をさまたげ、魔神を集めてあくまで対抗しつつありしなり。

ここに大八洲彦命は諸神将をあつめ、美山彦の罪状にたいし、

『天地の律法御制定により従前の罪悪を大赦せられたれば、この際本心に立ち帰

らせ、神業に参加せしめなば如何』
と提議されたり。諸神将は天使長の御意見に賛成したてまつらむと、満場一致をもつて命の提議を可決したり。されど邪智ふかき美山彦以下の曲人らの一筋縄にては到底城を追ひがたきを知り、竜宮城の侍女にして弁舌に巧みなる口子姫をつかはし、神意を伝達し、すみやかに大神に帰順せしむべく旨を含めて鬼城山に遣はしたまひける。

口子姫は照妙のうるはしき衣を着かざり、二柱の侍女をともなひ、鬼城山にいたり、美山彦をはじめ国照姫に面接を申込みたり。美山彦らは、口子姫を奥の間にみちびき来意を尋ねたるに、口子姫は一礼して後おもむろにいふ。

『このたび天地の律法地の高天原において制定され、世界の各所に十二の国魂を鎮祭し、八王八頭の神司を任命したまひたり。しかして鬼城山は真鉄彦、真鉄姫、元照彦、元照姫の主宰のもとに於かるることに決定されたり。汝はすみやかにこの神命を拝受し、鬼城山の城塞を明けわたし、地の高天原に参上りて神務に奉仕されよ。以上は天使長大八洲彦命の直命なり』

と淀みなく申渡しけるに、国照姫は、膝をすすめてその処置の不当なるを罵り、かつ懸河の弁舌をふるひて滔々と弁駁につとめたり。されど口子姫は名題の弁舌者なれば、負ず、劣らず布留那の弁をふるひて、神命の冒すべからざる理由を極力弁明したりけれども、国照姫もさすがの悪漢、口子姫が一言述ぶればまた一言、たがひに舌鋒火花を散らし鎬を削り、弁論はてしもなく、寝食を忘れて七日七夜を費やしけるが、布留那の弁者口子姫も、つひに国照姫の舌鋒に突き破られて兜を脱ぎ、国照姫の幕下となり、地の高天原に三年を経るも復命せざるのみならず、その身は鬼城山の美山彦に重用され、高天原に一時は反旗を翻すにいたりける。

大八洲彦命はふたたび諸神将を集めていふ。

『鬼城山に遣はせし口子姫は三年を経るもいまだ復命せざるのみか、もろくも国照姫の佞弁に肝をぬかれ、いまや鬼城山の重臣となり、反旗を翻さむとせりと聞く。鬼城山の美山彦一派にたいし膺懲の神軍をむけ、一挙にこれを討滅せむは容易の業なれども如何せむ、天地の律法は厳然として日月のごとく、毫末も犯すべからず、諸神の御意見承りたし』

と諸神司に対しはかりたまひける。ここに天使神国別命すすみいで、『天地の律法は「殺す勿れ」とあり、仁慈をもつて万物に対するは、大神の御神慮にして、かつ律法の示すところなり。大神は禽獣虫魚にいたるまで、広く万物を愛せよと宣ひ、かつ律法に定めおかれたり。彼らはいかに猛悪の神なりといへども、一方の頭領と仰がるるにおいておや。望むらくは再び使をつかはして大神の神慮を懇切に説き示し、大義名分を悟らせなば、つひに心底より帰順するにいたらむ。よろしく吾妻別の一子須賀彦を遣はしたまへ』と進言しければ、天使長はこの言を容れ、須賀彦を第二の使者として、鬼城山に派遣したまひける。

（大正一〇・一一・一五　旧一〇・一六　森良仁録）

第一〇章　無分別〔一一〇〕

天使長大八洲彦命の命により、須賀彦は第二の使者として、伴をも連れずただ一騎竜馬にまたがり蹄の音高く、鬼城山にむかひて出馬したりけり。須賀彦は、容貌うるはしく眉目清秀にして、あくまで色白く肌滑らかにしてあたかも天女の再来かと疑はるるばかりの美男子なりけり。

須賀彦は鬼城山の城門を何ンの憚る色もなく、竜馬に鞭うち奥ふかく侵入し、玄関先に馬をすて奥殿に進みいり、大音声をあげていふ。

『我こそは、地の高天原を司りたまふ国治立命、天使長大八洲彦命の直使として出馬せり、言ひ渡すべき仔細あり。美山彦はあらざるか、国照姫は何処ぞ。すみやかに我が眼前にまかり出で、直使の命を承れ』

と呼ばはりし。その言霊の力は、実に雷鳴のごとく轟きわたり何となくすさまじき中にも優しみありき。美山彦は須賀彦の言霊にのまれ、やや恐怖の念にかられて躊躇逡巡の色見えにける。

この時国照姫は一室より走りいで、須賀彦の容姿端麗にして、どことなく権威に充てるその態度に荒肝をひしがれ、何の言葉もなく頭を垂れて黙視するのみな

りしが、又もや静に入りきたる女性あり。須賀彦は一目見るよりハツタと睨み、『反逆不忠の口子姫、見るもけがらはし、片時も早くこの場を立ち去れよ』とにらみつけられ、口子姫は恨めしげに須賀彦の顔を見あげ、袖をもつてしたたる涙をふきながら四辺に眼を配り、わが胸を押へ、何事か口には出さざれど秘密のこもれることを暗示する様子なりける。

美山彦の一女に小桜姫といふ絶世の美しき若き女性あり。この小桜姫は最前よりの須賀彦の容貌端麗なるを、戸の陰より垣間見つつ心臓に劇しき波を打たせゐたるが、つひに耐へかねて顔を赤らめながら戸を押しひらき、静々と須賀彦の立てる前にはづかしげに両手をつき、慇懃に述ぶる挨拶も口ごもるそのしほらしさ。

小桜姫は思ひきつて面をもたぐるその刹那、須賀彦とたがひに視線は合致せり。いづれ劣らぬ花紅葉、色香争ふ美人と美人、両者の眼は何事かを物語るやうに見へにける。このとき美山彦、国照姫、口子姫はその場に現はれ、山海の珍味をもちだし須賀彦を丁寧に饗応し、ここに五人の神司は互ひに打ちとけ談話を交換したりける。

須賀彦はおもむろに使者のおもむきを伝へ、美山彦の返答を促しければ、美山彦は、

『使者のおもむき、たしかに拝承し奉る。しかしながら、城内の諸神司をあつめ一まづ協議を遂ぐるまで、数日の猶予を与へたまはずや』

と顔をやや左方にかたむけ、須賀彦の返答いかにとその顔を見上げたり。須賀彦はその請求を許し、数日城内に滞在し返事を待ちゐたり。国照姫は小桜姫に命じ、須賀彦の身辺に侍せしめ用務を便ぜしめける。

遠きやうでも近く、難きに似て易きは男女の道とかや。ここに須賀彦、小桜姫は人目の関を破りて割無き仲となり終りぬ。この様子をうかがひ知りたる国照姫、口子姫はおほいに喜び、須賀彦をとどめて婿となさむと思ひ、種々心を配りゐたりける。

それより須賀彦と小桜姫は両親の黙認のもとに夫婦きどりになり、緊要なる大神の使命を忘却するにいたりけるぞ歎てけれ。須賀彦は小桜姫に魂をうばはれ日夜姫を相手に淫酒にふけり、あまたの城内の神司とともに花見の宴を催したるに、

諸神司は酒に酔ひつぶれ、かつ庭前にいまを盛りと咲き香ふ桜木の下に、あるひは謡ひあるひは舞ひ、鐘や太鼓の拍子に乗つて踊りくるひ、かつ須賀彦の手をとり、「貴下も謡ひたまへ、舞ひたまへ」と、諸手をとつて大桜木の下に誘ひ、春風に散る花吹雪を浴びつつ愉快気に、須賀彦は酒の威力を借りてうたひ出しけり。その意味の大要を、今様式にここに挙ぐれば左の意味の籠れる歌なりける。

『花の顔色月の眉　富士の額に雪の肌
天津乙女の再来か　小野の小町か照手の姫か
ネルソンバテーか万竜か　欣々女史か楊貴妃か
褒似の姫か難波江の　よしもあしきも判きかぬる
富田屋八千代も丸跣　年は二八か二九からぬ
小桜姫の微笑は　天下の城も傾けむ
鬼神もおそるる幽庁の　閻魔も【よだれ】を流すらむ
優び姿は海棠の　雨の湿ほふごとくなり

かかる美人がまたと世に　　三千世界にあるものか
有明月のまるまると　　背は高からず低からず
一度にひらく紅梅の　　露に綻ぶ姿かや
口より見する歯の光　　光明姫か衣通姫の
美し命の再生か　　すずしき声は鈴虫か
さては弥生の鶯か　　松の神代に遇ふよりも
小桜姫ともろともに　　仲も吉野の山ふかく
竹の柱に茅の屋根　　虎狼の住家をも
なぞか厭はむ糸桜　　夜半の嵐に散るとても
散らぬ両人の恋衣　　恋に上下の隔てなし
隔てないのが恋の道　　隔てないのが恋の道
心須賀彦須賀々々と　　八雲の琴の須賀掻も
シヤツチン　シヤツチン　シヤツチンチン　シヤツチン　シヤツチン　シヤツチンチン』

と二弦の琴を弾じながら、あたりかまはず土堤を切らして踊り狂ふ。

かくして須賀彦は、つひに恋の虜となり、地の高天原への復命をなさず、敵城の養子婿となりすまして不義の臣とはなりにける。楽しき鴛鴦の契もつかのま、いづこよりとも知らず白羽の矢は飛び来りて須賀彦の胸を貫ぬきたれば、あはれ悶死を遂げにけり。あゝ、実に慎むべきは男女の道にこそあれ。

（大正一〇・一一・一五　旧一〇・一六　有田九皐録）

第一一章　裸体の道中〔一一一一〕

ここに国直姫命、大八洲彦命は、国治立命の命を奉じ、口子姫を使者として、鬼城山に遣はしたまへども、口子姫は国照姫に言向和合され、三年になるも復命せず、よつてさらに須賀彦をつかはし、神命を伝へしめたまへども、これまた、小桜姫の容色に迷ひて命に背き、美山彦の養子となりてこれ又三年にいたるも復

命せず、何れの神を遣はして、これを言向和合さむやと、国直姫命は、諸神を集めて言問はせたまひける。

ここに諸神司協議の結果は、天使言霊別命を使神として派遣することに決定したれば、命は、ただちに命を奉じ、村幸彦をしたがへ鬼城山にいたり、美山彦に、大神の大命を、いと厳かに申し渡されたり。

美山彦、国照姫は、数度の戦闘にうち破られ、千載の怨恨をいだける敵将、言霊別命の直使と聞き、おほいに怒り、平素の鬱憤を晴らすは、今この時なりと、さあらぬ体に装ひ、懐中に兇器をのみ、わざと恭しく他意なきふうを装ひ、命に海山河野の珍物をもつてつくりたる食膳を奉り、甘き酒をすすめむと言ひながら、国照姫はひそかに口子姫をわが居間に招き、毒酒をすすめることを小声に命令したり。口子姫は、今は鬼城山の使臣として重く用ひられつつあれども、なんとして天使言霊別命に毒酒をすすめ奉るに忍びむやと、心は矢竹に焦燥てども、傍に国照姫の目を瞠り、眼をすゑて、その動静を窺ひつつあれば、いかんともなすに由なく、やむを得ず、酒に毒を混入したりける。

この時同じ形したる二個の甕に酒を盛り、一個は毒の入らざる清酒を盛り、国照姫は、頭髪一筋を抜きて酒甕を縛り、毒酒の印とせり。二本の酒甕は命の前に据ゑられたり。ここに言霊別命、美山彦は晩餐をともにすることとなりぬ。口子姫は、件の頭髪をとり外し、清酒の甕に括りつけ、素知らぬ体を装ひゐたりける。

晩餐には国照姫、口子姫あらはれて、酌婦の用をつとめたるが、国照姫は、頭髪を括りたる甕をとり、これを言霊別命に勧めたり。また口子姫は印なき甕をとりて、美山彦にすすめ、つぎに国照姫にもこれを勧めける。あまたの侍女は酒杯のあひだを往来し、歌舞音曲を奏でてこの宴を賑しぬ。酒はおひおひと進むにしたがつて酔がまはりぬ。このとき美山彦は、にはかに胸苦しとて席をはづし、言霊別命に無礼を陳謝しつつ、酔歩蹣跚として寝所に入り、まもなく頭痛をおこし、腹を痛め、咽喉よりは盛ンに黒血を吐き、七顛八倒苦しみける。侍臣は驚き、水よ薬よと周章狼狽、上を下への大騒ぎとなりける。時しも国照姫はまたもや頭痛を発し、腹を痛め、これまた七顛八倒苦しみて黒血を吐きその場に打ち倒れたり。言霊別命はこれを見て大いに驚き、国照姫の介抱に余念なかりける。

口子姫は、言霊別命にむかひ目くばせしながら、美山彦の寝所にかけつけ、介抱に従事したりしが、幸にも、毒酒の量は少なかりしためか、数日の後夫婦は恢復を見るにいたりける。言霊別命は、吾身を毒害せむとし過つて夫婦が、毒酒を飲みたるその顛末を毫も知らず、また口子姫の反り忠義の所為なることをも知らずにゐたりしなり。

美山彦は、ここに新しき湯槽を造り、なみなみと溢るるばかり湯を沸し、まづ言霊別命を賓客として、第一着に入浴を勧めけるが、口子姫は、言霊別命に何ごとか私語つつ一間に入りて衣服を脱ぎ、これを言霊別命に着せしめ、みづから言霊別命の衣裳を身に着し、悠々として湯殿に入りぬ。

この時、国照姫は男神の浴殿に入りしことをたしかめ、ただちに美山彦に急告したれば、美山彦は時をはからひ、大身の鎗を提げ浴殿に入るや、たちまち魂消る女の叫び声。よくよく見れば思ひきや、わが寵臣の口子姫ならむとは、驚きあわてこれを援けむと駈けより見れば、湯槽の湯は、赤色に変じ、口子姫の身体は強直したるまま朱に染りて絶命しゐたりける。

ここに美山彦は、……言霊別命をとり逃せしか残念至極なり、たとへ鬼神の勇ありて天を翔り、地を潜るとも、要害きびしきこの城内を遁るべき手段なし、あくまで探し索めて、多年の怨みを晴らさむ……と、あまたの従臣に命を下し、血眼となりて城内くまなく捜索しける。このとき城門を走り出むとする女性あり。清熊は怪しみてあとより追ひすがり、背後より襟筋目がけて無手とつかめば、女神に変装せる言霊別命は手早く衣を脱ぎ捨てて裸体となり、城の堀にザンブとばかり飛び込みたまひ、清熊の手には、口子姫の着衣が残れるのみ。言霊別命は、水底を潜り、向ふ岸につき、辛うじて命を拾ひたまひぬ。命はそれより裸体のまま、鬼城山の城塞を後にして、韋駄天走りに、北へ北へと落ち延びたまひぬ。

寒気はますます烈しく歯の根も合はぬ苦しさをこらへて、とある荒廃家に逃げこみ、老人夫婦の厚意により、垢つき破れたる衣を与へられ、ホツと一息つきながら、なほも一目散に北方さして逃げ出したまへば、はるか後方より、声を限りに呼ぶものあり。ふりかへり見れば、まがふ方なき従臣村幸彦なり。命は彼に神策を授け、ふたたびこの場を引返して、鬼城山の偵察に向はしめたまひける。村

幸彦は今後はたして、いかなる活動をなすならむか。

（大正一〇・一一・一五　旧一〇・一六　栗原七蔵録）

（第三章～第一一章　昭和一〇・一・一五　於今治市吉忠旅館　王仁校正）

第一二章　信仰の力〔一一二〕

ここに村幸彦は言霊別命の内命により、ふたたび鬼城山にとつて返し、城内外の偵察に苦心しゐたり。あるとき猿世彦、清熊らの一行に城外において出会したり。清熊は村幸彦の姿を見るなり直ちに従臣らに命じ、四方より包囲して難なくこれを捕縛せしめ、直ちに城内に連れ帰り、言霊別命の所在をきびしく訊問したりける。村幸彦は空とぼけて、

『言霊別命は城内にましまさむ。汝らは何を狼狽して吾に向つてかかる奇問を発し、かつ吾らを捕縛せしや、思ふに汝らは酒興のあまり、滑稽にも我を愚弄する

心算ならむか。いやしくも天使言霊別命の従臣なり。いかに卑怯未練の命なりとて、何を苦しみて城内をひそかに脱出するの要あらむや、囈語もほどほどにせられよ』

と大口を開けてからからと打笑ひける。城内の魔神どもは真剣になり、たちまち憤怒の色を現はし、口々に罵りつつ執念深くも、

『命の所在を汝は知るならむ、逐一白状におよべ』

とたたみかけて厳しく訊問の矢を放ちしが、村幸彦は神色自若として何の怖るるところなく、ますます空とぼけて笑ひくづれける。

魔神どもは、

『かかる狂人を相手とするはあたかも暖簾と腕押しをなすがごとし。エエ面倒なり、此奴の衣類を脱がせ、冷水を頭上より浴びせかけ、逆上を下げやらむ』

といふより早く寄つてたかつて真裸となし、氷の張りつめたる池端に連れゆき、氷を打ち破り、池中に陥れ、頭上よりは長柄の柄杓をもつて幾千杯ともなく、水を代るがはる浴びせかけたり。

村幸彦は心中に深く神を念じ、小声になりて天津祝詞をしきりに奏上しつつ、たちまち身体冷え、凍え死するかと思ひきや、村幸彦の身体よりは濛々と湯煙たち昇り、少しも寒気を感ぜず、悠々として湯に入りしごとき愉快にみちたる顔色に微笑をうかべ、

『ヤイ魔神、湯が熱いぞ、も少し水をくれないか』

と大声に笑ひける。魔神どもは一体合点ゆかず、かかる厳寒の空に投込まれその上幾千杯とも限りなき寒水を頭上より浴びせかけられ、神色自若として、何の苦痛も感ぜざるのみか剰さへ……この湯は熱い、も少し水をくれ……とは正気の沙汰にあらざるべし。かかる大狂人をいつまでも池中に投じて苦しめむとするも何の益なしと、つひに村幸彦を救ひ上げたりしが、村幸彦の身体よりは盛ンに湯煙たち上りけり。これまつたく村幸彦が信仰の力と、国治立命の厚き神助によるものなりけり。

美山彦、国照姫はこの奇瑞を訝かり、このたびは赤裸のまま北風吹き荒ぶ廊下の柱に村幸彦を縛りつけ、寄り集りて嘲笑罵詈をきはめ、かつ、

『汝は大狂乱の大馬鹿者ぞ。見かけによらぬ土間助よ』
といひつつ竹箒をあまた携へきたり、四方八方より頭といはず顔といはず身体一面を、あるひは打ち或ひは突き、つひには竹箒の柄にて頭部を幾百千ともなくなぐりつけたり。されど村幸彦は何の苦痛も感ぜず、平然として笑を含み、
『鬼城山の魔神どもの腕力の弱さよ』
と腮をしやくりて嘲笑したりける。ここに美山彦は烈火のごとく憤り、
『然らば吾らの力を現はしくれむ。従臣どもは各自鉄棒を携へきたつて、彼が面上を力にまかせて打ちすゑ粉砕せよ』
と命ずれば、鶴の一声従臣どもはたちまち鉄棒かざして現はれ、前後左右より村幸彦を力かぎりに頭部面部の嫌ひなく打ちすゑたり。されど村幸彦は心中深く神を念じ、天津祝詞を奏上しつつありしためか、さしも烈しき鉄棒の乱打も鎧袖一触の感じもなく、口をきはめて魔神どもの非力を嘲笑したり。彼らはますます怒り、つひには面上目がけて、各自に痰唾を吐きかけ辱むとしたるに、いかがはしけむ、いづれの痰唾も村幸彦の面上にいたらず中空に飛びあがり、たちまち落下

して各自の面上に、数十倍の量と数十倍の汚穢とを増して滝のごとくに降りきたりぬ。

美山彦はおのれの吐き出したる痰唾に祟られ、面部一面に布海苔を浴びたるごとく、青白き瓜実顔は、たちまち紙雛をなめて吐きだしたるごとき滑稽なる顔貌とはなりにける。

美山彦はますます怒り大刀を抜きはなち、村幸彦に切つてかかれども、村幸彦の身体は石地蔵のごとく、切れども突けども何の答へもなく、剣は曲り刃は欠れ、たちまち鋸の刃のごとくなりにける。こんどは美山彦奥に入り、ねぢ鉢巻に赤褌、袴の股立高くからげ、大身の鎗をしごきながら、村幸彦の胸先目がけて「エヽ」と一声、電光石火の勢をもつて突込みしが、いかがはしけむ、鎗の穂先は葱の葉のごとく脆くも曲り、美山彦は空を突いて、ひよろひよろと数十間ばかり前方に走り、どつとばかりに倒れける。このとき高手小手に縛られたる太き麻縄を見て村幸彦はからからとうち笑ひ、

『かかる腐れ縄を吾にかけて何とする。いらざる戯事をすな。鼻屎にて的を張り

しごとき汝らの計画、実に失笑に値す』

といひも終らず、「エヽ」の一声、さしもの強き太縄もばらばらに寸断されたり。この様子を最前より窺ひゐたる須賀彦、小桜姫は走りきたつて両手をつき、村幸彦にむかつて、

『貴下は如何なる尊き強き神人にましますぞや。吾らはここに前非を悔ひ、真情より反逆の罪を謝し奉る』

と畏るおそる述べたてたり。傍にありし美山彦、国照姫は声をはなつて号泣し、神徳の威大なるに感じ、夢のさめたるごとく始めて本心に立ち帰り、大八洲彦命の直命を奉じ、鬼城山をこころよく開け渡し、一同は従臣を率ゐて地の高天原に参向し、帰順の意を表し、犬馬の労を執らむことを誓ひける。

ここに目出度鬼城山は真鉄彦、八王神となつて、灰色の玉を瑞の御舎仕へまつりて恭しく鎮祭し、元照彦は八頭神となり、真鉄姫、元照姫は共に城内にとどまり、夫の補佐を勤むることとなりける。

天地の律法はもつとも厳重にして毫末も犯すべからざるものとはいへども、発

根より改心と認められたる時は直ちにこれを許さるるものなり。実に改心にまさる結構は無かるべし。現に悪逆無道の極みをつくしたる美山彦、国照姫の罪を赦し、地の高天原の神業に参加せしめたまひしは、大神が無限の御仁慈の発露といふべし。

（大正一〇・一一・一五　旧一〇・一六　土井靖都録）

第一三章　嫉妬の報〔一一三〕

長白山には白色の玉を、荘厳なる神殿を造営してこれに鎮祭し、国魂の神の御神体となし、八王神は有国彦これに任ぜられ、妻の有国姫神業を輔佐することとなりぬ。八頭神には磐長彦任命せられ、磐長姫は妻となり、内助輔佐の役を勤めゐたりける。

しかるに磐長姫は、その性質獰猛邪悪にして、かつ嫉妬心の深き女性なりき。

常に夫の行動を疑ひ、何事にもいちいち反対的行動をとり、夫が東へゆかむとすれば、西へゆくといひ、山へゆかむといへば、川へゆくといひ、常に夫婦の間に波瀾が絶えざりしが、磐長姫の頭髪は、実に見事なるものにして、その色沢は漆のごとくあくまでも黒く、ひいて地上に垂るるほどなりし。磐長姫はある時ただ一人深山にわけ入り、白布の滝に身をうたれ、夫の我意に従はむことを祈願したり。

百日百夜強烈なる滝にうたれ、見るも凄じき血相にて、祈願をこめゐたるをりしも、山上より騒がしき足音聞え、樹木を吹き倒し、岩石を飛ばし、姫のかかれる滝の上にも、あまたの岩石降り来たりたれども、姫はこれにも屈せず、一心不乱に、長髪をふり乱し、祈願を籠めつつありぬ。そこへ忽然として白狐の姿現はれ、姫にむかつて、

『我は常世国の守護神なり。汝の熱心なる願ひにより、今より汝の肉体を守護すべし』

といふかと見れば姿は消えて、ただ滝の水のはげしく落つる音のみ聞えけり。

それより磐長姫の黒漆の頭髪は、にはかに純白色に変じ、眼は釣りあがり、唇は突出し、容貌たちまち一変するにいたりけり。

磐長姫は、我は白狐の守護により、夫の驕慢を矯なほし、夫婦和合の目的を達することと確信し、欣然として長白山にかへりきたれり。

さて磐長彦をはじめ、あまたの神司は姫の俄然白髪となり、かつ面貌の凄くなりたるに驚きぬ。それより姫は性質ますます獰猛となり、日夜従者をしたがへて山野に入り、兎、猪、山鳥なぞを狩立て無上の楽みとなし居たりければ、夫はこれを固く戒めて曰く、

『天地の律法を厳守して、すべての生物を断じて殺すべからず』

とおごそかに訓諭しける。されど白毛の悪狐に憑かれたる姫は、夫の訓諭を、東風吹く風と聞き流し、ますます殺生をつづけ、つひには我が意に少しにても逆らふ従者は、片つ端より斬り殺し、生血を啜りて無上の快楽となし、悪逆の行為日に日に増長し、従者も恐れて近づくものなきにいたりたり。

このこと八王神なる有国彦の耳に入り、唐山彦をして厳しき訓戒を伝達せしめ

られたるに、磐長姫は声を放つて号泣し、夫の無情を陳弁し、かつ、『妾は天地の律法を厳守し、虱一匹といへども殺したることなし。その証拠には妾が着衣を検められよ』

といひつつ、下着を脱いで唐山彦の面前に差出したり。唐山彦は、その下着を見ておほいに驚きぬ。よく見れば下着には、ほとんど隙間なきほどに、粟のごとく虱鈴生になりゐたればなり。唐山彦はこれを見て、同情の涙にくれ、

『貴女の御心中察するにあまりあり。かくのごとく虱にいたるまで、仁慈の情をもつて助けたまふ。今は疑ふところなし。この由ただちに八王神に達し奉らむ』

と袂を別ち帰りゆく。あとに磐長姫は長き舌をだし、いやらしき微笑を浮かべてけり。

有国彦は、唐山彦の復命の次第を詳細に聴きをはり、ただちに磐長彦を召して、

『事実の詳細をつつまず、隠さず奏上せよ』

と厳命しければ、磐長彦は事実をもつて答弁したり。されど有国彦は頭をかたむけ半信半疑の面色にて、命の顔色を熟視されつつありき。このとき磐長姫は、夫

の後を追ひ出できたり有国彦にむかつて、涙とともに、言葉たくみに我身の無実を陳弁したりける。

ここに夫婦二人の争論は開かれけるが、姫は口角泡をとばし、舌端火をはき、両眼はますます釣りあがり、口は耳元まで割け、見るも凄じき形相となりける。有国彦はこの光景を見てただちに奥殿にいり、白色の国玉を取りだし、その玉を両手に捧げ、磐長姫目がけて、伊吹の神業を修したまへば、その身体より、たちまち白毛の悪狐現はれいで、空中を翔りて、たちまち西天に姿を没したりける。

ここに磐長姫は大いに愧ぢ、この場を一目散に逃げだし大川に身を投じ、終焉を遂げたり。しかして磐長姫の霊魂は化して無数の緑白色の鴨となり、水上に浮きつ沈みつ日を送ることとなりぬ。これよりこの川を鴨緑江となんいふとかや。

（大正一〇・一一・一六　旧一〇・一七　栗原七蔵録）

（第一二章～第一三章　昭和一〇・一・一六　於みどり丸船室　王仁校正）

第一四章　霊系の抜擢〔一一四〕

磐長彦は独身となり、神務を管掌しゐたり。しかるに内助者たるべき妻に死別後は内政上すべての事につき不便を感じ、ここに忠実無比なる侍女玉姫を挙用して正妻となさむとし、諸神司をあつめてその意見を聴取したりしが、諸神司は磐長彦の孤独不遇の生活を見ておほいに同情の意を表し、玉姫を正妻となすべきことを満場一致をもつて賛成したりける。磐長彦は満足の体にてただちに八王神の御殿に参候し、玉姫を正妻とすべきことの許可を奏請したるに、有国彦は一身上の一大事なれば、自分単独にては決しかねしより、この旨を書面に認め使者を地の高天原につかはし、天使長大八洲彦命の裁決を請ひたまひけり。

大八洲彦命はただちに言霊別命、神国別命、大足彦を大広前に集め、磐長彦の婚儀につきその可否を討議せむとし、ここに天使会議を開かれたりける。

いよいよ天使会議は開かれぬ。大八洲彦命は立つて磐長姫の平素の行跡より変死の際にいたるまでの種々の経緯を詳細に説明し、かつ……侍女の玉姫を入れて

その正妻となすべきことの可否を審議されたしと、長白山の八王神有国彦より奏請し来れり。願はくは諸天使の慎重なる審議を望む……と、宣言して座に着きたまひぬ。ここに言霊別命は、

『磐長彦の妻帯はやむを得ざる次第なれば、ただちに承認を与ふべきものと思意す。一時も早くこれを正妻となし、長白山の安全を計りたし』

と述べ立てたり。

大足彦は座を立つて顔色を変へ、言霊別命の説を極力反駁していふ。

『天地の律法は一夫一婦の道をきびしく戒めあり。しかるに後妻を迎ふるは律法に違反するものにして、悪例を後日に遺すものなれば、断乎として許すべからず。体主霊従の行動は上に長たるものの最も慎むべきことならずや、上のなすところ下これに従ふ、上流濁れば必ず下流濁るは自然の道理なり』

と言葉はげしく反対の意を表示したりけるに、言霊別命はただちに起立し、

『実に心得ぬ貴下のお言葉かな。ただ今体主霊従の行為と言はれしが、吾は第二の正妻を迎ふるをもつて律法違反となし、または体主霊従の行為とみなすを得ず。

如何となれば磐長姫は夫にたいし根本的にその霊系を異にしをれば、常に円満を欠き、風波の絶えざるは当然なり。この夫妻はもとより恰好の縁に非ずして、霊系を無視し体系を重ンじたるに起因するものなり。霊系の合致せざる者と者とを夫婦となし、外観の体裁に重きをおくは実に霊系を無視したるものなり。今やこの過ちを去り、霊系の等しき玉姫を入れて正妻たらしめむとするは、体を軽ンじ霊を重ンずる天地の法則に適ひ、霊主体従の本義に帰りたるものなり。ゆゑに我は断じて体主霊従の行為と断ずること能はず』

と述べたて席に着きたまへば、大足彦は再び立ちあがり、

『言霊別命の仰せは一理あるに似たれども、いま一応熟考を乞ひたし。いかに霊主体従をもつて天地の法則なりとはいへ、現在卑しき侍女を挙用して、一国を司る八頭神の正妻たらしめむとするは、神界の秩序を紊すものにして、あたかも提灯に釣鐘、均衡の取れざること最もはなはだし、かくのごとき不均衡の結婚を許すといへども、たちまち軽重の度を失し、早晩顛覆破鏡の悲を見るは必然なり、かかる一大事を軽々しく聴許せむとするは、あへて天地の律法を軽んじ神意を冒

涜する無法の行為なり』
と極言したり。言霊別命は三度立つて口を開き、
『心得ぬ大足彦のお言葉かな。卑しき侍女をして八頭神の妻となすは不均衡なりとか、神界の秩序を紊すものなりとか、仰せられたれども、そのお言葉こそ体主霊従のはなはだしきものなり。いかに卑しき侍女なりとて、その霊性において美しく高貴ならば、たとへ形体の上において卑しき職にありとも、その精神にして立派ならば、霊主体従の本義よりみて之を否定すべきものに非ず。いたづらに門閥的旧思想を墨守し、いらざる体面論を主張さるるはかへつて神慮に背き、律法の精神をわきまへざる頑冥固陋の旧思想なり。かかる所論はほとんど歯牙にかくるに足らず』
と気色ばみて陳弁したり。
ここに、大足彦は三度立つてこの説を駁し、たがひに熱火のごとく論難攻撃いつ果つべしとも見へざりしを、このとき神国別命は立つて、
『両神司の所説いづれを聞くも一理あり。しかるに霊主体従および体主霊従の本

義については、われは言霊別命に賛成す。諸天使すみやかに玉姫を正妻に入るることの許可を与へられむ事を希望す』と主張したまひける。

ここに大八洲彦命は多数の意見を容れ、磐長彦の妻に玉姫を入れることの決定を与へ、目出度く天使会議は終了を告げたり。元来玉姫は忠実なる女性にして磐長姫の寵児なりける。いよいよ玉姫は玉代姫と改名し、磐長彦の妻となり内助の功もつとも多く、長白山は無事泰平に治まりにける。

（大正一〇・一一・一六　旧一〇・一七　加藤明子録）

第五篇　万寿山

第一五章　神世の移写〔一一五〕

万寿山には八王神として磐樟彦、磐樟姫の夫妻居住し、赤色の玉を荘厳なる神殿に鎮祭し、瑞穂別八頭神となり、瑞穂姫妻となりて内助の功もつとも多く、天地の律法は完全におこなはれ、神人一致して至治太平の神世はおごそかに樹立され、加ふるに忠実無比なる大川彦、清川彦、常立彦、守国別、その他の諸神司は綺羅星のごとく集まり、地の高天原につぐの聖場となつた。

万寿山の神殿は月宮殿と称へられ、赤玉の精魂幸はひたまひて、神人の心は赤誠丹心よく神に仕へ、長上を尊み下を憐み、各自の顔はいつも春のごとく、心は常に洋々として海のごとく、満山の紅葉は黄紅赤緋色を競ひ、春は紅の梅、香ひ芳ばしき白梅樹々の間に点々し、蒼々たる常磐の松は、紅葉のあひだに天を摩して栄え、千年の鶴は樹上に巣を組み神政の万寿を謳ふ。城廓を廻れる池の清泉には万代の亀、幾千万とも限りなく、神世を寿ぎ、右往左往に遊びたはむるその光景は、五六七神教成就後の神代の移写とも称すべき瑞祥なりける。かかる目出度

き万寿山は、実は霊鷲山の神霊三ツ葉彦命の内面的輔佐の神徳の功、あづかつて力ありしが故なりといふ。

ここに万寿山の八王、八頭の神司をはじめ、部下の諸神司は霊鷲山をもつて第二の高天原と崇め、三ツ葉彦命の神跡を慕ひて神人修業の聖場と定め、美しき神殿を山下の玉の井の邑に造営し、坤金神豊国姫命の安居所となし奉仕せむとし、ここに荘厳なる大神殿を宮柱太敷立て、高天原に千木高知りて日の大神、月の大神、玉照姫命、国治立命鎮座したまひて洪大無辺の神徳は四方に輝き、地の高天原と相まつて神界経綸の大聖場となりぬ。これを玉ノ井の宮といふ。

玉ノ井の宮は真道姫真心をもつて大神に仕へ、かつ霊鷲山に日夜かよひて神慮を伺ひ、つひに三ツ星の神霊に感じて三ツ葉彦命を生み、これを地の高天原の国治立命に献じ奉り、神政維新の神柱となさしめたまひける。三ツ葉彦命は、天の三ツ星の精魂の幸はひによりて地上に降り、真道姫の体に宿りて玉ノ井の邑に現はれける。玉ノ井の邑には玉ノ井の湖といふ清泉をたたへたる湖水あり、この湖水は神界経綸上必要の神泉なれば、自在天の一派は、この湖水を占領せむと百方

手をつくし、つひに三ツ葉彦命と争ひけるが、結局は目的を達するを得ずして退却したりしなり。

自在天の一派なる蟹雲別、牛雲別、種熊別、蚊取別、玉取彦らは、一斉に玉ノ井の湖水に押寄せきたり、あまたの魔神をして前後左右より取り巻き、第一着に玉ノ井の宮を破壊し真道姫を捕へむとしたりしが、三ツ葉彦命の神威に恐れて遁走し、二度押し寄せ初志を達すべく奮闘せし顛末は、次席に於て略述せむとす。

（大正一〇・一一・一七　旧一〇・一八　加藤明子録）

（第一四章～第一五章　昭和一〇・一・一六　於みどり丸船室　王仁校正）

第一六章　玉ノ井の宮〔一一六〕

玉ノ井の邑は、玉ノ井の湖の中央に浮かべる清き一つ島なり。玉ノ井湖の水は深く清く、常に紺碧の波漂ひ、金銀色の諸善竜神の安住所なりと伝ふ。湖の外は、

大小高低、千変万化の霊山をもつて囲らされ、万寿山は東方に位し、霊鷲山は西方に位し、その他の山々には諸々の神鎮まり、春は諸々の花咲きみだれ、山は雲か霞かと疑はるるばかり。夏は新緑諸山に栄え、老松処々に点綴し得もいはれぬ風景なり。秋は諸山錦の衣を織り、冬は満山銀色に変じ、霊鳥は四季ともに悠々として舞ひ遊び、山々の谷を流るる大河小川の水清く、玉ノ井の湖水に潺々として注ぎをれり。

国治立命は世界の中心に地の高天原を建設し、今また東方の霊地を選み、この地点を第二の高天原となし、東西相応じて、陰陽のごとく、日月のごとく、経と緯との神策を定められたるなり。常世姫は地の高天原なる蓮華台および竜宮城を占領せむとして、千変万化の奸策を弄し、苦心焦慮すれども、神威赫々として冒すべからざるに落胆し、第二の経綸なる玉ノ井の湖を占領せむとし、大自在天にその意を通じ、東西呼応して大神の経綸を破壊し、盤古大神の神政に覆へさむと焦心せり。

万寿山は第二の地の高天原に擬すべき霊地にして、玉ノ井の邑は竜宮城に比す

べき大切なる霊地なり。ゆゑに万寿山を占領するに先だち、玉ノ井湖を占領するの必要起りしなり。玉ノ井湖は前述のごとく四方霊山に囲まれ、神司の守護強く容易にこれを突破すること能はざる要害堅固の霊地なり。

ここに大自在天の部下蟹雲別は、あまたの神卒をことごとく蟹と化せしめ、東南の山々の谷をつたひて玉の井湖に這ひ込みきたり、また牛雲別は、数万の部下を残らず牛に変化せしめ、東北の山々の谷をつたひて湖水に近寄り来たり、また蚊取別は数万の魔を幾百万の蚊軍と化せしめ、西南より山々の谷をつたひて玉ノ井の邑にすすましめ、玉取別は数万の魔を、残らず瑪瑙の玉と化せしめ、西北の山の頂に登り、玉ノ井の邑を目がけて雨のごとく降り下らしめたりける。あまたの蟹はたちまち悪竜と変じ湖水に飛び込みしが、ここに湖水の諸善竜神と悪竜とは、巨浪を起し、飛沫を天に高く飛ばし、死力をつくして争ひ、さしもに清き紺碧の湖水の水もまたたくうちに赤色と変じ、得もいはれぬ血腥き風は四方に吹きまくりける。一方牛雲別の部下は、たちまち水牛と変じ湖水に飛びいり蟹雲別に加勢し、戦闘はますます激烈となり、湖水はすでに敵軍のために、占領されむと

したりけり。

ここに真道姫は玉ノ井の宮に、敵軍降伏の祈願をこめられしが、三ツ葉彦命は旗輝彦、久方彦を部将とし、湖水の敵軍に向つて天津祝詞を奏し、金色の大幣を打ち振り打ち振りおほいに敵を悩ましゐたる。時しも西北の高山より石玉の雨しきりに降りそそぎ、味方の神軍の頭上を目がけて打ち悩ましたり。西南の敵軍は、億兆無数の巨大なる蚊群となりて、味方の身体に迫り、その声は暴風の荒れ狂ふがごとく、咫尺を弁ぜざるばかり立塞がり、暗黒無明の天地と化しぬ。三ツ葉彦命は天にむかつて救援の神軍を遣はされむことを祈願しけるに、たちまち天上の三ツ星より東雲別命、白雲別命、青雲別命の三柱の軍神、雲に乗りて万寿山に降りきたり、大地を踏みたて、三柱一度に雄健びしたまへば、玉ノ井の湖水の水は一滴も残らず中空に舞ひのぼり、遠く東西に分れて降りきたり、一大湖水を現出したり。このとき石玉も、蚊軍も、共に湖水の水に浚はれて中天に舞ひのぼり、影を潜めけり。

東に分れし湖水の水は地上に停留してふたたび湖水を形成したり。これを牛の

湖水といふ。今日の地理学上の裏海にして、また西に分れ降りて湖水を形成したるを、唐の湖といふ。現今地理学上の黒海なり。ここに東雲別命、青雲別命、白雲別命は、湖水を清め、新しき清泉を湛へられ、永遠に玉ノ井の湖の守護神となり、白竜と変化したまひぬ。かくして三ツ葉彦命とともに神政成就ミロクの世を待たせたまひける。

（大正一〇・一一・一七　旧一〇・一八　河津雄録）

第一七章　岩窟の修業〔一一七〕

万寿山は前述のごとく、神界の経綸上もつとも重要なる地点なれば、これを主管する八王神は他の天使八王神に比してもつとも神徳勝れ、かつ神界、幽界の大勢を弁知し、大神の神慮を洞察せざるべからずとし、八王神なる磐樟彦は、単独にて万寿山城をひそかに出城し、霊鷲山の大岩窟にいたりて百日百夜、すべての

飲食を断ち、世染をまぬがれ一意専心に霊的修業をはげみ、つひに三ツ葉彦命の神霊に感合し、三界の真相をきはめ、天晴れ万寿山城の王たるの資格を具有するにいたりける。

磐樟彦は、霊鷲山の大岩窟を深く探究したるに、数百千とも限りなき小岩窟ありて、大岩窟の中の左右に散在して、それぞれ受持の神守護されつつありき。この岩窟はいはゆる宇宙の縮図にして、山河あり、海洋あり、種々雑多の草木繁茂し、禽獣虫魚の類にいたるまで森羅万象ことごとくその所を得て、地上の神国形成されありぬ。

三ツ葉彦命の霊媒の神力により、数十里に渉れる大岩窟の磐戸を開き、現はれいでたる気品高き美しき女神は、数多の侍女とともに出できたり、磐樟彦に向ひ軽く目礼しながら、

『汝は神界のために昼夜間断なく神業に従事して余念なく、加ふるに百日百夜の苦行をなめ、身体やつれ、痩おとろへ、歩行も自由ならざるに、どの神司も恐れて近付きしことなき、この岩窟の神仙境にきたりしこと、感ずるにあまりあり。

妾はいま、汝の熱心なる信仰と誠実なる赤心を賞でて、奥の神境に誘ひ、坤の大神豊国姫命の御精霊体なる照国の御魂を親しく拝せしめむとす。すみやかに妾が後にしたがひきたれ』

といひつつ、岩窟の奥深く進みける。磐樟彦は女神の跡をたどりて、心も勇みつつ前進したりしが、はるか前方にあたりて、眼も眩きばかりの鮮麗なる五色の円光を認め、両手をもつて我面をおほひながら恐るおそる近付きける。女神はハタと立留まり、あと振かへり命にむかひ、

『汝の修業はいよいよ完成したり。ただちに両手をのぞき肉眼のまま、御神体なる照国の御魂を拝されよ。この御魂をつつしみ拝せば三千世界の一切の過去と、現世と、未来の区別なく手に取るごとく明瞭にして、二度目の天の岩戸開きの神業に参加し、天地に代る大偉功を万世に建て、五六七の神政の太柱とならせたまはむ。神界の状勢は、この御魂によりて伺ふときは、必然一度は天地の律法破壊され、国治立命は根の国に御隠退のやむなきに立いたりたまひ、坤の金神豊国姫命もともに一度に御退隠あるべし。しかしてその後に盤古大神現はれ、一旦は花々

しき神世となり、たちまち不義の行動天下に充ち、わづかに数十年を経て盤古の神政は転覆し、ここに始めて完全無欠の五六七の神政は樹立さるるにいたるべし。汝は妄が言を疑はず、万古末代心に深く秘めて天の時のいたるを待たれよ。神の道にも盛衰あり、また顕晦あり。今後の神界はますます波瀾曲折に富む。焦慮らず、急がず、恐れず、神徳を修めて一陽来復の春のきたるを待たれよ』

と懇に説き諭したまひて、たちまちその気高き美しき女神の神姿は消えたまひける。

磐樟彦は天を拝し、地を拝し、感謝の祝詞をうやうやしく奏上したまふや、今まで光の玉と見えたる照国の御魂は崇高なる女神と化し、命の手をとり、紫雲の扉をおし明け、宝座の許に導きたまひける。

夢か、現か、幻か。疑雲に包まれゐたるをりしも、寒風さつと吹ききたつて、肌を刺す一刹那、王仁の身は高熊山の岩窟の奥に、端座しゐたりける。

（大正一〇・一一・一七　旧一〇・一八　土井靖都録）

第一八章　神霊の遷座〔一一八〕

霊鷲山は磐樟彦が修業の霊場にして、天神地祇の中にてももつとも先見の明ある神々のひそみて時を待ちたまふ神仙境なれば、等閑に附すべき所にあらずとし、磐樟彦は諸神司と議り霊窟のほとりに大宮柱太敷く造営し、神人らの修業所として鄭重に設備をほどこし、三ツ巴の神紋は、社殿の棟に燦然として朝日に輝き、夕日に照り映えじつに壮観をきはめたりける。満山ことごとく常磐の老松をもつて覆はれ、得もいはれぬ神々しさなり。社殿の境内には千年の老松、杉、桧、楓、雑木苔生して中天高く聳えたち、諸鳥の囀る声はあたかも天女のきたりて音楽を奏するかと疑はるるばかりなりける。

ここにいよいよ社殿は完全に建て上げられたり。八王神磐樟彦、磐樟姫をはじめ、八頭神なる瑞穂別、瑞穂姫は神霊鎮祭のため神衣を着し、参拝さるることとなりけり。

祭官としては、神世彦斎主となり、守国彦副斎主となり、大川彦は祓戸主とな

り、国清彦は後取を奉仕し、清川彦は神饌長となり、常立別は神饌副長を奉仕し、供物は海山河野の種々の珍らしきものを横山なして献られける。神饌のなかに鴨、山鳥、猪、海魚、川魚等あまた八足の机代に盛られあり。ここに旗照彦、久方彦はこの供物を一見して、

『穢らはしき物を神前に献るは何の故ぞ。神は清浄を喜び汚穢を嫌はせたまふ。しかるにかくのごとき禽獣や魚類の肉を献り、机上や神殿を汚し神慮を怒らせ、加ふるに博く万物を愛せよとの、天地の律法を侵害し生物を殺して神饌に供するは、何たる心得違ひぞ。神は律法を定めて殺生を固く禁じたまへり。神威を冒涜するの罪軽からず。すみやかにこの神饌を撤回し清浄無穢の神饌に改めよ』

と二神司は肩をゆすりながら顔色赤く気色ばみて述べ立てたり。これを聞くより清川彦、常立別は容をあらため襟を正し、二神司に向つていふ。

『貴下らは今吾らが献らむとする神饌にたいして色々と故障をいれたまふは心得ぬことどもなり。いはンやかかる芽出度き大神遷座の席においてをや。せつかく選りに選り、清めし上にも清め千辛万苦の結果、山野河海をあさりて漸く集め得

たる宇豆の神饌を、汚穢の供物なればすみやかに撤回せよとの貴下の暴言、実に呆然たらざるをえず。貴下らは祓戸の行事を何ンと心得らるるや。恭しく祓戸の神の降臨を仰ぎ奉り、清きが上にも清き神饌なり。万一これをも汚穢の供物なりとせば、祓戸の神の御降臨は一切無意義にして、ただ単に形式のみに終らむ。吾らは大神の祭典に奉仕せむとする以上は、つねに霊主体従の法則により赤誠をこめて奉仕す。いづくンぞ形式的に祓戸の神業を奉仕し、体主霊従の逆事に習はンや。つつしンで二神司の御熟考を請ひ奉る』

と顔色をやはらげながら陳弁したりしに、旗照彦、久方彦は直ちに反対していふ。

『貴下の言は一応もつともらしく聞ゆれども、すべて大神は仁慈をもつて神の御心となし、博く万物を愛育したまふ。しかるにその広き厚き大御心を無視し、神の愛によりて成り出でたる生物を殺し、天地の律法を破壊し、大罪を犯しながら、なほもこれを大神の清き神饌に供せむとするは何事ぞ。仁慈の神の大御心を無視したる暴逆無道の挙動にして、これに勝れる無礼の行為はなかるべし。是非々々この供物は瞬時も早く撤回されたし。貴下は強情をはり神饌長の職をもつて、こ

のままにして吾らの言を容れず、汚穢に充ちたる祭事を敢行さるるにおいては、我らはただ今かぎり折角の御盛典に列すること能はず』

吾意を固執して動く色なく、清川彦、常立別は大いに当惑しつつありしが、双方の論争を聞きかねたる斎主神世彦は、

『諸神司暫時論争を中止したまへ。我いま大神の神慮を奉伺し神示をえて正邪を決すべし』

と、ただちに件の大岩窟に白き祭服のまま進み入り神の教示を乞ひ、ふたたび祭場にかへりて神教を恭しく諸神に伝へたり。神教はきはめて簡単にして要を得たものなりき。すなはちその教示は、

『神は一切の万物を愛す。神の前に犠牲とさるる一切の生物は幸なるかな。そは一の罪悪を消滅し、新しき神国に生れ出づればなり』

との理義明白なる神示なりける。双方の争論はこの神示を尊重し、うやうやしく祭典を完了し、天地にとどろく言霊の祝詞に四方の神人集まりきたりて、荘厳無比の遷座祭の式は執行されたりけり。

（大正一〇・一一・一七　旧一〇・一八　栗原七蔵録）
（第一六章～第一八章　昭和一〇・一・一六　於みどり丸船室　王仁校正）

第六篇　青雲山

第一九章　楠の根元〔一一九〕

青雲山は、八王神として神澄彦任ぜられ、神澄姫妻となり、吾妻彦は八頭神となり、吾妻姫はその妻となりたまひて、青雲山一帯の神政を司ることと定まりにける。

青雲山には国魂として、黄金の玉を祭るべく、盛ンに土木を起して、荘厳無比

なる宮殿の建立に着手されたり。この宮殿を黄金の宮といふ。宮殿の竣工するまで、玉守彦をして大切にこの宝玉を保護せしめたまひぬ。

この黄金の玉は、十二個の国魂のうちにても、もつとも大切なる国魂なり。八王大神一名常世彦は、いかにもしてこの玉を手に入れむとし、部下の邪神、国足彦、醜熊、玉取彦に内命を下し、つねに玉守彦の保護せる国魂を手に入れむと、手を替へ品を代へ、つけ狙ひゐたりける。

玉守彦は、大切なるこの宝玉を敵に奪はれむことを恐れ、ひそかに同形の石玉を造り、これに金鍍金を施し、真正の玉には墨を塗りて黒玉となしゐたるを、玉守彦の妻玉守姫はこの様子をうかがひ知り、玉守彦に向つてその不都合を責め、かつ偽玉を造りたる理由を尋ねてやまざれば、玉守彦はやむを得ずして答ふるやう、

『この黄金の玉は天下稀代の珍品にして、再び吾らの手に入るべきものに非ず。われこの玉の保管を命ぜられしを幸ひ、同形の偽玉を造り、これを宮殿竣工の上、殿内深く納め、真正の玉はわが家に匿しおき後日この玉の徳によりて、吾ら夫婦

は、青雲山の八王神となり、一世の栄華を極めむと思ふゆゑに、吾は偽玉を造りたり』

といひつつ玉守姫の顔をのぞき見しに、玉守姫は喜色満面にあふれ、おほいに夫の智略を誉め立てにける。

玉守彦は、智慧浅く、口軽く、嫉妬深き妻の玉守姫に、秘密を看破されしことを憂ひ、終日終夜頭を垂れ、腕を組み、溜息をつき思案にくれける。女は嫉妬のために大事を洩らすことあり、いかにせば妻を詐り、この秘密の漏洩を防がむかと苦心焦慮したる結果、ここに玉守彦は、真偽二個の玉を玉守姫に預けおき、

『我は数日間山中を跋渉し、真宝玉の匿し場を探し来らむ。汝は大切にこの宝玉を片時も目放さず堅く守るべし。この玉は吾ら夫婦の栄達の種なり』

と、まづ名利欲をもつて玉守姫を欺き、自分は山に入りて兎を擒り、また海にいたりて鮭を捕へ、夜中ひそかに宝珠山にわけ入り、広き谷川の瀬に兎を笊に容れ浅瀬に浸し置き、八尾の鮭を大樹の枝につるし、何喰はぬ顔にて数日の後わが家に帰り、玉守姫に、適当なる匿し場所を探し得たることを、喜び勇み報告したり

ける。玉守姫はおほいに喜び、
『善は急げといふことあり。一時も早く、この黒き黄金の宝玉を匿しおかむ』
と玉守彦の袖をひきて、そはそはしき態度を現はし急き立てたり。玉守彦は、
『しからば明朝未明に吾が家を出で、汝とともに宝珠山にゆかむ』
と答へ、その夜は夫婦ともに安眠し、早朝黒き玉を携へ山深くわけ入りける。途中かなり広き谷川の流れあり。二人は浅瀬を選びて渡りはじめ、川の中ほどにいたりし時、バサバサと音するものあり。玉守姫は耳敏くこれを聴きつけ、眼を上流に転じ見るに、川中には一個の笊が浅瀬にかかり動きゐたり。夫婦は不思議にたへずと近より、笊の蓋を明け見れば不思議や、中には兎が二匹動きゐたり。玉守姫は玉守彦にむかひ、
『これは実に珍しき獲物なり。天の与へならむ。幸先よし』
と笊と共にこれを拾ひて、なほも山奥深くわけ入りにける。
鬱蒼たる老松は天をおほひ、昼なほ暗きまでに繁りゐる。その樹下に夫婦は横臥して息を休めゐたりしが、玉守姫はフト空を仰ぎ見るとたんに、

『ヤー不思議』
と絶叫したり。玉守彦は素知らぬ顔にて、
『不思議とは何事ぞ』
と言ひも終らざるに、玉守姫は頭上の松の梢を指さし、
『この松には沢山の鮭の魚生りをれり』
といふ。玉守彦はいかにも不思議千万とあきれ顔に答へ、ただちにその木にのぼり、鮭を一々樹の枝より【むしり】取りぬ。夫婦は鮭と兎を重たげに担ひ、なほも山深くわけ入り、楠の大木の根元に玉を埋めて帰り来たりける。
ここに夫婦は兎と鮭を料理して、祝ひの酒を飲み、雪隠にて饅頭喰ひしごとき素知らぬ顔にて日八十日、夜八十夜を過したりける。
（大正一〇・一一・一八　旧一〇・一九　栗原七蔵録）

第二〇章　晴天白日〔一二〇〕

青雲山上の黄金の宮は竣工を告げ、いよいよ国魂として、黄金の宝玉を鎮祭することとはなりぬ。神澄彦は玉守彦を招き、

『さきに保管を命じたる宝玉を持参せよ』

と命ずれば玉守彦は、預かりし玉を恭しく奉持してこれを奉り、荘厳なる儀式の下に国魂は祀られけり。ここに玉守彦は、黄金の宮の司となり、厳重に守護することとなりぬ。

玉守彦の侍女に良姫なるものあり。つねに玉守彦夫妻に忠実に仕へ、とくに玉守彦には信任もつとも深ければ玉守彦は、何事も良姫に相談するを常とせり。玉守姫は夫の良姫を深く信ずるを見て、嫉妬心をおこし、自暴自棄となりて、日夜飲酒にふけり、隣人を集め踊り狂ひ、ややもすれば酒気に乗じて、夫の秘密を口ばしるのみならず、玉守彦と良姫の間には汚き関係あるがごとく言ひふらしける。

玉守彦は、妻の日夜の放埒を見るに忍びず厳しく訓戒を加へたるに、玉守姫はたちまち眉を逆立て目を瞋らせ、顔色するどく、狂気のごとくなりて、玉守彦にむかひ、

『貴下は平素妾を疎んじ、侍女の良姫を寵愛し、妾に侮辱を与ふ。もはや堪忍袋の緒も切れたれば、妾はこれより八王神の御前に出で、夫の隠謀の次第を逐一訴へ奉らむ』

といふより早く家を飛びだし、八王神の御前に夫の罪を残らず奏聞したりける。奏聞の次第は、

『玉守彦は大切なる黄金の宝玉を預かりながら、この玉を吾物にせむと謀り、真の宝玉には黒く墨をぬり、別に同形の石の玉を作り、これに金鍍金をかけ、真の玉は宝珠山の奥深くこれを埋め、擬玉を差出して黄金の宮に祀り、後日時を得て真の宝玉を取りだし、玉の神力によりて青雲山の城塞を乗取り、八王、八頭の神を放逐し、おのれとつて代り八王神とならむと、不軌を謀りつつあり。夫ながらも実に恐ろしき悪逆無道の者なり。すみやかに捕へて獄に投じ、国の害を除かせたまへ』

と嫉妬の炎すさまじく、身をゆすりて泣きつ訴へにけり。ここに八王神神澄彦は、八頭神吾妻彦を招きて、玉守姫の訴への次第を物語り、ただちに玉守彦を召し捕

へしめたり。
玉守彦は妻の玉守姫とともに、吾妻彦の前に呼び出され、きびしき訊問を受けたるが、玉守彦は、言葉さはやかにその無実を陳弁し、かつ、
『玉守姫は嫉妬ふかく、今は狂者となれり、かならず彼がごとき狂者の言を信じたまふなかれ。至誠は天に通ず。願はくば天地の大神も吾が赤誠を照覧あれ』
と天を拝し地を拝し、涕泣して訴へたり。このとき玉守姫は首を左右に振り吾妻彦にむかひ、
『玉守彦は大胆不敵の曲者なり。彼はたしかに国魂を宝珠山に埋め、この黄金の宮の国魂は擬玉を祀りをれり。その証拠は現在妻の妾とともに山中に匿しおきたり。何時にてもその所在をお知らせ申さむ』
とあわただしく苛ち気味に奏上するにぞ、玉守彦は言辞を荒らげて、妻にむかひ、
『女の姦ましき要らざる讒言、いまに天地の神罰はたちどころに到らむ、慎めよ』
と睨めつけたるに、玉守姫は躍気となり、
『夫は何を呆け顔に弁解するや。宝珠山の谷を渡るとき、川の中にて二匹の兎を

生捕にし、また宝珠山の松の大木に大いなる鮭の生りをりたるを妾が見つけ、夫と共にこれを【むしり】帰りて、その夜兎と鮭を料理し、祝酒を飲みしことをよもや忘れたまふまじ。そのとき宝珠山に玉を埋めおきたるを忘れたるか』と烈火のごとくなりて述べ立つる。玉守彦は吾妻彦にむかひ、

『ただ今お聞きおよびのとほり、妻の玉守姫は発狂し、取とめなきことを述べたて候。彼がごとき狂人の言は御採用なからむことを乞ひまつる』

と奏上せるに、吾妻彦は玉守姫の狂者たることを知り、ここに玉守彦の疑ひは全く晴れ、許されて家に帰りぬ。

八王大神常世彦は、黄金の宮の国魂を奪はむとし、部下の国足彦、醜熊、玉取彦に命じ、種々の奸策を授けたり。ある日のこと国足彦らは夜陰に乗じ、黄金の宮に入り国魂を首尾よく盗み、遠く常世の国へ逃げ帰りたり。八王神神澄彦は国魂を拝せむと諸神司をしたがへ神殿に進み入りしに、神前の堅牢なる錠前は捻切られ、肝腎の国魂は紛失しゐたりける。

『八王大神の部下国足彦、醜熊、玉取彦、玉を取つて常世の国に立帰る。藻脱の

空の宮の神徳弥顕著ならむアハ、、、』
と認めありぬ。八王神は顔色青ざめ、
『吾は貴重なる国魂の守護を命ぜられながら、今これを敵に奪取され、大神にたいして謝すべき辞なし。この玉なきときは八王の聖職を奪はれ、かつ重き罪に問はれむ。いかがはせむか』
と歎きたまふをりしも、玉守彦はすすみ出で、
『八王神よ、必ず神慮を悩ましたまふこと勿れ。我は宝玉の保護を命ぜられてより、今日あることを前知し、擬玉を作りて奉斎し、真正の国魂の宝玉は、宝珠山の奥深く楠樹の下に大切に埋め置きたり。直ちにこれを掘出して更めて鎮祭したまへ』
と誠を色に現はして奏上したり。神澄彦はおほいに喜び、ただちに玉守彦を先頭に、あまたの神司を遣はし、白木の輿を作りて宝玉を納め、青雲山に奉迎せしめ、ここにあらためて立派なる遷座式を挙行し、玉守彦は疑ひ解けて晴天白日となり、かつその注意周到なる行動を激賞され、重く用ゐらるることとなり、天下に盛名

を馳せにけり。

（大正一〇・一一・一八　旧一〇・一九　河津雄録）

（第一九章～第二〇章　昭和一〇・一・一六　於別府・亀の井旅館　王仁校正）

第二一章　狐の尻尾〔一二一〕

ヒマラヤ山には純銀の玉をその国魂とし、白銀の宮に恭しく鎮祭し、高山彦は八王神に任ぜられ、高山姫は妻となりて神業を輔佐し、ヒマラヤ彦は、八頭神となり、ヒマラヤ姫を妻とし、神政を監掌し、一時よく上下ともに治まりける。白銀の宮には玉国別が宮司として恭しく奉仕したり。

ここに八王大神常世彦は、部下の武寅彦、武寅姫および猛依別に命じ、種々の秘策を授けて、この国玉を奪取せしめむとしゐたりけり。武寅彦は毎日毎夜宮詣でにことよせ、昼夜間断なくつけ狙ひゐたれば、玉国別は武寅彦らの行動を訝か

り、ひそかに同形同色の擬玉を造り、これを神殿に鎮祭しおきたり。武寅彦らは玉国別の妻なる国香姫に、種々の手段をもつて近づき、珍らしきものを与へ、巧言令色いたらざるなく、やうやくにして国香姫を薬籠中のものとなしにける。しかして武寅彦は、ある日国香姫にむかひ、

『貴女にして白銀の宮に鎮まれる純銀の国魂を、夫玉国別に奪はしめ、これを常世国の八王大神に献じなば、汝夫婦をヒマラヤ山の八王神に任じたまふべし。他神の幕下にいつまでも、唯々諾々として神妙に仕ふるも、悪きことには非ざれども、かの庭前の小松を見られよ、大木の蔭に立てる小松はいつまでも幹細く葉薄く日蔭の境遇に甘ンじ、幾年を経るも立派に成長する時期なし。しかるに同じ時に植ゑられたる小松も、大木の蔭に隠れざる松は、年とともに成長し、幹強く枝繁り、衝天の勢を有するに非ずや。貴下はかくの如き、不利益なる地位に甘ンずるよりも、人は一代、名は末代といふ諺あり。このさい奮起して純銀の玉を奪ひとり、身の栄達を計られよ』

と口をきはめて巧妙に説得したりければ、国香姫は幾度も頭を縦にふり、肩をゆ

すり、会心の笑をもらし、武寅彦にむかつて夫の玉国別をしてその目的を達せしむることを予約したりけり。

ここに国香姫は曲人の甘言に惑はされ、夫玉国別にむかひ種々言葉をつくして、国魂を盗み取らしめむとしたれども、玉国別は天地の律法を厳守せる正義の神司なれば、国香姫の言を聴いておほいに怒り、ただ一言の下に叱責したるが、たちまち「省みよ」といふ律法を思ひ出し、にはかに笑顔をつくりていふ。

『これには深き仔細のあることならむ。吾は最愛なる汝のために玉を盗みだし、夫婦諸共一度に出世をなさむ』

と、わざと嬉しげに答へたり。国香姫は夫の逐一承諾せることを、武寅彦に急ぎ報告したり。ここに武寅彦は願望成就の時こそ来れり、八王大神の賞賜に預からむものと、身も心も飛びたつばかり、勇み進みて夜半、玉国別の館を訪れにける。

玉国別は喜ンで、これを迎へ、山海の珍味佳肴をもつて饗応し、丑満の頃、武寅彦らをともなひ白銀の宮に詣で、自分は黄金の鍵をもつて社の錠をはづし、扉をひらき大なる麻の袋に擬玉をつつみ持ちだし、ふたたび扉を閉ぢ、武寅彦にむ

かつていふ。
『首尾よく国魂は手に入れり。一時も早くこの場を立ち去り、玉の湖の畔にいたりてこれを渡すべし。長居は発覚の恐れあり』
とみづから先に立ち、夜陰に紛れて玉の湖の畔に出たりける。
このとき玉国別は武寅彦外二人にむかひ笑つていふ。
『貴下らは実によく巧妙に化けさせたまへども、如何せむ、背後に白き狐の尻尾の見ゆるは不都合ならずや。吾は実にヒマラヤ山に住む年経たる大狸なれども、貴下らのごとく少しも尾を見せしことなし』
といひつつ武寅彦らの顔を穴のあくほど覗き見るにぞ、三人は、玉国別の言葉に感歎していふ。
『われは貴下の見らるるごとく、常世国の白狐なり。しかるにいま貴下にその正体を看破せられたるは、実に慚愧のいたりなり。貴下は何ゆゑに尻尾の見えざるや』
と訝かり問ふにぞ、玉国別はここぞとばかり肩をゆすり、鼻ぴこつかせ、得意満

面の体にて、
『さればとよ。我は純銀の玉を近く守りをれば、その玉の徳によりて天地の間にいかなる貴き神も我が正体を見きはむるものなし。貴下らもこの玉に一度手を触れたまひなば、我らのごとくよく化け果さるべし』
と笑ひつついふ。武寅彦は矢も楯もたまらず、
『われにこの玉を持たせたまはずや』
と羨まし気に顔をのぞき、玉国別の首はいづれにふれるやを凝視しをる。玉国別はたちまち首を左右にふり、
『なかなかもつて滅相千万、この玉は常世国の八王大神に奉るまでは他見は許されぬ』
ときつぱりと刎ねつけたりければ、武寅彦らは両手を合せ、
『常世国まで帰る道はなかなか長し。万一途中にて我が尻尾を他神に発見せられなば身の一大事なり。お慈悲にただ一度わが手に触れさせたまへ』
と歎願するを、玉国別はわざと不承不承に、

『然らば望みを叶へさせむ。三人とも一度に白狐の全正体をあらはし、この麻袋に飛び込み、おのおの自由に手を触れられよ』

と言ひ放てば、ここに三人ともたちまち白狐と変じ、先を争ひて布袋に飛び込みにけり。玉国別は、手早く袋の口を締め、

『サア悪神ども思ひ知つたか。狐の七化け、如何にたくみに化けるとも、狸の八化けには叶ふまじ』

といひつつ袋を大地に幾度となく抛げつくれば、白狐は痛さに堪へかね苦しき悲しき声をあげて救ひを求めける。玉国別は、

『邪神の眷属馬鹿狐、容赦はならぬ』

といひつつ袋に重き石を縛りつけ、玉の湖の深淵へどつとばかりに投げ込みにける。たちまち湖水は左右にひらき波浪たち騒ぎ、擬玉も狐と共に、ブクブクと音をたてて湖水の底深く沈没したりける。このこと常世彦の耳に入り、純銀の国魂は玉の湖の底深く、白狐と共に沈めるものと確信されたりければ、これより白銀の宮の国魂を奪はむとする計画は、あとを絶ちにける。

（大正一〇・一一・一八　旧一〇・一九　加藤明子録）

第二二章　神前の審判〔一二二〕

天山には黄色の玉を祀り、宮殿を造営してこれを鎮祭し、埴安の宮と名づけられたり。斎代彦を八王神とし、妻神斎代姫をして神業を輔佐せしめ、谷山彦を八頭神となし、谷山姫をして神政を輔助せしめられける。谷山姫は嫉妬猜疑の念ふかく、斎代姫の命令をきくことを非常に不快に感じゐたり。夫婦は、つねに犬猿のごとく、たがひに嫉視反目をつづけ、それがために天山城内の神政は、つねに紛擾絶えざりける。

ここに八王大神は、部下の邪神荒国彦を谷山彦の肉体に憑依せしめ、また荒国姫といふ邪神を谷山姫に憑依せしめたり。これより谷山彦夫妻の性行は俄然一変し、斎代彦夫妻をしりぞけ、みづから八王神たらむことを企てける。斯くのごと

く悪心を起したるは全く憑霊の所為なり。ここに谷山彦は妻の使嗾により、埴安の宮司国代彦、国代姫の夫婦を手に入れ、国魂を盗ましめ、八王神の身に失策を招かしめ、その目的を達せむとし、種々の手段をめぐらしゐたりける。

しかるに宮司の国代彦は正義の神司なれば、容易にその心を動かすべからざるを悟り、妻の国代姫を甘言をもつて説得せむと計りぬ。国代姫は谷山彦夫妻に招かれけるが、谷山彦はいふ、

『汝の弁舌をもつて夫国代彦の心を動かし、国魂を盗み出さしめなば、吾はただちに八王神の位に上り、汝ら夫妻を八頭神の地位に据ゑむ』

と言葉たくみに説き立てたり。国代姫はその成功を危ぶみ、かつ天地の律法に背く由を述べ、これを謝絶せむとするとき、何心なく夫の国代彦はこの場に現はれ来りぬ。谷山彦は国代彦にむかひて前述の謀計を打明けたるに、国代彦は一も二もなく賛成の意を表しけり。国代姫は夫の言に驚き、涙とともにその悪行を止めむとて泣きて諫言したりけれども、国代彦は決心の色を面に現はし、今この場において谷山彦の意見に反対を表せむか、いかなる危害の身辺に及ばむも計り難し

と、わざと空惚けていふ、

『我は天則違反の行為ならむと察すれども、諺にも勝てば善神、敗れば邪神といふことあり。吾が出世栄達の道を開かせたまふならば、よろこんで貴下の命を奉ぜむ』

と即答したりける。

谷山彦夫妻は大いに喜び、埴安の宮の祭典をおこなひ、これを潮に宮司国代彦をして玉を盗み出さしめむとしたりければ、国代彦は同形同色の偽玉を造り、深く懐に秘めて祭典に列し、みづから鍵を出して宮の扉を開き種々の供物を献じ、ひそかに偽玉を谷山彦に手渡ししたるに、谷山彦は素知らぬ顔を装ひ、これを懐中に秘しゐたりけり。祭典は無事に終了し、八王神斎代彦、斎代姫も列席し、直会の宴は盛んに開かれ、八百万神司は神酒に酔ひ、歌をうたひ、踊り狂ふ。このとき国代彦はたちて歌をうたひ、しきりに踊りはじめけり。その歌は、

『時世時節は怖いもの　深山を越えて谷越えて

常世の国の涯の涯　　黄が気でならぬ玉の守り。
時世時節は怖いもの　　谷は変じて山となり
山は代つて谷となる　　変れば変る世の中よ。
頭は今に尻尾となり　　尻尾は転げて谷底へ
落ちて苦しむ眼前　　何の用捨も荒国彦の
霊の憑りし谷と山　　どこの国代か知らねども
木々（黄々）の木魂に響くなり。　　埴安宮の玉欲しと
谷と山から攻めてくる　　谷と山から狙ひをる。
照る日の影は清くとも　　雲霧たつは山の谷
虎狼も隠れすむ　　気をつけ守る国世彦
玉は日に夜に曇るなり。　　曇る玉こそ替玉よ』

といつて面白く踊り狂ふ。ここに八王神斎代彦はこの歌を聴き、谷山彦の謀叛を悟り、ただちに夫妻を捕へて厳しく詰問したり。谷山彦は答ふるに実をもつてせ

り。

ここに斎代彦は谷山彦夫妻の職を免じ、国代彦、国代姫をして八頭神の後を襲はしめむと宣言せり。この時謙譲の徳高き国代彦夫妻は、

『命の大命実に有りがたく、身にあまる光栄なれど、われはかかる聖職に任ぜらるるの資格なし。願はくば以前のごとく宮司たらしめられたし。谷山彦夫妻は思ふに元よりかかる悪事を企つるごとき邪神にはあらず。悪霊の憑依によつてかかる無道の行動に出でられしならむ。すみやかに神前にともなひゆきて厳粛なる審神を奉仕し、その上にて裁断あらむことを』

と涙を流し赤心面にあふれて奏上したりける。斎代彦は打ちうなづき、直ちに二人の審神を開始されけるに、たちまち二神は上下左右に身体震動し、邪神荒国彦は谷山彦の体内より、荒国姫は谷山姫の体内より、神威に畏れて脱出し、悪狐の正体を現はし、常世の国にむかつて雲を霞と逃げ去りにけり。

邪神の脱け出でたる後の谷山彦夫妻は、夢から醒めたるごとく前非を悔い、かつ邪神の謀計の恐ろしきを悟り、それより心をあらため、神々を篤く信じ、元の

誠心に立ちかへりけり。斎代彦は今までの谷山彦夫妻の行動は、まつたく邪神憑依の結果となし、その罪を赦し、元のごとく八頭神の聖職に就かしめたりける。

（大正一〇・一一・一八　旧一〇・一九　土井靖都録）

第七篇　崑崙山

第二三章　鶴の一声〔一二三〕

崑崙山には紅色の国魂を、紅能宮を造営して鄭重に鎮祭され、八王神には磐玉彦を任じ、妻磐玉姫は神務を輔佐し、八頭神は大島彦が任ぜられ、大島姫妻として神政を内助し、紅能宮の司には明世彦、明世姫の二神奉仕し、崑崙山一帯の地

方は、きはめて太平無事に治まりゐたりける。

磐玉彦は名利に薄く、かつ忠誠無比にして、一切の宝玉、珍品を地の高天原に献納し、自己を薄くし、下を憐み、善政を布きたまひて、四辺よく治まり、鼓腹撃壌して神人その業を楽み、小弥勒の神政は樹立されたる姿なり。ために天上の日月は清く晴れわたり、蒼空一点の妖気をとどめず、五風十雨の順序ととのひ、地には蒼々として樹草繁茂し、五穀ゆたかに、鳥啼き花笑ひ、四季ともに春陽の気充ちて、世界第一の楽土と羨望さるるにいたりける。

磐玉彦は、

『天下克く治まり、神人みづから田を耕して食し、井を穿つて飲み、室に憤怨の声なく、神人和楽の色あり。かかる瑞祥の世には、天地の律法も徒に空文と化し、八王神の聖職もまた無用の長物たるに似たり。日夜無事に苦しみつつ高位にあるは、天地に対し何ンとなく心愧かしさに堪へず。すみやかに八王神の聖職を辞退して下に降り、神人とともに神業を楽まむ』

と決意し、ひそかに八頭神大島彦を招き、その意を告げたまひける。

大島彦はこの言を聞きておほいに驚き、暫時黙然として何の答弁もなく、八王神の顔を眺めつつありしが、たちまち首を左右に振り涙を流して諫めていふ。

『崑崙山一帯の今日の至治太平なる祥運は、貴神司の神徳の致すところにして、我らをはじめ下万神万民の貴神司を慕ひたてまつりて、感謝措く能はざるところなり。しかるに貴神司にして聖位を捨て、野に下らせたまへば、いづれの神司か、よくこの国土を治むべき。上を敬ひ下を愛撫し、もつて社稷を安全に保つは聖者の天賦的聖職なり。願はくば大慈大悲の聖徳によりて、なにとぞ退位の儀は、断念させたまへ』

と声涙交々下つて、諫言よく努めけるに、磐玉彦は答へて、

『我は八王神として、高天原の大神より重職を忝なうし、何の功労もつくさず、日夜神恩の深きを思ふごとに、慙愧の念胸に迫りて苦しく、一日として心を安んずることあたはず。下神人は日夜営々兀々として神業に奉仕し、汗油をしぼりて勤勉神業を励むなる世に、吾はいたづらに雲深く殿中にありて安逸の生を送り、何の活動をもなさず、曠職いたづらに光陰を消するは、天地の大神に対したてま

つり恐懼にたへず。今日の至治泰平は、要するに貴下らが誠実と苦心の賜なり。すみやかに吾の思望を許し、貴下は直ちに八王神の位に昇りて神務を主管されたし。吾はこれより夫妻ともに山野に隠れ、修験者となりて神明に祈り、神政の万歳を守らむ。男子たるもの一度決心したるうへは、いかなる諫言も拒止も耳にはいり難し』

と決心の色面に現はれ容易に動かすべからず。大島彦も、平素寡欲にして恬淡水のごとき八王神なれば、如何ともするに由なく、ただ黙然として深き憂に沈みゐたりしが、ヤヽありて大島彦は口をひらき、

『貴神司の潔白なる御神慮は、神人ともに常に歎賞おかざるところ、今更いかに諫めたてまつるとも、初志を翻させ給ふことなからむ。されど貴神司の身魂は貴神司の単独に処置さるべき軽々しきものに非ず、遠き神世の因縁によりて上下の名分定まり、天地の大神の優渥なる御委任に出づるものなれば、吾らはこれより直ちに地の高天原に参上がり神示を蒙りしうへ、その結果を詳しく奏上せむ。何はともあれ、それまでは何事も吾らに一任あらむことを』

と力をこめて歎願したりしに、磐玉彦は、
『貴下の言道理にかなへり、万事は一任すべし。よきやうに計らひくれよ』
と言を残して奥深く姿をかくしたまひける。
大島彦はただちに天の磐船に乗り、従者をともなひ空中風をきつて竜宮城に到着し、大八洲彦命に謁をこひ、八王神の退隠の件につき、裁断を下されむことを奏請したりける。ここに大八洲彦命は、すぐさま地の高天原の大宮にいたりて国直姫命に拝謁し、前述の次第を逐一奏上し、神勅の降下を願ひしに、国直姫命は衣服を更め、身体を清め、大神殿に進みいり、恭しく神勅を乞ひたまひ、大八洲彦命を近く召し、容姿をあらため厳かに神示のおもむきを伝達されたり。その神示の大要は、
『磐玉彦は遠き神代よりの御魂の因縁によりて、崑崙山に八王神の聖職を拝するは動かすべからざる神界の一定不変の経綸なり。君は万古君たるべく、臣はまた万古末代臣たるべし。王にして臣となり、あるひは下賤の地位に降り、臣にしてたちまち王の位に進むごときは、天地の真理に違反し、かつ大神の御神慮を無視

するものなり。神勅一度出てはふたたびこれを更改すべからず。神の一言は日月のごとく明らかにして一毫も犯すべからず。かつ名位は神の賦与する正欲にして、長者たるものの欠くべからざる栄誉なり。磐玉彦いかなればかかる明瞭なる問題を提出して、大神の御神慮を悩ませ奉るぞ。たとへ生くるも死するもみな大神の御心のままなり。一時も早く片時もすみやかに神慮を反省し、もつて神勅のまに八王神の聖職を奉仕し、今後ふたたびかかる問題を提出し神慮を煩はすこと勿れ』

との厳命なりける。

大八洲彦命は神示を拝し、恭しく礼を述べ、大島彦を近く招きて、神示を詳細に諭達したまへり。

大島彦はおほいに歓び急ぎ崑崙山に飛還し、八王神に一切の神示を恭しく復命奏上したりけり。素より正義純直の八王神は、神勅を重ンじ前非を悔い、ふたたび元の聖職につき、その後数百年のあひだは、実に至治至楽、泰平の聖代は継続されたり。神命の犯すべからざるは、これにても窺ひ知らるべし。

（大正一〇・一一・二〇　旧一〇・二一　出口瑞月録）
（第二一章～二三章　昭和一〇・一・一六　於亀の井旅館　王仁校正）

第二四章　蛸間山の黒雲〔一二四〕

蛸間山には銅色の国玉を鎮祭し、吾妻別を八王神に任じ神務を主管せしめ、妻には吾妻姫を娶はし内面的輔佐を命じ、国玉別を八頭神に任じ国玉姫を妻として神政を輔助せしめられ、駒世彦を宮司となし駒世姫をして祭事に従事せしめられたりしなり。しかるにこの蛸間山には、かねて地の高天原より、言霊別命神命を奉じて国魂の神を鎮祭し、荘厳なる宮殿まで建立しあれば、つまり二個の国魂を並べ、祭祀さるることとなりぬ。ここに二つの国魂の霊現はれて互ひに主権を争ひたまへば、蛸間山は常に風雲たちこめ、時に暴風吹きおこり強雨降りそそぎ樹木を倒し、河川の堤防を破壊し、濁水地上に氾濫して神人その堵に安ンずること

能はず、神人の嫉視反目は日に月に激烈の度を加へ、東天より西天にむかつて真黒の雲橋かかりて天地は為に暗黒となり咫尺を弁ぜず。ここをもつて常夜ゆく万の妖ことごとく起り、国土間断なく震動し、草の片葉にいたるまで言問ふ無道の社会を現出し、所々に大火あり大洪水あり疫病蔓延して神人まさに滅亡せむとし、また銅能宮は日夜震動して妖気を吐き、国魂の宮また同時に大音響を発して百雷の一時に轟くかと疑はるるばかり凶兆しきりにいたり、神人ともに心安からず、戦々兢々として纔に日を送る状態を馴致したりける。

国魂の神よりしてすでに斯くのごとく互ひに主権を争ひ、ほとんど寧日なきの有様なりければ、その霊精また一は八王神に憑依し、一は八頭神に憑りてつねに狂暴の行為多く、ことに八頭神には前の国魂神憑依して、八王神の命令に一々反抗し、たがひに権利を主張して相譲らず、犬猿もただならず氷炭相容れず、混乱紛糾ますます甚だしく、神人塗炭の厄に苦しみ、荒ぶる神人の言騒ぐその声は、五月蠅のごとく群がりおこりて修羅道を現出し、動乱止むことなく饑饉相次ぎ、虎狼、豺狼、毒蛇、悪鬼、妖怪なぞの邪霊は地上に充ち満ちたり。このことただ

ちに国祖の御耳に入り、国直姫命の口をかりて、大八洲彦命に神教を伝へしめたまひける。

国祖の御神教の大要は、

『天に二日なく地に二王なきは天地の神則なり。汝らさきに蛸間山に国魂の神を鎮祭しおきながら、国魂神には何の通告もなさず、新に同じ神山に二個の国玉を奉斎せるは、おのづから秩序を紊乱し争乱の種をまくものなり。彼ら八王神八頭神は名利にふけりて争ひ憎み、たがひに怒りて天下を騒擾せしむるの罪軽からずといへども、要するに一所の霊山に二体の国魂を鎮めたる失敗の結果にして、たちに二神を懲戒すべきに非ず、このたびの出来事はすべて汝らの一大責任なるぞ。神は神直日大直日に見直し詔り直し、もつて今回はその罪を問はざるべし。一日も早く改言改過の実をあげ、蛸間山を境として国土を南北に両分し、その持場を決定し、騒乱を鎮定し国祖の大神に復命せよ』

とおごそかに宣りたまひける。

大八洲彦命は恐懼措くところを知らず、みづからの不明不徳を謝し、大足彦と

ともに蛸間山に向つて出発したまひけり。

大八洲彦命は八王神に、大足彦は八頭神にむかつて神示を説き諭し神恩の忝なく尊きことを慇懃に宣り伝へける。八王神はただちに天使長の懇篤なる説示を承り、翻然として前非を悟り、かつ国魂の神のもつとも恐るべき威力に感じ、正心誠意をもつて神業に厚く奉仕し、かつ如何なる神勅なりとも、今日かぎり断じて違背せじと、心底より誓約をなしたりにける。

これに引替へ、大足彦は八頭神なる国玉別にむかひ順逆の道を説き、神の威徳をさとし言辞を竭して説示したるが、国玉別は天使の教示を聞くやたちまち顔色獰猛の相をあらはし、口をきはめて反抗し容易に屈伏せず、ほとンど捨鉢となりて天使大足彦の面上に噛みつかむとせるを、大足彦は、心得たりと両手の指を交叉し鎮魂の姿勢をとり、ウーと一声発くその言霊に、国玉別は地上に仰天し倒れ伏し、口中よりは多量の泡沫を吐きだし悶え苦しみけり。天使はなほも一声言霊の矢を放つや、八頭神の体内よりは、にはかに黒煙立ちのぼるよと見るまに、金毛八尾の悪狐の姿現はれ、雲をかすみと西の空めがけて逃失せにけり。

国魂神の嫉妬的発動の狂態を洞察したる常世国の邪神は、貪・瞋・痴の迷につけ入り、たちまち憑依の目的を達し、進ンで八王神を倒し、八頭神を失墜せしめ、蛸間山を攪乱せむとしゐたりしが、八頭神は始めて覚醒し、天使にむかつて以前の無礼を謝し、我が精神空弱にして意志強からず、つひに邪神の容器となり、神を無視し長上を侮蔑し、天地の律法を破りたる大罪を悔い、低頭平身罪に処せられむことを願ひけり。大足彦は、

『国魂の神ある上に重ねて再び、国魂の神を斎りたるは天使長以下の経綸を誤りたる結果なれば、その責任は吾らも同様なり。されど仁慈ふかき大神は、この度の事件に関しては寛大なる大御心をもつて、神直日大直日に見直し聞き直し詔り直したまひて、吾らがたがひの大罪を忘れさせたまひたり。心安く思召されよ』と満面笑をうかべて宣り聞かせたるに、国玉別は神恩の尊く忝なさに涙を滝のごとく流し、衷心より改悛の情をあらはし、八王神に忠実に仕へける。それより天地和順し上下よく治まりて、松の神代の常永に時津風枝も鳴らさぬ聖代を招来したりける。

今まで天空に橋状をなして横たはりし黒雲は、次第に散乱して拭ふがごとく、天明らけく地清く、神人和楽の極楽浄土を現出したるぞ目出度けれ。これより二個の国魂を南北に分ち祭られ、国土を二分して、北方は八王神吾妻別これを主管し、南方は八頭神国玉別これを主管することとなりぬ。君主的神政の神界の経綸も、ここにいよいよ民主的神政の端を啓かれたるぞ是非なけれ。

（大正一〇・一一・二〇　旧一〇・二一　午後八時東の天より西の天に向つて一条の怪しき黒雲横たはり、天を南北に区劃し、天地暗憺たる時、竜宮館において、加藤明子録）

第二五章　邪神の滅亡〔一二五〕

吾妻別、吾妻姫二人の間に、月世姫、月照姫、五月姫の三人の娘生れたり。長女の月世姫は、その性質粗暴にして常に邪神の群に出入し、邪神と結託して、蛸

間山を混乱紛擾せしむることにのみ全力を集注しゐたりけるが、吾妻別の重臣たる日出彦は、平素月世姫の行動ますます暴逆の度を加へ、非事醜行止まざるを歎き、涙をふるつてしばしばこれを諫めたれども、月世姫は一言半句も耳をかさず、つひには日出彦を讒訴してこれを排除せむとくはだて、百方手段をつくして蛸間山城の神人を籠絡し、市守姫、畑野彦、田長彦、国平別、竹代彦らを股肱の臣となし、昼夜謀計をめぐらし、日出彦に失敗を来さしめむとし、ここに芳香姫といふ美はしき女性に策を授けて、日出彦を陥いれむとしたりけり。

日出彦は八王神の命を奉じて、竜宮城に使ひせむとする時、芳香姫は門に立ふさがり日出彦の袖をひきてこれをとどめ、かつその顔色を熟視していふ。

『貴下は何故に妾を平素詐りたまひしや、残念々々』

と身をふるはし、声をくもらせ涕泣する。日出彦は芳香姫の言、少しも合点ゆかず、ただ呆然として芳香姫の様子を怪しみ眺めゐたるのみ。

芳香姫はたちまち日出彦に抱きつき、

『無情非道のわが夫よ。しらじらしきその御様子。ア、妾は今まで貴下の玩弄物

とされゐたるか。死なば諸共死出の山、三途の川もともどもに渡らむものと誓ひし仲をも顧みず、竜宮城に御使ひの旅出に、ただ一言の御相談もなく妾を捨て、はるばると出行きたまふは余りの無情。ア、残念や、口惜や』

と歯をくひしばり、大地にドツと打ち伏し、声をかぎりに泣き叫びける。

日出彦は藪から棒の出来事に、月世姫一派の奸計とは知らず、

『芳香姫は発狂せしか、不憫の者よ』

といひつつも、直ちに手をとり抱きおこし労はり介抱せむとする折しも、時を待ちゐたる月世姫は、市守姫、畑野彦、田長彦、国平別、竹代彦らの一味と共にその場に現はれ、

『天地の律法を破れる不義もの、日出彦を縛れよ』

と下知の声とともに、田長彦らは何の容赦もなく荒縄おつとり、手足をしばりて八王神の御前にまかりいで、

『天地の律法を破り、芳香姫を玩弄せし曲者捕へたり。かかる曲者を城内に止めおくは、風儀を乱し秩序を破るの恐れあるのみならず、八王神の御名の汚れなり。

すみやかに厳罰に処し、当城を追放し禍根を絶ちたまへ。証拠は吾ら数名の実地目撃せるところなり』

と言辞たくみに無実の奏上をなしたりしが、日出彦は、神色自若として恐るる心なく、

『ただただ賢明なる八王神の御裁断を請ひ奉る』

と言ひしまま、一言も発せざりける。

八王神は、黙然としてこの訴へを聞きつつありしが、何の言葉もなく、ツト立ちて宮殿の奥深く入りたまひ、ただちに神前に端坐して神教を請ひたまひ、日出彦、月世姫その他一同を召し出し列を作らしめ、日出彦にむかつて叮嚀に言葉をかけ、吾が長女月世姫の不都合きはまる行動を謝し、かつ、懇ろにこれを慰撫したまひ、月世姫に向つて今後を戒め、その他の神人にも厳しく訓戒したまひ、ここにいよいよ神示によりて日出彦の疑ひは氷解され、正邪の判断は、日月のごとく明らかとなりにける。

日出彦は無実の疑ひ、まつたく神の明白なる教示によりて晴れわたりたれば、

天地にむかつて拝謝し、急ぎ竜宮城さして出発したりける。

月世姫は謀計のガラリはづれたるに失望し、いかにもして初志を達せむと、蛸間の滝に芳香姫をともなひ、悪竜の神に七日七夜祈願を籠めけるが、芳香姫は忽然として六面八臂の邪鬼と変じ、中空に駆けのぼるよと見るまに、東北の天に怪しき雲塊あらはれ、たちまち西北の空にむかつて延長し、昼夜を弁ぜざる常暗の空となり、あまたの黒竜は月世姫の頭上目がけて降りきたり、盛ンに毒気を吹きかけ、火炎の舌を出して月世姫を喰ひ殺さむとす。このとき月世姫は声をあげていふ。

『汝は芳香姫の変化にあらずや。妄の汝に命ずるところは、妄を苦しめよとには非ず。日出彦を悩ませ滅亡せしめむがためなり。何をまちがへてかかる反対的行動をとるや』

と絶叫したりしに、その時黒雲の間より声ありて、

『汝は実に悪逆無道なり。芳香姫は今や悪竜となりて汝を滅ぼさむとす。他を呪はば穴二つ、自己に出るものは自己に還る。天の賞罰は、寸毫もたがふことなし、

思ひ知れや』

と言葉の下より鎗の穂尖は雨の降るがごとく、危険身にせまりて寸毫も免るるの余地なかりけるが、辛うじてわが居室に逃げいりホット一息つぐ間もなく、家の四隅より毒竜あまた出現して瞬くうちに火炎と化し、烟は身辺をつつみ、猛火炎々として天に冲し、月世姫は黒焦となりて敢なくも亡びける。今まで稍さえたる月世姫も、神の懲罰によりて暗路をたどり幽界のふたたび刑罰を受くるの破目に陥りしなり。アヽ天地に依怙なし、善を助け悪を亡ぼし、世界の神人を戒めたまふこと、実に明鏡の物を写して余蘊なきがごとし。慎むべきは悪事にして、恐るべきは天地神明の大道なり。神はかかる暗黒無道の世に出現して、神、幽、現の三界の立替立直しの神業を開始し、真善美の天国を地上に樹立したまはむとす。神の国に生れ、神の国の粟を食む神の子孫たる吾人は、つつしみて神業に奉仕し、神恩に報いたてまつるべき責任の重大なるを深く自覚すべきなり。

（大正一〇・一一・二〇　旧一〇・二一　外山豊二録）

（第二四章～第二五章　昭和一〇・一・一六　於亀の井旅館　王仁校正）

第二六章　大蛇の長橋〔一二六〕

モスコーには、黒色の玉を安置し、これを烏羽玉の宮といふ。道貫彦を八王神となし、道貫姫を妻として神務を輔佐せしめ、夕日別を八頭神とし、夕照姫を妻として神政を輔翼せしめたまへり。

夕照姫は常に気の勝ちたる女性にして、したがつて肉体甚だ弱く、常に病魔の襲ふところとなりゐたり。その病魔は八頭八尾の大蛇の眷族大蛇姫といふ邪霊ありて、憑依し、姫の身体を苦しめゐたり。これがために夕照姫はつひに重態におちいり、危篤に瀕しければ、夕日別は枕頭をはなれず親しく看護に手をつくしたり。従つて夫婦の仲はきはめて親密なりける。夕照姫は臨終にさいし、夕日別にむかひ、

『妾が死後はかならず後妻を納れたまふなかれ』

と遺言せむとし、言ひだしかねて煩悶し、連日連夜夫の顔を凝視てゐたりける。夕照姫は、吾が死後において夫の後妻を娶るを嫉ましきことに思ひ、その一念執

着のため、臨終の息を引きとりかねゐたりけるより、夕日別はつひにその心中を察知し、妻にむかひて、

『汝は吾に心を残すことなく神界にいたるべし。汝の昇天後、吾は断じて後妻を納れじ、安心せよ』

と約したりければ、夕照姫は満面笑をふくみ眠るがごとく絶息したりける。

かくて夕日別は多くの年を経たるが、老年におよび淋しくなりしより、後妻を娶らむとするの心を抱きける。部下の神人は、命の老て寂寥を嘆きたまふを気の毒に思ひ、後妻を娶られむことを勧めけるに命はおほいに喜び、夕照姫との約束を無視して、八王神道貫彦の娘なる夕凪姫を娶りける。

夕日別はそれより元気とみに回復し、領内の巡視に、あまたの従者をしたがへ出張さるることしばしばなりき。夕凪姫はいつも奥殿に居住して外出せざりけるが、ある時、たちまち天上より黒雲に乗りて降りきたる容貌醜悪なる鬼女あり。薙刀をひつさげ、夕凪姫の前に現はれて、

『妾こそは夕照姫なり。夫は、妾が臨終のときの堅き約束を破り、汝を納れて後

妻としたり。妾は夫にたいして恨を晴らさむと日夜つけねらへども、神力強盛にしていかんともすること能はず。よつて、その片割なる汝と雌雄を決せむ。尋常に勝負あれ』

と呼ばはりけるに、夕凪姫も元来勝気の女性なれば、少しも怖れず、ただちに立つて長押に懸けし薙刀を取るより早く立ちむかひける。かくして互ひに火花を散らし、秘術をつくして戦ひけれども容易に勝負はつかず、鶏鳴とともに夕照姫は、ふたたび黒雲にのり中空に影を没したりける。夫の不在中は、毎夜時刻を定めて現はれきたり、たがひに薙刀をもつて勝負を争ひゐたるをもつて、一間のうちは天井裏、柱、畳、襖の区別なく、薙刀の創痕ばかりとなりける。されども夕凪姫は深くこれを秘して何人にも漏らさざりけり。

夕日別は領内の巡視を終へ、帰城して夕凪姫の奥殿に入り、居室の刀痕を見ておほいに怪しみ、その理由を尋ねける。夕凪姫はやむを得ず有りし次第をもれなく物語りしに、夫はこれを聞きておほいに驚き、ただちに烏羽玉宮にいたり、祈願を凝らし、かつ宮司高国別をもつて神勅を奏請したりける。

ときに巫子あり、にはかに身体震動し、大地にバツタと倒れ、起あがりてはまた倒れ、大声を放つて泣き叫び、夕日別の面上を穴のあくばかりに、怨恨に燃ゆる嫌らしき目をもつて睨みつけ、

『汝夕日別は、妾との約束を破り、夕凪姫を後妻にいれたり。ただ今、目に物見せむ』

と矢庭に飛びかかり、命の首に手をかけ、生首を引き抜かむと猛りくるふその有様は、身の毛もよだつばかりなりける。

夕日別は如何ともするよしなく、ただ違約の罪を謝し、かつ、

『夕凪姫を離縁して汝の霊を慰め、冥福を祈るべければ、今回は許せよ』

といひけるに、巫女はふたたび口を切りて、

『しからば妾が要求すべきことあり、第一にその要求を容れたまふか』

と念を押したり。夕日別は震慄しながら、

『何事にても我が力のおよぶ範囲のことならば汝の要求に応ずべし』

と言葉も切れぎれに息をはづませて答へける。巫女はやや顔色をやはらげ、

『然らばモスコーの長橋の袂に、今宵丑満の時を期して、三万匹の蛙を捕へ、笊籠に納めて汝みづから持ちきたれ』

といふを、夕日別は恐怖のあまり一も二もなくこれを承諾して館に帰り、即時に数多の神卒に命じ、山野にいでて蛙を捕獲せしめたれど、蛙は漸く三百匹より集まらず、夕照姫の要求の百分の一を得たるに過ぎざりける。ここに夕日別はやむを得ずあまたの【なめくじ】を捕へてこれを底積となし、蛙をもつて上側をつつみ、侍神をして丑満の刻を期し、長橋の袂に持ち運ばしめける。

たちまち天上より黒雲に乗りくる鬼女あり。侍者は驚きその場に打ち倒れむとするとき、鬼女はこれを助けおこし侍者にむかひて、

『夕日別は何故来りたまはざりしや』

と問ひければ、侍者は答へて、

『命は数十万の【なめくじ】を室の四周に集め、その中に安座して出でたまはず、夕凪姫と相擁して楽しみゐたまへり』

と答へたるに、鬼女はたちまち忿怒の色を現はし、見る見る黒き大蛇の姿となり、

蛙の入れある笊に頭を投げ入れ、一口に喰ひつくしたるが、たちまち【なめくじ】の毒にあてられ、大蛇の身体は見るまに溶解消滅して跡には骨のみを残し、夕照姫の怨霊はここにまつたく滅尽したりける。

夕凪姫は、それより先妻同様の病を発し、帰幽してその霊魂は大蛇と化し、長橋の守護神となりにける。これを「大蛇の長橋」と称ふ。

（大正一〇・一一・二八　旧一〇・二九　加藤明子録）

第八篇　神界の変動

第二七章　不意の昇天〔一二七〕

天地の律法御制定とともに各山各地の守護神は、いづれも更迭を命ぜられける。その中に高白山や長高山のごとく以前のままに守護神としてとどまり、神務を奉仕する神司もありける。ただ重要なる地域にかぎり十二柱の八王神と八頭神らを配置したまへり。ローマは神界経綸上もつとも大切なる地域なるより、神界にてもことに有力なる神人をして守護せしめられたり。ローマの都には白色の国魂を祭りこれを白玉の宮と名づけ、また白波の宮とも称へけり。元照別を八王神に任じ元照姫を妻として神務を輔佐し、朝照彦は八頭神を命ぜられ朝照姫を妻として神政を補助せしめ、水口別、大依別を部将とし盛ンに経綸をおこなひ、神徳隆々として旭日昇天の勢なりけり。

このとき山口別といふ者あり、ローマを占領せむことを企てゐたり。彼は鬼雲別、蚊取別らの魔を奉じて羅馬城を顛覆しここに大根拠をかまへ、漸次に進ンで竜宮城を奪取し、つひに地の高天原をも占領せむと企て、常世の国の八王大神なる常世彦を首領として、あまたの邪神とともに四方八方より全力をつくしてローマに攻め寄せけり。元照別は朝照彦とともに地の高天原に急使を馳せて、救援軍

を送られむことを請ひ来りぬ。

地の高天原においては国直姫命、大八洲彦命、真澄姫協議の結果、大足彦に道貴彦を副へてローマの救援に向はしめられたり。しかるにローマは地の高天原および万寿山と相並びて、神界の経綸上、その大半はここに根拠を据ゑざるべからざる要所なり。

大足彦は八王神元照別、八頭神朝照彦ら、各地に配置されたる十一柱の八王神をここに集め、十二の八頭神に国魂の守護を一時委任することと定め、十一の八王神はあまたの神将神卒を引つれローマにあつまり、八王大神の魔軍にむかつて、あるひは攻め或ひは防ぎ全力を傾注し、一時は非常なる勢力にて、さすがの八王大神の全力をつくしたる攻撃軍も敵しかね、旗色俄にさびしくなりきたりて、や小康を得たるローマの聖都は、八王神おのおの心をゆるめ、難を避け安きに移らむとする萠しを馴致したりける。

ここに十二の八王神はたがひに嫉視反目して同志討ちをはじめたる。この虚に乗じて常世彦の魔軍は、醜女、探女を深く城内に入らしめ、内部より土崩瓦潰せ

しめむと全力を傾注したり。八王神各自の嫉視反目はおひおひ激しく、あたかも洪水の堤を崩すごとく、さすがの大足彦、道貴彦も、これを鎮定するの手段尽きたりにける。

かくして八王神はローマに集まり、争闘につぐに争闘をもつてし、許多の年月を経過したり。七王も八王も協心戮力もつて敵を亡ぼさむとしたる計画は、かへつて失敗の大原因となり、そのあひだに大国彦、常世彦の両派の魔軍は、八頭神を使嗾して八王神にたいし反旗を揚げしめ、独立を計ることとなりぬ。これぞ世界の国々の分立割拠する端緒となりける。

ローマ城は内部の暗闘と探女の陰密的活躍に加へて、外部よりふたたび常世彦の部下の山口別らの総攻撃にあひ、つひに支へがたき状態に陥りぬ。大足彦は天の鳥船にのり夜陰に乗じてひそかに竜宮城へ帰還し、ローマの窮状を逐一国直姫命に進言したり。そのとき何処より出で来りけむ、常世姫は大足彦の前にあらはれ、ローマ守備の粗漏きはまれる施設を口をきはめて罵倒し、かつ……速やかに大足彦を排除されたし……と国直姫命に進言したり。国直姫命は何故かこの解決

を与へず、ただちに雲を起し天へ上りたまひける。
常世姫は時期到来とひそかに喜びつつ、国直姫命の遺言なりと偽り、魔我彦、魔我姫をして神務と神政を行はしめ、みづから国直姫命の地位に就かむと企てゐたりける。
（大正一〇・一一・二八　旧一〇・二九　桜井重雄録）

第二八章　苦心惨憺〔一二八〕

竜宮城の従臣與彦、田依彦、與若、木糸姫、竜国別、三国別、高杉別らの役員等は、国直姫命の上天後、その去就に迷ひつつありける。
そこへ常世姫は、種々の手段をめぐらしてこれらの神司を自己の部下に引入れ、大八洲彦命、神国別命、大足彦に極力反対の行動を執るにいたれり。
一方ローマ城内にては、四分五裂の窮状を曝露し、外部よりは八王大神常世彦

の強力なる魔軍に包囲され、ほとんど落城せむとするの光景なりき。言霊別命は天の鳥船に乗り、急遽ローマにむかひ直ちに入城したりしが、十二の八王神は、言霊別命の不意の来城にほとんど狼狽の体なりき。ここに言霊別命は城内の諸神将をあつめて統一をはかり、ふたたび勢力を盛返し、協力一致の積極的行動をとりければ、八王大神の魔軍は、その勢力に辟易して退却し、遠方よりこれを包囲監視しつつあるのみなりけり。

さて地の高天原は、常世姫の横暴きはまる行動に、諸神司は遠く四方に散乱し、常世姫の目の上の瘤はほとんど払はれけり。常世姫は、内は竜宮城を攪乱せしめ、魔我彦、魔我姫、美山彦、国照姫をして大国彦に通じ、大国彦をして外部より竜宮城および地の高天原を攻撃せしめたり。大国彦は松代別、国代別を部将とし、あまたの魔軍を熊と化し、不意にこれを襲ひ、つひに城内くまなく探索して大足彦を捕へ、凱歌を奏して帰陣せり。あとに常世姫は、ほとんど竜宮城の主宰者となり、地の高天原をも蹂躙せむと、着々として歩を進めつつあり。

このとき大八洲彦命、真澄姫、言霊姫、広国別、広宮彦、照代姫の部将は、地

の高天原を厳守して、魔軍に一指をもつけさせざりけり。されど常世姫は執拗に
も、高杉別、與彦、與若、魔我彦、魔我姫などを煽動して地の高天原の一角を崩
壊せむとし、ほぼその目的を達せむとしたり。

○

このときローマに破れ、一時退却したる常世彦は、到底ローマの容易に陥落せ
ざるを知り鬼雲別、蚊取別らをして、大国彦の力を借り、これを鏖滅せむと図り
ぬ。大国彦はただちに承諾し、数多の魔軍を二人に与へ、常世彦と共に三方より
ローマ城を包囲攻撃したりける。

このとき万寿山城をのぞく十一の八王神はほとンど遁走し、以下の神卒は四方
に散乱したり。言霊別命は敵の猛烈なる攻撃にすこしも【ひるむ】色なく力戦奮
闘をつづけたまふ。しかるに火弾は空しく、弓は折れ、矢は尽き、敵のために捕
はれ俘虜となり、つひに常世の国に送られける。

言霊姫は、言霊別命の常世城に囚はれしを憂ひ、大神に祈願されつつありし。
をりしも常世姫は魔我彦、魔我姫をともなひ、言霊姫の祈れる前に意気揚々と

して現はれきたり、やや軽侮の色を面色に現はしていふ。
『汝は言霊別命を救はむとする心なきや。汝の決心次第にて、夫の難を救はむ』
と心あり気に口を切りぬ。言霊姫はよろこびて、
『いかにせば夫を救ふ途ありや』
と反問しけるに、魔我姫はここぞと言はむばかりの顔つきにて、肩をいからせながら、
『貴女は竜宮城を明け渡し、大島彦以下の神司を率ゐて、万寿山に転居すべし。しからば妾はその改心の賞として、常世城にます八王大神常世彦に歎願し、言霊別命を救ひ与へむ』
と得意然としていふ。
ここに言霊姫はその去就に迷はざるを得ざりけるが、魔我彦、魔我姫は、口をそろへて言霊姫の決心をうながすべく、弁にまかせて説きつけたれば、憂ひに沈みたる言霊姫はつひに魔我姫の言にしたがひ、竜宮城を開放し万寿山に遁れむと決心を定め、あまたの従者にその意を伝へしめむとしたりける。

このとき国若姫、広国別らの神将は、極力これを諫止し、かつ大神に祈り神力をえて、つひに常世姫一派の鬼神をやうやく退場せしめける。常世姫は、ただちに常世の国に馳せ帰り、戦備をととのへ再び捲土重来の期を待ちつつありける。

（大正一〇・一一・二八　旧一〇・二九　外山豊二録）

（第二六章～第二八章　昭和一〇・一・一七　於亀の井旅館　王仁校正）

第二九章　男波女波〔一二九〕

モスコーの八王神道貫彦は、ローマに召集されて多年の間不在なりき。妻の道貫姫は子に甘かりしため、その長女春日姫は父の不在に心をゆるめ放縦堕落ます激しく、神司らの指弾する行動をつねに平気にて演じゐたり。されど母人は、子の愛に眼くらみて春日姫のあらぬ日々の行動如何を少しも気づかざりける。春日姫は眉長く眼涼しく、口許しまりて色白く、膚やはらかく、あたかも桜花の時

をえて咲初めたるごとき容姿を持てりき。

八王大神の従臣に竹倉別といふ若者ありき。竹倉別は水色の烏帽子狩衣を着し、烏羽玉の宮に参拝したるに、春日姫は盛装をこらし侍女の春姫とともに、神前に参拝ををはり階段を下らむとするや、みづからわが衣の裳を踏み階段より真逆さまに顛倒せむとしたり。このとき階段を上りくる竹倉別は、春日姫の体をささへ危く厄難を救ひければ、春日姫の感謝は一通りの歓びではなく、何か深き印象を胸底にとどめける。春日姫は春姫に手をひかれて階段を下り、あと振返りつつ竹倉別の階段を上りゆくを流目に見惚れゐたりしが、これより春日姫は何ゆゑか、ただちに病の床に呻吟する身とはなりける。

諸神司はこれを憂ひて大神に祈り、医薬を与へなど色々と手をつくせども、春日姫の病にたいしては何の効果もなかりける。母の道貫姫は姫の日夜に弱りゆく姿をながめて、夜も日も、たまらず煩悶苦悩しつつ、あたかも掌中の玉を失ひしごとく、落胆失望の極に達しゐたり。

道貫姫は春姫をひそかに招き、

『汝はつねに春日姫の側近く仕ふる者なれば、姫の意中をよく察しゐるならむ。姫のこの度の重病につきては、何か思ひあたることなきや』
と耳に口よせひそかに問ひかけたるが、春姫は春日姫の病因はほぼ察知してゐたれども、恐れて口外することをはばかり、
『くはしく探りて後日申しあげむ』
とやうやくその場を立去り、春日姫にむかひ、
『烏羽玉の宮に参拝のをり、竹倉別に危難を救はれ、それより発病したまひしは、神も薬もきかぬ御病気には非ずや』
とおそるおそる尋ねけるに、春日姫は袖にて顔をおほひながら頭をかたむけ、やや覚束なき声にてただ一言、
『然り』
と答へ、そのまま夜具をひきかぶり息をはづませ、病体を左右にゆすりてもがき、かつ啜り泣さへ聞へけり。春姫は春日姫にむかひ、
『主のためならば、たとへ身は天律を破るとも、妾は律法の犠牲となりて目的願

望を達し参らせむ』
と決心の色をしめし、しばしの暇を乞ひこの場を立去り、ただちに竹倉別の家を訪れた。
竹倉別は明けても暮れても、烏の鳴かぬ日はあつても、春姫を思はぬ間は瞬時もなきまでに懸想しゐたりしが、今その当の女性に不意の訪問をうけて胸ををどらせ、肩を上げ下げしつつ顔をあからめ、用もなきに前後左右に室内を駈けまはり、晴天の霹靂頭上にはげしく落下せむとする時の態度そのままなりける。春姫は落付顔に竹倉別の手をとり、
『何事の出来せしか知らざれども、まづ、しばらく落つかせたまへ』
と肩を撫で、胸をさすりてその場に端坐せしめたるに、竹倉別はあたかも酢に酔ひしごとく、骨までぐなぐなになりし心地して、何となく落つかぬ風情なりき。
春姫は耳に口寄せ、あたりをはばかりながら、
『春日姫は汝に心をよせ、ために病床に臥したまふ。貴下は主を助くるために春日姫の夫となりたまはずや』

と私語けば、竹倉別は狐につままれたるごとき面持にて、ただ茫然として春姫の面を穴のあくほどうちながめ両眼よりは熱き涙ほとばしりける。春姫は竹倉別の心中を知らず、その態度に焦慮がり百方弁をつくして、春日姫の意に従はしめむとしきりに勧めてやまざりける。竹倉別ははづかしさうに、

『貴下のお勧めを承諾するに先だち、一つの願ひあり』

とて狩衣の袖に面をつつみ、息をはづませ肩まで動揺させたり。春姫は、

『貴下の願とはいかなることぞ。か弱き女の身に叶ふことならば、何事にても身命にかへて応じたてまつらむ』

といふ。このとき竹倉別を訪ねて若彦といふ麗しき若者、烏帽子直垂を着用しながら這入りきたり。若彦は、春姫の寝ても覚めても忘れられぬ若者なりき。春姫の血は燃えたちぬ。若彦はこの場の光景を見ていぶかり無言のまま、直立不動の姿勢を取りゐたり。

竹倉別は春姫に心奪はれ、若彦の入りきたりてわが前に立てることさへ少しも気づかず、顔の紐を解きてしきりに春姫に向ひ思ひのたけを、ちぎれちぎれに口

説きたてたり。春姫は、若彦の前にて思ひもよらぬ竹倉別に口説きたてられ、痛さ痒さの板ばさみとなりて、心中悶々の情にたへざりけり。若彦は竹倉別の家にひそかに春姫の来りゐるを見て、なンとなく不快の念をおこし、たちまち顔色を変じて物をも言はず立去りにける。この時の春姫の胸は剣を呑むよりも苦しかりしならむ。

春姫はわが心にもなき主命によりての訪問を若彦に認められ、若彦の顔色のただならぬに煩悶し、いまは自暴自棄となりにける。されど主の命は重く千言万語をつくして竹倉別を納得させ、春日姫の夫たることを承諾させたりける。

春姫は竹倉別をともなひ、春日姫の館に導きぬ。それより竹倉別は春日姫の親切にほだされて、つひには春姫を一時の夢と忘るることとなりぬ。若彦はまた春姫に心を深く寄せゐたりしところ、春姫のひとり竹倉別を訪問せるを認めてより大いに竹倉別を恨み、いかにもして春日姫との間を割き、鬱憤を晴さむと日夜計画しゐたり。

あゝ竹倉別、春日姫の間は如何になりゆくならむか。

（大正一〇・一一・二九　旧一一・一　谷村真友録）

第三〇章　抱擁帰一〔一三〇〕

春日姫と竹倉別は琴瑟相和し、春の日の洋々たるごとく楽き日を送りゐたり。道貫姫も子の可愛さにひかれて、これを黙許せり。若彦は鷹住別にしたがひ烏羽玉の宮にふたたび参拝したりしが、春日姫は春姫をしたがへて参拝ををはり、階段を下りきたりけるが、若彦と春姫との視線は稲妻のごとく互ひに閃きぬ。春日姫は目ざとくこれを見てやや嫉妬の念起り来りしが、若彦は春姫の自分に対する心情を察知し、ただちに春姫にたいして異様の視線を発射せり。春姫は黙然として若彦の面を恥かし気に打ち見守りける。この様子を目前に立ちてながめゐたり春日姫は、ますます嫉妬の焔を燃やさざるを得ざりける。

神品骨柄において、竹倉別に倍せる鷹住別は、正装のまま笑顔をつくりて春日

姫の前に大手を拡げて立ちふさがりければ、春日姫は前後の分別もなく鷹住別に涼しき眼をむけたりける。二人はこれより相信じ相和し、水も洩らさぬ親密なる交際をはじめたりける。

それ以後、春日姫の竹倉別にたいする態度はうつて変り冷淡となりぬ。竹倉別は鷹住別、春日姫のきはめて親密なる関係を探知し、おほいに憤り、あまたの従者を引きつれ、夜陰に乗じて鷹住別の住居を襲ひ仇を報いむとしたりければ、鷹住別は不意の襲撃に驚き、大道別に急使を馳せ救援を請ひにける。

ここに大道別は仲裁の労をとらむとただ一人、館を立ちいで鷹住別の住居にいたり、邸外を包囲せる竹倉別に向つてすみやかに退散すべく厳命したりける。このとき、鷹住別、若彦は竹倉別の部下の者どもに身辺を取りかこまれ、いかんともする道なかりける。竹倉別は大道別の厳命に少しく躊躇逡巡の体なりき。されど、逸り切りたる部下の者共は水の出ばなの勢とどめがたく、鬨をあげて……鷹住別、若彦を滅ぼせ……と叫び続けてやまざりにけり。

大道別は天にむかつて、天津祝詞を言霊すずしく奏上したるに、たちまち破軍

星の精霊なる武満彦命天上より降りきたり、竹倉別の頭上へ猛烈なる霊剣を雨のごとく投下したまひければ、竹倉別はたちまち色蒼ざめ、合掌して武満彦命にわが行動の不穏なる罪を陳謝しけり。武満彦命はただちに紫雲に乗じ天に帰らせたまひたり。

ここに大道別は両者和睦の宴を開かむとし、大蛇の長橋のほとりに建てる広殿に招待し、かつ相たがひに春日姫との手を断然きることを堅く約し、歓をつくして宴席を各自思ひおもひに退場したりけり。

大道別は鷹住別、若彦とともに紅葉山の麓まで帰るをりしも、鬱蒼たる森林の中より何者とも知れず数十の黒影あらはれきたり、大道別をはじめ鷹住別、若彦の手をとり足をしばり、太き綱をこれに結びて大道を引ずりゆくものあり。これぞ竹倉別以下の従者どもの不逞の所為なりける。

このとき、紅葉山上より数限りなき岩石、竹倉別の群に向つて落下し、数名の従者を傷つけたりしが、これはローマにありし若彦の兄勝彦が、弟の危急を救はむとして、竹倉別の謀計を前知し、この山上に待ち構へゐたりしなりける。竹倉

別は勝彦の勇気に辟易し、部下を捨てて八王大神の下に走り、ついにその部将となりぬ。それより鷹住別、春日姫の得意時代とはなりける。若彦はつひに春姫の夫となり烏羽玉の宮に忠実に奉仕したりける。

春日姫と鷹住別のあひだは蜜のごとき関係の結ばれたるが、春姫は即興歌を作りてこれを祝しける。その歌、

『春の弥生の暁か　四方の山辺は陽炎の
きらめき渡り春風に　ほころぶ梅の香しさ
梢に来鳴く鶯の　谷の戸明けてホーホケキヨー
ホーホケキヨーと経を読む　坊主の愛する今日（経）の春
霞の衣身にまとふ　四方の山々春姫の
青きみけしをまつぶさに　とりよそひたる長閑さよ
風も長閑な君が春　春日の森の常磐木は
千年の色を染めなして　桜は笑ひ紅葉は

若き面を赤らめつ　差招くなり君が代の
春の陽気の春日姫　松に千歳の鷹住別や
神の許せし妹と背の　中を隔つる竹倉別も
今は別れて常世往く　世は烏羽玉の暗くとも
光りかがやく玉椿　八千代の春はいつまでも
花は散らざれどこまでも　色はあせざれ常永に
ウラルの嵐強くとも　君には神風福の神
八千代の椿優曇華の　花咲く春や春日姫
ほまれはますます高殿に　登りて見晴らす天の原
ふりさけ見れば三笠山　峰より昇る望の夜の
清き月影欠くるなく　円き涼しき家庭内
園の白梅くれなゐの　梅の薫りといつまでも
失せずにあれよどこまでも　五六七の代までかをれかし
一時千金花の春　老いず死らず幾千代も

操をかへぬ庭の松　千代の緑の蒼々と
栄ゆるごとく永遠に　変りたまふな春日姫
世は烏羽玉の暗くとも　二人のなかは紅葉の
赤きえにしを結び昆布　胸の奥山鹿ぞなき
木々の木の葉を木枯に　吹き散る淋しき世ありとも
偕老同穴むつまじく　月日をおくれ春日姫
四方の山々紅葉して　佐保姫錦織るとても
霞の衣とことはに　紅葉山下に安々と
楽き御世を送らるる　その瑞祥に因みたる
陽気目出度き春姫の　心はいつも若彦や
栄ゆる心をとこしへに　つづかせたまへ春日姫
鷹住別といつまでも』

かくのごとく春姫の祝ひし歌も春の夜の短き夢と消え失せて、春日姫はつひに

破鏡の悲しみを味はふこととなり、発狂して暴狂ひ自暴自棄に陥りにける。
この春日姫ははたして何ものぞ。
（大正一〇・一一・二九　旧一一・一　桜井重雄録）

第三一章　竜神の瀑布〔一三一〕

長らくローマに足を留めたる八王神道貫彦は、ローマの没落とともに、モスコーを気づかひ、あまたの敵軍を突破してやうやく帰城し、道貫姫とともに長物語りに夜を徹したりける。

しかるに道貫彦はわが不在中、春日姫の鷹住別と夫婦となりしことを大いに怒り、かかる一身上の大問題を父にも母にも計らず、決行したる春日姫も不都合なれども、第一母たる道貫姫の行き届かざる行為を怒り、道貫姫には別殿を造りてこれに蟄居せしめ、鷹住別と春日姫のあひだを生木を割くごとく、無残にも夜半

の嵐の物凄く、常世国にむかつて鷹住別を神退ひに退はれにける。
春日姫は、海洋万里の孤島にただ一柱とりのこされし心地して、連日連夜泣き暮したる。その結果、つひに心魂に異状を呈し、狂乱となり、行きあふ人ごとに形相を変じ眼を見はりて、
『鷹住別、々々々』
と叫び狂ふ。ここに竹友別、畠照彦は、いかにもして春日姫の病を癒さむとし、遠近の高山に分け入り瀑布に身を浸し、あるひは断食をなして祈願を籠めたれども、病気はおひおひ重くなるばかりなりける。
あるとき畠照彦、竹友別はゆくりなくも天道山に分け入りしが、ここには「竜神の滝」といふがありて、山頂より落下する水勢は百雷の一度に轟くがごとく、水煙濛々として立ち上り、実にすさまじき深山幽谷なりける。
ここに二人は、七日七夜精神をこめて祈願したりしが、その時馬の蹄の音戛々と山上より聞えて、六面八臂の鬼神あらはれ二人にむかひ、
『春日姫の病気は、この瀑布に一ケ月打たれなば全快せむ』

と告げ、そのまま姿は煙雲のごとく消え失せけり。二人は天にも上る心地して急ぎモスコーに帰り、平玉彦とはかり春日姫をひそかに誘ひ、天道山の瀑布に連れ行かむとしたるに、大道別はこれを探知し、直ちにこれを厳禁したるに、畠照彦、竹友別は顔色をかへ大道別にむかつて、

『心得ぬ貴下の仰せなるかな。貴下は八王神に仕へまつる侍従長の顕職にありながら、毫末も忠良の志なし。われは身命を捨て、八王神夫婦の心痛を助けまつらむ忠義の心より出でたるなり。数月のあひだ、食を断ち、あるひは深山に分け入り、瀑布に投じあらゆる艱難辛苦を嘗め、その報いによつて神の命を受け、春日姫を救ひまつらむとす。しかるに厳禁すとは何事ぞ。いかに長上の言なればとて、かかる不忠不義の言に服従すること能はず』

と云ひ放ち、ひそかに春日姫を鶴舞姫と仮名し、ここに主従三人は天道山の大瀑布の下に進み入りにける。

道貫彦は、平玉彦以下二人の赤誠を非常に感謝されたりといふ。ここに大道別は守高彦を瀑布に遣はし、すみやかに春日姫をともなひ帰るべく命令を伝へしめ

たれば、守高彦は、天道山の瀑布にいたり窺ひみれば、平玉彦以下の人々は春日姫の鶴舞姫を傍の石の上に横臥せしめ、代るがはる瀑布に打たれ、真裸のまま春日姫の身体にむかつて指を組み、鎮魂の姿勢をとり汗を滝水と流して、【ウーウー】と呻りゐたり。守高彦はこの体を見てあきれ果て、つひには抱腹絶倒のあまり、自分も気が変になりきたりぬ。そのとき鶴舞姫は、

『竹友別、々々々』

と連呼しけるが、竹友別は唯々諾々として滝壺より這ひあがり、鶴舞姫の前に畏るおそる跪坐しける。鶴舞姫はいやらしき笑をうかべて、

『貴下は恋しき鷹住別に非ずや』

と力のかぎり手首を握りたり。強力の鶴舞姫に手首を握られたる竹友別はみるみる顔色青褪め、その場に打ち倒れたり。畠照彦は驚きて滝壺より這ひあがり滝水を口に含み、竹友別の面上を目がけて息吹き放ちけるに、竹友別やうやくして正気づきぬ。されど鶴舞姫は堅く手を握りて放さねば、竹友別は耳菟のごとき円き目を白黒とむき出し、一言も発しえず悶え苦しみにけり。時しもあれ守高彦は、

やにはに鶴舞姫の横面目がけて拳固を加へたるが、そのはずみに鶴舞姫は滝壺へ落ち込みたり。三人は驚きて鶴舞姫を滝壺より救ひあげ、守高彦の手足に搦みつき、

『汝は不忠不義の悪人よ。主にたいして無礼の段その罪もつとも重し、目に物見せてくれむ』

と、三人一度に有りあふ岩を手に持ち、守高彦の身体を処かまはず打ち据ゑける。守高彦は四つ這となり、笑ひながら、

『もう、それでよいか』

と嘲笑したるに、三人はますます怒り、岩を持つて打てども擲れども、不死身の守高彦は平然たり。何はともあれ、一時もはやくこの様子を大道別に報告し、あまたの神司を引き連れきたりて三人をしばり、春日姫を連れ帰らむと心を定め、守高彦は一目散にモスコーに走り帰り、この次第を大道別に奏上したりける。

大道別は大石別を守高彦にそへ、あまたの神司をひきゐて天道山の瀑布にむかひ、

『鶴舞姫以下諸神司を残らず打ち殺し帰るべし』
と命令したり。大石別、守高彦は案に相違の顔色にて、
『畏れおほくも主の御娘を、従臣の分際として、打ち殺し帰れとはその意を得ず。貴下もまた常世国の邪神に憑依されて、かくのごとき暴言を吐かるるならむ。決して決して貴下の本心より出し言には非ざるべし』
と言ひつつ、大石別、守高彦は前後より手を組み合せ、【ウーウー】と一生懸命に霊力をこめ鎮魂の姿勢を取りける。大道別は吹きだし、腹をかかへてその場に打ち伏し、
『大石別腰を揉め、守高彦足を撫でよ。あまりのをかしさに腹も腰もだるくて置き処なし』
とて哄笑せり。二人は烈火のごとく憤り、
『不忠不義の悪魔の張本、天にかはりて誅戮せむ。思ひ知れよ』
と力自慢の守高彦は、蠑螺のごとき拳固をかためて大道別を打たんとしたるその刹那、守高彦の腕は銅像のごとく手を振り上げしまま少しも動かずなりにける。

大道別は二人にむかひ、
『吾は臣下の分際として忠義の道をわきまへざるに非ず。春日姫はすでに鷹住別と手をたづさへて常世国にあり。しかるに二人の春日姫の在すは合点ゆかずと、毎夜ひそかに烏羽玉の宮に詣で、神勅を請ひゐるをりしも大神現はれたまひ、かれ春日姫は銀毛八尾の悪狐の変身なり。その証拠はかれの足の裏に狐の形したる斑紋ありとの神示なりしかば、吾は常に注意しつつありしに、ある機会にその斑紋を見届けたり。ゆゑに偽りもなき悪狐の変化なれば、汝はすみやかに天道山の瀑布にいたり、姫もろともに一度に打ちとるか、さなくばこれを生擒りにして帰りきたるべし』
と初めて心中を打ち明けたりしに、守高彦はいづれが真の狐なるや合点ゆかず、ともかくも春日姫の足の裏を見とどけての上決せむと、大石別もろとも急ぎ竜神の瀑布に進み入りにける。
（大正一〇・一一・二九　旧一一・一　加藤明子録）
（第二九章～第三一章　昭和一〇・一・一七　於延岡市吉野屋旅館　王仁校正）

第三二章　破軍の剣〔一三二〕

大石別、守高彦は、大道別の言葉の実否を試さむと、急ぎ天道山の大瀑布に諸神卒とともに駆つけ見れば、春日姫は容姿がらりと変じ、にこやかに微笑しながら二人にむかひ遠路のところ御迎ひ大儀と、実にすましゐたりける。平玉彦は得意らしく鼻を【ぴこつ】かせ、右の手の甲にて上下の唇を左から右へ斜にこすりながら、

『大石別、守高彦』

と言葉鋭く呼びかければ、二人はその態度に憤然として面をふくらせ、

『銀毛八尾の悪狐にしたがふ平玉彦の盲目どもよ、平玉蜘蛛となりて、吾が前に正体をあらはせ』

と叫ぶや、平玉彦は怒りて、汝無礼ものと言ひながら大石別に打つてかからむとしたり。されど、仁王のごとき強力無双の守高彦の両手に拳骨を握りをるその形相のすさまじさに、やや躊躇の色ありき。

春日姫は言葉優しく、
『大石別、守高彦、妾はすでに病気全快なしたれば、最早ここに長居するの必要なし。わが本復の祝ひにかへ、平玉彦を許せよ』
と言葉を添へけるを、大石別は守高彦と目と目に何事か物言はせながら、この場を無事に引返すこととなり、春日姫は神司らに送られて賑々しく帰城したりける。
道貫彦は、春日姫の無事帰城せることをよろこび、春日姫の頼みを容れて烏羽玉の宮の宮司に任じける。平玉彦、大石別以下の神司は、これを見て欣喜のあまり落涙しながら、大道別の前にすすみいで、
『貴下は、畏れおほくも八王神の御娘春日姫を、銀毛八尾の悪狐といひ、かつ御足の裏に狐の斑紋ありといはれたり。されどかくのごとく病気全快したまひ、神聖なる烏羽玉の宮の司とならせたまひ、精神ここに一変して至善至美なる神司とならせたまひしに非ずや。貴下は八王神にたいし速やかに切腹せらるべし。卑怯未練に躊躇せば、われ天にかはつて貴下を誅戮せむ』
と息まきながら詰めよりにける。

時しも道貫彦の御召なりとて、春姫は言葉おごそかに大道別を差招きければ、大道別は春姫とともに奥殿に進み入りしに、奥殿には道貫彦、春日姫が正座にひかへ、言葉も荒く、

『汝は春日姫にたいする無礼の罪により、天地の律法に照らし自殺を申しつくる』

と厳かに言渡しける。大道別は驚くかと思ひのほか、大口あけて打笑ひその場に倒れ伏しぬ。しばしの後、

『あゝ暗い、暗い』

と呟きながら、腰の一刀を抜くより早く電光石火春日姫の首は、胴を離れける。

このとき道貫彦は、大声に大道別を引捕へよと怒号すれば、この声に驚いて平玉彦、大石別、畠照彦、竹友別その他の神司は奥殿目がけて走りいり、前後左右より大道別を取り押さへ、高手小手にしばり上げたり。大道別は心中に天の破軍星を祈り、国治立命の救助を祈りければ、たちまち百雷の一時にとどろく如き音響とともに、破軍星の精魂たる武満彦命降りきたり、破軍の剣をもつて空中を切り捲りたまふにぞ、今まで春日姫と思ひし女性は、銀毛八尾の悪狐と化し、そこ

に斃死しゐたりける。ここに全く大道別の無辜は晴れ、かつ道貫彦は非常に口をきはめて大道別の天眼力を感賞したり。しかるに大道別は春日姫の悪狐の首を斬り捨てたるさい、そのほとばしる血の一滴を口に呑み、その血は身体一面にひろがり、さしも明察にして勇猛なりし大道別も精神に異状をきたし、発狂者となりにける。

これよりモスコーの城は、常世姫の駆使せる金毛九尾の悪狐のために蹂躙され、道貫彦、夕日別の夫妻は、つひに城を捨てて万寿山に難を避くることとはなりぬ。

大道別はそれより世界の各地を漂浪し、ある不可思議の出来事より、病気まつたく癒えたれど❓、命は依然として発狂者をよそほひ、かつ聾者となり、馬鹿者となりて敵状を視察し、最後に神政成就の神業にたいして偉勲を立てたるなり。神機発揚の神司として五六七神政の基礎となり、国祖再出現にさいし、とつぜん地の高天原に顕現する神人なり。大道別の正体ははたして如何。ただ今後に徴せむのみ。

（大正一〇・一一・二九　旧一一・一　外山豊二録）

第九篇　隠神の活動

第三三章　巴形の斑紋〔一三三〕

大道別は、常世の国の邪神の変化たる春日姫を亡ぼし、偉勲を建てたる際、邪神の血液の一滴口中に飛び入り、ために全身の血液けがれて聾唖となり痴呆となり、かつ発狂者となりてモスコーを立出で、地上の各山各川を漂浪し、長年月を経て、南高山の深き谷間に迷ひ入りける。

この時いづこともなく、巨大なる呻き声の起りしよと思ふ瞬間、幾万ともかぎりなき猛虎現はれきたり、大道別に前後左右より噛みつききたる。聾者となりし大道別もこの呻り声は、透きとほるごとく耳に入りければ、心得たりと大道別は噛みつきたる猛虎の首筋を引つかみ谷間の岩角に打ちつけ、これを亡ぼすこと数ふるにいとまなきほどなりき。猛虎の群はますます怒り猛り狂ひ、命かぎりに飛

びついてくるを、大道別は縦横無尽に戦ひけるが、つひに心身ともに大いに疲労を感じ、千仞の谷間へ真逆様に転倒し、頭部に大負傷をなし、多量に出血して、谷間に失心のまま横たはりける。

数万の猛虎はそれと同時に掻き消すごとく姿を隠し、あとには南高山の松風と、谷川の激流の音ばかりなりける。

南高山の山つづきなる此方の高山の奥に、荒河の宮といふ社殿建ちをり、その神名は荒河明神ととなへ、年々地方の神人をして犠牲を供せしむるを、慣例となしをりける。毎年冬のはじめに、南高山一帯の神人は犠牲をささげて盛大なる祭典を執行することとなれり。万一、一回にてもこの祭典を怠りしときは、南高山一帯は暴風吹きおこり猛雨降りそそぎ、たちまち大洪水をおこして、神人樹草その他の生物を苦しむる暴悪無比の神なりける。

南高山の守神大島別は、一切の危難を免れしめむがために、毎年犠牲の祭祀を怠らず執行されゐたりける。大島別の子に八島彦、八島姫といふ二人の子女ありき。八島姫の額に、たちまち巴形の黒き斑点が現はれたるが、上下貴賤の区別な

く、この斑点の現はれたる者は、その年の祭典の犠牲者たるべき運命の定まりしものとせられゐたり。

大島別、大島姫をはじめ数多の神司は、八島姫の額の斑点を見て、悲歎やるかたなく、部下の神司をあつめ種々協議の結果、その身代りを立てむと、地方一般に神司を派して、他に巴形の斑紋ある女はなきやと、昼夜間断なく山野河川を捜索しつつありき。

時しも、南高山の谷川を渡るとき、平素清けき川水は、血液の色を帯びゐるを認めたる玉純彦、高山彦は、流れの変りたるを訝かり、あまたの神司とともに渓流をつたひ、岩の根、木の根踏みさくみ上りゆく。谷川の底にあたりて、何とも知れぬ呻き声聞えきたるにぞ、諸神司は、巌壁をつたひ、辛うじて谷底に下りみれば、仁王のごとき容貌骨格のたくましき一人の男子が岩角に頭をうち出血して、ほとんど虫の息となり呻きゐたりける。

玉純彦は直ちに谷水を掬ひ来りて口に飲ませ、かつ伊吹きの狭霧を吹きかけなど種々介抱に手をつくしたる結果さいはひに蘇生し、目をギロギロとみはり、も

のをもいはず茫然として神司らの顔を眺めゐたり。
高山彦は、この男の額に巴形の斑紋歴然として現はれをることを目撃し、欣喜雀躍しながら、玉純彦の耳に口をよせ、何事をか私語きける。あまたの従者の顔にも何となく晴やかなる気分のただよひ見えゐたるなり。
大道別は神司らに誘はれ、南高山の城塞に連れゆかれ、その夜は鄭重なる饗応を受け、かつ再生の恩を謝したりしが、この時すでに大道別の精神状態は、出血のため改まり、耳は漸次聞えだし、口はものをいふことを得、視力はますます正確になりゐたりける。
大道別は、モスコーを出しより、無我無中に幾千里を跋渉しつつありしが、今この南高山において病気恢復したれば、今の吾が身は、その身のいづれの地にあるやも分らざりしなり。
大道別は玉純彦にむかひ、
『ここの地名は何といふや、吾は永らく病気のため夢中の旅行をなし、突然精神状態の正気にかへりたる際なれば、はじめて生れ出たるごとく、何事も分明せず』

と云ふにぞ、玉純彦は、
『ここは南高山の城塞なり』
と答へけるにぞ、大道別はその長途の旅行に、みづから驚きゐたりける。
（大正一〇・一二・六　旧一一・八　栗原七蔵録）
（第三二章～第三三章　昭和一〇・一・一七　於延岡市　王仁校正）

第三四章　旭日昇天〔一三四〕

ここに大道別は、大島別の奥殿に導かれ、山野海河の珍味の饗応をふたたび受け、終日終夜うるはしき女性の舞曲を見せられ、絲竹管絃の音に精神恍惚として、鼻唄気分になりゐたりしが、不思議や八島姫の巴形の斑紋は拭ふがごとく消え去り、大道別の斑紋はおひおひ濃厚となりきたりぬ。
ここに大島別は威儀を正し、大道別にむかひ、八島姫のこの度の大難より、大

道別の渓間に顛倒しほとんど絶息しゐたるを助けゐたるに、あにはからむや、その面上に巴形の斑紋あらはれ、八島姫の額の斑紋はしだいに薄らぎ消え失せたる次第を物語り、

『汝は吾が娘八島姫の身代りとなりて、荒河の宮の犠牲たるべき運命のもとにおかれたるものなり』

と吐息をつきながら涙を流して物語りけるにぞ、大道別は少しも驚く色なく、涼風面を吹くごとき平気な態度にていふ。

『そは実に面白きことを承るものかな。我はかかる犠牲的行為を心底より喜ぶ。そもそも神たるもの犠牲をたてまつらざれば、怒りて神人を苦しますべき理由あるべからず。これまつたく邪神の所為ならむ。我かつて竜神の滝において悪魔を見届けたることあり、よき研究材料なり。謹ンで貴意に応ぜむ』

と、こともなげにいひ放ち平然として酒をのみゐたりけり。大島別以下の神司らは、おほいに喜び感謝の意を表し、ただちにその準備に着手したりぬ。

いよいよ期日は迫り来れり。神司らは種々の供へ物とともに、大道別を柩に入

れ納め、山深く分けいりて、黄昏ごろやうやく荒河の宮に到着し、社前に柩ならびに供へ物を安置し、一目散に逃げ帰りける。

夜は森々と更けわたり、四辺しづかにして、水さへ音なく、静かにねむる深更の丑満時となりぬ。たちまち社殿は鳴動しはじめ、数万の虎狼が一度に咆哮するごとき、凄じき音響聞え来りぬ。

大道別は何の恐るる色もなく、柩の中に安坐して、天津祝詞を幾回ともなく繰返し奏上しゐたるに、たちまち神前の扉は【ぎいぎいぎい】と響きわたりて、眼は鏡の如く、口は耳まで引裂け、不恰好に曲める鼻は菊目石を括りつけしごとく、牙は剣のごとく、白髪背後に垂れ薄蝋色の角、額の左右に突出たる異様の怪物、金棒をひつさげて柩の前に現はれ、どんと一突き地上を突けば、その響きに柩は二三尺も地上をはなれ飛び上りける。さすがの大道別も、すこしは案に相違の面持なりける。

大道別は天津祝詞を一生懸命に、汗みどろになり声をかぎりに奏上したるに、その言霊の響きによりて、柩は自然に四方に解体したれば、大道別はスツクと立

ち上りたり。怪物はその勢に辟易して二三歩後方に退きし、その隙間を見すまし、怪物の胸部を目がけて長刀を突き刺しけるに、怪物はキヤツと一声、大地にだうと倒れ伏し、もろくも息は絶にける。大道別はそのままそこに端坐して、神前の神酒神饌その他の供へ物を仁王のごとき手をもつて之をつかみ、【むしやむしや】と片つ端から残らず平げにける。

しばらくあつて天上より微妙の音楽聞え来たりぬ。大道別はその音楽を酒の肴のごとく思ひつつ、神前の冷酒の残りを【がぶがぶ】と呑みはじめたる時もあれ、たちまち容色端麗にして荘厳無比なる女神は数多の侍神とともに現はれたまひ、言葉しづかに、

『妾は天の高砂の宮に鎮まる国直姫命なり。汝はこれより吾が命を遵奉し、神界経綸の大業を完成するまで、地上の各地をめぐり悪神の陰謀をさぐり、逐一これを国治立命に奏上すべし。それまでは汝は仮に道彦と名乗り、かつ聾唖となり、痴呆と変じて神業に従事せよ。汝には、高倉、旭二柱の白狐をもつてこれを保護せしめむ。使命を遂行したる上は、汝は琴平別命と名を賜ひ、竜宮の乙米姫命を

娶はし、神政成就の殊勲者として四魂の神の中に加へむ。夢疑ふなかれ』と言葉終るとともに、国直姫命以下の神司らの姿は消え失せ、東方の山の谷間よりは紫の雲を分けて天津日の神豊栄昇りに昇りたまひぬ。かたはらを見れば象のごとき怪物、血にまみれて横たはりゐたり。これぞ六面八臂の邪鬼の眷族なる大狸なりける。

それ以後荒河の宮は焼きすてられ、南高山一帯の地方の禍は、跡を絶つに至りける。玉純彦以下の神司らは、大島別の命により数多の神司を引率し、荒河の宮にいたり見れば、大道別は平然として大狸の横に安坐し、天津祝詞を奏上しゐたるにぞ、神司らはかつ驚きかつ喜び、大道別とともに南高山の城内に意気揚々として帰り来りける。大道別は神司らより親のごとく尊敬され、優待されて若干の月日をここに過したりける。

（大正一〇・一二・六　旧一一・八　加藤明子録）

第三五章　宝の埋換〔一三五〕

大道別は道彦と改名し、南高山の城内に長くとどまり、大島別夫妻の非常なる信任を受け、南高山の八島姫を娶はせて、わが身の後継者たらしめむとし、大島別みづから道彦に向つてその旨をうち明し、しきりに勧めて止まざりにける。

また八島姫は生命の恩人なる上、道彦の英傑なるに心底より心をよせ、ぜひ道彦の妻たらむことを祈願しつつありける。道彦は親子の日々の親切にほだされて、これを素気なく辞退するに苦しみゐたりける。

あるとき大島姫は、身体にはかに震動しはじめ、両手を組みしまま上下左右に振りまはし、城内くまなく駆けめぐり、これを静止すること困難をきはめたり。大島別は大いにこれを憂慮し、地の高天原にむかつて、国治立命の救助を祈願せり。道彦はただちに姫の狂暴を取押へむとして後を追ひ、表の階段の上にて姫とともに格闘をはじめける。

その刹那、道彦は階段より顛落して頭部を負傷し、流血淋漓失神不省の態とな

りぬ。大島姫は初めて口をきり、
『われは南高山に年古くすむ高倉といふ白狐なり。道彦はわが頭首をうち滅ぼせしにより、その仇を報ゆるために姫の体内を借り、これを階下になげつけ、傷口より毒血を注ぎいれたれば、彼はたちまち聾唖となり、痴呆となり、かつ発狂の気味を有するにいたるは火をみるよりも明らかなり。アヽ嬉しや、喜ばしや』と肩を前後左右にゆすり、足踏みして愉快気に哄笑するにぞ、八島姫はおほいに悲しみ、道彦を抱きおこし、別殿にかつぎこみて種々介抱に手をつくしたれども道彦の容態すこしも変らず、八島姫の言葉にたいして何の反応もなく、ただただ【げらげら】と涎をたらして笑ふのみなりける。
大島姫はふたたび身体を前後左右に震動させながら、大島別にむかひ、
『われはもはや道彦を術中に陥れたれば、これに憑依するの必要なし。イザこれより常世城に遁げ帰らむ』
と言ふかとみれば、大島姫はバツタリ殿中にうち倒れたり。諸神司は右往左往に周章狼狽して水よ薬よと騒ぎまはりしが、やうやくにして大島姫は正気に復し、

さもはづかしき面色にて大島別の前に平伏し、城中を騒がせし罪を拝謝したりける。ここに道彦は真正の聾唖にして、かつ痴呆にかかり、全快の望みなきものと一般に信ぜらるるにいたりけるぞ口惜しけれ。

道彦は白狐の高倉と旭の二柱にみちびかれ、南高山の山頂にある数多の珍宝を調査すべく上りゆく。されど痴呆と思ひつめたる神司らは、道彦の行動に毫も注意を払はざりしは、道彦にとりて非常なる幸福なりける。

道彦は、夜陰に乗じ白狐の案内にて山頂に登りみれば、常世姫の間者なる高山彦は、山頂の土を開掘し、すでに種々の珍宝を奪ひ、常世の国に帰らむとして同類とともに、あまたの荷物をこしらへゐたる最中なりき。そこへ突然道彦が現はれきたりたれど、高山彦は、痴呆にして聾唖なる道彦と思ひ、少しも懸念せず種々の宝を掘出し、かつ貴重なる宝物を道彦の背に負はせ、山を下らしめむとせり。一味の曲者はおのおの宝を背負ひ、山を下りゆかむとするこの時、高倉、旭の白狐はにはかに千仞の谷間を平地と見せかけたれば、いづれも平坦の道路と思ひ誤り、残らず谷間におちいり、岩角に傷つき、あるひは渓流に流され、ほとンど曲

者の一隊は全滅しをはりしぞ愉快なれ。

高山彦も大負傷をなし、つひに滅亡せしかば、道彦は白狐に導かれ谷間に下りけるに、不思議にも、その谷間は自分のかつて顛落したりし同じ箇所なり❓。すべての宝は皆この谷底に集まりありければ、白狐の指示すままにその宝を一所にあつめ、土を掘りてこれを深く秘め蔵し、その上に千引の岩をもつて覆ひ、何くはぬ顔にて帰り来たりける。

南高山の城内には、高山彦以下のあまたの神司の姿見えざるに不審をおこし、四方八方に手配りして、その行方を探しつつありしところへ帰り来たりし道彦の衣類には、血が一面に附着しゐたれば、大島別は、道彦の衣類の血を見て、やや不審を抱きつつありけるところへ、数多の神司は高山彦の屍骸を担ぎ帰り来たりぬ。しかして数多の神司は渓流に落ちて苦しみ、ほとんど全滅せることを委細に奏上したりける。時しも高山彦の従臣なる高彦は、危難をまぬがれ帰り来り、道彦のために全部滅ぼされむとしたることを、涙とともに奏上したりける。

大島別は烈火のごとく憤り、長刀を引抜き、真向より道彦に斬りつけたるに、

道彦はヒラリと体をかはし、手をうつて笑ひながら後退りしつつ、
『ここまで御座れ、甘酒のまそ』
と踊りつつ城門をにげだしたり。八島姫は血相かへて道彦の後を追ひつつ門外に出づるや、たちまち暗にまぎれて行方をくらましにける。
（大正一〇・一二・六　旧一一・八　外山豊二録）
（第三四章～第三五章　昭和一〇・一・一八　於延岡市吉野家　王仁校正）

第三六章　唖者の叫び〔一三六〕

道彦は南高山の城塞を脱出し、白狐の高倉に守られて何処ともなく、足にまかして漂泊の旅をつづけたりしが、高倉は道彦の先に立ちて導きゆきぬ。
八島姫は道彦の後を慕ひて、見えつ隠れつ従ひゆく。されど道彦は八島姫の後より呼びとどめる声を、聾者の真似をなして少しも聞えぬふりを装ひ、ドンドン

と進みて行く。無論偽唖者となりし身は一言も発せざりける。八島姫はかよわき足にて、けはしき山坂を幾つともなく、昼夜を分たず跋渉せし疲労によりて、ほとんど息も絶えだえに苦しみけるが、やうやくにして長高山の麓を流るる深き谷川のほとりに着きぬ。道彦は白狐の跡を渡り、浅瀬を選びて向ふ岸にやつと到着し、後を振りかへり息を休めゐたりける。

このとき、八島姫は命からがら対岸まで追ひかけきたり、この谷川の絶壁に立ち、いかにして渡らむやと途方にくれながら、声をかぎりに道彦を呼びとめたり。道彦は表面素知らぬ顔はなしゐるものの、心の中には八島姫の心情を察知し、万斛の涙にむせびゐたるなりき。

されど神命もだしがたく、聾唖を装ひし身は一言の慰安も与ふるの自由を有せざりき。対岸の八島姫は、天を拝し地に伏し、慟哭やや久しうし、ここに決心の色を浮べてたちまち懐中より短刀を取り出し、天にむかつて合掌し、吾と吾が咽喉を突かむとする一刹那、道彦は思はず、

『しばらく待たれよ』

と呼ばはりぬ。姫は声をしぼつて、

『妾が一旦夫と定めたるは、天地の間に貴下を措きて他になし。生きて恋路の闇に苦しみ迷はむよりは、いつそ貴下の御目の前にて自殺を遂ぐるは、せめてもの心の慰めなり。かならず止めたまふな』

とまたも咽喉を突かむとする時、白狐はたちまち姿を現はし、八島姫の持てる短刀を力かぎりに打ち落したりしが、姫はその場にドツと倒れて失心の態なり。道彦はこの惨状を見るに忍びず、ふたたび谷川を渡りきたりて、谷水を口にふくませ種々介抱の結果、姫はやうやく蘇生するにいたりける。

姫はやうやう顔をあげ、涙をぬぐひながら道彦の手をかたく握りしめ、顔を赤らめ胸肩ともに波をうたせ、たださめざめと泣くばかりなり。道彦は親切にこれをいたはり、かつ我が身の大神より一大使命を拝し、偽つて聾唖となり痴呆となり、発狂者を装ひゐるその苦痛を逐一述べ立てたるに、八島姫ははじめて悟り、吾が身の不覚と無智を悔い、今までの怪しき心をあらため、何とぞ今後ともに神業に参加せしめよと、赤誠をこめて嘆願したりける。

道彦はただちに天にむかつて天津祝詞を奏上しけるに、たちまち天上より二柱の天使降りきたり、一柱は道彦にむかひ、一柱は八島姫にむかひ、各自に特種の使命を伝へ、固く口外することを禁じたまひぬ。この天使は天の高砂の宮にます国直姫命の使神なりき。ゆゑに道彦は八島姫の使命を知らず、八島姫はまた道彦の使命のいかなるかを知らざりける。しかし道彦には白狐高倉をしてこれを守護せしめ、八島姫には白狐旭をしてこれを守護せしめられたりける。

それより八島姫は、自己の美貌を楯に悪魔の巣窟に入りてすべての計略を探知し、道彦は力強の馬鹿となりすまして、悪神らの巣窟を探り、種々の陰謀を覚知して、これを国直姫命に詳細奏上することに努めたり。

道彦、八島姫は、個々別々に身を窶して長高山の城下に進みいりぬ。長高山は忠孝両全の誉高かりし清照彦、末世姫の二人が主将として守りゐたりけり。

しかるに、美しき花は風に散りやすく、良果は虫に侵されやすきがごとく、長高山は一時天国浄土の現出せしごとく天下泰平に治まり、風雨和順して神人鼓腹の楽しみに馴れ、あまたの神人は少しも治世の苦しみを知らざりける。常世姫の

間者土熊別、鬼丸は善の仮面をかぶり長高山に現はれ、城内の神人らを絲竹管絃の楽みをもつて籠絡し、日夜茗宴にふけらしめたれば、長高山は天下泰平の波にただよひ、神人は下の苦しみを知らず、たがひに自己の逸楽栄達のみにふけり、難を避け安きにつき、天職責任を解せず、頤をもつて下民人を使役し、日をおふて驕慢心を増長せしめけり。上は日夜絲竹管絃のひびきに心魂をとろかし、酒池肉林の驕奢に魂を腐らし、宝を湯水のごとく濫費し、下級民人の惨苦を少しも思はざるにいたれり。これぞ常世姫の間者土熊別、鬼丸らの術中に陥らしめ、長高山を内部より崩潰せしめむとの奸策なりける。神人はつねに美女を座に侍らせ、長夜の遊楽に耽りゐたりけるが、あるとき土熊別は酒の酔をさますべく、城外にいでて散歩せるに、たちまち前方に容色ならぶものなき美人が現はれける。この美人は前述の八島姫なりける。

八島姫は、酔眼朦朧として唄を歌ひつつ進みくる土熊別の前にいたり、にはかに地上に俯伏して泣き苦しみはじめたり。土熊別はこれを見てただちに抱きおこし、

『貴女はいづれの女性にましますや。また何用ありてこの城下へ来たられしや』と舌もまはらぬ言霊にて問ひかくれば、姫はただうつむきて泣くばかりなり。土熊別はもどかしがり、しきりに名を尋ねけるを、姫はただちに顔をあげ、涙をぬぐひながら、

『妾は天より降りたる旭姫といふ者なり。長高山には常に絲竹管絃の音絶えず、日夜面白き舞曲を演ぜらるると聞き、雲路を分けてひそかにその舞曲を見むと降りきたる折しも、烈風のために羽衣を破られて飛行自由ならず、突然地上に墜落して大腿骨を打ち、痛苦に堪へず苦しみをれるなり』

と真しやかに物語りければ、土熊別はやや右の肩をそばだて、首を左右に傾けながら、旭姫の顔を熟視ししばらくは無言のまま突つ立ちゐたり。このとき、旭姫はニタニタと笑ひはじめたり。しかして姫は、

『あゝありがたし、妾の苦痛は全く癒えたり』

と言ひながらすつくと立あがり数十歩円をゑがいて軽々しく歩行して見せたるに、土熊別は手を拍ちて喜び、ただちに姫の手をたづさへ城内の酒宴の場に導きける。

あまたの美人は宴席にあれども、旭姫の容色端麗にしてその風采の優雅なるによよぶ者なかりける。ほとんど姫は万緑叢中紅一点の観あるにぞ、神人らは手を拍つて喜びあいにける。

ここに旭姫は神司らの請ひをいれ、天女の舞ひを演ずることとなりぬ。拍手喝采の声は城の内外に轟きわたりける。

（大正一〇・一二・六　旧一一・八　桜井重雄録）

（第三六章　昭和一〇・一・一八　於延岡市　王仁校正）

第三七章　天女の舞曲〔一三七〕

八咫の大広間の大酒宴の中に立ちて、旭姫は長袖いとしとやかに舞ひつ踊りつ、口づから歌ひはじめたり。その歌、

『朝日は豊栄昇りまし　神の光もいやちこに
清照彦のうしはげる　世は永遠に長高の
山の草木もかぐはしく　花は咲けども百鳥の
声は長閑に謳へども　月に叢雲花に風
常世の国より吹きおくる　冷たき嵐にさそはれて
山のふもとや谷底の　木草は倒れ花は散り
神人一度に泣き叫ぶ　その声今に長高の
山の尾の上を轟かし　常世の暗の世とならむ
心きよてる彦の神　その身の側に気をつけて
角の生えたる牛熊や　鬼丸等がたはむれを
真寸美の鏡に照し見よ　あらしはやがて吹き荒み
炎は今に燃え上がる　清照彦よ気をつけよ
常世の暗となるなれば　長高山も末世姫
末世澆季の世をてらす　国直姫の御使

旭の明神これにあり　　太刀抜き振ふは今の内
角折りこらすはこの砌　　大道別や八島姫
後にひかへ奉る　　いそげよいそげいざ急げ
一時の猶予は千歳の　　悔いを残さむささ早く』

清照彦は旭姫の諷歌を聞くや、侍臣に命じてその場に牛熊別を縛せしめむとせしに、さすがの牛熊別も大酒をすごせしため身体自由ならず、やすやすと部下の神司のために前後左右より取り囲まれ縛につきぬ。このとき山下に聞ゆる鬨の声。清照彦は突つ立ち上り、

『反逆者の襲来ならむ。神将らは武装を整へ防戦にむかへ』

と下知すれども、酒に酔ひつぶれて正体なく、ただただ寝耳に水の恐怖心にかられ、右往左往に城内を奔りまはるのみ。一人として戦場にむかふ勇者は無かりけり。

時しも鬼丸は、陣頭に立ちあまたの魔軍を引率し、城内に侵入しきたり、

『鬼丸これにあり、清照彦命に見参せむ。吾こそは常世国の重臣にして、鬼丸とは世を忍ぶ仮の名、実は八王大神の密偵、鷹虎別なるぞ。長高山を占領せむと身をやつし牛熊別としめし合せ、本城を根底より覆へさむとの吾が計略、天運ここに循環して、日ごろの大望成就の暁はきたれり。もはや叶はぬ清照彦は、本城を開けわたし、常世の国に従ふか、ただしはこの場で切腹あるか。返答いかに』

と阿修羅王の荒れたるごとく、奥殿目がけて攻めきたるを、清照彦、末世姫は、強弓に矢を番へ、立ち出でて鷹虎別にむかひ、一矢を発たむとする時しも、いかがはしけん、弓弦はプツリと断ち切れて双方とも用をなさず、進退きはまり夫婦は最早切腹の余儀なきをりしも、旭姫は牛熊別を縛のまま、その前に曳出しきたり、短刀を牛熊別の胸に擬し、鬼丸にむかひ、

『汝吾が主にむかつて危害を加へむとせば、妾はいま汝の主を刺殺さむ』

と睨めつけたるにぞ、鷹虎別は仁王立ちとなりしまま歯がみをなし、手を下すによしなく溜息つくをりしも、表の方よりにはかに聞ゆる数多の足音。鬼丸はふと後を振返る一刹那、旭姫は短刀の鞘を払ふより早く、鬼丸の胸につき立てしが、

鬼丸はアツと一声、その場に倒れことときれにけり。
山麓に押しよせたる鬼丸の部下をさんざんに打ち悩ませ、敵を四方に散乱せしめ勝に乗じて山上に登り、城内の危急を救はむとして入り来れる大道別の雄姿は、今この場に現はれ、鐘のごとき大声を放ちて、神助の次第を報知したりける。
旭姫はおほいに悦び、奥に進み入りて清照彦、末世姫に戦捷の次第を物語り、かつ大道別の功績を逐一物語りたり。清照彦はただちに大道別を引見し、その勲功を感謝し、ただちにわが地位を捨てて大道別、八島姫に譲り、かつ、
『吾ら夫妻は、貴下の従臣として永く奉仕せむ』
と赤心を面に表はして、しきりに慫慂したりける。
案に相違の大道別は、大いに迷惑を感じ、直ちに偽の聾唖を装ひ、痴呆を真似て清照彦の言を馬耳東風と葬り去りぬ。旭姫は口をきはめて道彦の力量のみ徒に強くして、治世の能力なき痴呆者たる事を宣明したれば、清照彦は止むを得ずこれを断念したりけり。
これより清照彦は、領内の正しき神人を下級より選抜し、重任に就かしめたり

しより、その後は一回の紛擾もおこらず、長高山はその名のごとく、世は長く栄え神徳は高く四方に輝きわたり、常世の邪神はつひにその影を没したりける。大道別は長高山を煙のごとく消え失せ、八島姫もまた何時のまにか、姿を隠したりける。雲のごとく現はれ、霞のごとく消え去りし二人の神変不可測の行動、高倉、旭の二白狐の変現出没の神妙奇蹟は、今後の物語りによつて判明するならむ。

（大正一〇・一二・七　旧一一・九　近藤貞二録）

第三八章　四十八滝〔一三八〕

長高山の城塞より煙のごとく消え失せたる道彦は、高倉のあとを追ふて、遠く東北にすすみ、氷のはりつめたる海峡を渡りて、アラスカの高白山の谷間に進みたりしが、すこしく谷川の上流にあたりて喧騒の声聞え来たる。道彦はその声を

しるべに谷川をどんどん上りゆきみれば、谷の両側はあたかも鏡を立てたるごとく、断巌絶壁の一方に、あまたの人々寄り集まり、右往左往に声を放ちて騒ぎゐたり。

見れば、高白山の主将荒熊彦は、谷間に顛落して大負傷をなし、谷水を鮮血にそめ苦しみつつありしなり。

神司らはこれを救はむとすれども、名におふ断巌絶壁、いかんともすることあたはず途方にくれゐたりける。

このとき白狐の高倉は、金色の槌と変化し、絶壁をうち砕き、足のかかるべき穴を穿ちつつ谷底に下り行く。道彦は傍なる山林に生茂れる藤葛を長く結び、谷川のほとりの老木の根にその一端を結びつけ、みづからその蔓を谷底に垂れ、高倉の穿ちおきたる巌壁の穴に足をかけ、やうやく谷底に下りつき、荒熊彦のかたはらに寄りそひ、水を口にふくみて面上に吹きかけ、かつ天津祝詞を奏上し、鎮魂の神術をほどこし、やうやく正気づき、出血もただちに止りたれば、右の脇に引抱へ、藤葛を左の手に持ち、巌壁の穴に足をかけ上りきたりぬ。神司らの喜び

の声、感歎の声は天地も崩るるばかりなり。荒熊彦は道彦を命の親として尊敬し城内にともなひ帰り、山海の珍味を出して饗応し、救命の恩を感謝したりける。

さて荒熊彦は衆とともに、この谷間の絶景を眺めて酒宴を催し、興に乗じて踊り狂ひ眼くらんで、この千仞の谷間に顛落したりしなりけり。この谷川は四十八滝と称し、いたる所に奇岩、怪石散在して、大小四十八個の荘厳なる瀑布が出現し、風光絶佳の遊覧所となりゐたりけり。

道彦は荒熊彦の信任を得、聾唖痴呆の強力として侍臣のうちに加へられ、つひには炊事の用務を命ぜられ、まめまめしく奉仕しゐたり。

高白山の城内の宰相に、八十熊別といふ徳望高き人あり。この人は常世姫の間諜にして、古くより高白山に謀計をもつて忍び入り、時をみて高白山を顛覆せむと企てゐたりける。

ここにローマの戦に敗れ、常世の国に送られたる言霊別命❓、中途にて、言代別命のために救はれ、身を変じて高白山にのがれ、賓客として、荘厳なる別殿に迎へられ、時機を待ちつつありしが、八十熊別は、言霊別命の素性を探知せむと、

探女を使役して常にその行動を注視せしめゐたり。探女の名を月の姫といふ。月の姫は常に八十熊別の命により、言霊別命の侍女として、表面まめまめしく仕へゐたりぬ。

ある夜、言霊別命と荒熊彦の密談を立聴きしてをり、ひそかにその詳細を八十熊別に報告しければ、八十熊別は月の姫に耳語して何事か命令を下しける。

時に八十熊別は、茶の湯の饗応に言寄せて荒熊彦夫妻を招待し、かつ賓客なる玉照彦を招待したり。玉照彦は言霊別命の仮名なり。道彦は荒熊彦の侍者として宴席に現はれしが、彼はただちに炊事場にいたり、水をくみ茶を沸かすなど、まめまめしくたち働きける。

八十熊別の侍者は、道彦の聾唖と痴呆とに心をゆるし、よろこびて炊事一切をうち任せける。月の姫は客人に茶をたて、これをすすめむとするとき、懐中よりひそかに毒薬をとり出し、茶の湯に投じたるを道彦は素知らぬ顔にこれを眺めゐたりける。月の姫はうやうやしく茶の湯を両手にささげ、玉照彦、荒熊彦らの前にすゑ、一礼して座を立ちにける。

道彦はただちに月の姫を強力に任せてひきつかみ、茶席の前に現はれ出で、仰向に押し倒し、その茶を取るより早く、月の姫の口に無理やりに飲ませたり。

月の姫はたちまち手足をもがき、黒血を吐きことぎれにける。

八十熊別は謀計の暴露せむことを恐れ、合図の磬盤を打つやいなや、どこともなく数多の邪軍現はれ、玉照彦、荒熊彦らを目がけて前後左右より、長刀を抜き放つて切り込みぬ。このとき道彦は、高倉の妙術により、数百の道彦となつて現はれたれば、八十熊別の味方の邪軍は、縦横無尽に、道彦を目がけて切りこめども、いづれも皆空を斬り、影を追ひ、勢あまつて階上より地上に顛落し、さんざんに敗北したりける。

八十熊別はこの態を見て、裏門よりのがれ出むとするや否や、幾千丈とも限りなき深き広き池沼にはかに現出して、遁るるの道なかりける。これは高倉白狐の謀計的幻影なりける。

八十熊別はやむをえず、あとへ引返すとたんに、真正の道彦のために、八つ割にされ、ここに高白山の妖雲はまつたく晴れわたり、真如の明月は、高く中天に

輝きはじめたり。

言霊別命は、高白山の主将となり、しばらく地の高天原の神司らにも行衛を秘密にしゐたまひける。

荒熊彦、荒熊姫は、言霊別命に一切を譲り、みづから従臣となり忠実に奉仕したりしが、道彦の姿はまたもや煙と消えにける。

（大正一〇・一二・七　旧一一・九　栗原七蔵録）

第三九章　乗合舟〔一三九〕

道彦は高白山を出でしより、諸方を遍歴し艱難辛苦を重ねて、やうやく常世国スペリオル湖の北岸に出たり。ここに船を傭ひ、ロッキー山に向はむとしたり。船中には沢山の神人乗りゐたり。八島姫もいつの間にか、この船の客となり居たりしが、道彦はわざと空とぼけて、素知らぬ顔をなしゐたり。八島姫は道彦の変

りはてたる姿を見て、少しも気付かざりける。
この時船の舳先よりすつくと立ちて、八島姫の傍に近づききたる神人あり、これは南高山の従臣玉純彦なりき。南高山は八島姫の出城以来、四方八方に神人を派遣して姫の行方を探しゐたりしなり。玉純彦は八島姫にむかひ、飛つくばかりの声を発し、
『貴女は八島姫にましまさずや』
といふ。八島姫も風采容貌ともに激変して、ほとんど真偽を判別するに苦しむくらゐなりしかば、八島姫は首を左右に振り、
『われは旭姫といふ常世城の従臣にして、南高山のものに非ず、見違へたまふな』
と、つンとして背を向けたるを玉純彦は、どことなく八島姫の容貌に似たるを訝かり、姫の前方にまはりて首を左右にかたむけ、穴のあくばかり千鳥のごとき鋭き目を見はり、
『如何にかくしたまふとも、貴女の額には巴形の斑点今なほ微に残れり。われは主命により貴女を尋ねむとして、櫛風沐雨、東奔西走あらゆる艱難をなめつくし、

今ここに拝顔し得たるは、天の授くる時運の到来せしならむ。袖振り合ふも他生の縁といふ。況ンや天地のあひだに二柱と無き主の御子においてをや。今この寒き湖の中に一蓮托生の船客となるも、かならず国治立命の御引き合せならむ、是非々々、名乗らせたまへ』

と、涙を流して男泣きに泣く。

八島姫は名乗りたきは山々なれども、国直姫命の神命を遂行し、地の高天原に復命を終るまで、なまじひに名乗りをあげ、神業の妨害とならむことをおそれ、断乎としてその実を告げざりし。八島姫の胸中はじつに熱鉄をのむ心地なり。玉純彦はなほも言葉をついで、

『貴女はいかに隠させたまふとも、吾は正しく八島姫と拝察したてまつる。貴女の出城されしより、御父は煩悶のあまり、重き病の床につかせたまひ、御母また逆臣豊彦のために弑せられ、御父大島別は老いゆくとともに世をはかなみ、ぜひ一度八島姫に面会せざれば死すること能はずと、日夜悲嘆の涙にくれたまふのみならず、御兄八島彦は、瓢然として出城されしまま、行方不明とならせ給ふ。海

山の大恩ある御父の難儀をふりすて、わが意中の道彦の後を追はせたまふは、実に破倫の行為にして天則に違反するものに非ずや』

と言葉をつくして述べたてける。

姫の胸中は暗黒無明の雲にとざされにけり。ほどなく船は南の岸に近づきぬ。この対話を聞きゐたる道彦は、はじめて様子を知り、いよいよ八島姫なることを悟り、つくづくその面を見れば、かすかに巴形の斑点を認むることを得たり。

船はやうやく岸に着き、神人は先を争ふて上陸したり。道彦は八島姫に悟られじと直ちにその姿を物陰に隠したるに、玉純彦は姫の手を固く取りて離さざりけり。

八島姫は進退きはまり、国治立命の神霊にむかひて、この場を無事にのがれむことをと祈願したるに、たちまち白色の玉天より下り、二人の前に落下し白煙濛々としてたち昇り、四辺をつつみける。玉純彦は驚きて、姫の手を離したるを幸ひ、姫は白煙のなかを一目散に南方さして逃げ去りにける。

ややありて白煙は四方に散り、後には八島姫地に伏して泣き倒れてゐたり。こ

れは白狐旭の変化なりき。玉純彦はふたたび傍に寄り、千言万語をつくして帰城をすすめたれば、姫はやうやう納得して、玉純彦とともに帰城の途につきにける。

数多の山河を跋渉し、やうやく南高山の城内にたち帰り、八島姫は久しぶりにて父に面会し、無断出城の罪を謝したりしが、父はおほいに喜び、かつ玉純彦の功績を賞揚し、城内にはかに春陽の気満ち神人らは祝宴をひらいて万歳を唱へ、大島別はここに元気回復して、後日神政成就の神業に参加することとなりける。

道彦は八島姫の目を免がれ、常世城に入り、従僕となり遂に抜擢せられて、八王大神の給仕役となり、総ての計画を探知するを得たり。また白狐の変化ならざる八島姫も同じく常世城に入り、常世姫の侍女となり、一切の邪神の計画を探り、地の高天原に復命し、偉勲を樹つる次第は後日明瞭となるべし。

（大正一〇・一二・七　旧一一・九　加藤明子録）

第一〇篇　神政の破壊

第四〇章　国の広宮〔一四〇〕

国直姫命の上天されしより、地の高天原も、竜宮城も綱紀紊乱して、諸神司は日夜に暗闘をつづけ、ほとんど収拾すべからざるに立いたりぬ。ここに大八洲彦命、神国別命は国直姫命の神霊を奉安し、神助をえて地の高天原を統治せむことを企てたまひぬ。

このとき竜山別、広若、船木姫らの一派は神殿造営に極力反抗し、竜山別は大八洲彦命にむかひ、

『国直姫命は、すでに上天したまひたれば、肉身ある神にあらず。神はすべて霊にして、形体なし。いたづらに土木を起し、神殿を造営するは、かへつて天地の神慮に反くものなり。神は金石木草をもつて造りたる社殿には住みたまはざるべ

し。霊を拝するには霊をもつてせざるべからず。神殿を造りて、これに拝跪するごときは、いはゆる偶像を拝する悪逆無道の行為にして神慮を傷つくるものなり』と強弁したれば、広若、船木姫らも手をうつて、その説に賛成の意を表しける。

大八洲彦命は憤然として立上り、

『貴下の言一応は道理のごとく聞ゆれども、神は霊なりとしてこれを放任し、いたづらに天を拝するは、顕幽一致の神術に相反するの甚だしきものなり。神は絶対無限の神霊にして、かつ無形無声にましますは真理なれども、そは宇宙の大元霊たる天之御中主大神の御事にして、一旦肉身をもつて地上に顕現されし国直姫命のごときは幽神に非ず。今日は顕の幽神として上天したまへば、かならず荘厳なる宮殿を造り、神霊を祭祀し神助を仰がざるべからず』

と宣言したまひければ、神国別命は、一も二もなく大八洲彦命の説に賛成し、いよいよ天の原といふ聖浄の地を選み、宮殿を造営することとなり、これを国の広宮ととなへられける。

国の広宮には、宮司として武直彦、玉国彦が奉仕することとなりぬ。大八洲彦

命はあまたの神司とともに、神霊鎮祭の祭典を執行されたりしが、その場に美山彦、国照姫、竜山別、広若、船木姫、田糸姫などの面々も、不承不承に参列しゐたりけり。

神霊鎮祭の儀式をはるや、たちまち神殿鳴動して扉は自然に開かれ、殿内より強烈なる光線矢を射るごとく、美山彦、国照姫、広若、船木姫、田糸姫らの面上を射照したるに、神威におそれて美山彦以下の面々は、その場に顛倒し、ふたたび起あがり手をふり、身体を動揺させ、怪しき声をたてて庭前を狂気のごとく飛びまはりける。

しかして美山彦以下の身体よりは銀毛八尾の白狐、古狸等数限りもなく現はれ、たちまち妖雲を捲きおこし、雲に隠れてどこともなく散乱したりける。国の広宮は、天神地祇諸神の審神をなす聖場と定まりてより、美山彦、国照姫、竜山別は呆然として気抜けせしごとく、神司らの前をはづかしげにすごすごとして竜宮城に立ちいたり、第二の計画をめぐらしにける。

（大正一〇・一二・七　旧一一・九　外山豊二録）

第四一章　二神の帰城〔一四一〕

美山彦、国照姫は、天の原なる国の広宮の建設されしより、邪鬼、悪狐の憑霊現はれ、八百万の神司の手前面目を失し、竜山別、広若、船木姫、田糸姫、猿若姫らとひそかに広若の館に集まり、地の高天原をはじめ竜宮城を占領せむことを企てたるが、到底その力のおよばざるを悟りて、大国彦、常世彦の助力を求め、第一に国の広宮を破壊し、厳粛なる神司の審判を廃止せしめ、そのうへ当初の目的たる地の高天原を占領せむとし、四方の魔軍を募り、かつ大自在天大国彦の部下、醜原彦、大鷹彦、中依別、藤高、鷹取、遠山その他の暴悪非道の曲神の率ゐる数万の魔軍を、天の原にむかつて攻めよせしめたり。

宮司の武直彦、玉国彦をはじめ、竜宮城の従臣佐倉彦、白峰別は大八洲彦命の命によりて極力防戦したれども、暴悪なる魔軍はなんの容赦もなく、多数の権威を頼みてたちまちこれを破壊し、凱歌をあげていういうと引揚げたりける。しかるに美山彦、国照姫の一派は、この残虐を自己の関知せざる態によそほひ、なほ

も依然として竜宮城内に留まり、言霊姫命、真澄姫、杉生彦を甘言をもつて説きつけ、地の高天原の主宰者なる大八洲彦命をはじめ、神国別命その他の重職にある神司を排除し、竜山別をして天使長の職に代らしめむとしたりける。

されど強直無比の曙姫、梅ケ香姫、玉若彦、豊日別の若き神人のために遮られて、せつかくの計画も九分九厘のところにて一頓挫を来したりけるが、あくまで執拗なる美山彦、国照姫、船木姫、杵築姫らは、弁舌たくみに言霊姫命、真澄姫を利害得失をもつて説きつけ、

『万々一我らの進言を用ゐたまはざるにおいては、大自在天大国彦の軍勢は、直ちに竜宮城へ押寄せきたりて、国の広宮のごとく一挙に地の高天原もろとも破壊さるるのみならず、大八洲彦命以下の神司は残らず滅ぼされむ。我らの言を採用し、常世姫を迎へたてまつり、かつ竜山別をして天使長の職に就かしめなば、地の高天原も竜宮城も安全無事なるのみならず、言霊別命、大足彦は常世国より解放の歓びにあふは必然なり。真澄姫、言霊姫にして、夫の危難を救ひ本城を永遠に保ち、神徳を四方に発揮せむと欲したまはば、速やかに我らの忠言を容れられ

よ。夢にも我らの言を否みたまふにおいては、後日のため面白からぬ結果を招き、つひには貴女らの御身の上にも大事の発生せむこと、火を睹るよりも明白なり』と脅喝したりければ、さすが女人の心よわく、真澄姫、言霊姫は、その賛否に迷はざるを得ざりける。曙姫、梅ケ香姫、佐倉姫らの女性は、いたつて強剛の態度をとり、真澄姫、言霊姫にむかつて、

『断じて美山彦一派の言に耳を傾けたまふべからず』

と進言したりけるに、二人はやや思案にくれつつありき。そこへまたもや国照姫、杵築姫、船木姫、広若らの邪神現はれ来たり、二女にむかひて、

『如何にしても吾らの忠言を容れて諸神司を放逐し、竜山別以下の神人を採用せざるときは、災禍たちまちいたりて本城は大国彦の部下に亡ぼされ、言霊別命、大足彦は常世国の刑に処せられ、末代帰還さるべき機会なし。一時も早く吾らの言を容れて大改革を断行されよ』

と前後左右より攻めよするをりしも、竜宮城の門外にはかに騒がしく、諸神司の歓呼の声、鬨の声、百雷の一時に轟くごとく聞こえきたりぬ。これは言霊別命が

神助の下に常世国に送らる❷中途において、従者言代別命に救はれ、一たん高白山の城主となり各地をひそかに巡視し、詳細なる偵察を了へて緑毛の大亀にうち乗り、大足彦とともに突然帰還したまひしなりき。

かくと知りたる美山彦、国照姫、杵築姫らの邪神は、たちまち周章狼狽して色をうしなひ、逃ぐるにも逃げ途なく、梟の夜食に外れし時のごとく面ふくらしながら二神司を迎へて、いやさうな、気乗のせぬ声にて、

『よくもお帰りありしぞ、マアマア御芽出度し』

と義理一遍の冷淡きはまる挨拶をのべ、早々わが居室に立ち去りにけり。

あまたの神司は、二神司の無事に帰還せられしを心底より欣喜にたへず、天を拝し、あるひは地を拝し、枯木に花の咲きしがごとく勇み立ちにける。二神司はまづ天の三柱の大神に無事の帰城を感謝し、ついで国治立命の神前に拝跪して神恩の深きに涙を流し、真澄姫をはじめ留守中の諸神司に、永日の労苦を謝しをはりて、蓮華台上の聖地にのぼり、天神地祇、八百万の神々に感謝の祝文を奏上し、衆に守られて城内深く休息したまひける。

ややあつて国照姫、杵築姫、広若は二神司の前に現はれ、

『妾らは、常世城に捕はれ獄中に呻吟したまふことを悲しみ、同情の涙にたへず、よりて妾らは種々の手続きを求めて大国彦に歎願し、かつ常世彦のもとに必死的運動の結果、貴神司らは今日無事に帰還するを得たるは御承知のことならむ。神明の加護とはいひながら、その大部分は妾らが犠牲的大運動のたまものなれば、今後は妾らの忠言を容れて、大々的改革を断行したまへ。この好機を逸する時は、地の高天原も竜宮城も、暗黒界と変ぜむこと明らかなり』

と喋々として述べ立つる。二神司は国照姫以下の邪神の、見えすきたる虚言にあきれて、言語も発し得ざりける。すなわち二神司は一旦ローマの戦ひに破れて捕はれたれど、神の佑助によつて中途に救はれ、言霊別命は一時高白山に隠れて時を待ち、それより不思議にも途中大足彦に会し相共に天下の諸山を歴視し、邪神の奸計を詳細に探求し還りたることを告げ、かつ国照姫、杵築姫らの言葉の事実に相反し、全然虚構なる旨を素破抜きたまひける。

国照姫以下の邪神らは、二神司の言を聞きて赤面するやと思ひの外、厚顔無恥

なる彼ら悪神は、少しの痛痒も感ぜざるごとき態度をよそほひ、かへつて二神司の言を虚言と言ひはなちつつ、なほも陰に陽に反抗的態度を持続し、あるひは大国彦の部神に通じ、あるひは常世姫とはかり、盛ンに地の高天原を顛覆せむと焦慮しつつ、表に善人の仮面を被ぶり、暗々裡に反逆的活動を続けたりける。

（大正一〇・一二・七　旧一一・九　桜井重雄録）

第四二章　常世会議〔一四二〕

美山彦、国照姫らの一派は暗々裡に大国彦に内通し、言霊別命以下を窮地におとしいれ、地の高天原を神退ひに退はむと、ここに玉の井の湖に一敗地にまみれ潰走したる牛雲別、蚊取別、蟹雲別を先導に、八十枉津なる朝触、夕触、日触、言触らをして数百万の探女を天の下四方の国々のこる隈なく配置し、もつて言霊別命、大足彦の悪評を宣伝せしめ、蠑螈別、播磨別らの応援をえて各山各地の八

王神を籠絡せしめたり。八王神、八頭神はつひに彼らの奸策におちいり、漸次言霊別命に反抗の態度をとり、各山各地の八王八頭を常世城に召集し、十二柱の八王八頭を八王大神の部下に附属せしめむとし、一大団結力をつくつて地の高天原なる大八洲彦命を排除せむことを鳩首謀議し八王八頭の賛成をえたりける。大八洲彦命はこの形勢を見て事態容易ならずとし、ここに八嶋彦、加賀彦、陸奥彦を使者として常世国に遣はし、一たん神界にて定められたる天使長の管轄をはなれ、自由に八王八頭の連合団体を造り、大神の制定を破るは、天則違反のもつとも甚だしきものたることを極力言明せしめたり。

されど最早常世彦は、世界の八王八頭をほとんど悪辣なる手段をもつて言向け従へたる勢にまかせ、天使長大八洲彦命の宣示を馬耳東風と聞き流し、自由権利論を強調して八嶋彦、加賀彦、陸奥彦らの使者を侮蔑し、かつ全地上の国魂の一致の決議をいまさら改変するは、道理に於て宥すべからざる悪逆無道の処置なり、と一言に【はね】付けたり。使者はほとんど取りつく島も泣き寝入り、波にとられた沖の舟、悄然として帰城したりける。

その中にも万寿山の八王神磐樟彦の一派と、天山の八王神斎代彦の一派の神司は、天則を重ンじ苦節を守り、四面楚歌の中に卓立して、上下一致よく永遠に神政を支持しつつありき。

かくして地の高天原において神定めたまひし十二の八王神は、十王女まで八頭八尾の憑依せる常世彦のために併呑されをはりぬ。手撫土（艮の金神）、足撫土（坤の金神）のひそかに守りたまへる十二の宝座は、すでに十座までも失はれける。十二個の黄金水の玉を竹熊のために、十個まで占奪されたると同様の惨事なり。八王大神は勝に乗じて、なほもこの残りの二王をその幕下たらしめむとして、あらゆる奸策を施したれど、この八乙女のみは、国大立命のために難を免れたりけり。

この次第は後日に詳しく口述すべし。ある古書に載せたる八乙女といへるは即ち八王と女神の意義なりといふ。

（大正一〇・一二・八　旧一一・一〇　谷村真友録）

第四三章　配所の月〔一四三〕

八王大神常世彦は十王、十頭の神司を操縦し、あまたの魔軍とともに数百千の磐船に乗り、天空をかすめて黄金橋の上空を襲ひ、数百千万とも数限りなき火弾を投下し、かつ進ンで竜宮城およびエルサレムの上に進撃しきたり、ここにも多数の火弾毒弾などを、雨霰のごとくに投げつけたり。大八洲彦命、神国別命、大足彦、八島別は城内の神将神卒を指揮しつつ盛ンに防戦に努めける。竜宮城よりも数多の磐樟船を飛ばして大いに敵軍を悩ませたるが、しかも一勝一敗を繰返しつつ戦ひ久しきにわたり、竜宮城の神軍は日夜にその数を減じ、ほとんど孤城落日無援の窮地に陥りにけり。

大八洲彦命は、もはや如何に神明の加護と神智を揮ひ神算鬼謀の秘術を尽すといへども、到底勝算なきを看破し、百計ここにつきて、つひに国祖の御前に拝跪し、天の真澄の鏡をもつて敵軍を防がむことを奏請したりけるに、国祖はおほいに怒りたまひ、

『汝らは天地の律法をもつて何ゆゑに敵を言向和し悔改めしめざるや、進退これ谷まりたりとて、いやしくも天地の律法を制定され、世界を至善の道をもつて教化すべき天使の職掌を拝しながら、敵の暴力に酬ゆるに暴力をもつて対抗せむとするは、天使長より神聖なる律法を破るものにして、これに過ぎたる罪科は非ざるなり。あくまでも忍耐に忍耐を重ねて、至誠一貫もつて極悪無道の人物を心底より悔改めしめ、天則の犯すべからざるを自覚せしむべし。これ善一筋の誠の教なれば、たとへ如何なる難局に立つとも断じて真澄の玉は使用すべからず。かつ、その玉は稚桜姫命幽界に持ちゆきたる浄玻璃の神鏡となりたれば、これを戦闘のために使用すべきものに非ず。汝らは神の力を信じ、至誠を天地に一貫し、もつて天津神の御照覧にあづかるをもつて主旨とし、暴悪無道の敵軍に暴力をもつて戦ふを止めよ。真の神の心は宇宙万有一切を平等に愛護す。ゆゑに大神の眼よりは一視同仁にして、いたづらに争闘を事とするは神慮に背反するものなり。断じて武力に訴へなどして解決を急ぐなかれ。何事も天命の然らしむるところにして、惟神の摂理なり。ただただ汝らは、天使たるの聖職に省みて広く万物を愛し、敵

を憎まず、彼らの為すがままに放任せよ』
との厳命なりける。
天使長大八洲彦命は、各天使を地の高天原にあつめて神勅を報告し、かつ最高会議は開かれたり。天空には敵の磐船雲霞の如く襲来し、頭上に火弾を雨下し、会議の席上にも火弾飛びきたりて神人を傷つけ、暗雲天地をこめて咫尺を弁ぜざるにいたる。されど国祖の神勅は大地よりも重く、その命は儼乎として動かすべからず。さりとて神命を奉ぜむか、味方の敗亡は火をみるよりも明白なる事実なり。万一神命に背反せむか、天則破壊の罪科を犯さむ。アヽ善の道ほど辛きものはなし、と諸神司は思案にくれ、溜息吐息の態なりける。
竜宮城内よりは美山彦、国照姫、杵築姫、竜山別らの一派は、平素の目的を達するは今この時と、内外相応じて八王大神の魔軍に応援し、味方は四分五裂の状勢におちいり収拾すべからず、進退いよいよ谷まりたる天使長大八洲彦命以下の天使神将は、やむをえず大神の禁を破つて破軍の剣を抜き放ち、寄せくる空中の敵軍目がけて打ち振るやいなや、剣の尖より不思議の神光あらはれ、天地四方に

雷鳴電光おこり、疾風吹き荒び雨の降るがごとく、数百千の磐船は一隻も残らず地上に墜落し、敵軍の大半はほとんど滅亡したりける。

さしも猛烈なる敵の魔軍も、大八洲彦命以下の神司らの犠牲的英断と破軍の剣の威徳をもつて、もろくも潰滅したりける。敵の逃げ去りたる跡の地の高天原および竜宮城は、あたかも大洪水の引きたる跡のごとく、大火の跡のごとき惨澹たる光景なりき。折しも大風吹きすさび強雨降りそそぎて、すべての汚穢物は惟神的に吹き散らされ、大雨洪水となりて大海に流れ去り、ふたたび清浄なる聖地聖城とはなりにける。

ここに美山彦、国照姫の一派は、国治立命の御前にすすみいでて、

『このたびの大八洲彦命以下の天使神将は、厳格なる大神の神勅を無視し、厳禁を犯して破軍の剣を採り出し、寄せきたる数多の敵軍をさんざんに攻めくるしめ、暴力のあらむ限りをつくし、優勝劣敗弱肉強食の戦法を使用し、広く万物を愛し敵を憎まず、善一筋の誠をもつて言向和さず、かつ「殺す勿れ」の律法を無視したる悪逆無道の罪、断じて宥すべからず。希はくば、かれ天使長以下の職を解き、

地の高天原を追放し、厳格なる天地の律法を犯されざるやう、何分の御処置を下されむことを願ひたてまつる』

と頭をそろへ律法を楯に、うやうやしく奏上したりける。

地上霊界の主権者に坐します国祖の大神も、律法を守り天地の綱紀を保持するの必要上、いかにやむを得ざる情実のためとはいへ、天地の神の定めたる禁を犯したる以上は、これを不問に附することあたはざる破目に陥りたまひ、呑剣断腸の思ひを心中に秘め、涙を隠して断然意を決したまひ、大八洲彦命、言霊別命、神国別命、大足彦の四天使を召して儼然たる態度のもとに、地の高天原と竜宮城を退去すべく宣示し給ひける。この四天使らは、稚桜姫命の到りませる幽庁の神と左遷さるる規定なりけるが、貞操なる真澄姫、言霊姫、竜世姫らの歎願哀訴により、大神はその情をくみ給ひて、その罪を赦し、万寿山の城に蟄居を命ぜられ、四神将はここに配所の月をながめて、いくばくかの星霜を送りたまひける。

この四神将は元来国大立之命、天神の命を奉じて大海原の国を知食すべく、その精霊魂を分ちて神界の守護に当らせたまひしものにして、

大八洲彦命は【和魂】であり
言霊別命は【幸魂】であり
また、
大足彦命は【荒魂】であり
神国別命は【奇魂】である。
ア、天使長以下三天使の重なる神司の退却されし後の地の高天原および竜宮城の形勢は、いかにして治まり行くならむ乎。
（大正一〇・一二・八　旧一一・一〇　近藤貞二録）
（第三七章～第四三章　昭和一〇・一・一八　宮崎市神田橋旅館　王仁校正）

第一一篇　新規蒔直し

第四四章　可賀天下〔一四四〕

大八洲彦命以下天使の聖地退去ののちは、国治立命の奏請により、天上より高照姫命を降したまひて、これを地の高天原の宰相神に任じ、天使長の聖職に就かしめ、真澄姫、言霊姫、竜世姫をして天使の聖職につかしめたまひぬ。ここに女神司四柱相並びて神務と神政に奉仕することとなり、神々の心気を新にすることを得たりけり。

一たん常世彦の威力に圧せられ、八王聯盟に加はりゐたる諸天使は、八頭神を引連れ八王大神に背きてふたたび高照姫命の幕下となり、前非を悔い、ここに目出度く帰順することとなり、聖地の神政はまつたく復活することを得たりき。天使長高照姫命は国治立命の神命を奉じ、八王八頭を率ゐて、天地の律法をあまねく地上の世界に宣伝し、一時は飛ぶ鳥もおとすばかりの大勢力にして、世界の各山各所には天津祝詞の声充満し、神人動植物はことごとくその堵に安んじ、実に天下は泰平に治まり、邪神はおのおの影をひそめ国土安穏にして、天日いよいよ

照り輝き、月光澄みわたり蒼空一点の妖気なく、実に完全無欠の神世を現出せしめたれば、世界の神人こぞつて可賀天下と賞揚するの聖代とはなりける。

竜宮城に雲をしのぎて聳立せる、三重の金殿より顕国の御玉の神霊発動して、唸りを発し、ときどき不可思議なる光輝を発射して邪悪神の面を照らしたまへば、地の高天原の聖地も竜宮城の聖城も、日ましに神威霊徳くははり、金色の鴉、銀色の神鳩嬉々として中空に舞ひ遊び、天男天女はつねに四辺を囲繞して太平の音楽を奏し、五風十雨順をたがへず、禾穀豊穣して神人その業を楽しみ、神界理想の黄金世界を現出するにいたり、遠近の邪神も静謐帰順をよそほひ、野心を深く包みて現実的暴動を慎み、天下一点の妖雲を見ざる瑞祥の世とはなりにける。これは万寿山に退去されし前天使長以下の日夜の専念的祈念の力によりて、その精霊体に活動をおこし、聖地聖域の霊徳を発輝したまひしが故なり。されど天使長高照姫命以下の三天使をはじめ神将神卒にいたるまで、須佐之男大神の昼夜の御守護の賜たることを少しも覚らず、天運の循環と、新天使以下の神務と神政の完全無欠にして、天地神明の神慮にかなひ奉れる結果ならむと、心おごりて、顕国

の御玉の守護と、大八洲彦命以下の専心祈念の賜たることを忘却し、つひには女神司のあさはかにも驕慢心増長し、その結果は天地の律法まで軽視するにいたり、神徳日々に衰へ各所に不平不満の声おこり、漸次日を追ひ月を重ぬるとともに、可賀天下の神政を呪ふ神々勃発するの形勢を馴致したりける。

ここに一旦鉾をおさめ帰順をよそほひゐたる八王大神常世彦は、常世姫と再挙をくはだて、大国彦と計り、世界各所の八王八頭に、八頭八尾の大蛇の霊魂を憑依せしめ、その女神司には金毛九尾の悪狐の霊を憑依せしめ、部下の神司には六面八臂の邪鬼や眷属を憑依せしめて、俄に反逆心を発せしめたり。世界の神人はまたもや一時に起つて、地の高天原の神政に反抗的態度をあらはし、あまたの神人魔軍と変じて、八王大神指揮のもとに、まづ諸山の神軍を降し、勝に乗じて聖地にむかひ、天の磐船を数百千とも限りなく建造して天空を翔り、群をなして攻めよせ来りぬ。天使長高照姫命は周章狼狽の結果、神勅を請ふのいとまなく、ただちに数百隻の天の鳥船を造り、橄欖山より敵にむかつて攻入り、蒼空高く一大激戦を開始し、一勝一敗たがひに雌雄を争ひ、ふたたび聖地は紛乱の巷と化し去

りにける。空中の戦ひは夜を日につぎほとンど一年有余を費やしたり。国祖国治立命はまたもや神勅を降し、

『天地の律法を遵奉し決して暴力をもつて戦ふべからず。大慈大悲の親心をもつて敵を言向和はせ、善一つの大道に教へ導くべし』

と厳命されたれども、高照姫命、真澄姫、言霊姫、竜世姫は、

『今日の場合かかる緩漫なる方法をもつて敵を改心せしめむとするは、実に無謀迂遠の策にして到底寸効なかるべし。いたづらに宋襄の仁を施しかへつて敵に乗ぜられ、噬臍の悔を後日にのこさむよりは、強暴にたいするに強暴をもつてし、我らの実力を示して敵を全滅せしめ、後難を絶つに如かず。いかに国祖の神命なればとて、危急存亡の場合、実力なき天地の律法をふりかざして、なんの効をか為さむや。神勅は、われらは努めて遵奉せざるべからずといへども、それは時と位置とに関して行ふべきものなり。急場の用に立つべきものにあらず』

と四柱の天使はきはめて強硬なる態度を持し、神勅を鼻の先にてあしらひゐたりけり。

時しも敵はますます進ンで聖地の上空に雲霞のごとく飛びきたり、天の三柱宮の上に火弾を無数に投げつけたれば、たちまち黒煙濛々として立ちのぼり、さしも荘厳を極めたるエルサレムの大神殿もたちまち烏有に帰したり。時しも火焔の中より巨大なる神将あらはれ、味方の鳥船にうち乗り敵の神将醜原別にむかつて衝突を試みたりければ、醜原別はもろくも打ち落され、火焔の中につつまれ苦悶の結果つひに焼死したりける。味方の神将神卒は手を打ちてよろこび、快哉を叫びしが、その声天地も動ぐばかりなり。言霊姫は又もや破軍の剣を抜放ち、敵の魔軍にむかつて前後左右に空中目がけて打ち振りしにぞ、宝剣の威徳ただちに現はれたまひて、敵の将卒は雨のごとく地上に落下し、あるひは火焔の中に墜落して黒焦となり滅亡したり。敵軍の将卒は不意を打たれて一敗地にまみれ、命からがら西天をかすめて遠く姿を没しける。東北の強風突如として吹きおこり聖地聖城を倒潰し、動植物の被害は目もあてられぬ悲惨なる光景となりければ、真澄姫、竜世姫はおほいに驚き、

『妄ら神勅違反の行動を執りたるを大神の赫怒したまひて、かくのごとく災害の

頻発するならむ』

と、天地に拝跪して謝罪し天津祝詞を一生懸命に奏上したれども、東北の風はますます強烈となり、洪水氾濫してつひには竜宮城も水中に没せむとするに到れり。聖地聖城の神将神卒は、今さらのごとく一斉に天地に拝跪して救助を祈り神言を奏上したれども、天地の怒りは容易に解けず、祝詞を奏上すればするほど風勢は刻々に猛烈の度をくはへ、雨はいよいよ繁く降りきたり、雷鳴は天柱くじけ、地維裂くるかと疑ふばかりの大音響すさまじく轟きわたり、電光ひらめきわたりて眼を開くあたはず、神人らの面色は土色と変じ、息をこらして地上に平伏するのみなりける。

（大正一〇・一二・八　旧一一・一〇　栗原七蔵録）

第四五章　猿猴と渋柿〔一四五〕

天使長高照姫命以下の女天使は、天地の激怒に狼狽し、ほとんど為すところを知らず、部下の神司らは残らず驚きのあまり右往左往に逃げまはり、或ひはつまづき或ひは失神し、【とかげ】の欠伸したるごとき怪しき顔にて呆れ仰天するもあり、石亀の酒壺におちいりて溺れし時のごとき顔付にて、じつに見るも滑稽至極のいたりなりける。

雷鳴は容易にやまざるのみならず、ますます激烈に鳴りとどろき、東北の強風しきりに吹き荒み、暗雲天地に閉してすさまじく、常夜の暗のごとく神人戦慄し、禽獣虫族にいたるまで、いづれも地に俯伏して息をも発せざるの惨状を現出したるぞ畏こけれ。また四柱の女天使は自我心もつとも強くして、神命さへも抗拒し律法を破りたれば、天地の大神の怒りに触れ、かかる混乱状態に陥りたるぞ是非なき次第なりけり。

待ちまうけたる常世姫の部下、国照姫、杵築姫は、平素の願望を成就するはこの時を逸すべからずとし、国治立命の奥殿に参向し、高照姫命以下の女天使らの神勅を無視し、律法に違反せる罪科を詳細に陳述し、すみやかに四柱の女天使の

職を免じ、聖地聖城を追放されたしと進言したり。神明に依怙なし、大神は天地の律法に対し、情に訴へて四天使を赦すわけにもゆかず、つひに涙をのンで四人の聖職を免じ、かつ四人に対し、改心のためとてエデンの園に籠居を厳命したまひける。

四天使は神命と律法にたいしては抗弁するの余地なく、唯々として厳命を拝受し、命のまにまにエデンの園に籠居の憂目を味はふの止むなきに立いたりけり。

四天使の追放とともに、さしも激烈なりし雷鳴も、凄じかりし電火も、烈風強雨も、たちまち鎮まりて清澄なる天地と化し、宇宙は夢の醒めたるごとき光景となりにける。

エデンの園は、東北西の三方青山をもつて囲まれ、南方のみ広く展開して一条の大川清く流れ、自然の城壁を造られあり。四人はこの一定の場所に押込められ、草木の実を食用に供しつつ楽からぬ光陰を送りけり。

エデンの園は、かつて邪神の棟梁竹熊の割拠せし所にして、鬼熊のために占領せられしが、鬼熊、鬼姫の没落後まつたく竜宮城の管下になりゐたりしところな

り。
因に、高照姫命は金勝要の神の【和魂】であり、
真澄姫命は【幸魂】であり、
言霊姫命は【荒魂】であり、
竜世姫命は【奇魂】である。
今まで四魂合一して、神業に奉仕されつつありしが、自我心の強烈なりしために、聖地聖城を追放され、さびしき配所の月に心を慰め、時を待ちたまふの止むをえざるに立いたりしは実に残念のいたりなりける。これについても慎むべきは、自我心と驕慢心なれ。神諭の各所に、
『金勝要之神もあまり自我心が強かつたゆゑに、狭い処へ押込められなさつたぞよ』
とあるも、この消息を漏らされたるなり。
しかるに金勝要の神は、一旦大地神界の根神とまでなりたまひしに、自我心の頑強なりしため、エデンの園に押こめられ、なほも自我を頑強に張りしため、つ

ひには地底の醜めき穢なき国に墜落し、三千年の辛苦をなめたまふに至りしなり。

美山彦、国照姫の一派は、時運の到来をよろこびつつ、かならずや後継の天使長は、常世彦に新任され、自分らの一派は天使の聖職を命ぜらるるものと期待し、肩を怒らし鼻をうごめかし、得意頂点に達し、その吉報を今か、いまかと指をり数へて楽しみ待ちゐたりける。

しかるに豈計らむや、後継の神司は常世彦一派に下らずして、天上より降りきたれる金神の首領なる沢田彦命の一派に降りける。沢田彦命は一名大将軍と諸神将より賞揚されつつありし英雄神におはせり。

常世彦の一派は、案に相違し、猿猴が渋柿を口一杯に含みしごとく、頬をふくらせ渋面を造りながら、悄然として引下がりたるその状、見るも気の毒なる次第なりける。

ここに国治立命は沢田彦命を天使長に任じ、妻沢田姫命を輔佐神司となし、真心彦を天使に任じ、妻の事足姫をして神務を輔佐せしめたまひける。

また沢田彦命の従臣に、八雲彦、八雲姫の夫婦ありしが抜擢されて用ひられ、

また真心彦には国比古、国比女の夫婦および百照彦を従臣として奉仕せしめられたり。

百照彦は、真心彦のもつとも寵愛深かりし者にして、真心彦は霜の朝、月の夕に無聊を晴らすためと、百照彦を居室に招き、種々の面白き物語を聞きて心の労を慰めゐたり。百照彦は、いかにして主の心労を慰安せむかと常に焦慮しゐたれども、主の機嫌とるべき物語も、もはや種絶れとなりにける。

いかにせば良からむやと我が居間に端座し、双手を組みて吐息をもらし、思案に沈みてゐたるを、妻なる春子姫は夫の近ごろの様子をうかがひ、夫には何か一大事の出来し、それがために朝夕苦慮をめぐらしたまふならむかと、心も心ならず、思ひきりて夫にむかひ言ふやう、

『近ごろの夫の様子を伺ひまつるに、よほど御心痛のていに見受けたてまつる。天地の間にかけがへなき水ももらさぬ夫婦のあひだに、なにの遠慮懸念のあるべきぞ、苦楽を共にすべき偕老同穴の契を結びたる妻に、心の苦衷を隠したまふは、実に冷酷無慈悲の御仕打ち、妾はこれを恨みまつる』

と涙片手に口説き立つれば、百照彦はやうやく口を開き、

『吾は主の仁慈と恩徳の深きに昼夜感謝の念を断たず。しかるに主真心彦は神務の繁忙に心身を疲労し、日をおひて身体やつれ弱らせたまふを見るにつけ、従臣の身として、これを対岸の火災視するあたはず、いかにもして主の御心を慰め奉らむと日々御側に侍し、神務の閑暇には面白き四方山の物語を御聞に達し、御心を幾分か慰め奉りきたりしに、もはや吾はめづらしき物語もつきたれば、今後はいかにして御心を慰め奉らむと、とつおいつ思案にくるるなり』

と語りて太き吐息をつく。春子姫は何事か期するところあるもののごとく、夫にむかひ笑顔をたたへ見せゐたりけり。

（大正一〇・一二・九　旧一一・一一　加藤明子録）

第四六章　探湯の神事〔一四六〕

百照彦は黙然として春子姫の面色を打見やりつつありしが、たちまち膝を前めて、
『汝の愉快にみちしその容貌、たしかに妙案あらむ、はやく吾がためにその妙案を物語れよ』
と顔色に光をあらはし勢よく問ひければ、春子姫はこたへていふ、
『妾は元来芸無し猿の不束者なれども、ここに一つの隠れたる芸能あり。そは天人の舞曲にして、天上において諸神の讃歎やまざりし、妾が独特の芸能なり。妾もし夫の許しを得ば、夫とともに真心彦の御前において一曲を演じまつらば、かならず歓ばせたまはむ』
と得意満面にあふれて勇ましげに言ふ。百照彦はおほいに驚きて、
『ア、汝は何時のまにか、かかる芸能を覚えたるか』
と尋ぬれば、春子姫は、
『妾は貴下のもとに娶らるるまで、高天原の神殿に奉仕し、日夜舞曲を奏し、神歌をうたひ、大神の神慮を慰め奉る聖職に奉仕せしが、その技はつひに神に入り、

妙に達して、天上における第一位の芸能者として、もてはやされしが、このたび地の高天原の改革につき、貴下は真心彦とともに赴任さるるに際し、大神の命によりて貴下の妻と定められたり。されど、貴下は大神の御心のあるところを毫も知りたまはず、ただ単に自ら選びて妾を妻に娶りしごとく思召したまへども、夫婦の縁は決して独自の意志のごとくになるべきものに非ず。いづれも大神の御許しありての上の神議りのことなれば、夫婦の道は決して軽忽に附すべきものにあらず。いづれも皆夫婦たるべき霊魂の因縁ありて、神界より授けらるるものなり』と天地の因果を説き示し、夫婦の道は神聖にして犯すべからざる理由を諄々として説き立たり。

百照彦は初めて妻の素性を知り、かつ神律の重ンずべきを深く感得したりしが、百照彦はさらに妻にむかひ、

『汝はさほどの芸能を有しながら、現在夫たる吾に今日まで何故に告げざりしや』と怪しみ問ふを、春子姫はこたへて、

『妾は貴下の妻となりし上は、妻たるの務めを全うせば足る。いたづらに芸能に

驕り慢心に長じ、つひには夫を眼下に見下すごときことありては、天地の律法を破る大罪なれば、夢にも芸能を鼻にかけ不貞の妻と笑はるるなかれとの、父母の固き教訓なれば、今日まで何事もつつしみて、一度も口外せざりし次第なれども、今日夫の辛労を傍観するに忍びず、この時こそは妾が得意の芸能を輝かし、夫を輔佐し奉らむと決意したる次第なり。諺にも芸は身を助くるとかや、妾の身は何れになるも問ふところにあらざれども、現在の大切なる夫の神業を助け、なほ殊恩ある主の御神慮を慰め奉ることを得ば、妾が鍛錬したる芸能の功も、はじめて光を発するものなれば、女性の差出口、夫にたいして僭越至極の所為とは存じながら、夫を思ふ一念にかられて、はづかしながら妾の隠し芸を知れることをふと申上げたるなり』

と夫の前に両手をつき、敬虔の態度をあらはし物語りたり。

ここに百照彦は妻を伴なひ、主真心彦の館に参向し、春子姫の芸能のすぐれたることを進言したりけるに、命はたちまち顔色をやはらげ、さも愉快気に、

『天地神明の神慮を慰め、万物を歓ばしむるの道は歌舞音楽に如くものはなし。

幸ひにも春子姫芸術に妙をえたるは何よりの重宝なり。一度吾がために一曲を演ぜよ』

と言葉もいそいそと所望したりける。

百照彦は主の愉快さうなる顔色を見て、やつと安堵せしものの如く胸をなでて笑声を作りける。

春子姫は、会心の笑みをもらしながら、舞衣に着替へ長袖しとやかに舞ひはじめしが、実に春子姫の言へるごとく、その技、妙に達し神に入り、天地神明の嘉賞したまふも当然なるべしと、真心彦をはじめ百照彦もただ感にうたれて恍惚たる有様なりける。その妙技の非凡なるを伝へ聞きて、大将軍沢田彦命まで臨席せられ、真心彦にむかひて、

『貴下は実に良き従臣を持たせらる。吾は羨望の念にたへず』

と言ひながら、その妙技に首を傾けて観覧したまひける。百照彦、春子姫はおほいに面目を施し、主の賞詞をうれしく拝受して厚く礼を述べ、吾が館に帰りただちに神前に神酒を奉献して、感謝の祝詞を奏上したりける。

それより天使真心彦は、春子姫の舞曲の優雅なると、その神格の高尚なるとに心をとろかし、一にも春子姫の舞曲、二にも姫の音調と、事あるごとに二人を招き酒宴をもよほし、つひには神務を捨てて絲竹管絃の道にのみ耽溺し、真心彦と春子姫の間に面白からぬ風評さへ立つにいたりける。

真心彦は元来仁慈の念ふかく、かつ多情多感の神司なりけり。それゆゑ外部の風評を耳にするや、春子姫にたいする同情の念は日をおうて昂まり、悪しき風評はますます油の浸潤するがごとき勢にて内外に拡まりにけり。

このことたちまち国治立命の耳に入りたるより、命はただちに真心彦を召しだして厳しく不義の行為の有無を詰問されたりしが、真心彦は首を左右にふり、

『吾いやしくも聖地の重神司として、天使の職を忝なうし、天地の律法を宣伝すべき聖職にあり。いかでか斯かる忌はしき行為を敢てせむや。天津神国津神も、吾が心身の潔白を照鑑ありて、わが着せられし濡衣を干させたまへ』

と一心不乱に祈願を凝らしたり。そのとき春子姫は突然身体激動して憑神状態となりぬ。これは稚桜姫命の降臨なりける。命は教へ諭していはく、

『よろしく探湯の神事をおこなひ、その虚実を試みよ。神界にてはこの正邪と虚実は判明せり。されど地上の諸神人は、疑惑の念深くして心魂濁りをれば、容易に疑ひを晴らすの道なし。ゆゑに探湯の神事を行なひ、もつて身の疑ひをはらすべし。正しきものは、神徳を与へてこれを保護すべければ、いかなる熱湯の中に手を投ずるとも、少しの火傷をもなさざるべし。これに反して、汚れたる行為ありし時は、たちまちにして手に大火傷をなし、汝の手はただちに破れただれて大苦痛を覚ゆべし』

と宣示されたり。

真心彦は、喜びて頓首したまひ、ただちに探湯の神事に取かかりけり。八百万の神人はその虚実を試すべく探湯の斎場に垣をつくり片唾をのンで見ゐたりしが、沸きかへる熱湯の中に、怖ぢず臆せず、真心彦は天津神国津神にむかつて祈願し、泰然自若として手を浸し入れたり。つづいて春子姫も同じく手を浸し、久しきにわたるといへども、二人ともに何の火傷もなく、ここに二人の疑ひはまつたく払拭されにける。二人は天地にむかいて神恩の有難きを謝し、慟哭やや久しうしぬ。

八百万の神人は一斉に手をうつて、二人の潔白を賞讃したりける。国治立命は、二人の清浄無垢の心性を賞し、かつ種々のありがたき言葉を賜ひ、かつ今後は神祭のほか断じて舞曲に耽溺し、絲竹管絃にのみ心を奪はれ、神務を忘却するごとき不心得あるべからず、と厳しく教へ諭したまひ、悠然として奥殿に入らせたまひける。

真心彦は大いに愧ぢ、

『我は大いに過てり。我が悪しき風評の高まりたるは、わが不徳の致すところなり。聖地の重臣として、いかで他人に臨み得むや』

と直ちに国治立命の御前にいたり、天使の聖職を弊履を捨つるがごとく辞したりにけり。

（大正一〇・一二・九　旧一一・一一　外山豊二録）

第四七章　夫婦の大道〔一四七〕

真心彦は職を辞し、固く門戸を閉ざして他人との接見を断ち、謹慎の意を表しつつありしが、つひにはその精神に異状を呈し、一間に入りて、ひそかに短刀を抜きはなち、

『惟神霊幸倍坐世』

と神語を唱へ自刃して帰幽したりける。妻事足姫をはじめ、長子広宗彦、次子行成彦の悲歎と驚きはたとふるにものなく、七日七夜は蚊の泣くごとくなりけり。八百万の神人も涙の雨に袖をしぼらぬはなく、同情の念はことごとく清廉潔白なる真心彦の御魂に集まりぬ。八百万の神人は命の生前の勲功を賞揚し、長子広宗彦をして、父の後を襲ぐべく神司らは一致して、国治立命に願ひ出でたり。

ここに広宗彦は仁慈をもつて下万民に臨みければ、神界現界は実に無事泰平に治まり、したがつて国治立命の神世を謳歌する声は六合に轟きわたりたり。国治立命をはじめ、地の高天原の神人の威勢は旭日昇天のごとく隆々として四海を圧するにいたり、開闢以来かくのごとくよく治まりし神世は空前絶後の聖代と称せられける。要するに、清廉にして無欲、かつ仁慈深き真心彦の血を享け継ぎたる

広宗彦の経綸よろしきを得たる結果なるべし。

ここに真心彦の未亡人なる事足姫は、夫の心を察せず、数年を経てつひに夫の恩徳を忘れ、春永彦といふ後の夫をもち、夫婦のあひだに桃上彦といふ一柱の男子を生みけり。桃上彦はまた仁慈ふかく下の神人をあはれみ、かつ上にたいして忠実至誠の実をあげ、衆の評判も非常に好かりけるより、兄の広宗彦はおほいに歓び、自分の副役として神務を輔佐せしめたり。

然るに星移り月を閲するにしたがひ、最初きはめて善良なる性質の桃上彦も、つひに常世国の魔神にその心魂を誑惑せられ、漸次悪化邪遷して体主霊従の行動をなし、上位の命を奉ぜず、他神人の迷惑も心頭におかず、自己本位を旨とし、驕慢心日々に増長して、つひには兄の地位を奪ひ、みづから天使の位置に昇り、神政の全権を掌握せむと計り、ひたすら下万民の望みを一身に集中することのみに砕心焦慮したりけり。それゆゑ下万民の桃上彦にたいする勢望は一時は非常なるものにてありき。つひに桃上彦は兄を排斥し、みづからその地位につき仁政を世界に布き、大いに神政のために心身を傾注しける。下々の神人も最初はその仁

政を口をきはめて謳歌しつつありしが、つひにはその恩になれて余りに有りがたく思はざるにいたり、放縦安逸の生活をのみ企て、天地の律法をもつて無用の長物と貶するにいたり、聖地の重なる神司も侍者も漸次聖地を離れて四方に各自思ひおもひの方面に散乱したり。而して桃上彦にむかいて忠告を与ふる神人あらば怒つてこれを排除し、かつ罪におとしいれ、乱暴狼藉いたらざるなく、瞬くうちに聖地は冬の木草のごとき荒涼たる状況となり了りける。これぞ常世彦、常世姫があまたの邪神を使役して、神政を紊乱せしめ、国治立命を漸次排除する前提として、大樹を伐らむとせば先づその枝を伐るの戦法を用ゐたるゆゑなり。国治立命は枝葉をきられた大樹のごとく、手足をもぎとられし蟹のごとく、二進も三進もならざるやうに仕むけられたまひて、神の権威はまつたく地に落ちにける。これぞ体主霊従の大原因となり、天地の律法は根底より破壊さるるの状態を馴致したるなりき。

事足姫は、空閨の淋しさに忍びきれず、婦女のもつとも大切なる貞節を破り、後の夫をもちて夫の霊にたいし無礼を加へたるごとき、体主霊従の精神より生れ

いでたる桃上彦なりければ、最初の間はきはめて身、魂ともに円満清朗にして、申分なき至誠の神人なりしかども、母の天則を破りたる、不貞の水火の凝結したる胎内を借りて出生したる結果、つひにはその本性あらはれ、放縦驕慢の精神萠芽せむとする、その間隙に乗じて邪神の容器と不知不識のあひだに化りかはり、つひには分外の大野心をおこし、あたら大神の苦辛して修理固成されたる天地の大経綸を、根底より破滅顛覆せしむるにいたりける。神諭に、

『世の乱れる原因は、夫婦の道からであるぞよ』

と示されあるごとく、夫婦の道ほど大切なもの又と外になかるべし。国家を亡ぼすも、一家を破るも、一身を害ふも、みな天地の律法に定められたる夫婦の大道を踏みあやまるよりきたるところの災なり。神界の神々は申すもさらなり、地上の人類は神に次ぐところの結構なる身魂なるを知りて、第一に夫婦の関係に注意すべきものなり。

かくのごとく事足姫の脱線的不倫の行為より、ひいてはその児の精神に大なる影響をおよぼし、つひには神界も混乱紛糾の極に達し、現界の人類にいたるまで、

この罪悪に感染し、現代のごとく邪悪無道の社会を現出するに立いたりたるなり。

これを思へば神人ともに、体主霊従の心行を改め、根本より身魂の立替立直しに全力をささげ、霊主体従の天授の大精神に立かへり、神の御子たるの天職を奉仕し、毫末といへども体主霊従に堕するがごときことなきやう、たがひに慎み、天地の律法を堅く守らざるべからざるを強く深く感ずる次第なり。

天地の律法を破りて、自由行動を取りたる二神人の子と生れたる桃上彦が、大なる野心を起しその目的を達せむため、下の神人にたいして人望を買はむとし、八方美人主義を発揮したるために、かへつて下々の神人より軽侮せられ、愚弄され、綱紀は弛緩し、上の命ずるところ下これを用ゐざる不規則きはまる社会を現出せしめたるなり。神界にては桃上彦を大曲津神と呼ばるるにいたりける。神諭に、

『慢神と誤解と夫婦の道と欲ほど恐いものは無い』

と示されたるとほり、桃上彦の失敗を処世上の手本として、神人ともに日々の行動を慎み、天授の精魂を汚さざるやう努力せざるべからず。また桃上彦は八十猛

彦、百猛彦を殊のほか寵愛し、両人を頤使してますます野心をたくましうし、神政をもち荒したる結果は、現界にもその影響波及し、持ちも降しもならぬ澆季の世を招来したりしなり。

（大正一〇・一二・九　旧一一・一一　谷村真友録）

（第四四章～第四七章　昭和一〇・一・一八　於宮崎市神田橋旅館　王仁校正）

第四八章　常夜の闇〔一四八〕

真心彦の帰幽されし後は、その従者たる国比古の行動一変し、広宗彦の命を奉ぜず、利己的に何事も振舞ひ、いたづらに権力をふるひ、事足姫を軽蔑し、自由行動をとりて神人を籠絡し、つひに神界の混乱を来たさしめたるも、国比古の行為の不正なるに基因するもの多大なりけり。

この国比古と国比女夫婦のあひだに真道知彦、大森雪成彦、梅ケ香彦の三柱の

男子生れたり。この三人は、両親に似合ぬきはめて厳正にして、智仁勇兼備至誠の神人なりける。三人は、父母の不忠不義の行動を改めしめむと、交るがはる涙をふるいて道法礼節を説き、幾度となく諫言したれど、父母は吾が子の諫言には少しも耳を傾けむとはなさざりける。

三人は是非なく、父母の発菩提心を待つのやむを得ざるを覚り、五六七神政の時まで善道を修め、天則を遵守し、二度目の岩戸開きの神業に奉仕し、抜群の功名手柄を顕はし、国治立命の大神業を輔翼し、もつて父母の罪を償はむと、古き神代の昔より現今にいたるまで、その神魂は生きかはり死にかはり、神界において神政成就のため一生懸命の大活動を今につづけゐるといふ。

広宗彦は桃上彦の傍若無人の行動に妨げられて、非常に困難の地位にたち、筆紙口舌のつくしがたき艱難辛苦を嘗めたりにけるが、父の真心彦は、清廉潔白の心より悪評を世間にたてられ憤慨の結果職を退き、つひには帰幽したるより、父の光を現はさむため善道をおこなひ律法を守り、至誠の結晶力をもつて天地神明の稜威を宇内に輝かし、森羅万象をしておのおのその安住の所を得せしめ、父母

の失敗と罪科をつぐなひ、その神霊を助けむとして、現代にいたるまで地上の各所に放浪し、神政成就の暁に処するため、犠牲的艱苦をなめつつありといふ。

広宗彦は至善至愛の神人なりけるが、元来温柔なる身魂の性質として、弟の桃上彦の行動にたいして厳戒することを躊躇したり。そのゆゑは、桃上彦の行動を一言にても批評し訓戒するときは、継父たる春永彦の気色を損することを恐れたるが故なり。ゆゑに桃上彦の悪行を戒め、暴政を改めしむること能はざりしは、命にとつて末代の不覚にして、終生の大失敗なりける。神の道に奉仕する神人は、右の次第をよく了解し、天則を遵守し、情義にからまれて末代の悔をのこさざるやう注意すべきなり。

桃上彦の体主霊従天則違反の行動の結果は、上は下に押へつけられ、下はまた世とともに悪化し、慢神の空気は天地にみなぎり溢れ、下はおひおひ自己本位の波たち騒ぎ、神人の階級までも根元より破壊せしめたり。至誠一貫的に奉仕せる善良なる神人も、つひには忍びかねておひおひに退職し、神界の神務は如何ともすること能はざる惨憺たる形勢とはなりぬ。

広宗彦は、弟の行成彦と力をあはせ心を一にして、天則を厳守し、善一筋の模範を世界に示し、回天的神業をおこして、地上の神界を根本より改造せむと焦慮したれども、放縦と怠慢と逸楽のみを希求するにいたりたる神人は、一柱としてその神業に参加するものなく、神界はますます混乱紛糾の度を加へ、万妖億邪一度に突発して収拾すべからず、常夜の暗黒世界とたちまち変ずるにいたりける。

大将軍天使長沢田彦命の妻沢田姫命は、出雲姫とともに、神政の紛乱と律法の破壊とをおほいに煩慮し、心身を傾注しつつ神界幽界大改造の神業の一端にも奉仕せむと、雄々しくも女神の身魂をもつて、神代より今にいたるまで久遠の歳月を一日のごとく、筆紙口舌につくしがたき大艱苦をなめ、必死の活動をつづけたまふという。

三千世界一度に開き、艮の金神ふたたび表に現はれて、五六七の神業を開始したまふ時運の到来したる今日なり。ゆゑに今度こそは、苦労の結晶の花の咲き匂ひ、うるはしき実を結ぶ神政の世に近づけるものにして、世界は神界現界に論なく、神人ともに必死の活動をなし、末代しほれぬ生き花を咲かし、神国のために

十分の努力を励まねばならぬ時期に迫りきたれるなり。
（大正一〇・一二・一〇　旧一一・一二　桜井重雄録）

第四九章　袖手傍観〔一四九〕

沢田彦命、沢田姫命夫婦のあひだに生れたるは杵築姫、朝子姫、猿子姫の三女なりける。

天地の律法破壊して万妖一時に発起し、つひには地の高天原の神政は、ほとんど潰滅せむとしたるも、沢田彦命は対岸の火災を傍観するごとき態度を持し、少しも神界のために全力を傾注せざりける。ゆゑに妻の沢田姫命は躍起となり、夫にむかつて、

『かかる神界一大事の場合に際し、神界のために、奮発努力して万妖を鎮定し、大神の神慮を安んじ、下神人の苦難を救ふは、貴夫の双肩にかかる大責任なり』

と千言万語をつくして奮起をうながし、かつ諫言し給ひたるに、沢田彦命はその諫言を馬耳東風と聞き流したるのみならず、無責任にも三人の娘を引連れ、妻を地上にのこして空に乗り、ふたたび天上に還りける。沢田姫命は夫子に生別れの辛酸をなめ、あるにあられぬ憂目を味はひ給ひて悲歎やるかたなく、天を仰ぎ地に俯して、夫の一日も早く天より降りて混乱紛糾の神政を修理固成したまへと一生懸命に歎願したり。されど一徹短慮なる沢田彦命は、一旦決心したる以上は初志をまげずと断然【はね】つけにける。

ここに広宗彦は、沢田姫命の窮状を察して一方の力となり、神政を輔佐せむと弟の行成彦と議り、沢田姫命にむかつて、

『聖地の神政のかくまで混乱状態に陥りたるについては、吾々にも大責任あれば、袖手傍観するに忍びず、ゆゑに今後は兄上と共に神界のため兄弟一致して神業を助け奉らむ』

と誠実を表に現はし、苦心に苦心を重ね、一時の困難を救ひたりける。

沢田彦命は天上に昇りて、自由自在に神界の経綸を成さむと焦慮したりしが、

元来最愛の妻の至誠のこもれる諫言に立腹し、地の高天原の混乱状態を余所に見流し、難をさけ安きにつき、利己の目的を達することのみに熱中せる無責任にして、かつ無慈悲なる神人なれば、犠牲的精神に欠けゐたるため、何事も志と相反し、つひには天の八衢に現はれて、猛悪なる魔神となり了りける。

また出雲姫は、天地の律法が神人の怠慢によりて破壊されたるを憂ひ、善行をもつて神人に模範を示さむとの義侠心を振おこし、神国特有の麻柱の真柱を建てむと百方焦慮したまへども、何分にも肝腎要めの大本元破れけるにぞ、回天の神業はつひに完成にいたらざりける。

（大正一〇・一二・一〇　旧一一・一二　松村仙造録）

第一二篇　霊力体

第五〇章　安息日〔一五〇〕

天地剖判に先だち、宇宙の大元霊たる無声無形の一神ありけり。

これを神典にては、天之御中主大神ととなへ奉り、神界にては大六合常立尊と申す。西洋にてはゴッドといひ、仏教にては阿弥陀如来といふ。漢土にては古来天帝または天主といふ。吾々はきはめて言語のすくない簡単な御名を選んで、ここでは天主ととなへ奉つて述ぶることにしたいと思ふ。

天主は、過去現在未来に一貫して無限絶対無始無終の大神霊にましまし、その絶対の霊威を発揮して宇宙万有を創造したまうた。

大宇宙の太初にあたつて、きはめて不完全なる霊素が出現し、それが漸次発達して霊の活用を発生するまでの歳月はほとんど十億年を費してゐる。これを神界においては、【ヒツカ】（一日）といふ。つぎにその霊の発動力たる霊体（幽体）なるものが宇宙間に出現した。これを【チカラ】と称へた。【チ】とは霊または火の意味であり、【カラ】とは元素の意味である。この宇宙に元素の活用するに

いたるまでの歳月は、また十億年を費してゐる。この十億年間を神界において【フツカ】（二日）といふ。

つぎにこの元素に霊気発生して、現顕の物体を形成するにいたるまでの歳月は、また大略十億年を費してゐる。この十億年間の霊体の進歩を称して【ミツカ】（三日）といふ。ここにいよいよ霊、力、体の三大勢力発揮して、無数の固形体や液体が出現した。太陽、太陰、大地、諸星の発生はつぎの十億年の間の歳月を費してゐる。これを神界にては【ヨツカ】（四日）といふ。

またつぎの十億年間の歳月を費したる神霊の活動状態を、神界にては【イツカ】（五日）といふ。【イツ】は稜威にして【カ】は光輝の意である。この五日の活動力によりて、動植物の種天地の間に現出した。いよいよ五十億年間の星霜を経て陰陽、水火の活用あらはれ、宇宙一切の万物に水火の活用が加はり、森羅万象の大根元が確立した。この歳月は六億年を費してゐる。この六億年間の神霊の活用を【ムユカ】（六日）といふ。

かくのごとくして天主は宇宙万有一切を【ムユカ】に創造された。それより天

主は一大金剛力を発揮して、世界を修理固成し、完全無欠の理想世界いはゆる五六七の神代、松の世を建設さるるその工程が七千万年の歳月であつて、これを【ナナカ】（七日）といふ。【ナナ】とは地成、名成、成就、安息の意である。七日の神霊の活用完了の暁にいたつて、至善至美至真の宇宙が完成さるる、之を安息日といふ。

安息日の七千万年間は天主の荒工事をはつて、その修理固成のために活動さるる時代であつて、世人のいふごとく神の休息したまふ意味ではない。もしも天主にして一日はおろか一分間でもその神業を休めたまふことがありとすれば、宇宙一切の万物はたちまち滅亡してしまふからである。ゆゑにこの安息日は人々神の洪恩を感謝し、かつその神徳を讃美すべく祝すべき日である。

かくして五十六億七千万年を経て、五六七の神政まつたく成就され、天主の経綸の聖代がくるのである。しかるに幸ひなるかな、五六七の歳月もほとんど満期に近づいてをる。いよいよ五六七神政出現の上は、完全無欠、至善至美の世界となり、神人和合して永遠無窮に栄えゆくのである。ゆゑに今日までの世界は未完

成時代であつた。ここに天運到来して、神政の開かるる時機となつた。現代はその過渡時代であるから、その前程として種々の事変の各所に突発するのも、神界の摂理上やむを得ざる次第であらうと思う。

この安息日については各教法家の所説も、古今東西の区別なく論議されてをるが、私は世説の如何にかかはらず、神示のままを述べたまでである。

（附言）

聖書に、神は六日に世界を造り了へて、七日目は安息せりといふ神言がある。この神言について言霊研究の大要を述べてみやうと思ふ。

【ナ】の言霊は宇宙万有一切を兼て統一するといふことである。◎の凝る形であり、行届く言霊であり、天国の経綸を地上に移すこととともなり、◎の確定ともなり、調理となり成就となり、水素の形となり、押し鎮むる言霊の活用ともなる。

次の【ナ】も同様の意義の活用である。

【カ】の言霊は、燥かし固むる活用となり、晴れて見ゆる也、一切の物発生の神力となり、光明となるの活用である。

【メ】の言霊は、世界を見るの活用となり、起り兆となり、本性を写し、女子を生み、天の岩戸を開き、草木の芽となり、眼目となるの活用である。

以上の言霊によりて、神は七日目に安息したまふといふ神語は、実に明瞭となつてくるのである。要するに宇宙万有一切の生物にたいし、神人、樹草、禽獣、鳥族、虫魚の区別なく、各自その所に安んじて、その天職に奉仕する聖代の現はれである。

ゆゑに七日は現代の暦にいふ日月火水木金土の一週間の日数の意味ではないことも明白なる事実であると思ふ。

（大正一〇・一二・一〇　旧一一・一二　加藤明子録）

（第四八章～第五〇章　昭和一〇・一・一九　早朝　於宮崎市神田橋旅館　王仁校正）

附録　岩井温泉紀行歌

瑞月作

岩井温泉紀行歌

【瑞の御魂】に縁由(ゆかり)ある　壬戌(みづのえいぬ)の一月の
雪降りつもる銀世界　【黄金閣】をあとにして
八日午前の巳(み)の刻に　身魂の垢を清めむと
【岩井温泉】さして行く　【湯浅】【篠原】【植芝】や
松の【大本】の【竹下氏】　恵みの風も【福島】の
【近藤】の湯治を送らむと　信仰かたき【石の宮】
家並は古く朽ちぬれど　名は【新町】の正中を
足並速き自動車に　揺られて【綾部】の駅につく
汽笛一声汽車の窓　記者の【外山】氏【加藤】女史
【西村徳治】を伴ひて　心も勇む【石原(いさ)】の駅

煙をあとに【初瀬(はせ)】の橋　飛びたつばかり進み行く
科戸(しなど)の風の【福知山】　聞くも恐ろし【鬼ケ城】
見捨てて走る山間の　【上川口】や【下夜久野】
降り来る雪を突破して　安全守る【上夜久野】
【梁瀬(やなせ)】を渡りゴウゴウと　輪音も高き【和田山】や
篠竹しげる【養父(やぶ)】の駅　【八鹿(やうか)】【江原】を打ち過ぎて
外山に包みし【豊岡】の　昇降客のいと多く
但馬名所の【玄武洞】　右手にながめて【城ノ崎】の
温泉場を振り返へり　【竹野】や【佐津】の駅も過ぎ
【日本海】をながむれば　雪雲とほく【香住】駅
山腹包む【鎧(よろひ)】田の　雪つむ景色面白【久】
【谷】を埋むる白雪は　山陰寒気の表徴と
ながめて走る汽車の窓　煙草正宗菓子饅頭
お茶お茶弁当の売声に　空しき腹を満たすと【は】

【ま坂】思はぬまうけもの　　車のすみに【居組】つつ
いよいよ汽車も申(さる)の刻　　【岩美】の駅に降りけり
【雪】より白き【お梅】さま　　雲【井】の【上】の雪の空
緩【高梅】の田舎道　　ホロの破れし自動車に
一行六人ぶるぶると　　自身神也屁の車
廻る【駒屋】の温泉宿　　【湯治々々】と【月】代の
一同夕餉も相済みて　　腹もポンポコ【湯冠り】の
【ヤレヤレ】ヤレの拍子歌　　いと面白き雪の庭
なが夜を茲に【明】しける　　大正十年十二月
【十(なか)】の二日の未明(あさまだき)　　新暦一月九日に
激しき吹雪降りすさみ　　寒さに凍えた【瑞月】は
炬燵の中の侘住居　　横に立ちつつ千早振
神世の奇しき【物語】　　【外山】【加藤】【井上】氏
筆を揃へてかくの通り

○

来訪者名読込歌

温泉(いでゆ)の神と現れませる　【出】雲に坐す大己貴(おほなむち)　（出口王仁三郎）

岩井の湯【口】細くとも　薬の【王】と聞えたる

神の【仁】慈の【三】ツ御魂　心地も日々に【朗】かに

病の根まで断(き)り払ふ　効験(しるし)は岩美に名【西】負ふ　（西村徳治）

田舎の【村】の湯の御【徳】　療【治】を加ねて藤くより　（加藤明子）

【明】々つどひ遊び来る　男【子】と女子の宿りたる

これの駒屋の温泉は　【外】に又なき客の【山】　（外山豊二）

【豊二】暮す玉の【井】の　この【上】もなき御神徳　（井上留五郎）

【留】る三階に【五郎】々々と　ねころびながら霊界の

ありし昔の物語　【石】より堅き信仰の　（石渡馨）

丹【波】に【馨】る神の道　常磐堅磐（ときはかきは）の【岩】よりも　（岩淵久男）

かたき誠の教の【淵】　汲取るものは【久】方の

天より降る変性【男】子　この世の峠や【嵯峨】の【根】に　（嵯峨根民蔵）

さまよふ【民蔵】救はむと　誓ひ出ます神の世に

生れ【大野】は【只】ならじ　深き因縁の著（いち）【次郎】く　（大野只次郎）

【田】づね来て見よ神の【村】　天地を【兼太郎】大神の　（田村兼太郎）

黄色の色や白梅の　【佐】和に【佐木】たる神の苑　（佐々木清蔵）

【清】き【蔵】昔のそのままの　【紙】より白くすがすがし　（紙本鉄蔵）

世の大【本】の金【鉄】の　身魂【蔵】めし万代の

【亀】のよはひの本宮【山】　二代教主にかかりたる　（亀山金太郎）

【金】勝要の【太】み神　肌への色は山吹の

清【郎】比ぶるものもなき　景色も【藤】や【田】子の浦　（藤田武寿）

よはひも今は【武寿（たけとし）】の　【古】き昔を【田】どる【時】　（古田時治）

【治】まる波路を加露ケ浜　【船】にて【越】え来し三保の関　（船越英一）

【英米須（えびす）】の神を祭りたる　山陰【一】の神霊地

稜威も【高嶋】あとに見て　浪路を進む【ゆか】しさよ　（高嶋ゆか）

神の御魂を迎【遠藤】　綾部に居ます牛【虎】の　（遠藤虎吉）

神の【吉】詞をかしこみて　やうやう平田にたどりつき

田【植】の中の道【芝】を　神のま【盛】りに踏みて行く　（植芝盛隆）

【降】々昇る旭影　【竹】はなけれど松梅の　（竹下斯芸琉）

御杖を【下】げて道草の　【斯芸琉（しげる）】野路を勇ぎよく

【東】の空の色【良】しと　【俊（とし）】老いたまふ大教祖　（東良俊）

【桑原】田原の【道】別けて　【喜】び一行幽世を　（桑原道善）

【知食（しろしめ）】します大社　栄ゆる【松】や神の【田】の　（松田政治）

尊き【政治】を偲びつつ　苔むす【藤】のいと高く　（藤松良寛）

からむ社の千代の【松】　心持【良】く胸【寛】く

進む【小林】神の森　【秀】づる【尾】の上の弥仙山　（小林秀尾）

鶴山亀山右左　神威を【保】つ【一】の鳥居　（小林保一）

【稲】田の姫の命をば　救ふて得たる【村】雲の　（稲村寿美）

劔の光【寿美】渡り　須賀の宮居を建了へて

【横】暴無道の悪神の　【山】田の大蛇を斬放(はふ)り　（横山辰次郎）

ひの川上に【辰】雲の　光も殊にいち【次郎】く

神の功ぞ尊とけれ　諸【木】の【下】を潜りたる　（木下泉三）

谷の【泉】も【素鵞(そが)】の川　【三】山の【奥村芳】りつつ　（奥村芳夫）

【夫】婦はここに八雲立　出雲八重垣つまごめに

八重垣作る八重垣の　誉れは今にコン【近藤】　（近藤繁敏）

栄えて【繁】る長の【敏】　我日の本のあなひの

道を教へし大己貴　浦【安】国の【田】のもしく　（安田武平）

【武】力絶倫国(くに)【平(むけ)】の　鉾を皇孫(みまご)に奉り

君の御尾前仕へなむ　これの誓ひは万代も

【田賀】へじものと手を拍つて　青紫垣にかくれたる　（田賀鉄蔵）
事代主の金【鉄】の　堅き御言【蔵】尊とけれ
すぎ【西】むかしの物語　神有【村】の老人に　（西村菊蔵）
詳しく【菊蔵】ありがたき　地の高天【原】にあれませる　（原祐蔵）
神の【祐蔵（たすけぞ）】うれしみて　詣でし一行十五人
神【徳岡】さぬ皇神の　【重】き御命を拝しつつ　（徳岡重光）
神の【光】を照さむと　藤き山路や【原】野越え　（藤原勇造）
【勇】み来る【造】艮の　神の生宮直子刀自
社の【前】に【田】知よりて　祈る誠の【美千香】る　（前田美千香）
この音づれを久方の　雲【井】の空や土の【上】に　（井上敏弘）
いと【敏（すみ）】やかに【弘】めかし　神の真【毛利】は【八】洲国　（毛利八弥）
【弥】常永（とこしへ）に伝はりて　栄え目出度瑞穂国
秋の足穂の御【田代】は　太田の神に神【習】ひ　（田代習）

教の苗を植付ける　　国常立大神の

【高木】勲を【寿】ぎて　　【三】柱神の神の教　　（高木寿三郎）

【田中】も山も佐【嘉栄吉】し　　五六七の御代に【住山】の　　（田中嘉栄吉）

人の心は【泰】平【蔵】　　雲井の【上】も葦【原】も　　（住山泰蔵）

【熊蔵】なき迄【住】渡る　　清けき富士の高【山】に　　（上原熊蔵）

金銀【竜】の【二】柱　　世人を真【森田】すけむと　　（住山竜二）

御心【くま】らせ玉ひつつ　　大【矢嶋】国栄え【ゆく】　　（森田くま）

祥(めで)たき御代を【松】の世の　　【浦】安国の磯輪垣(しわがき)の　　（矢嶋ゆく）

【秀】妻の国【蔵】尊とけれ　　元気も【吉田】の一行は　　（松浦秀蔵）

身魂【勝】れて【美】はしく　　聖地を【西】にあとに見て　　（吉田勝美）

町や【山村】伝ひつつ　　又【蔵】降り来る五月雨(さみだれ)を　　（西村伝蔵）

おかして【伊佐】み【田】庭路の　　福知へ帰り【喜一郎】　　（伊佐田喜一郎）

途上つはりの心地して　　二代スミ子は澄渡る
石原（いさ）の【小泉】すくひ上げ　　教祖手づから清泉を　　（小泉熊彦）
口に富（ふ）【熊】せ玉ひつつ　　国武【彦】の真【森田】る　　（森田勘太郎）
綾の【勘】部の【太】元に　　雨の【中尾】ば六月の　　（中尾豊弘）
四日に【豊】かに【弘】前に　　神徳高く【山】の如（ごと）　　（山本惣吉）
頭にいただき帰ります　　大【本】役員【惣】一同
今日の生日（いくひ）の【吉】き日をば　　祝ひ【納】むる【吉】祥の　　（同納吉）
宴を【平木】て大神の　　御【稜威】かしこ【美山川】の　　（平木稜威美）
供物（くもつ）を献じ【石】の上　　古き【太】初の皇神の　　（山川石太郎）
直なる【武】の【田】ぐひ【な】き　　誉れ【を】今に伝へける　　（武田なを）

大正三年の春の頃　　十三才の直霊嬢
瑞月柳月の三人が　　出雲大社へ礼参り
其往きがけに岩美駅　　馬車にゆられて晃陽の

やかたに再び逗留し　いよいよ三度(みたび)の入浴に
身魂の垢を洗ひつつ　五ツと六(むゆ)との霊界の
昔語りを新らしく　天地宇宙の外に立ち
言葉も清くいさぎよく　まはる駒屋の温泉場
心の垢をあらひつつ　あらあらかくは識(しる)しけり

皇道発祥の霊地日向国宮崎市の公会堂に於て昭和神聖会支部の発会式を盛大に挙行したる翌朝七時四十分、同市神田橋旅館の二階の間大淀河の名橋や清流を眺めつつ誌し置く。いよいよ霊主体従寅の巻の校正を終る。
（昭和一〇・一・一九早朝）

附言

明治三十四年旧五月十五日、教祖様神勅(しんちょく)を受けて、八雲立出雲(やくもたついづも)の国の天日隅(あめのひすみ)の

宮に御参拝の節、山陰道を徒歩し一行十五人、岩井温泉駒屋に一泊せられ、帰路ふたたび同家に宿泊されたる、大本にとつて由縁浅からざる温泉なり。瑞月は大正三年の春、三代直霊、梅田信之氏とともに一泊したることあり。今回にて三度目の入浴なり。静養かたがた霊界物語の口述をなすも、神の御仁恵と歓びのあまり、筆記者および信者の訪問して色々と御世話下されし其の厚意を感謝するため、諸氏の芳名を読込み、長歌を作りて第三巻の巻尾に附する事となしぬ。

霊界物語　第三巻　霊主体従　寅の巻

終り